
緒方勇吾の恋愛事情 其の弐

龍之介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緒方勇吾の恋愛事情 其の弐

【Nコード】

N1688C

【作者名】

龍之介

【あらすじ】

俺こと緒方勇吾には、付き合っつて一ヶ月の恋人がいる。これから俺は、彼女とゆるやかに、ささやかに日々を送るつもりだった。だがどうも、神様は俺の事が相当に嫌いらしい。何故か俺に迫ってくる学校一の恋多き女、俺を追いかけてきた忌まわしい過去、そして『師匠』。どれもこれも、俺にとつちや超が付くほどの厄介事だ。くそつたれ、こうなりやとことんまでやってやる。さあ、どこからでも掛かって来やがれ！***立ちはだかる者は、唸る拳で皆まとめてデストロイ！チンピラ主人公が送る、どこか荒んだヒロイ

ツクラブコメ。***この作品は『緒方勇吾の恋愛事情』の続編に
当たります。お気に召しましたら、前作も併せてお楽しみください。

プロローグ（前書き）

前作がそれなりに好評だったので、続編を作りました。
コメディ主体になる予定です。

では、本編をどうぞ。

プロローグ

夢。

それは誰でも　それこそ、小学生でも知っている言葉だ。眠っている間に見る、或いは五感の全てによって感じ取る仮初の世界。それが、夢。

人が見る夢は、個人によって大きく違う。同じ夢は有り得ない。もつとも、同じ環境に長く置かれた者同士であれば、偶然に引き付けられ、夢を共有することもあるかもしれないが。

退屈な日々に鬱屈している者であれば、何の脈絡もなく始まる冒険活劇の夢を見るだろうし、恋愛　特に片思いをしている者であるなら、想い人とのラブロマンスに身悶えするかもしれない。

そういった具体性の無い、というよりも意味すら無い個人のイメージが漠然と形を為すのが、一般的に夢と呼ばれる現象である。が、例外もある。

それは、過去の自分を夢に見た場合の事だ。

一度体験した事、その中でも特に印象深いものが夢として再生された映像は、この上なくリアルで、そして意味のある現象だろう。

彼　緒方勇吾がその日見た夢も、そんな過去を投射する、何かを暗示するかのような夢だった。

まず感じたのは、何とも形容しがたい浮遊感だった。と言っても、実際に宙に浮いているわけではない。ただ、地に足の着いていないような奇妙な感覚だけが、体中に纏わりついている。

(ここは……俺が通ってた中学校か?)

目の前に広がる光景に、勇吾は独りごちた。もつとも、この場には

彼以外誰も存在していないのだが。

（しかも、ここは空手部の道場じゃねえか。なんだってこんなところに居るんだ、俺は？）

高校生になった今、滅多な事では思い出すことも無い場所にぼつねんと一人立ち尽くしているのは、我ながら酷く滑稽に思える。実際、傍から見ればさぞかし奇妙に思えるだろう。

などと考えている間にも、夢は進行していくようだった。

「勇吾。何ボサツとつつ立ってんの？」

不意に背後から名を呼ばれ、勇吾は振り返った。

「え？」

自分と呼んだ人物を視界に捉えて、そのあまりの意外さに間の抜けた声が漏れる。

「な……なんで貴女が……」

「何でも何も、稽古中にあたしが居ちや可笑しい？」

視界の真ん中に捉えたその人物は、当然のように言う。そういえば、空手部の稽古中に『この人』が道場に居ること自体は別に可笑しくない。むしろ当然とも言える。

そう自然に思考を流してから、勇吾はふと自分の体を見下ろした。

白い胴着に、有段者　　と言っても自分は初段程度だが　　の証である黒帯。それが今の服装だった。

と言うことは、今は稽古中なのか　　？

（んなわけあるか）

自問に否定で答えて、勇吾は頭を振った。

高校生になった今、自分が道場で稽古こをする事など無いはずだ。

だとすれば、自分は今、何でこんな所で『この人』と対峙しているのだ　　？

（ああ、そうか）

唐突に、勇吾は理解した。これは夢なのだ。過去の残像を、過ぎ去った時間の残滓を再生して、脳裏に映し出している。ただそれだけの事。

「それじゃ、組み手を始めようか」

こちらの思考を他所に、目の前の『この人』は悠然と言ってくる。勇吾は頷いた。

中学時代、『この人』には、一度として勝てた験しがない。それどころか、まともにも一撃を打ち込んだ事すら無かったかもしれない。今回もそうだろう。勝てるはずが無い。

だが、どうせ夢なのだ。流れに合わせていれば、その内覚めるはずだ。でないと困る。
なぜなら

（『この人』は、俺にとっては尊敬の対象でもあるが、それより最大にして絶対の畏怖だからな。夢だと判つても、あんまり長く向かい合つてたくない……）

「それじゃ……行くよっ！」

掛け声とともに、瓦程度なら十数枚纏めて叩き割れそうな拳打が襲い掛かってくる。

（う………やっぱ怖え！ 『この人』の恐怖だけはどうにもなんねえ！??）

悲鳴じみた絶叫を上げつつ、勇吾は拳打をまともに食らって派手に吹き飛ばされた。

そして そのまま、目を覚ました。

プロローグ（後書き）

『緒方勇吾の恋愛事情』の感想に、続編希望があったので調子にのっております。

へっばこ物書きの龍之介です。

今作の主人公も、前回に引き続いて勇吾です。まあ、タイトル見ればまんまなんです。

拙い作品ですが、よろしければお付き合いください。

では、また次回のがきで。

第一話：始まりの朝

ずだんっ！

というその音は、踏み込みの際に鳴る音としては理想的と言えた。踏み込みというのは、要は両足を使って移動する時、最初に地面を蹴って踏み出した力を、地面の適当な所で制止する。そのままだと転んでしまうので、という事だ。もっとも、それは通常の歩行に関する理論だが。

喧嘩せんとうにおいての踏み込みは、歩行とは多少働きが異なる。

単に踏み出して生まれた力を制止するのではなく、自分の力の流れを変えて上手く利用してやらないといけない。

だから踏み込みは適当な所で行わず、出来るだけ効率よく力の向きを変えられる位置で行う必要があるわけだ。

なので勇吾は、最も攻撃の打ち込みやすい、或いは力の流れを乗せ易い位置に踏み込みつつ、目の前の標的に向かって掌底を打ち放つた。

真っ直ぐに突き出された右の掌は、ほぼ予定ど通りの軌跡で標的

襲撃者に直撃し、吹き飛ばした。

「のああああっ!？」

派手な悲鳴を上げて、襲撃者が固いアスファルトの道路を転がっていく。悲鳴は襲撃者が一回転することに小さくなり、三秒ほど距離にして三メートルはバタバタと変則的に後転したのち、襲撃者が大の字に停止したところで、ようやく悲鳴がびたりと止んだ。

それを陰鬱な表情で見送りながら、彼　緒方勇吾は大きくため息を吐いた。

「……これで今日は三人目か。つたく、この一ヶ月の間、一日も欠かさず襲ってきやがって」

突き出していた掌を引き戻しながら、疲労と呆れの滲んだ呟きを零す。

吹き飛ばされた襲撃者は、大柄な　ほとんどプロレスラーに近いような　男だった。

対して勇吾は、その大柄な男を転がした技に見合うほど体格が良いとか、強そうであるといった風体ではない。身長は平均よりやや高いといえるが、それだけである。

しかしその実、中学時代に空手の全国大会で優勝した経験を持つ猛者だ。

その彼、羽丘高校二年三組出席番号六番、緒方勇吾はこんな少年だ。精悍と言うには幼さが残るものの、野性味を感じさせる顔立ち。特に染髪しているわけでもない自然な黒髪はどうやら直毛らしく、若い生命力を誇示するようでもあった。

そして……今は少し険しくなっているその双眸には、日本人らしい黒ではなく、翠の瞳が鈍く輝きを放っていた。これは彼が、欧州出身の曾祖母から受け継いだ遺伝子によるものだ。

客観的に見て、彼の容姿に点数を付けるとすれば平均程度のはずだが、凡人には無い、どこか人を惹きつける魅力があるとも言える。翠の瞳はその象徴だろう。

今は彼がいるのは高校に向かう途中の通学路だ。もうそろそろ一年と半年程通っている事になるこの道にはすっかり慣れたが、十七年体験してきた筈の夏の暑さには慣れる兆しすらない。

「ああ、腹立つ。このクソ暑い中余計な運動させやがって」

左手で提げていた学校指定の鞆を持ち直して、勇吾は忌々しげに吐き捨てた。『余計な運動』をした割には息も乱れていないが、元々気温が高いせいか額に少し汗が浮かんでいる。

勇吾は空いている右手で額を拭いつつ、毒づいた。

「ええいくそ！ 朝から気分悪い。もう一発くらいぶん殴りゃよかつた」

「荒れてるな、おい。今日はなんでまたそんな機嫌悪いんだ？」

と、後ろから、どこことなく陽気な声が聞こえてきた。振り返ると、そこには見慣れた男子生徒が一人、声と同じく陽気な雰囲気纏って立っていた。勇吾は顰めたままの表情で、その男子生徒の名を呼んだ。

「……昂か」

「うわ、本気で機嫌悪いなお前」

勇吾の不機嫌そうな視線に苦笑いしつつ、聞き返しているのは、芹沢昂。

勇吾にとって最も付き合いが長く、また信頼を置いている友人で、親友と呼んで差し支えない存在である。

「どうした、紫亜と喧嘩でもしたのか？」

「そんなんじゃないよ。紫亜とは順調そのものだ」

彼女の名を出してきた親友に、勇吾は切り返した。

「じゃあ、なんでそんなキレ気味なんだよ。というか、少しは手加減とかしたらどうだ？」

昂は先程勇吾が吹き飛ばした 今は完全に失神している 男を指差して言った。対して勇吾は、肩を竦めて、

「こつ毎日襲撃されたんじゃ、手加減する気も失せるんだよ。それに、今日は元々機嫌がすこぶる悪いんだ」

「だからなんで」

焦れたように、昂は早口で訊いてくる。勇吾はなんとなく空など見上げつつ、ポツリと呟く。

「……嫌な夢を見たんだよ」

「夢？ どんな？」

聞き返されて、勇吾は顔を顰めた。正確には、嫌な夢というよりは『とんでもなく怖い夢』と言ったほうが正解に思える今朝の夢。正

真、口にするのも恐ろしい。

「……師匠の夢だ。中学時代の、と言ってもお前になら伝わるだろ？」

「……ああ。なるほど」

彼らにとつては暗黙の了解であるらしく、その短いやりとりだけで互いに理解の色が広がる。

どうやら、中学時代の『師匠』とやらは、二人にとって共通の認識
畏怖の対象であるらしい。

「ま、まあそれは取り合えず置いて、だ。そこに転がってるのは、やっぱり紫亜の親衛隊の奴か？」

『師匠』の話題から逃げるためか、昴は半ば強引に別の話を持ってくる。

再び、先程からずっと気絶したままの男を指差している。

「ああ。今日は終業式だからか、いつもより多かった。夏休みに入ると襲撃しにくいと考えたらしい」

勇吾の彼女である姫神紫亜は、成績優秀、容姿端麗で性格も良いという、殆んど偶像アイドルといっても良いような少女である。

男子生徒からの人気は圧倒的で、学校内では二大女神の一人として知られており、校長の名は知らなくとも彼女の事はほぼ全校生徒が知っている。

その彼女には親衛隊なるものが非公式ながら 当たり前だが存在しており、隠し撮りの写真などが高校生にしては高額で取引されているという噂もある。

そんな高嶺の花と付き合っているのが、この緒方勇吾なのだ。

当然、親衛隊としては怒り心頭だろう。もっとあからさまにモテそうな男は、学校内にいくらかいる。サッカー部の貴公子など一部の女子に噂される佐々岡。バスケ部の佐伯。そして、容姿だけであれば昴とて充分に美少年と断じられるレベルだ。

そついう男なら、親衛隊もある程度納得しただろうが、勇吾は冒頭でも述べたとおりのごく普通の少年である。

『なんでこんな男と？』と、親衛隊がいきり立つのも無理は無いかもしれない。

ともあれその結果が、そこに転がっている男と繋がるのだ。

といつても、繋がりには至極単純で、親衛隊の中でも気の短い連中が、勇吾の登校中や下校中を狙って襲い掛かっているだけなのだ。

つまり、逆恨みである。もしくは嫉妬、僻みか。自暴自棄やけそとも言えるかもしれない。なので襲撃は手加減なしで問答無用。病院送りにするくらいの気迫である。

だが、勇吾の中学時代の空手全国制覇は伊達では無い。そのごくごくを返り討ちにし、逆に数人を病院へと叩き込んだ。

勇吾が紫亜と付き合いだしてから一ヶ月経つが、その間毎日そんな感じで襲われているのだ。

いい加減、鬱陶しくなってきた場合である。

「にしても、何でこの程度の戦闘技能ちんぱうぎぬうで、一戦交えようなんて思うんだらうな、こいつら？」

呆れの混じった声音で、勇吾は呟いた。誰に言うでもないが、敢えて言うなら虚空に投げた問い掛けのようなものだ。

「さあ。嫉妬に狂った奴なんて獣みたいなものだから、本能かなんかで動いてるんじゃないか」

かなり小さな声で呟いたのだが、昴には聞こえたらしい。肩を竦めながら、投げやりに言ってきた。なんとなく、その意見は的を射ている気もしたが、元より答えを求めていた問いでは無いので放置して。とある事を思い出して声を上げた。

「やっべえっ！ 校門前で紫亜と待ち合わせしてんの忘れてた！」

叫ぶと同時に、冒頭の踏み込みよりも遥かに強烈な音を靴底と地面で奏でて、勇吾は走り出していた。

少し遅れて、昴も併走してくる。

昴が何か言っているような気もしたが、最早勇吾は聞いていなかった。

そしてそのまま二人して走り続けて

校門が見えた頃には、H・Rの始まりを告げるチャイムの音が、やけに暢気に響いていた。

第一話：始まりの朝（後書き）

短い。問答無用に短い。

どうも、へっぴょ物書きの龍之介です。

前作の続編というのは、思ったより難しい。

二、三話は導入部分と言う形になりそうです。

では、また次回のがきで。

第二話：付ける薬はありません（前書き）

導入編その2。前作を読んでいない読者の方が大半と思われるので、主人公周辺の環境を主題としています。
では、本編をどうぞ。

第二話：付ける薬はありません

「……約束、破った」

「わ、悪かった」

先程から何度も繰り返したやり取りを、また一回。

具体的な回数はもう覚えていない。だって無駄だから。

終業式は恙無く終わり、ただ校長の話は何でこう催眠電波染みているのかという疑問のみが残る放課後。

H・Rでは担任から熱烈な補習宣言ラブコールを受けた生徒が打ちひしがれる光景もあったが、今では緩やかに時の流れる、ただの放課後である。特にやる事が無いのか、教室に残っている数人のクラスメートが何でも無い話をしている。

通知表を見せ合ったり明日から始まる夏休みの計画を話し合ったりと、高校生らしい会話がそこかしこで花を咲かせていた。

そんな中で、勇吾は何故か、ただひたすら謝り続けていた。

彼が一心に頭を下げているのは、肩くらいまでの艶やかな黒髪を持つ、よほど偏った性癖の持ち主で無い限り、まず誰が見ても美少女と判断するであろう少女だった。

姫神紫亜。付き合い始めてそろそろ一月程になる、勇吾の恋人だ。

また、学校の女神アイドルとも呼ばれている。もっとも、本人に自覚は無いのだが。

その彼女が、殆んど拝むようにして謝罪を続ける勇吾を前にして、少し不機嫌そうにそっぽを向いている。

「いや、だからさ。ちょっと事情があつて遅れただけで、決して忘れてたわけじゃ……」

これも、数えるのが面倒になるくらい繰り返している台詞だ。意味は無いと知りつつも身振り手振りを交えた言い訳。

そう。約束とは守られて初めて約束になるわけで、破られた約束は印鑑の捺されていない契約書のようなもの。要するに、全く意味は無い。

(……まあ、意味が無いって事では、こいつらのこのやり取り自体がそうなんだけどな)

目の前で延々十分以上リピートされている現象を眺めつつ、昴は内心で呟いた。

実際、昴の呟きはそう間違っているわけでもない。というか、断言しても良いだろう。

このやり取りは無意味だ。それは身に染みて理解できる。

何故なら、始まった時点で結果が歴然と判っているから。

などと考えていると、昴の思考に同意するように、小さな呟きが聞こえてきた。

「よく飽きもせずに続けられるわね、あの二人」

呆れたような口調でそう呟いたのは、昴の真横にいる少女だ。

名を、姫神紅葉という。

苗字から推察出来たかもしれないが、彼女と紫亜は双子の姉妹である。ただし、二卵性双生児なのでそっくりと言うほどには似ていない。雰囲気や趣味嗜好は正反対と言ってしまうても問題ないぐらい差異があるし、容姿も普通の姉妹程度の似方だ。

ただし、二人とも美人であると言うことに関してはしっかりと共通しているのだが。

どちらかと言えば大人しい紫亜と、活発でエネルギーギッシュな紅葉。大雑把に印象を挙げればそんなものだろう。

ちなみに、紅葉も学校内で『女神様』などという呼び方をされている。主に一年生の男子から。姫神姉妹を二人合わせて二大女神と呼ぶらしいのだが、それはまあ、余談というか蛇足である。

昴は赦免の気配が一向に見えないせいか、とうとう焦りであわあわし始めた勇吾から視線を引き剥がして、頭ひとつ分低いところにある紅葉の表情を見やった。

すると、複雑そうなのと、とうか、実際心中はかなり複雑だと思われる。紅葉の顔が視界に入った。

「まあ、あいつらにとつちや通過儀礼みたいなもんなんだから。

傍から見ると痴話喧嘩にすらなっていないけどな」

「そうね。多分、犬どころかハイエナでも食べないでしょうし、もし食べたならきつと胸焼けするわ。甘すぎてさ」

そう。勇吾と紫亜のこうしたやり取りは、彼らが付き合いだした当初から何度も起こっている事だ。

昴と紅葉は最初こそ早くも破局か？ などと思ったが、何度も見ている内に段々とからくりが判ってきたのだ。

勇吾が何かポカをやらかして、紫亜が拗ねてしまう。勇吾が焦って謝る。何度か頭を下げていると、そのうちあっさりと和解して元の鞘に収まる。例外は無く、これまでは全てそのパターンだ。

要するに、これもコミュニケーションの一つなのだ。バカップルが変則的にいちやついているとも言えなくは無いが。

なんにしろ、傍観している者からすれば、言い方は悪いが茶番以外の何ものでもない。

彼らと一緒に行動する事の多い昴と紅葉からすれば、いい迷惑だ。

正直、見ているだけでお腹一杯、糖分過多である。

「でもまあ、仲が良いってのは僥倖だ。どんな形にしろ、なにそれ」

昴は視線を紅葉に固定したまま喋り出し、言葉を切ると同時に目を伏せた。それから、続ける。

「こんな短期間で別れられたら、お前の立つ瀬無いだろ」

「うっさい、馬鹿」

紅葉は口をへの字に曲げて、昴の脇腹を小突いた。どうやら少し拗ねたらしい。

まあ、それも無理からぬ事かも知れない。

実は紅葉も、紫亜と同じ時期に勇吾を好きになってしまい、それが元で一悶着あつたからだ。

結局、勇吾が選んだのは紫亜で、紅葉は単に振られただけでなく、思い人が双子の妹と付き合うという形になってしまった。

単純に妹の交際を祝福する事は、流石に出来ない。どうしても悔しさだとか、そういつた感情が邪魔をしてしまう。

というか、この状況で手放しに祝福の拍手などしていたら、それは聖人君子かただの馬鹿だ。

そんな訳で、紅葉としては目の前のやり取りを微笑ましく見ていられないし、かといって食って掛かるのは憚られるという絵に描いたような板ばさみ状態に少々嫌気が差してきていた。

「あんたって結構デリカシーとか欠けてるよね。普通言にくい事ズバズバ言うし。顔だけ見るとんでもない優男なのに」

思わず漏れた呟きには、どことなく皮肉が込められていた。が、言われた本人である陽気な金髪男　　言うまでも無いが、昴だ　　は、気にした様子も無く、肩を竦める。

「そりゃどうも。お褒め頂き光栄だ」

「いや、褒めてないから」

律儀に突っ込んできた紅葉の声には、疲れのようなものが滲んでいた。これは紅葉に限った事では無いが、昴と会話すると何故か疲れるらしい。さり気無くボケをかますので、いちいち突っ込んでいると疲労するのである。

「お、そろそろオチみたいだぞ」

昴に言われて、紅葉は勇吾たちの方に目を向けた。

そつぱを向いていた紫亜が勇吾と視線を合わせて何か言っている。それに勇吾が頷いて、更に何か言って、今度は紫亜が頷いていた。そこそこ距離があるので内容は聞こえないが、想像は付く。

恐らく、

『今度からは気を付けてね』

『わかった。約束する』

『うん。約束だよ？』

といった事なのだろう。この前もそんな感じだった。その前も同じだからきつと、今回もそんなものなんだろう。

隣では、紅葉と同じ結論に達したらしい昴が、笑いを噛み殺している。

まあ、毎回同じ取り決めで、しかも一連のやり取りの原因はごく小さな勇吾のポカだから、これではハムスターがひたすら中で走り続けるアレと同じだ。同じ所をぐるぐる回るだけ。

笑いたくもなるのだろう。微笑ましい光景と言うのは、度が過ぎると、稀に爆笑を誘う。

昴はその誘惑と戦っているらしい。

だが、紅葉は笑わなかった。微笑ましすぎる光景が誘うのは、なにも笑いだけではない。

胸焼けだって誘うのだ。

恋人同士の甘いやり取りは、当人以外にとっては大量の生クリームと変わらない。

そして　もう好きにしてくれ、という、諦観染みたまのまで勧めてくる。

紅葉の場合はそれだった。

なので紅葉は、既に笑顔で会話を始めているバカカップルに向けて、溜め息混じりに呟いた。

「
バカカップル
彼氏彼女に付ける薬は無いもんかしら」

当たり前だが、そんなものが在るはずも無い。

紅葉はもう一度小さく溜め息を吐いてから、未だ笑いを堪えている
様子の昴を小突いて、勇吾たちに向かって歩き出した。

明日から、夏休み。

さて、こんな調子でどうなることやら。

第二話：付ける薬はありません（後書き）

某麻雀漫画に影響されて麻雀を始めたものの、携帯ゲームのレベル1にすら勝てないへっぽこ物書き龍之介です。

くそつ。レベル1のくせに二順目で国士無双なんて卑怯だ。しかも直撃。即死だちくしょうめ。

えーと、取りあえずこの話で前作の説明的な部分は粗方書けたと思います。

ここから徐々に本題に入っていきますので、まったり読んでやって下さい。

感想、評価など待ってまーす。

では、また次回の後書きで。

第三話・夏、開幕。(前書き)

導入編その三。ちょっととくどいかもしれませんが、よろしければ読んでやってください。

では、本編をどうぞ。

第三話：夏、開幕。

「海に行かないか？」

唐突に、何の伏線も脈絡も無く昴がそんな事を言ってきたのは、夏休みが始まって二日目のことだった。

外は馬鹿なんじゃないかというほどに見事な快晴で、太陽は嫌味なくらいに熱線を送らせて眼下の大地を炙っている。太陽に性格があるとするとしたら、きつと陰湿なサディストなのだろう。

慈悲の心があるなら、もう少し手加減というものを弁えている筈である。

そんな無意味な思考をしまうくらいには、昴の発言は唐突で突然だった。

今は、夏休みの宿題をより効率良く始末するための『勉強会』の最中で、勇吾、紫亜、紅葉、昴の四人が昼前くらいから勇吾の部屋に集まって、各々問題集に取り掛かっていた。

勇吾は一瞬思考を停止させた後、シャーペンを走らせていた問題集から顔を上げて、テーブルを挟んで対面に座っている昴を見やった。

「何だ、いきなり。気が散るだろうが」

素っ気無く、告げる。すると昴は勇吾の発言を放置して、この場に居る別の人間に向けて再度口を開いた。

「二人はどう思う？」

訊かれて、四角いテーブルの、勇吾から見て右斜め前に座って辞書を引いていた紫亜が、まず顔を上げた。

「えっと、良いと思うよ。折角の夏休みだし」

どうも話の流れを掴み損ねているらしい紫亜は、しばし黙考した後、ようやくそれらしい答えを口にした。

それに被せるように、今度は勇吾の左斜め前の紅葉が昴に目を向け

て、

「あ、良いね海。あんまり行ったことないけど、やっぱり夏休みといったら海は外せないでしょ」

紫亜よりも話の流れが見えているらしく、殆んど即答だった。それに、昴が頷く。

「そうそう。夏といえば海。花火とか祭りも捨てがたいが、やはり海は外せないだろ」

「まあ、言わんとしてることは判らんでもないが」

曖昧にだが、勇吾も頷いた。が、その後直ぐに顔を顰めて、告げる。

「どうも俺、海つてのは苦手なんだよな。別にどうしても駄目だつて言うほどでもないんだが」

「え？ 海が苦手って……もしかして泳げないとか？」

紅葉が、意外そうに言ってきた。見ると、紫亜も似たような表情でこちらを向いている。

勇吾は手をひらひらさせて否定の意を表しつつ、

「いや、別に泳げないって訳じゃないんだけど。むしろ遠泳とかなら割と得意だ」

「じゃあ何だよ？」

再度、紅葉の発言。既に彼女の意識からは、テーブル上の問題集は消えているようだった。

勇吾は少し時間を置いてから、答える。

「……中学時代、空手部の合宿で海に行った時散々な目に遭ってな」「えっと、津波に呑まれたとか？」

控えめに、紫亜が言ってくる。それに重なるように、紅葉が、

「もしくは鮫に襲われたとか？」
確かに、そんなことが過去にあったのなら、海が苦手というのも頷ける。

が、勇吾は、それらを一蹴した。

「そーいう災害系じゃなくて、人災なんだよな……」

言葉を切ってから、勇吾はふと気付いた。いつの間にか、両サイド

の二人の目の色が変わっている。

(……これは、興味の色、か?)

当てずっぽうで呟いたのだが、案外それが正解である可能性もある。微妙に勇吾の過去に掠るような話題が出たので、好奇心を刺激したのだらう。

紫亜とは付き合っているのだし、紅葉とも良い友人関係を築けていると思うのだが、そのわりに、これまで自分の過去の話をした事が無い。

勇吾自身も、出会う前の彼女たちの事を知りたいと思うことはあるから、その逆も有り得るのかも。

自分の過去など空手の稽古か喧嘩か家事か、という程度のものであるが、知らない者からすれば興味が湧くのかもしれない。

(まあ、言ったからどうなるって事でもないし、ついでに少し昔の話でもするか)

とはいえ、何を　　というか、どこから話せばいいものか迷う。

(……とりあえず、話の流れからだど師匠のことが適当かな?)
話す事を決めると、勇吾は咳払いを一つした。こちらの言葉を待っている二人に向けて、口を開く。

「その、人災の原因つてのが、特別顧問　俺や昂は『師匠』って呼んでた人でな。俺は主にその人からの教えて全国制覇出来たようなもんなんだけど、その人がなんつーか……無茶苦茶だったんだ。たまに脈絡も無く訳判らん事言い出すし。空手の腕は凄いいし、人格も傍目には取っ付きやすい人だったんだが　どーいうわけか、俺に対してはやたらと厳しかった。稽古で気い失う事も日常茶飯事だったしな。そーいや、組み手中に骨折られた事もあったつけ。何しろ瓦なら十枚くらい纏めて粉々にするような人だから、まともに喰らったらタダじゃすまん」

「えーと、その人ホントに人間……?」

思わず、といった様子で紅葉が呟く。

勇吾は一月ほど前　つまり、紫亜と付き合いだす直前に、紅葉や紫亜の目の前でチンピラとの喧嘩で腹をナイフで刺されたという経歴がある。しかも、普通なら間違いなく致命傷になるような勢いで刺されたのだ。にも関わらず、勇吾は一日入院しただけでほぼ全快してしまった。呆れた頑丈さである。

その勇吾を素手で打ち倒すという『師匠』なる人物というのは、一体どんな化け物なのだろう。

勇吾は紅葉の発言はとりあえず置いて、何の話をしていたんだっただかと少し考えつつ、続けた。

「あー、兎に角、普段の稽古からしてそんな調子の人だから、合宿ともなると一層えらい事になるのは判るよな？　そんで、中二の時の冬、合宿で海に行つて、その最終日　顎の骨とか折られた」

「は？」

思い出しながら呟々と語る勇吾に、紅葉が素つ頓狂な声を上げた。それはそうだろう。

話の流れが明らかにおかしい。選手での顎を砕くしちゆう先生などいないだろう。普通なら。

「な、何でそんなことに？」

どことなくうろたえた様に、紫亜が聞き返してくる。

だが、答えたのは勇吾ではなく、昴だった。彼は何故か笑みを浮かべて、

「特別戦闘訓練だったんだよな。勇吾の武に関しての才能は師匠に目え付けられてたから。叩けば叩いた分だけ成長するもんだから、色々試したくなったらしい。で、人体急所の攻撃法を習得する時に顎とアバラを折られたわけだ」

「……とくべつせんとうくんれん？」

妙に物騒な単語が出てきて、紫亜は不思議そうに首を傾げた。

今度は勇吾が口を開き、補足する。

「そう、特別戦闘訓練。空手を軸に、ただし喧嘩を前提に行う戦闘法の訓練だよ。俺は空手そのものというより、力を欲してたから。」

渚を守るためにな。馬鹿馬鹿しい話だが、力さえあればどうにかなると思ってたわけだ、昔の俺は」

勇吾の両親はかなり昔に他界しており、今は姉の渚と二人で暮らしていた。勇吾自身はそもそも両親の顔も知らないの、大して感慨は無かったが。

だからというわけでは無いが、勇吾は残っているただ一人の肉親である渚をやつきになって守ろうとしていた時期があった。

まあ、渚は放っておいたらどこかへ飛んで行ってしまいそうなほどボケボケな人間なので、ある意味勇吾の心配は当然とも言える。

「ま、実際師匠に教わった技能は役に立ってるんだけどな。チンピラ相手なら多少の人数差は問題にならないし。俺がただの空手少年だったら、紫亜や紅葉と出会ったとき、戦えなかったかもしれん」

「成る程。勇吾の異常な強さの源泉はその師匠（しし）ってわけね」
納得したように、紅葉。紫亜は何故か複雑そうな顔で首を傾げていたのだが、勇吾は気付かなかった。

「とまあ、こんな感じで俺は海が苦手なわけだ。多分その時の怪我が俺の人生で最大のもんだったからさ」

勇吾はその時の痛みを思い出して、苦笑いしながら話を締める。未だに折られた肋骨のあたりが疼いているような気がしてならない。と、そういえば元々は何の話をしていたんだっかと思いついて、少し付け足した。

「でも、最初に言ったようにどうしても駄目、ってわけじゃないから、別に行っても構わんぞ、海」
それに、昴が頷いた。

それから四人は、顔をつき合わせて海に行く予定を立て始めた。

どうやら、テーブルの上の問題集の事は、もう誰の頭からも抜け落

ちているようだった。

第四話・姫神さんの家庭事情（前書き）

紅葉メインのお話。

ここからがようやく本筋です。

では、本編をどうぞ。

第四話：姫神さんの家庭事情

「ま、こんな感じかな」

パンパンに膨らんでいる旅行用の鞆を前にして、紅葉は満足げに呟いた。

ここは姫神家の二階にある紅葉の一人部屋。ぬいぐるみなどが数多く見られる、女の子らしいといえらしい部屋だ。ただし、ピンクなどの軽薄な　と、紅葉は思っている　色は個人的にNGなので、全体的な雰囲気としては落ち着いている。

「ちよつと重いけど、まあ良いかな。疲れたら昴にでも持たせれば問題ないし」

言いながら紅葉が見ている鞆は、今回の旅行の為の荷物で、小一時間ほどかけて準備したものだ。隣の部屋では、同じように紫亜が準備に追われていることだろう。

勇吾の部屋で決定した『海へ遊びに行く』計画は、折角だから思いっきり遊び倒そうという事で、結局は泊まり掛けの小旅行という形に纏まった。

比較的近場の、観光地帯にある海が目的地で、決行は明日だ。天気予報では降水確率0パーセントだった上、お天気お姉さん曰く『絶好の海水浴日和になるでしょう』とのことなので、ほぼ間違いなく明日には青い海と白い砂浜が見られるだろう。

追記しておく、人数は六人ということになった。

紅葉と昴、紫亜に勇吾、それから、紅葉のクラスメイトで仲の良い女友達が二人。

最後の女友達二人というのは、もし旅行先で勇吾と紫亜が無自覚いちやつきモードに突入してしまうと、紅葉と昴が必然的に二人でいる事になり、それではいつもと変わらないためだ。

ということは旅行先ですらあの気まずさ　　というか甘ったるさ

を味わうことになるのと同義であり、それはちょっと嫌だなあと
いう昴の意見に紅葉が賛成した結果、人数を増やすことになった訳
である。

無自覚であるが故に注意したところでそう簡単に直らないだろうし、
だいたい「ちょっといちゃつき過ぎじゃないか」などと言うのは何
か嫌だ。

なので勇吾や紫亜には本当の理由を伏せて、単に大人数の方が楽し
いから、という説明をしてある。

幸い かどうかは定かでないが、とりあえず勇吾たちは変に勘ぐ
っている様子もなく、普通に納得していた。

素直というのはいい言葉だ。

(……こんな事考えてる私は、素直さに欠けてるのかも知れないけ
どね)

自嘲気味に胸中で呟いて、紅葉は嘆息した。

と、ふと気付く。また、ため息を吐いている自分に。

勇吾に振られてから極端に増えたため息を、この一ヶ月間なるべく
意識して減らすようにしていたのだが、それでも追いつかないくら
いに、無意識に嘆息してしまう。

今日だけでも、十回以上嘆息している。

(らしくないわね。昔は、滅多にため息なんて吐かなかつたし、そ
もそも数を数えたりなんてしなかつたのに)

声には出さずに呟いてから、今度は声にして、付け足す。

「これが、失恋の憂鬱って奴なのかもね」

恋愛物のドラマのヒロインや、あるいは自分の友達が失恋した後極
端に気落ちするということは、よく見かける光景だ。

後者に関して言えば、それなりに仲の良かった中学時代の友達が、
失恋を苦にして『死んでやる!』とか叫んでいるのを耳にしたこと
があるし。

これまで傍観者として見ていただけの紅葉は、何を大げさな、と思っていたのだが……

実際それが自分の立場になってみると、成る程、これはかなり精神的にキツイものがある。

もつとも、彼女の場合は失恋と同時に、想い人が自分の妹と結ばれるというオプシヨン付きだったので、他の場合よりも傷は深いのかもしれないが。

いや、実際、傷は深かったと断言しても問題ないだろう。

今でこそそれなりに回復しているが、振られた直後の紅葉は、彼女自身でも酷いと思わざるを得ないような落ち込みっぷりで、周囲にはえらく心配させていたらしい。

それこそ、今にも自害しかねないような有様だったと、クラスメートに言われた覚えがある。

もちろん紅葉自身はそんな気はなかったが、落ち込んでいた事は事実だ。

と、そこまでぼんやりと思考してから、紅葉は頭を振った。

また、実の無い事を考えてしまっている。

こんな事は、ため息の数と同じくらい考えた。今更意味なんかないだろう。

嘆息が混じらないように気をつけながら、言う。

「……まあ、もう済んだ事だし、どうしようもないか」

それで吹っ切れる訳でもなかったが、取り敢えず口にしてしまえば少し楽になるもの確かだった。

「よし。折角遊びに行くんだし、いつまでも暗いまんまじゃ私らしくないよね。いっそ、馬鹿騒ぎするぐらいじゃなきゃ」

決意を新たに　というほど大袈裟な事ではなかったが、少し気合を入れて、伸びをする。

明日は朝早くに出発するので、もう寝た方が良くかもしれない。

そう思つて、まずは風呂に入ろうと、部屋を出ようとして　そこ
でちょうど、電話の呼び出し音が鳴った。

あまり聞き覚えのない、家の電話の音だ。

紅葉たちの両親はここ数年、揃つて海外出張に出掛けているため、
家の電話が鳴ることは殆どない。紅葉たちに用があるなら、携帯の
方に連絡が来るからだ。

自宅に連絡があるときは、何かの宣伝の電話か、海の方こうにいる
両親からの国際電話かのどちらかだ。

ただ、両親から　といつても父親からだ　は先週連絡があつ
たので、確率的に言えば、これは多分宣伝の方だろう。

「何？　こんな時間に。面倒ね……無視しようかしら」
言いつつ、受話器の所まで歩いて、電話に出る。

宣伝だつたら何にも言わないで切つてやるうと思ひながら、受話器
の声に耳を傾けた。

「もっしもし。夜分遅くに失礼します。……つて、自分の家に掛
けてんのに言う必要あるのかしら、これ？」

聞こえてきた声は、えらくハイテンションだった。恐らく、アルコ
ールが入っているのだろう。

聞き覚えのある　というか一度聞いたら忘れないであろう声に、
思わずため息が出るが、今度は自嘲の言葉は出なかった。

酔っているこの人を前にしたら、嘆息と突っ込み無しでは会話がで
きないからだ。

少しばかりの皮肉　こんな時間に電話してきたことに対しての
を交えて、紅葉は答えた。

「……どちら様ですか？　こんな時間に何の宣伝なんです？　因みに
夜分遅いのが判つてたらそもそも電話しないのがクレバーだと思
いますか」

「うそーん。何か紅葉ちゃんが冷たいー。もしかして反抗期？　親
の言う事は片っ端から聞く耳持たなくなっちゃった？」

どうやら皮肉そのものは無視されたく、さらにボケを重ねてきただけだった。
紅葉はもはや隠そうともせず大きなため息を吐いて、壁にもたれながら呟いた。

「はあ。……何か用なの？ お母さん」

電話の相手は、予想に反して母親だった。しかも酔っ払っているらしい。

受話器が伝えてくる声は、相変わらず気楽だった。

『うーん、用って程の事でもないんだけどね。ただ紅葉ちゃんたちは元気かなーって』

「そりゃ元気だけどね。特に紫亜は絶好調よ」

『あら、どして？』

声は間髪入れず、聞き返してくる。

（まあ、お母さんなら言っちゃっても良いか。親馬鹿のお父さんには、まだしばらく内緒の方が良いだろうけど）

しばし考えてから、紅葉は端的に答えた。

「恋人かれしが出来たからよ」

途端に、受話器が静かになる。正確には、受話器の向こうにいる酔っ払いの母が。

数秒して、声だけ聞いても呆然と目を見開いている母の姿が想像できるくらいに気の抜けた声が紅葉の鼓膜を叩いた。

『……え？ マジ？ 紅葉ちゃんじゃなくて、紫亜ちゃんか？』

「こんな事で嘔吐いてどうすんのよ。紛れもなく、疑いようもなくマジな話よ。ていうか、どうでもいいけどちゃん付け呼ぶの止めてよね。素面ふつの時は絶対そんな喋り方しないでしょ？」

紅葉がそう言った後、一瞬の間があった。息を吸い込むまでの所要時間、という程度の間。

『う……』

「うっ？」

『嘘おおおおお！？』

キーン、と耳の中で音が鳴る。それくらいの大絶叫だった。思わず受話器を放り出しそうになるのを堪えて、取り敢えず今まで受話器を当てていた方とは逆の耳に受話器をかざす。

『え？ あの内気で大人しい子に彼氏が出来たの？ ねえ、どんな奴？ どんな奴？』

早口に捲くし立てる受話器　じゃなくて姫神母。

あんたは恋バナ好きの女子高生か、と内心突っ込みながら、紅葉は勇吾の特徴を挙げだした。

「えっと。同じ学校の同級生で、私にとっても友達なんだけど。特徴は……結構背は高いね」

『うんうん。それで？』

「性格は、男友達とかの前だと短気な感じだけど、紫亜には行き過ぎなくらい優しいかな。顔は、少なくとも平均は超えてると思う。ちよっと目付きが鋭すぎるかもしれないけどね」

『ふむふむ。他には？』

「そうね……。喧嘩とかすごく強くて、一人で何人ものチンピラを倒したり出来るわ。それは私も見たことあるし。それに聞いた話だと、中学時代に暴走族を一つ、一人でやっつけちゃった事もあるらしいけど」

『……何か、どっかで聞いたような話ね』

今度の説明には少し相槌が遅れていたが、紅葉は無視して続けた。
「そうそう、中学時代といえば、空手の全国大会で優勝した事もあるんだって」

『……へー』

すっかり酔いの醒めたような声音での返事だったが、紅葉は気付かない。

「それから、すっごく恐い空手の師匠に顎を折られたとも言ってた

っけ」

『ほほう』

もはや受話器からの空気振動はドスの効いた声になっているのだが、いつの間にか話すのが興に乗ってきていたので、紅葉は気にしなかった。

「あ、それと、これが一番印象的な事なんだけど」

『聞きましようか』

完全に酔いが消え失せ、本来の口調に戻った姫神母が静かに聞き返す。

「両目が綺麗な翠色なんだ。何か、ひいお婆さんの遺伝なんだって」
言い終えて、紅葉はもうこれくらいで概ね伝わったかと口を噤んで、母の反応を待った。

が、受話器は何故かうんともすんとも言わない。

しばらくして、沈黙の中から母の吐息が聞こえた。なんとなくだが、笑いを堪えようとして失敗しているような感じを受ける。

『……ふっ……くくく……で、その紫亜の彼氏の、な、名前は？』

吐息に続けて聞こえた声は、もはや完全に笑っていた。紅葉は訝しく思いつつも、とりあえず答える。

「えーと、緒方勇吾っていうんだけど……」

『ぶっ……あーはっはっはっは！ ふ、くくくくく』

大爆笑。母はどうやら床を転がりながら笑っているらしく、バタバタと騒がしい音が笑い声に混じって聞こえてくる。紅葉はしばらく呆然としながらそれを聞いていたが、あまりに盛大に爆笑しているので、母がお酒を飲みすぎて頭が可笑しくなっただんじやないかと不安になった。

「あの、どうかした……？」

『うっん、なんでもない。こっちの話。それじゃ紅葉、その彼氏君によるしく言っというて』

「あ、うん。いいけど」

『それじゃ、もう切るわ。また電話するから、紫亜とはその時話す』

よ

「判った。それじゃ」

ガチャリ、という音が聞こえて、それきり声は途切れた。紅葉は受話器を戻して首を傾げる。

（結局、何だっただらろ？）

風呂場に向かいながら考えてみるが、よく判らない。

（でもまあ、あの母の笑いのツボなんて判りっこないか）

最後の母の大爆笑を思い出しながら紅葉は、ま、いーかと思っただ。

自宅の電話の子機を放り出して、姫神夏美は笑いの余韻を噛み殺していた。

「いやーまさか、紫亜に彼氏が出来るなんてねえ。しかも……」

言葉を切つて、再度込み上げる衝動　　というか笑動を堪えて、それから続ける。

「しかも、その相手が弟子ていしだなんて。これはもう、運命しゆんめいとしか言いようがないじゃない」

かなり飲んでから電話したのに、もう酔いが醒めていた。それだけ、紫亜むすめと勇吾ゆうごの組み合わせが意外だったのだ。

「さて、旦那にはどう言おうかな。下手な言い方したら、即座に日本に帰って勇吾を半殺しにしちやいかねないし。血の気多い上に親馬鹿だからなー、ウチのは」

もっとも、あのバカ弟子は、彼女が今まで見てきた空手少年の中でも間違いなく最強だったから、もしかしたら旦那ともいい勝負をするかもしれない。

だとしたら、それを見るのも面白いかも。

第四話・姫神さんの家庭事情（後書き）

はい。早くもネタばらしでした。

どうも、へっぴょ物書きの龍之介です。

「師匠」の事はもっと後半まで引っ張ろうと思ったんですが、路線変更しました。

次回から、夏休み編第一部の小旅行です。

海がメインステージで、少しばかり勇吾には苦勞してもらいます（えー）

では、また次回のあとがきで。

第五話・ジエラシーは突然に（前書き）

新キャラ登場編。四人だけだとか賑わいがないので追加出演。前回のあとがき通り、勇吾には苦勞してもらっています。では、本編をどうぞ。

第五話：ジェラシーは突然に

不条理というのは、要するに当人にはどうすることも出来ない現象の事で、それ故に厄介なことこの上ないと言える。

例えば、突然通り魔に襲われる、落とし穴に嵌まる、満員電車で痴漢と間違えられる 他にも色々あるが、概ねそのようなものだ。いきなりナイフで切りつけられたら普通は驚いて対応なんて出来ないし、最初から落とし穴があると思って歩いていない限り、隠された罠など見抜けない。

電車の中で『この人痴漢です！』なんて叫ばれたら、間違いなく、しかもスピーディーに冤罪を押し付けられるだろう。

そう。今のこの状況だって、別に自分は悪くない筈で、全ては冤罪なのだ。

(だから誰か助けてくれ……俺は無実だああ！)

勇吾は胸中で絶叫しつつ、我が身に降り掛かった不条理を噛み締めていた。

勇吾は今、特急列車の座席の両側から、今日あったばかりの少女二人に抱きつかれて、真正面の紫亜に思いつきり睨まれているところだった。

助けを求めて視線を巡らせると、紅葉は素知らぬ顔で目を背け、鼻にいたっては寝たふりなどしている。しかも、笑いを堪えているのか、口許が引き攣っている。

(薄情者……)

情けない心地で呻いて、勇吾はげんなりした。

というか、何でこんな事になってんだらうと今更ながらに疑問が湧いてくる。

勇吾は殆んど現実逃避に近い心持ちのまま、ここまでの道のりを回

想した。

とりあえず思い浮かんだのは、まだ平穩だった頃の待ち合わせの場所だった。

* * * * *

「暑いぞ、意味もなく暑い」

駅に向かう道中で思わず呟いたのは、そんな当たり前の事だった。だって今は夏だから、暑いに決まってるのだ。この時期が寒いようなら、地球は完全に天邪鬼と化している事になる。

とはいえ、やはり過剰な気温の上昇は不満以外の何者でもなく、勇吾はフルフェイスのヘルメットの中で、鬱陶しげに顔を顰める。現在の勇吾の状況は、一言で言ってしまうえば移動中だった。

十六歳になったその月のうちに免許を取ったので、もう一年近くの付き合いになる愛車バイクに跨って、午前中の快適な道路を駆けている。勇吾の家から駅までなら、そう大した距離ではないので、本来なら徒歩でも構わない道のりなのだが、目覚まし時計を前日に叩き壊していた事を忘れていたせいで寝坊してしまったのだ。

（まったく、何でちょっと叩いたくらいで粉々になるんだろうな、目覚ましってのは。これで何個目だっけ、寝ぼけて壊した時計……四個目か。今度からは、もうちょい気合の入った奴買おうしよう）
無茶なことを考えながら、勇吾は少しスピードを上げる。そろそろ、待ち合わせの時間だ。

と、まだ遠目にだが、駅が見えてきた。勇吾は何とか遅刻せずに済みそうだと少し安堵しながら、駅の真横にある駐輪場に向かった。

どうでもいいが、気合の入った目覚まし時計ってどんなんだ。

* * * * *

「滑り込みで、ギリギリセーフだな。あと三秒で遅刻だったぞ」
既に全員が集まっていた面子　いつもメンバー三人と、知らない少女が二人　の元に勇吾が現れると同時に、昴がそんな事を言うてきた。

「いや、三秒で。細かすぎないか、おい。それはまあ、置いとくとして。おはよ、紫亜」

遅刻しかけていた事は事実なので控えめに突っ込んでおいて、勇吾は紫亜に目を向けた。

「うん。おはよう、勇吾君」

微笑んで、紫亜。勇吾はそのまま会話に入ろうとして、口を開きかけた。

が、そこに、やたらとハイテンションな声が横から飛び込んできた。「っておい！　こっちは放置ですか、もしもーし！」

声に少し驚きつつ見やると、ビシッという擬音が聞こえてきそうなくらい見事にこちらを指差して、勇吾の見知らぬ少女が仁王立ちしていた。

「かー！　見せ付けてくれるね。いきなりラブラブモード全開ですねこれは！　新参者は目にも映らないとは！　聞きしに勝るバカップルだ！」

「えーと……」

そういうあなたはテンション大爆発ですね、というような少女の弾けっぷりに、勇吾は口ごもる。

はつきり言って、対処の方法が思いつかない。ていうかラブラブモードってなんですか？

ゲームか何かの必殺モード？　だとしてもネーミングが嫌過ぎる。それにしてもバカップルとは何っー表現だ。まだ朝の挨拶しかしていないというのに。

どうしたもんかと視線を泳がせていると、視界の端で、昴の横で頭

を抱えていた紅葉が言ってきた。

「えっと、この娘は園部琴子そのくまこ。今回呼んだメンバーの一人よ。私のクラスメートで、紫亜とも面識あるから」

言われて、ふと気づく。そういえば、傍らの紫亜はこのぶっ飛んだテンションに動じた様子も見せていない。妙だとは思っていたが、既にこの感じを経験していたらしい。だから動じてないのか。

納得して、視線をテンションぶっ飛び少女 琴子というらしいに戻すと、彼女はいけね、とても言うように舌を出して、それでもノリは同じまま、

「あ、自己紹介忘れてったっけ。琴子だよん。よろしくっ！」
と言った。勇吾は軽く会釈しながら、

「ああ、よろしく。緒方勇吾だ。好きなように呼んでくれて構わない」

「よし、それじゃさっそく渾名を決めるぜ！」

即答された。なんとなく変な渾名を付けられそうだと半ば確信のよ
うなものを抱きつつ、聞き返す。

「どんな？」

「ゆづごん！」

「怪獣じゃねえか」

勇吾は再びの即答に、こちらも速攻で突っ込んでから、やっぱり変
だったと細く嘆息する。

それに、琴子はうーむと唸って、それから何か思いついたように、
喜色満面で叫んだ。

「じゃあ、ゆづごんじらってどう!？」

「また怪獣かよ!？」

思わず素のノリで思いつきり突っ込む勇吾。少し離れた所で、昂が
爆笑しているのが聞こえた。あいつはあとで殴つところと思いが
ら、勇吾は再び嘆息する。この調子だと、渾名が決定するまでに日
が暮れそうである。

「はいはい。漫才はその辺にしときなさい。勇吾にはもう一人紹介

しなきゃなんないんだから」

早くも疲れたような声で、紅葉が割り込んできた。琴子が横暴だ！
っ！とか言っているが、無視されている。

紅葉はなおも何か言っている琴子を断固としてスルーして、未だに
笑いの衝動に肩を震わせている昴の近くに立っている少女を指差し
た。

「で、こっちの娘が羽坂楓^{はさかかえで}。琴子と同じでクラスメートね」

「初めまして。羽坂楓よ。好きに呼んでくれて良いけど、出来れば
楓って呼んでね、緒方君。あなたの話はよく紅葉から聞いてるわ」

「……それはどうも。緒方勇吾だ。君も好きなように呼んでくれて
いい。ただし、怪獣は不許可」

彼女は勇吾の目の前まで歩いてくると琴子とは対照的に、丁寧な物
腰で会釈してくる。

勇吾は思わずそれに合わせて会釈しながら、少し茶化しながら答え
た。と、同時に、何かが引っかかる。

(……羽坂？ どっかで聞いたような名前だな)

「ふふ。それじゃ遠慮なく、勇吾君って呼ばせてもらおうわ」

言いながら微笑んでくる楓は、自然な動作で長い髪をかき上げる。

ふわりとほのかな香りが鼻腔を擦り、一瞬ドキリとさせられて、勇
吾は思わずたじろいだ。

その一瞬で、僅かに感じた引っかかりを忘れる。

彼女が『女』である事を強制的に認識させられるような感覚を受け
て、改めて少女 楓を見ると、かなりの美人である事が理解でき
た。

まあ、容姿だけで言えば琴子も十分美少女と呼べるのだが、あの過
剰なテンションがあるので少し評価が斜め右下向きだ。

勇吾はぼんやりと彼女を観察しながら、彼女から強く放たれている
独特の雰囲気^{きょうき}に晒されていた。

その雰囲気^{きょうき}に吞まれて というか彼女に見とれているとも言える

が 更にぼんやりしながら、ふと考える。

(……なんだろうな、この甘ったるいような感覚は。殺気みたいに刺々しくなく、膨張する怒気とも違う。首筋が焼け付くような闘気でもないしな。この状況じゃ当たり前だけど、狂気みたいな禍々しさも違うし……何て言うんだっけ、この感じ。 そうだ、『色気』って奴だ)

今更ながらに思い出して、一人納得する。

残念ながら、『色気』という一点においては、彼女は郡を抜いている。紫亜や紅葉とは、かなり差があるものと思われる。そういえば、体つきや服装もかなり挑発的な感じがするし。

顔の造作の完成度でいえば三者は互角と違って良いが、この一点に関しては某最高のコーディネーターと連邦軍士官くらいの差異がある。要するに勝ち目がない。

少々マニアックな比較をしていると、勇吾はふと視線を感じた。見ると、向かい合っている楓の後ろから、昴の姿が見える。

彼はなにやら苦笑しながら、アイコンタクトで意思を伝えてくる。

勇吾は口で言えよと訝しんだが、とりあえず視線から意味を拾い上げてみた。

『ヒダリ、キケン。チュウイシロ』

(左? 注意しろったって、何をだよ……)

ふと左側に目をやって、 勇吾は心の中で悲鳴を上げた。

(ぎゃー! 何かいつの間にか紫亜がめっちゃ怒ってらっしゃる! ? 何でだ? 俺なんか悪い事したか!?)

勇吾の隣で、紫亜が思いつきり拗ねていた。怒っているというより、単に妬いてる感じだったが、それが判るほど勇吾の恋愛経験は多くない。

勇吾はさんざっぱら焦りながら、

「あのー、紫亜？　なんでそんなに怒ってる？」

「怒ってないもん」

完全にいじけていた。勇吾は更に焦る。

「いや、だって」

「怒ってない」

唇を尖らせながら言っても説得力はないが、そこまで断言されてはこれ以上言いようがないのも確かだった。

そこに、琴子が何故か楽しそうに、

「お、何々、修羅場？　あたし昼ドラは嫌いじゃないよっ！」

「何が昼ドラだああああ！？　琴子っ！　無意味に煽るなっ！」

思いつきり突っ込む。思わず呼び捨てにしてしまったが、気にしている場合でもなかった。

それを聞いて、何故か楓がポンと手を打ち合わせて、

「ふふ。私も昼ドラのドロドロ泥沼関係は嫌いじゃないわ」

「ええ！？　そこで乗っかるのか！？　何その無駄なノリの良さ！？」

「うー……」

「ていうか痛いっ！　紫亜、脇腹は抓られたらマジ痛いからっ！」

ごめんよく判んないけど取り合えずゴメン！」

意味もなく微笑みながら言ってくる楓に突っ込み、更に脇腹を抓ってくる紫亜に懇願する。

どうやらそれである程度紫亜の気が晴れたらしく、脇腹の痛みから解放された。

（あー、痛かった。……でもまあ、このくらいで解放されたって事は、ほんとに怒ってたわけじゃないのかもな。となると……えーと、この場合は、妬いてたっていうのか？）

どうも楓に見惚れていたのが不味かったらしいと、勇吾はここに来てようやく気付いた。

と、そこで、ここまでのやり取りを傍観していた紅葉が、パンパン

と手を叩いて一同を制止した。

「はい、そこまで。漫才は止めなさいって言ったでしょうが、まったく。そろそろ移動しないと電車に乗り遅れるわよ」

言って、紅葉は改札に向かって歩き出した。この集団には纏まりが決定的に欠けているが、それでも紅葉の一言で取りあえず騒ぎが収まり、そろそろと彼女の後に続いていく。

目的地の海のある駅に行くには、この駅から二駅隣の駅で特急列車に乗り換えるので、まずは普通の電車に乗らなければならぬ。この駅には急行が止まらないから、一本乗り遅れただけでも結構なタイムロスになってしまう。

というような事を頭の中で纏めていると、不意に服の袖が引っ張られた。

「ね、ね、ちょっと」

琴子だった。妙にまじめな顔で　今までのノリがノリだったので、変な感じだった　こちらを見ている。

何か深刻な事なのかと訝ぶって、聞き返す。

「何だよ」

「ゆづごもらってどう?」

「結局怪獣じゃねえか!」

どうも最初的话题を、まだ検討中だったらしい。

この旅行、こんなんで大丈夫なのかと勇吾は思ったが、どのみちどうする事も出来ないのだし、なるようになれと割り切るしかなかった。

結論から言つと、やっぱり大丈夫じゃなかった。

数十分後、勇吾一行は特急列車に乗り込んでいた。つまり、勇吾の平穩はこの数十分のみだったということである。

「座席、どうする？」

不条理が始まったのは、紅葉のこの一言からだった。

「まあ、別に適当で良いんじゃないか？ なんならじゃんけんですつた奴から座るとか」

「そーだな」

昴の言葉に皆、特に異論は無いようだった。勇吾個人としては、出来れば紫亜と隣のほうが良いのだが、どうせ喋る時は全員参加なのだろうから、そう拘る必要も無い。

そのまま昴が仕切って、席決めじゃんけんが始まった。

「それじゃやるか。じゃんけん、ぽい」

結果、三人掛けの座席の一つをクルリと回して六人が向かい合えるようにして、片方に昴、紫亜、紅葉が座り、その対面に楓、勇吾、琴子の順に座る。

「なんか作為的な位置取りになったよーな気がするんだが」

じゃんけんなど運任せなのだから、そんなことはあるはず無いのだが、両サイドを今日が初対面の女子二人に固められるという状況に、勇吾は思わず呻いていた。

「あら、私たちが隣じゃご不満？」

上目遣いに言っただけの楓に、勇吾は思わず目を逸らした。

意識しているのかわからないかは判らないが、露出度の高い服の胸元から、ふくよかな膨らみが二つ、チラチラと見えている。

その上、妙に距離が近いというか、密着してきているのだ。勇吾は若干身を引きつつ、

「いや、別に不満とかそんなんじゃねえんだけど」
言いながらも、断固として目は逸らしたままだ。

逸らした先で昴のにやにやした笑いにぶつかり、ふと思いついてアイコンタクト。

『セキヲカワツテクレ』

『コトワル』

『タノムカラ』

『キヤツカ』

『ジヨウコクスル!』

『ヒケツスル』

(こんの野郎)。楽しんでやがるな)
胸中で呻いて、嘆息する。

勇吾は基本的に異性と接するのが苦手なので 紫亜と手を繋ぐのも過度に緊張するくらい こうして近くに異性がいる状況というのはあまり好ましいとは言えなかった。

ある程度の距離で喋るくらいなら問題ないのだが、直接触れたり今のように胸元などが見えたりするのは正直しんどかったりする。

別に嫌悪感があるわけではないし、女嫌いでもないのだが、どうしても意識し過ぎてしまうのだ。

それは昴も周知のことなので というか度々それをネタにおちよくられたりする、今回もそうなのだろう。

(何かってーと俺で遊びやがるんだよな、こいつは。ったくいい趣味してやがるぜ……)

こうなったら仕方ないか、と諦観じみた割り切り方をして、勇吾はそういえば琴子が大人しいなと右側を見やった。
と、昴と同じようにやにや笑いが視界に映る。

(こ・い・つ・ら・は〜!!!) 揃いも揃って人をおちよくりやが

つて！)

憤然と喚く　心の中でだが。こめかみの辺りが引きつるのを感じるが、それこそ仕方ないというか、どうしようも無いことだった。勇吾は誤魔化しがてら、笑ってみる。それも引きつっている上に、乾いたものだった。

「は、ははは。取りあえず離れてくれ、楓。寿命が縮むから」

「あら、良いじゃない。嫌じゃないんでしょ？　このくらいのスキンシップ、普通よ？」

「いや、そういう問題じゃなくてだな……」

どう言ったら伝わるものかと、天井など見上げつつ、少し考える。

と　左腕に、突如柔らかい感触が発生。何だこれは、と左を見る。そして　確認すると同時に悲鳴を上げた。もともと、それすら胸中で抑えたのだが。

（げえっ！　何だっつてんだ！？　何がどーして　ああもう意味わかんねえ！）

視界に映ったのは、勇吾の左腕に押し付けられて窮屈そうにしている楓の胸だった。

「ちょ、流石にこれは不味いだろ！？」

今度は流石に黙ってはいられず、勇吾は叫んだ。腕を引っこ抜こうと力を入れるのだが、本気でやって怪我をさせても不味いので、ほどほどにしか出来ないため、上手くいかない。

「あつはつは！　楓エローい。そしてあたしも飛び入り参加ー！」

「だから意味わかんねえって！？」

今度は右側から琴子が飛び付いてきて、状況はもはや完全に意味不明の混沌カオスと化していた。

（こんなんもうオチが見えてるじゃねーか！　紫亜が怒ってこの後さんざつぱら苦労するんだろ！？）

胸中で叫んで、恐る恐る紫亜を見してみる。

「……………」

めっちゃ睨まれた。

(イエーイヤっぱり！　きれいさっぱり予想通りだよこん畜生っ！)
何だかもう泣きたくなってきて、更にいえばヤケクソのような心持で、勇吾は頭を抱えようとして　　両側から引っ付かれているのでそれすら出来なかった。

「いや、頼むからもう勘弁してくれ！　　おいこら昂！　笑い堪えてないで助けるよお前えええ！？」

「残念。聞こえないわ」

「はっはっは。聞こえないーい」

「俺は寝てるから当然聞こえない」

三者三様に拒否の発言。紅葉は頑なに明後日の方向を向いている。

「い・い・か・げ・ん・に・し・ろおおおお！　　昂てめえこ

ら！　寝てる奴が返事するわけねえだろが！？」

「寝言だ。ぐー」

「わざとらしい寝息立ててんじゃねえっ！」

ひたすらに、喚く。もう周りへの迷惑とかは考えておらず、完全に叫び声である。

それでも、誰も勇吾を解放してくれなかった。

結局　　勇吾が自由を得たのは、目的地　　海が見えてきて、皆の注意がそちらに逸れてからのことだった。

当たり前の事だが、紫亜の機嫌と勇吾の精神衛生はすこぶる悪く、ほんとにこの旅行はこんなんで大丈夫なのかと、勇吾は今日何度目かの危惧を抱いていた。

第五話：ジェラシーは突然に（後書き）

海には辿り着いてませんが、テンションはいつもより高いです。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

新キャラ登場でますます騒がしい勇吾の周辺。

これからもつとやかましくなる予定になっております。

次回は勇吾大暴れ編、という事を考えてますので、バトルシーンが少し入るかも。

では、また次回のがきで。

第六話：海だっ！

本来ならどんな根暗人間でも上機嫌になってしまいそうな快晴だといふのに、こうまで疲労し、そして気だるいのはどうした事だろう。（性分……いや、運命かな。物事がスムーズに運んだ事なんて、今までに一度も無い。それがどんなに小さな事であっても、だ……。両親がいけないのは、そのケチの付き始めか？）

無表情だった顔に苦笑を貼り付けて、勇吾はそんな事を考えていた。性分、運命。

どちらであっても、大した差は無いのだろうか。つまるところ、どちらも生きてるうちに変わるものではない。

どうあっても変わらないのであれば、苦笑してその事を忘れても良いのではないか？

というよりも、そうする他に何が出来るだろう？

それなりに人の居る浜辺にシートを敷いてその上に寝そべり、勇吾はぼんやりと空を見上げていた。

どこで見ても変わらない空。その全てを一度に見ることが出来ないほどに広大で、深い世界。こんなちっぽけな島国のどこから見ても、多分見て取れるような違いは無いだろう。

それでも、宇宙という観点を踏まえて見れば、この空はほんの小さな塵でしかない。

その塵の中の、より小さな存在。それが自分。（……馬鹿らしいな。自身を過小評価したところで、憂鬱が晴れるわけじゃない）

何でこんなことを考えてしまったのか。それは簡単だ。要するに、退屈だったというだけの事。

ついでに言えば、ちよっとした悩みを抱えてしまったという事も理

由の一つか。

まあ、結局なにが言いたいのかというところ。

勇吾は起き上がると、もう一度空を見上げて呟いた。

（さて……紫亜がまとも口利いてくれねーのは、どうしたもんだろうな？）

ただ、それだけの事なのだが。

* * * * *

特急列車から降りた一行は、予約しておいた、浜辺の近くにある旅館に宿泊用の荷物を置くと、最低限あそびための持ち物だけを持って早速海に繰り出していった。

勇吾が居るのは海で遊ぶ上での拠点、つまりは荷物置き場だった。更衣室で水着に着替え、パラソルとシーートの準備をしたところでやる事が無くなって、ぼんやりと寝転んでいたのである。

女性陣はまだ着替えている途中なので、極めて退屈な時間だ。これでは、多少馬鹿な考えに耽ひたつてしまおうとしても、空でも見上げるしかやる事が無い。

「相変わらず凄い事になってるな、お前」

「……？」

突然話しかけられて、勇吾は振り返った。と、海パンのポケットに手をつっ込んで、鼻が立っている。

「凄いって、何が」

再び空を見上げて、勇吾は聞き返した。この男相手なら、背中越しに会話をしてもこっちを向け、などと咎められることは無いだろう。

「何がって、傷だよ。その体の傷」

「……ああ。これが。そりゃ、あんだけ喧嘩ばっかしてりゃこうなるさ。桜通りじゃ喧嘩で刃物出してくるチンピラやヤクザは腐るほど居るんだからな」

言いながら、自分の体を見下ろす。

それなりに鍛えているせいかそこそこ引き締まっている体に、いくつかの傷跡が残っている。

肩、脇腹、それに、自分では見えないが背中にもあるはずだ。

どれも大した大きさではないが、深く切られてはいるので、くつきりと残っていた。

一番最近のもので、一月前。腹のど真ん中にある範囲の狭い傷跡がそれだ。これは刺し傷だから新しいからは判りかねるが、取りあえず最も明瞭に残っている。

昴はどうやら、嘆息したようだった。

「いや、俺もお前と同じくらいやらかしてるけど、傷なんて無いんだがな。……お前は直ぐに自制乱すからそーなるんじゃないのか？

毎度の事だが、ぎりぎりの勝負になると防御捨てて特攻かますだろ、お前」

「ほつとけ。んなこたあ師匠に散々言われてたんだ。今更確認することでもねえだろうが」

家族連れやカップルがちらほら見られる中で、二人のやけに物騒な会話が続く。

なんというか、夏の海で交わされる会話としては、どうにも色気に欠ける連中である。

「ところで」

と、突然に　この男は大概の事がそうなのだが　昴は話題を変えてきた。

「聞いてもいいか？」

やけに抽象的な問い。勇吾は顔を顰めた。ちらりと肩越しに昂を見やっつて、

「何をだよ。主語が抜けてたら答えようがねえだろが」

「ま、そうだな」

言ってから、ふむ、と相槌を一つ打って、昂は少し間を取ったようだった。何の間かと訝しんでいたが、単に昂が勇吾の横に移動しただけの事だった。

「それじゃ、単刀直入に言おう。紫亜とはどこまでいったんだ？」

「……は？」

「いや、だから。お前、紫亜とはどうなってるんだ？ もう一月経つんだし、キスくらいはしてるんだろ？」

勇吾は鈍痛のしてきたこめかみの辺りを人差し指で摩りつつ、またも空を　　というか単に上を　　見上げて思考を加速させた。

どうしてこの男はそんな事を聞いてくるのだろう。どうして雲は白いのだろう。どうしてポストが赤いのかは　　その方が目立つからだ、きつと。

思考を打ち切り、視線を巡らせ、真横の金髪バカを視界に収めとりあえず感じたのは、眩暈めまいだった。

暑さにやられたわけではないだろう。この脱力感と眩暈は間違いなく、精神磨耗から来るものだ。

大きく、ため息を吐く。それが気力を根こそぎ搾り出しているような錯覚に辟易しながら、勇吾は呻いた。

「そんなもん、訊いてどうすんだよ」

「いや、暇だから訊いてみただけなんだが。ま、紫亜がいると訊き辛いから、今が丁度良いつちゃ丁度良いしな。それで、どうなんだよ」

再び訊かれて、勇吾は言葉に詰まった。答えるのに困るような事はしていないが　　いや、何もしていないのも微妙な所か　　とにか

く口ごもる。

しばし思考して、勇吾は結局、

「何も」

とだけ答えた。それに、今度は昴が閉口したようだった。もっとも、理由は全く別物だろうが。

「……何も？ 付き合って一ヶ月経つのに、キスもしてない？」

ややあつて、昴が言ってくる。

「……ああ、そうだ」

無然として、勇吾は呟いた。なんとなくだが、昴のリアクションが読めたからだ。多分、笑うか呆れるかの二択だろう。

「く、くくく。あーっはっはっは！ お、お前ら田舎の中学生かよ？ ふ、くくく」

予想通りだった。いつそ痛快なくらいに、昴は腹を抱えて笑っている。

これ以上笑いのタネを供給するのは非常に腹立たしいので、勇吾は半眼で昴を見やるだけで返答を打ち切った。

こちらの心境を知ってか知らずか、昴はひとしきり笑ってから、ポンポンと肩を叩いてきた。

まあ頑張れ、といった意味なのだろう。……多分。

息を吐いて、立ち上がる。いい加減、紫亜たちも着替え終えてこちらに来る頃だ。

全員集まったらとりあえず一泳ぎするつもりでいたし、琴子あたりの相手をするのは多分骨だろうから さっきのテンションからすると、いきなり飛び掛ってきたりしそうだ 軽く準備体操でもしておこうと勇吾は伸びをする。

そして 背後からプレッシャーを感じて横っ飛びに飛び退いた。

「とおりやあー！ って避けられたっ!？」

一瞬前まで勇吾がいた辺りを、とび蹴りの体勢のまま琴子が通り過ぎていく。というか飛んでいく。

目標を失った琴子は見事なくらい着地に失敗して、ズザザー！と豪快に頭から浜辺へ突っ込んだ。

「……いや、まあなんとなくやりそーだとは思ってたが、そこまで忠実に実行されてもな」

呻いて、見やる。と、琴子はガバツッと起き上がると、渋面で立ち尽くしている勇吾を指差して、

「うおーっと！ これはあたしへの挑戦か!? チャンピオンの座は渡さんぞ！」

などと叫んだ。勇吾はリアクションに困りつつ、

「攻撃してきたのはそっちだが。大体、チャンピオンって何のだよ。わけわからんぞ。……ああ、そーいやそれは元々か」

「何をー！ 挑戦者のくせに生意気なっ！ 許さんぞ虫けらども！ じわじわとなぶり殺しにしてくれな！」

何故かポーズなど取りつつ叫ぶ琴子。微妙に危ない 色んな意味で 台詞に、勇吾は短く叫んだ。

「ネタが古い！ ネタがっ！」

「ならば！ ……我が生涯に一片の悔いなしっ！」

「大して時代変わってねえよ！ ていうか状況に関係無くなってるだろーがっ！」

「何やってんのよあんたらは……」

声を上げて、ぜいぜいと息を吐いていると、呆れたように誰かが言ってくる。ふと視線を巡らせると、紅葉が片手を腰にやって直ぐそこにいた。その少し後方、顔を確認できるくらいの距離に、紫亜と楓もいる。

勇吾は簡単に、紅葉や他の女性陣を見やり、観察した。

紅葉は赤いビキニで、健康的な肌を惜しげもなく太陽の下にさらしている。スレンダーとでも言うべきだろうか。若いからと言ってふくよかではなく、どこか豹を思わせるしなやかな肢体だった。学校の親衛隊連中が見たら、泣いて喜びそうな姿である。

琴子は激しく動き回っても脱げない事が重要なのか、やけに露出が少なく、しかし確かに動き易そうな水着だった。色はオレンジ。形としては競泳用の水着に近い。

まだ夏休みは始まったばかりなのだが、既に肌が日焼けしていて、どうも前々からプールか何かに行っていたものと思われる。

続いて楓　これは、なんと言うか言語化するのが難しいような格好だった。名称的には黒のビキニ、というのだけれど、普通の物より明らかに布の面積が狭い。一応要点はガードしてるが、あんな格好で泳いで大丈夫なのかと不安に　周囲の男どもからすれば期待なのだろうが　なるような状態だ。

そして、紫亜だ。彼女の水着は他の三人とはまた別の趣で、上は胸おむちの辺りをしっかりと覆っているが、露出度は結構高い。下はビキニに近い形のもので、その上からパレオを着けている。水着の上下が白なので一見地味に見えるが、パレオが中々カラフルなので全体のバランスは取れていた。

まあ、それはともかく。

「いや、何かこう、突っ込まずにはいられないような使命感に駆られてな」

勇吾は額の汗を拭いつつ、言う。紅葉は嘆息してから、まあいいわ、と呟き、

「そんな事より、折角着替えてきたんだから、何か言う事ないの？」
自身の胸を指差し、次いで紫亜、楓と方向を変える。
それは暗に水着の感想を言え　もつと言えば褒めろ、という事な
のだが、勇吾にそんな暗喩が通じるわけがない。

勇吾は眼前の紅葉を見やって、特に考えたという訳でもなさそうに、
簡単に呟いた。

「うーむ。赤いな。とりあえず赤い」

見たまんまだった。訊いた意味が無いようにも思えてくるコメント
に、紅葉は再び嘆息した。

「そーね。確かに赤いわ。……勇吾にこういう事期待しちゃ駄目な
の忘れてた」

言うと、紅葉はそのまま昴の方へ歩いていった。

勇吾はそれを見送りながら、何で嘆息されたのかが判らず首を傾げ
る。

(……あ、そーか。こういう時って似合ってるかどうかとか言うん
だっけ)

遅れて気づいたが、紅葉は既に昴と話し始めていた。

(ま、明日も来るんだし、そんな時でいいか)

一人割り切ってふと前を見ると、周囲の男たちの注目を集めながら、
楓は堂々と、紫亜は少し恥ずかしそうにこちらに歩いてくる。

(げ。何だあれは)

改めて楓の水着が目に入って、勇吾は呻いた。

というか、歩くたびに胸が揺れるというのは一体どんな構造でそう
なってるんだろうか。世の中は不思議な事が多い。

(ありや殆んど紐ひもじゃねえか。つーか、よくあんな重そうなモン二
つもぶら下げて生活できるよな、女って生物は。　そーいや、あ
れを見ると腹減るんだよなー)

「楓さんの方ばかり見て、何考えてるの？」

「いや、何か肉マンが食いてえな、と。……あれ？」

自分は一体誰に返事をしたのかと不思議になつて、勇吾は疑問符を浮かべた。

声のした方を見やると、いつの間にもここまで来たのか、紫亜が横にいた。勇吾はその事に多少驚きつつ、更にはようやく口を利いてくれた事に安堵して、告げる。

「い、いつの間に。走ってきたのか？」

「うん。えっと、その……」

頷いて、紫亜は口ごもつたようだった。俯いてもじもじと、何か言おうとして失敗している。

（あ、成る程）

ふと、勇吾は気付いた。言おうか言つまいか一瞬悩んだが、結局腹を括つて、それでも小声になりつつ、

「えーと、そのなんだ。水着似合ってるぞ、紫亜。可愛いよ」

恐らく昴が聞いていればこの浜辺中に響き渡るくらいの大声で笑い倒したであろう一言を告げた。というか、勇吾自身もう一人の自分がこの言葉を聞いていたら笑うだろうと思っていた。

「あ……え、う……」

結果的には、言われたほうも言つたほうも真っ赤になっただけだった。紫亜に至つてはそのまま卒倒しそうなくらい身を硬くしている。それでも。

「あ、ありがとう……」

恥ずかしそうに微笑みながら、紫亜が言う。

それに勇吾は、

（セーフツ！ とりあえず好感触！ 慣れん事でもやってみるもんだな……）

胸中で快哉を上げる。少なくとも、ここからは普通に口を利いてくれるだろう、と。

が、喜びもつかの間というかなんと言つか、とにかくそこに、爆弾とも言える存在が割り込んできた。

「あら、初々しいわね、勇吾君たち」

言ってきたのは、更衣室からここまでの間にナンパの的になった楓である。

紫亜はさっさとここまで来たのでそういった事にはならなかったがもつとも、そんなことになれば勇吾が何をするかは明白だ。堂々と人目を憚らずに歩いてきた楓は恰好の標的だったわけだ。

「私はどう？　勇吾君。結構身体には自信があるんだけど」
彼女は何か流し目で、そんなことを言ってきた。

どう、と言われても、答えようが無かった。勇吾の女性に対する褒め言葉の語彙能力は、正直台風の日のビニール傘より頼りないのだ。それでも何か言っておくべきかと思案をめぐらせて、言葉を探り

勇吾はつかえながら答えた。

「あー、何っーか、あれだ。色っぽいとは思う」

「そう？　ふふ。ありがと勇吾君」

言いながら、彼女は近づいてきた。あ、何か嫌な予感、と思った頃にはもう遅い。

グニン。……ムギユツ。

多分擬音化すればこんな感じだろうという勢いで、勇吾は楓に抱きつかれて　　というか胸を押し付けられた。

「な、何だよ急に!？」

「え？　意味なんて無いわよ？」

「何で!？　何で意味も無くこんなデンジャラスな事に!？　ていうかまたこんなにかよ!？」

特急列車と全く同じ展開に、勇吾は悲鳴を上げた。琴子が絡んでいないのが唯一の救いだ、それでも十分以上に厄介である。

(怒ってる。絶対怒ってる……)

殆んど確信をもって、勇吾は紫亜を見やる。

すると、紫亜はジト目でこちらを見ており、明らかに「機嫌斜め

ご様子。

「……………勇吾君のえっち」

「ぐ……………」

ぐさり、と、思いのほか破壊力のある言葉に心を抉られて、勇吾は呻いた。

(ぐうおおおおお！ し、紫亜の言う『えっち』にここまでの破壊力があるとは……………)

何か手負いの獣じみた慟哭を胸中で上げる勇吾。だが、紫亜の言葉はそれで終わりではないようだった。

「……………すけば、へんたい、おんなずき！」

「う、いや、ちよつと待て紫亜！ 俺は別に……………」

「バカ！ える助！ もう知らない！」

そこまで叫んでから、紫亜は踵を返して走り出そうとした。

(ええー！？ 問答無用！？ いや、んな事はどうでもいい、紫亜を止めないと！)

「紫亜、話を」

聞いてくれ、と言おうとしたのだが、それより早く、紫亜が振り返り様に、

「うるさい、勇吾君の巨乳マニア！」

と叫んで、そのまま走り去ってしまった。

「……………」

たっぷり十秒。その間は思考も呼吸も、信じられない事に鼓動まで止まっていたかもしれぬ。いや、とりあえず呼吸はしていた。

その証拠に、

「何でだっ！？ 何でこうなる！？」

思いつきり叫ぶ。

その時になって、ようやく離れてくれた楓が横で、

「あらら、からかい過ぎちゃったか」
とか呟いていたが、もはや勇吾は聞いていなかった。

（……というか、『巨乳マニア』なんて言葉どこで覚えてきたんだ
？）

心の傷が変な方向に作用しているのか、勇吾はそんな無意味な思考
をしながら 思わずその場に座り込んだ。

第六話：海だっ！（後書き）

夏バテ予防にしっかりと朝食を食べてたら五キロ太りました。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

この一話で海の一日目終わらせる予定だったんですが、長くなりそうなんで分割します。

勇吾は今回暴れませんでした。

代わりに精神的に疲労してますが。

最近ようやく紫亜の動きが判って来ました。

まだしばらくはコメディっぽく行きますが、そのうちシリアスも混じりますので、お楽しみに。

では、また次回のがきで。

第七話：男たちの事情と厄介事（前書き）

タイトルのまんまです。

前半ちよいシリアス、後半コメディという感じでしょうか。
では、本編をどうぞ。

第七話：男たちの事情と厄介事

海の楽しみ方は、人それぞれだ。

ひたすら焼きを入れている者、ナンパに青春を掛けている者、友達同士で泳ぎを競っている者、人気の無い岩場で、恋人同士の甘い時間を過ごす者。珍しいところでは、わざわざナンパされに来ている女たちもいるという。

そんな風に楽しみ方などいくらでもある空間で、ただぼんやり座り込んでいる男と言うのは、果たして余人の目にはどう映るのだろうか。

（まあ、他人にどう思われようが、知ったこっちゃねえけどな）

陰鬱な呟きを漏らして、勇吾はシートの上に腰を下ろしたまま、視線をふらふらと巡らせた。

ほぼ正面、十メートルほど先の所で、彼以外のメンバーがビーチボールを追い回している。

もっともテンションが高いのは琴子だが、他の面々も十分楽しそう

だ。
相変わらず絶好調な太陽が水面を照らし、キラキラと輝かせる。水飛沫も宝石のように煌きながら宙を舞い、やがて水中へと帰っていく。

その様子を眺めながら、勇吾はふと目を細めた。

（昴の奴はいつもの事ながら適応が早いな。もう琴子や楓との的確な距離の置き方を悟ってやがる）

器用な親友に感心しつつ、勇吾は自分の荷物の中から煙草とライター、携帯灰皿を取り出した。

最近　紫亜と付き合い始めてから本数は減ったものの、未だに手放す事の出来ていない勇吾の必需品だ。

一本を啜えて、火を点ける。高校生なので喫煙はまだ駄目なのだが、

肉体が早熟なせいか見咎められた事は無い。

(にしても、紫亜がここまで妬いてくるとはな。まあ、俺も迂闊ではあったんだけど)

先ほどの出来事を反芻して、一人語散る。

結局あの後、楓を伴って紫亜に謝ったので、一応の赦免ということにはなったのだが、それでもやはり紫亜の機嫌が元に戻ったわけではなかった。

それもあって、勇吾は一人離れて紫亜の頭が冷えるのを待っているのである。

考えたい事もあるので丁度良い、と最初は思っていたのだが、十分もするとあっさり退屈が押し寄せてきて、思考も若干やさぐれ気味になりつつあった。

(あー、くそ。何でもこう上手くいかないかね？ もうちょっと気楽に生きたいもんだぜ、ちっとくらいはよ)

乱暴に髪をかき乱して、呻く。

勇吾は煙草を灰皿の中に押し込みながら、細く嘆息した。

「ため息ばっかだな、お前」

不意に、声が掛かる。姿など見なくても判るくらいに聞きなれた声だ。

「やかましい、ほっとけ」

いつの間にか眼前に立っていた昴に言い返して、勇吾は仰向けに寝転がった。

「抜けてきて良かったのか？ あの中じゃ琴子の手綱を握れそうなのはお前だけだろ」

ビーチバレーをしていたはずが琴子の暴走でドッジボールのようになり始めた女性陣を見やって、勇吾は問いかけた。

それに、昴は肩を竦めて、

「さあ。あれはあれで楽しそうだから良いんじゃないか？ 大体、それを言うならお前だけこんなところで昼寝してないで混ざってくりやいだろ？」

「紫亜がもうちょい落ち着いたらそうするさ。タイミング間違うと拙そうだから、慎重にならざるを得ないんだよ」

即答してから、勇吾は跳ね起きた。寝転んだり座ったりばかりだったので、体が痛くなってきた頃合だ。軽くストレッチなどしながら、続ける。

「あいつ、思ったより強情みたいだからな。ま、時間はあるんだし、ゆっくりやるさ」

「そうか？ 俺には強情っていうより、何か焦ってるような感じに思えるんだけどな」

気楽に言った勇吾に、真面目な顔で切り返す昴。

勇吾はその表情を見て、ふと引つかかった。この男が真面目な顔で意味深な事を言うときは、大抵その言葉は当たっている。特に人間に対する観察力に関しては、昴はすば抜けて聡い。

だからというわけでもないが、なんとなく無視できずに、勇吾は聞き返した。

「焦ってるって、何に？」

すると昴は考えを纏めるように虚空を見上げて、しばし黙考していた。やがて言うべき言葉が見つかったのか、勇吾を見据えて、

「お前の周りにいる他の女に、だと思いがな。多分、紫亜は自信がないんだろ。自分の魅力に関して、お前に好かれてるかどうかに関して。だからお前が他の女にお前を取られるんじゃないかって不安になるんだ。今日の過剰な紫亜の反応は、多分その辺の不安とか、あとはまあ、嫉妬とかが混ざってデカくなり過ぎちゃった結果じゃないかと思う。これは厭くまでも推測でしかないけどな」
そこで昴は一度、言葉を切った。勇吾は黙って続きを待つしかない。

「で、もう一つだけ言っとくと、紫亜が自信を持ってないのは、恐ら

「くお前が原因だ」

なんでもない口調で言われたので思わず通り過ぎるところだった。

勇吾は自身の顔を指しながら、

「俺が、原因？」

「そう。さっき言った二つの自信のうち、後者のな。前者は彼女が自分で何とかするしかねえけど、後者はどう考えたってお前が悪い。明らかにスキンシップ不足だからな。お前がそう言う事苦手なのは知ってるが、もう少し触れ合っていないと、そりゃ自信も何もないだろうよ。　　だいたい、まあ、あれは不意打ちだったが、紅葉とはキスしただろ、お前。なのに紫亜とはまだだときた。それも含めると、逆さに振ったって自分が好かれてる自信なんざ出てくるわけねえよ」

よくもまあそこまで細かく推論が出てくるもんだと変に感心しつつ、勇吾は昴の言葉に聞き入っていた。

言われてみれば、昴の言う事には思い当たる節がある。

「……ホント良く見てるよな、お前。俺は言われるまで、そんな事考えもしなかった」

普段は陽気に、あるいは適当に生きているだけにしか見えないが、肝心なところは押さえている。昴という男の本質はその鋭さと観察力だ。

人間の心なんて見えるものじゃないから、表情や行動からそれを推し量るしかない。

にも拘らず、この男はその人間の思考を読んできたかのような事を簡単に言ってくるのだ。

「推論だつて言ってるだろ。挙動から汲み取れる心理なんて大した役には立たねえよ。……ま、これに関しちゃう当たらずとも遠からずだとは思つが」

昴は簡単に言つて肩を竦めた。勇吾が感心するような技能も、彼にとつては役立たずらしい。

ふと見ると、昴は既に表情を元のシニカルで陽気なものに戻している。

彼は日差しを浴びて更に輝きを増している金色の髪を適当に掻き上げると、気楽に呟いた。

「ま、今俺が言った事は、頭の隅っこにでも置いとけばいいさ。紫亜の彼氏はお前なんだ。お前が思うようにやるのが一番良いだろ。今は時間をかけてゆっくり、ってのも悪い案じゃないしな」

言い終えて、昴は女性陣に呼ばれて歩き出した。勇吾も琴子に手招きされたのだが、手を振り返すだけに留める。

そして、昴は去り際に、一言付け加えた。

「だがな、物事にはスピードが必要な時もあるんだ。恋愛には忍耐も必要だが、結局は素直で真っ直ぐなのが一番手っ取り早いんだからな。間に合わなくなっただけだからじゃ、何もかもが無意味だぜ？」

そいつは俺にだって判ってるさ、と心の中だけで返事して、勇吾は苦笑した。

頭を冷やすべきなのは、紫亜だけじゃ無い。

(ようするに、お前も頭冷やせって言いたかったわけだ、あいつは回りくどいお節介もあつたもんだな)

言うべき事は一つなのに、わざわざそれを十の言葉で伝えてくる。

ある意味、それも不器用なのかもしれない。

単純なくせにややこしく、器用なのに不器用。見事に矛盾している。(なんのこたあない。昴も、普通の人間だって事だ。自分の思い通りばかりってことも無いだろ)

お節介な親友の背中を見送りながら、勇吾はそんな事を考えていた。

(やれやれ。ちょいと老婆心を出し過ぎたかな?)

琴子の暴走がいよいよ佳境に入り始めたらしく、何故かビーチボールを放り出して水中プロレスのような状況になっている女性陣の集団に向かつて歩きながら、昴は内心で語散っていた。

琴子と紅葉がなにやら騒ぎながら追いかけて、楓と紫亜はそれを笑いながら見ている。

微笑ましいと言えば微笑ましい光景だが、昴は笑う気にはなれなかった。

思考を続けつつ、足も止めないように意識する。

(人の恋路に介入するのは、あんまり気分の良いもんじゃないんだけどな)

傍から見ているだけならそれなりに楽しめるのだが、深入りすると火傷しかねないのが他人の恋愛というものだ。

世の中にはそれも込みで楽しみとして事態の中心に突っ込んでいく猛者もいるそうだが、昴には理解できない事だった。

(そもそも俺自身、勇吾に偉そうな事言える立場じゃねえつてのに。忍耐と素直さが足りなくて『あんな事』になったのは誰だよ?)

自嘲して、表情にも皮肉な笑みが浮かぶのを感じる。

思い出すのは、過去の記憶の中で最も苦い一欠片。

『あんな事』。

それは別に大それた事ではなく、ただ昴も恋をして、それに破れたというだけの事。

どこにでもある、青臭い少年の失恋の話。

出会って、言葉を交わして、笑って、怒って。そうする内に惹かれていって、胸の内に小さな炎が宿った事に気づく。それは恋慕の炎。一度気づいてしまえば、言葉を交わすたび、微笑みかけられるたびに熱く大きくなっていく魔性の情熱。

昂もそれに気付いた。自身の中で蠢き逆巻く炎に。そして、それを自分で切り捨てた。その感情を自分で受け入れられずに拒絶したのだ。

認めるのが怖くて。認めてしまえばそれまでの『彼女』との関係が全て消えてしまうから。

ただ、恐れて逃げ出した。振り返る事も無く、無様に尻尾を巻いて『彼女』という灯りに釣られたくせに、その灯りに焼かれる事を恐れた。

自分は、蛾にすらなれなかった臆病者だ。あの醜い蝶々の出来損ないでさえ、己の身を焼く灯りを恐れないというのに。

そんな青臭い上に馬鹿馬鹿しい自分の過去は、誰も知らない。勇吾にすら話していない。

知っているのは、自分だけ。それで良い。自分さえ忘れなければ、同じ間違いを犯す事は無いのだから。

(ホント、最低の終わり方だったぜ、あれは……)

昂は皮肉に歪んだ口元を更に吊り上げた。あまりの情けなさに今でも虫唾が走る。本当に、最低で最悪な幕切れだった。

(ま、そのせいかな。互いに好き合ってるのに踏み込めずにいる勇吾たちを見てると、お節介の虫が騒ぐのは)

嘆息して、昂は思考を止めた。騒がしい女性陣はもう目の前だ。

「おらー！ 水中バツクドローッブツ！」

見ると、琴子のオリジナル水中技で紅葉が投げ飛ばされている。本当に騒がしい。

「こんの……大人しくしてやってたら好き放題やってくれちゃって！ あ、こら待ちなさい！」

追いかけてこがまた始まった。楓は笑っている。紫亜はおろおろして止めるべきか迷っているようだ。暢気で平和な光景。

と、紫亜の目線が別の方向へと動いた。

それを追って、昴は視線を巡らせる。

紫亜が見つめる先には、どこへ向かうつもりなのか浜辺を一人で歩く勇吾の姿。

(やれやれ。気になるなら追いかければ良いものを)

肩を竦めつつ、昴はとりあえず琴子をコブラツイストで固めている紅葉を諫めようと方向転換した。

「はいはい、そこまで。中学校のプールの授業じゃねえんだから、もうちつと淑女らしくしてろ」

「うっさい！ このアホ女、いっぺん痛い目に合わせて」

「あーもう、めんどくさい。ちよつと痛いけど覚悟しろよ紅葉」

「あ、ちよつと何であたしなのよ!？」

紅葉が納得いかなさそうに喚くが、昴は無視した。

そして、これからも前途多難であろう二人を思い浮かべて、

(頑張れ、彼氏彼女たち)

そんな事を考えながら、昴は暴れる紅葉の額にデコピンを食らわせた。

* * * * *

気温が高いと喉が渴く。それは生物として当たり前のことであり、更に言えば渴きというのは空腹よりも耐え難いものと相場は決まっている。

そんな訳で、勇吾は何らかの水分補給を目当てに、自動販売機を探していた。

(まあ、悩んでいようがいまいが、腹は減るし喉も渴くってことか)
当たり前のことを考えつつ、視線を巡らせる。

『海の家』にも飲み物は売っているのだが、ほとんどぼったくりのような値段なので敬遠していた。もう少しまともな値段ならいちいち歩き回って自販など探さなくて済んだのだが。

(ほんと、縁日の出店より酷かったもんな。紙コップ一杯の烏龍茶で、何で三百円もしやがるんだ?)

ぶつくさ文句を呟いていると、浜辺を挟んで海の反対側の道路に、ポツンと自販らしきものが立っているのが見えた。

ようやく見つけた、と早足になって、勇吾は自販に駆けていった。

なんとなく飲みたくなつたコーラを購入して、勇吾は一気飲みしてゴミ箱に缶を放り込んだ。

と　どこからか、微かに声が聞こえてくる。

『だからさ、ちよつと遊ぶだけだつて』

『でも、友達が待つてるから』

『じゃあ、その友達も一緒に』

『だから』

そういつた会話が、複数の男女の声で聞こえてくる。

「……?」

興味を引かれて、勇吾は声のする方に歩いていく。

声はどうやら、道路の脇にある小屋の影から聞こえているようだった。

元々はこの海にきた海水浴客相手に商売をしていた小屋のようだが、今は人の訪れた形跡が一切ない。どうも長い間放っておかれているらしい。

多分経営が成り立たなくなつて放棄されたのだらうと、勇吾は適当に推測した。

元々木造の粗末な造りの上に長期間放置されているので、軽い地震でも簡単に崩れそうである。

ともあれ、勇吾は小屋の影を見やった。すると、声と同じように複数の男女がなにやら言い合っている。

間違いないナンパだろうと、勇吾は確信した。

軽薄そうな男たちが三人と、勇吾とそう年齢は変わらないであろう少女が二人、向き合っている形だ。勇吾の方から見ると男たちの人相は確認できないが、やけに日焼けした肌から、多分地元の若者達だろうと見当がついた。

（あー、どうすっかな。下手に関わると面倒だし……。強引なナンパは一応海の監視員が取り締まってる筈だから、通報しときゃ問題ないか？）

この海は観光用の海水浴場なので、地元の役所か何かが海開きの期間中は見回っている筈である。

多分その目から逃れるためにこんな判りづらい小屋の影なんかで話しているのだろう。

「あつ！」

「……？」

突然上がった声に釣られて見やると、二人いる少女の内の一人が、こちらを指差している。

それどころか、その場の全員の視線が勇吾に殺到していた。

何がなんだか判らずに顔をしかめていると、指を差していた少女がこちらに走り寄ってきた。

「ほら、こいつが待たせてる友達。あんまり遅いから心配して探しに来てくれたみたい」

あまつさえそんな事を言われて、勇吾は混乱した。当たり前だが、こんな少女と面識などない。

「おい、何だよいきなり。俺は君みたいな娘は知らな　ぐえ」

文句を言おうとして口を開いたら、何故かわき腹を肘で突かれた。

勇吾は痛みに　あと怒りが少し　顔を更に顰めて、

（おい、いきなりなんだってんだ？）

今度は小声で言うと、少女は囁き返してきた。

(いいから話を合わせて！)

「おい！ 何こそそやってやがる！」

男たちの一人が、痺れを切らしたようにこちらに歩み寄り、怒鳴ってきた。さほど背の高くない、ごく標準的な体格の男だ。

「ホントにお前、この娘たちの知り合いなのか？ さっきから話が噛み合っていないじゃねえか」

「う……」

言われて、少女は口ごもったようだった。しかしすぐに立ち直って、今度は何を言うつもりなのかと訝しんでいると、

「そうよ！ こいつは私の高校の同級生で、更に言えばそこにいる麻衣の彼氏よ！」

(はあ！？ こいつまた訳のわからんことを！)

胸中で叫んで、もう一人の少女 麻衣というらしい を見やると、彼女はポカンとしていた。

彼女にとってもこの発言は意外な事だったらしい 当たり前だが。そんな勇吾と麻衣という少女の胸中などお構いなしで、傍らの少女の弁舌は更に続くようだった。

「もうこの二人ったらラブくてエロくて、いつつも が××で、こりゃもう今日は海だし旅行だしで、一体どんな になるのかと仲間内ではトトカルチョが 」

「待ていっ！」

たまらずに、勇吾は叫んだ。テレビならば自主規制で『ピー』とか『バキューン』とかで隠されそうな発言の連発に、流石に忍耐が品切れだ。

「だ・れ・が・んな事やらかした！？ ていうか思いついたとしても口にするなよそんな単語！」

「そうだよ！ 私そんな事しないもん！」

勇吾が言い終える前に、麻衣という少女が真っ赤な顔で叫んできた。どうやら彼女はまともな神経の持ち主らしい。

「あーもう！ だったら私の彼氏ってことで良いでしょ！？ 文句

ある!？」

「なんでじゃああああ! 文句ある!? じゃねえ! 文句しかでてこねえよ!」

「うるせええええ!」

今度は、こちらに歩み寄ってきた男が声を上げた。拳を握り締め、腹の底から怒鳴ってくる。

「黙って聞いてりゃ無視しやがって! ようするにお前ら他人なんじゃねえか!」

もつともない分に、勇吾は思わず頷いていた。強引ナンパ男の方が正しい事を言っているというのも、奇妙な話だが。

勇吾はため息を吐いて、頭を抱えた。どうも変なのに関わってしまった。

そしてこういう場合、たいてい最後まで巻き込まれてしまうというのが、勇吾の経験上濃厚な線だ。

(どーしてこう、俺の人生って荒れてるんだろーか……)

そもそも、今日は琴子にペースを引っ掻き回されたり、楓にくっ付かれて紫亜の機嫌を損ねたり、散々な目に遭っている。

その上でまだこんな事になるのだから、これはもう厄日とでも言うしか無い。

(そう考えると、何か腹立ってきたな)

苛つきを感じて、勇吾は呻いた。何だかもう、色んな事がどうでもいい。

と、そんな少し物騒な事を考え始めた勇吾には気づかないようで、

男は傍らの少女の腕を掴んだ。

「あ、こら何触ってんのよ!」

「こいつは他人なんだろ? 関係ないから立ち去ってもらって、続きを うべあ!？」

「あ、やっちまった」

言いながら歩き出そうとしていた男を、勇吾は無意識に殴り倒していた。どうも、思ったよりもストレスが溜まっていたらしい。

勇吾は嘆息して、

（ま、いーか。今日は色々あってイライラしてることだし、ちょっと手荒にしても構わんだろ）

浅い思考を流して、ぼんやりと決定する。

「てめっ何しやがる！」

と、地面に転がっていた男が叫んで、立ち上がるうとする。それに先んじて動いていた勇吾は、男の顔面にビーチサンダルの底を叩き込んだ。

悲鳴を上げる暇もなく、男が昏倒する。白目を剥いている気もしたが、それはどうでも良い。

勇吾は啞然としている少女　目をぱちくりさせて気絶した男を見ている　の腕を掴んで適当に移動させると、残りの二人が襲い掛かってくるであろう事を予測して向き直った。

が、予想に反して、こちらに向かっているのは一人だけだった。

何故二人同時に来ないのか不思議ではあったが、それは思考から追い出して向かってきた一人と対峙する。

茶髪の、それなりに長身の男である。だが、どうにも痩せすぎで、あまり喧嘩に向いているようには見えない。

「よう兄ちゃん。ちったあ腕に覚えがあるみたいじゃねえか」

男は、そんな事を言ってきた。声には、余裕のようなものが感じられた。

「さあな。そいつはこれから直接見せてやるよ」

言い返しながら、構える。といっても、さほど大仰な構えを必要とするわけではなかったが。

自然体からやや右足を引き、膝を軽く曲げておく。派手ではないものの、戦闘の動作に移るにはこれで十分だ。

勇吾は構えた時点で、意識を戦闘に集中させている。弱そうな外見

とはいえ、油断するわけにもいかない。

男は蛇のような目つきでこちらを一瞥すると、ぐつと腰を下ろし

(来るか!?)

「行くぜああああ!?!」

叫びながら走り出して、二歩目で転んだ。

「……は?」

地面に這いつくばったままの男を見下ろして、勇吾は肩透かしを食らったような声を出した。

こちらの地面はかなり平坦で躓くようなものは何もない。つまりこの男は、自分の足に引っかけた転んだ事になるが……

勇吾はふと思い至って、呟いた。

「……お前、もしかして見た目通りの虚弱体質?」

「ふっふっふ。そんな事はない」

顔だけを上げて、男が言ってくる。

勇吾は疑わしげに、

「そーかなー」

「ただ、ちよっぴり運動神経が悪くて病弱なだけだ!」

「やっぱ虚弱体質じゃねえか……」

「ちなみに直射日光にもすこぶる弱いぞ」

「だったら帰れよ!?!」

結局こんなにかよと思いつつ、勇吾は適当に男を蹴飛ばした。虚弱なだけあってあっさりと沈黙する男から視線を外して、勇吾は大きく嘆息する。

「ああもう! なんだって俺の周りにはこんな変なのばっか集まりやがるんだ!?! ……で、あんたはどうすんだ!?!」

残っているもう一人の男に向けて、勇吾は問いかけた。あまりに馬鹿馬鹿しい事が続くので、いい加減

もう諦めて帰ってくれたら良いのだが、仲間を二人やられては

一人は自爆したただけだが 黙ってはいまい。

案の定、最後の一人　かなり大柄で、隆起するほどの筋肉を纏った強面の男が、ずいっと前に出てきた。

その男は何故か突然服を脱いで、上半身裸になってからこちらに視線をやって、

「小僧。調子に乗っていられるのは今のうちだけだ。見よ、この肉体を……ふんっ！」

と気合を入れて、筋肉を盛り上がらせた。うげ、と勇吾の後ろでさっきの少女が嫌そうな声を上げている。

「……えーと………？」

わけがわからず、呻く。しかし男は意に介さず、ひたすら気合の掛け声を上げながら筋肉をピクピクと動かし続けている。

それが十秒ほど続いた後。

「どうだ！？　この素晴らしい大胸筋、背筋、腹筋！！　どれをとっても貴様など遠く及ばん芸術品だ！」

一人でポージングなどしながら、そんな事を捲くし立ててきた。

（き、筋肉バカだ……。そして間違いなく変態だ。ていうか、また変なのが増えた……）

力強く断定した後、勇吾はなんで今日はこんなんばつかなんだと泣きたくなった。

もちろん、誰も答えてはくれないのだが。

「……それで、鬪やんのか鬪やらんのか、どっちなんだ！？　こっちはもう限界ギリギリまでフラストレーション溜まってんだからちやっちやと来てちやっちやと倒されるっ！」

拳を振りかぶりながら、自棄になって叫ぶ。

が、男は意外そうに目を見開いて、呟くように言ってきた。

「……何を言ってる。オレは喧嘩などせんぞ」

「は？　じゃあ何しに出てきたんだよ？」

問われて、男はにやりと笑みを浮かべた。それで苛つきが増大した

が、とりあえず返答を待つ。

「……………」

「……………」

男はしばらく間を取った後、再びポーズをとって、

「オレ様の筋肉を見せ付けるためだ！」

「だあああああああらっしやああああああああつ！！！！！」

思いっきり跳躍し、拳を叩きつける。拳は顔面のド真ん中にぶち当たり、男は鼻血を噴出しながら、それでもポーズは崩さずに

地面へとダイブした。

「ったく」

毒づいて、頭を掻く。

「もー何か色々ありすぎて嫌んなってきた……。まわりにや馬鹿がこぞって集まるし、紫亜はまだ怒ってるし……………」

言いながら、勇吾は歩き始めた。

ナンパ男は全員殴り倒したんだから、少女らももうこちらに用はないだろう。

と思っていたのだが、予想に反して背後から声が掛けられた。

「あの一」

「……………何だよ」

不機嫌に、振り返る。

声を掛けてきたのは、麻衣とかいう少女だった。彼女は頭を下げながら、

「助けていただいて、ありがとうございます。あの人たちしつこくて、困ってたんです」

丁寧に言ってきた。

助けたとはいっても成り行きで馬鹿を三人殴り倒しただけなので、勇吾は手をひらひらさせながら、

「いや、まあ別になんとなく腹立ったから殴っただけだし、頭なんぞ下げんない」

「え、でも」

「いやーから。その迷惑娘連れて向こう行つとけ。ここにいたらまためんどくさい事になるから。……じゃあ俺連れがいるからもう行くわ」

言つて、勇吾は再び歩き出した。

まだ後ろから『ありがとうございました！』と声が聞こえていたが、それは無視した。

勇吾はポケットに手を突っ込んで、ぼんやりと歩く。

もう会うことも無いだろうから、別に構わないだろうと思いつながら。

第七話：男たちの事情と厄介事（後書き）

ゲーセンの格ゲーでハメ技使ったら怖いお兄さんとリアルファイトになりかけました。

いや、逃げましたけどね。

どうも、へっばこ物書きの龍之介です。

思ったより勇吾の暴れっぷりを表現できませんでした。師匠襲来編ではこつてりとバトルの描写になるので、今回はこんなもんかと。

というかこの小説って読んでる人いるんだろーかと最近疑問に思い始めました。

いや、へボなんであんまりいないと思うんですけどね。

もしこの小説読んでるよー、という少数派な人がいましたら、感想が評価してやってください。

主に作者が喜びます。

では、また次回のあとがきで。

第八話：彼女たちの交流と面倒事（前書き）

多少短いです。

いつもよりコメディ色が薄いかも。

第八話：彼女たちの交流と面倒事

「おかえり……」

まず聞こえたのは、ぐったりとした声。

小屋の影でのごく小規模な戦闘を終えて、微妙にげんなりしながら帰ってきた勇吾に、最初に掛けられた言葉がそれだった。

「……俺がいない間にえらく疲れ果ててるな、紅葉」

シートの上でうつ伏せに寝転んでいる紅葉に呟くような返答をしてから、勇吾はふと海の方を見やった。

と、紅葉以外の残りのメンバーが意外にも普通に　やはり琴子だけは微妙にズれているが　ビーチバレーを楽しんでいる。

「今必殺のおおお！　木の葉落としいい！」

お前は一体何歳いくつなんだと言いたくなるような古いネタを叫びつつ、琴子がボールをぶつ叩き、弾丸のように　ビーチボールなので威力はたかが知れているが　ボールが昴を強襲する。

昴は特に琴子のテンションには頓着せずに、平然とボールを打ち返していたが。

勇吾は視線を紅葉に戻すと、得心がいったように呟く。

「なるほど。あのテンションに着いていけなくて、ここで干物になってたわけだ」

「干物は心外だけど、まあそんなようなものよ」

起き上がりながら、紅葉が言ってくる。確かに、酒も飲まずにナチュラルであるのノリだと休憩を挟まないとやっていけないだろう。

勇吾は紅葉の隣に　少し距離を離してだが　座り込んで、手に持っていた後で飲むうと思っ追加購入しておいたスポーツドリンクのペットボトルを、紅葉に差し出した。

「ありがとう」

短く礼を言つて、紅葉がそれを受け取る。

それから特に話すべき話題が見つからずに二人して黙っていたのだが、しばらくすると、ふいに思い立ったように、紅葉が虚空を見上げた。

「あ……そうだ。勇吾に謝る事があつたんだっけ」

「何をだ？」

会話を飢えていた　　というか退屈を持て余していた勇吾は、即座に聞き返す。

「私が誘つてきたあの二人さ。どうも勇吾には迷惑かけてるみたいだから、連れてきた責任つていうか、私が代わりに謝つとくよ。ごめん」

迷惑、というのは特急内でのあの出来事のことだろう。確かに少し困つた事にはなつたが、謝られるほどの事でもないような気がする。勇吾はバツの悪そうな紅葉の表情を盗み見て、なるべく気楽に言つておいた。

「いや、まあ多分悪気は無いんだろっし、構わないけどな。楓のあれは流石にやめて欲しくはあるが」

「……そっか。なら良いんだけど」

少し安心したような表情で、紅葉。が、彼女はその直後に表情をまた曇らせて、付け足してきた。

「あのさ、楓のことなんだけど……勇吾なら大丈夫だと思うけど、一応気をつけて欲しいことがあつて」

「……？」

いきなり声を潜めてきた紅葉に、勇吾は少なからず奇妙な感覚を覚えた。

とりあえず聞き返すことはせず、続きを待つ。

「あの娘さ、ちょっと厄介な癖があるのよ」

「癖つて、さつきみたいにいきなり抱きついてくるとか？」

「うっん。そうじゃなくて、もうちょっとややこしい奴。普段は良い娘なんだけど、男のことでよく揉め事起こすのよ」

その言葉に、ふと何かが引つかかる。魚の小骨が喉に刺さったような、微妙な違和感。

そういえば、今朝も似たような感覚を覚えた気がする。

しかしその引つ掛かりが何を示しているのかはわからないので、まずは聞き返すことにする。

「……つまり？」

紅葉はいったん間を取ったようだった。咳払いなどしつつ、続ける。

「……彼女持ちの男を見ると、奪ってみたくなるらしいの」

「おい、それって……まさか、羽坂楓って、あの『寝取りの羽坂』か！？ 学校中の彼女持ち女生徒を戦々恐々とさせてる奴だつて聞いたことあるぞ」

引つ掛かりが、取れる。さっきの引つかりも、今朝楓の名前を聞いたときに感じたそれも、いっぺんに取り払われた。

紅葉は勇吾が知っていた事に少し意外そうに眉を顰めたが、特にそこには触れずに続ける。

「勇吾も知ってたんだ。……そうだよ。まあ、実際に寝取ったりとか過激な事はしてないけど、楓が原因で即刻別れちゃったり、そこまできなくても仲が険悪になったりしてるカップルはいるのはホント。でも、さっきも言っただけど普段は良い娘だから、別れちゃった人達も恨みきれないみたい」

確かに、彼女は悪い人間ではない。少なくとも勇吾にはそう思える。略奪する事に喜びを感じるような根っからの悪女であれば、とつくにイジメか何かで痛い目に遭っているだろう。

まあ、彼女の『良い娘』の部分が元々の性格なのか、処世術としての仮面なのかは判断が出来かねるが、少なくとも表面上は毒のない『良い娘』だといえる。

ぼんやりとそんな事を考える勇吾に、紅葉は追加の説明を入れてきた。

「まあ、あの顔にあの身体だから、大抵の男はちよつと話して上目遣いにも見上げられたら、ころつといつちやうわけよ。特に半分下半身で生きてるような今の男子高校生はね」

随分な言いようだが、概ね事実だ。

勇吾とて男であることには変わりないから、『ころつといつちやうた』男たちを笑えないだろう。

（まあ、昴に關しちやどうとも言えねえけどな。あいつはそういう意味じゃ難攻不落の自制心を持つてる。……あいつが墮とされる所は想像もつかないが、見てみたい気もするな。あ、やべ。何か違うこと考え始めてる）

横道に逸れつつある思考を頭を振って断ち切りつつ、勇吾は何の話をしてたんだったかと思ひ返し、数秒を費やして思ひ出した。

「それで、俺は何に気を付けりゃいいんだ？」

紅葉は今更何を、という風に目線で訴えつつ、答えてきた。

「だから、楓はどうも勇吾に食指が動いてるみたいだから、ころつといつちやわないうように気を付けてって事。実際今も、紫亜が拗ねちやつてるでしょ？」

「ああ、なるほど。そーいう事が」

話の趣旨を理解して、勇吾は頷いた。つまり、楓の色仕掛けには乗るなということだろう。

「それにしても、彼女持ちの男ばっか狙うってのは、奇妙な性格だよな。あの年で不倫癖　ってのも妙な言い回しだが、とにかく変な感じだ」

「……まあ、あの娘の場合は恋愛と遊びをこつちやにしてるみたい。これまで本気になった事は無いらしいから。多分、子供が他の子の玩具を欲しがって程度の事なんじゃないかと思うんだけど」

「……難儀な事だな」

世の中には色んな人間がいるもんだと変な方向に感心しつつ、勇吾は天を仰いだ。

今話を頭の中で総合する。

楓には奇妙な嗜好があつて、その嗜好に勇吾の現状が合致している。ということはまず確実に　　というか既にあつたのだが　　こちらにちよっかいを掛けてくるだろう。

要するにこの旅行中、もしくはそれ以後も、楓の動向に注意していなければならぬという事だ。

(面倒だな、おい……)

前述の通り楓の基本的な人格が『いい娘』である以上、あまり強く叱責するわけにはいかないし、そもそも勇吾の性格上それは難しい。となると対応策は消極的にならざるを得ず、しかしそれでは根本的な解決にはならない。

現状で勇吾に出来る事と言えば、

「……精々接近の気配を読み違えないようにするくらいか。俺はそーいふの苦手なんだけどな」

その程度のことである。

「ま、さっきも言った通り本気の略奪愛ってことは無いだろうから、適当に処理しといてくれれば良いわ。　　あ、これ飲みきれないから、残り飲んじゃって」

紅葉は話している間に半分くらいまで飲んでいたペットボトルを投げてよこしながら、そう言つて話を締めた。

「善処する」

勇吾は短く切り返して、空中でキャッチしたペットボトルの中身を飲み干す。

空になったペットボトルをその辺に放置して、勇吾は軽く伸びをした。

「さて、と。俺も混じつてくるか」

呟いて、勇吾は昴たちの方を見やった。とりあえずあの中に混じらないと、紫亜と話すこともままならない。

本当はもう少し紫亜の様子を見るつもりだったのだが、よく考えれ

ば時間を置こうが置くまいが、あまり意味が無いように思えるのだ。紫亜が本気で怒っていないなら話しているうちに元に戻るだろうし、本気で怒っているなら尚更話をしないと始まらない。

（今までだって、話せばどうにかならったんだ。……逆に言えば、意思疎通がなければ事態は好転しない）

とにかく行動すること。それは勇吾の人生哲学でもある。

基本的に単純ばかで実直な男なので、いちいち深く悩んだり考え込んだりするのは性にしょう合わないのだ。

「よし。そうと決まればとっとと行くか」

胎を決めて、勇吾は歩き出した。

* * * * *

時間を少し遡る。勇吾が自販を探している間の事だ。

ビーチバレーというよりは、もっぱら琴子と昴の決闘と化した感の否めない空間で、紫亜はぼんやりと考え事をしていた。

途中までは彼女も参加していたのだが、やけに攻撃性を帯びてきたスパイクの応酬に付いていけなくなつて、こつそりと輪から抜け出していたのだ。

見ると楓も、紫亜とは反対側に数歩離れて観戦モードに入っている。紅葉に至つては早々に『いち抜けた』と言って退場して、シートの上で寝転んでいた。

紫亜もこんな中途半端な場所ではぼんやりしているくらいなら、紅葉と一緒にシートまで戻れば良いとは思つたのだが、諸事情によつてそれは断念していた。

諸事情と言うのは、まあ言うまでもないことだが、勇吾のことであ

る。さっきのやり取り以降、どうにも顔を合わせ辛くなっていた。

というか、はつきり言ってしまうえば紫亜はかなりご立腹だった。

(もう、勇吾君の馬鹿。ちょっと楓さんに抱きつかれたからってデレデレして)

憤然として、呟く。そうしたところで何がどうなるわけでもないが、内心でくらい愚痴を零したいのだ。

愚痴や不満というのは人に聞いてもらった方が消化されやすいのだが、今のところ適当な相手がないので、こうして自分に言い聞かせるしかない。

姉である紅葉は勇吾を取り合った中なので却下だし、琴子は論外。

楓はそもそも愚痴そのものの原因の一部なのでNGである。

となると残りは昂しくない訳だが、彼には勇吾と付き合い出してから色々世話を焼いてもらっているので、不満の捌け口にするのは忍びなかった。

というわけで紫亜は、今日の勇吾の態度についての愚痴を、胸中で列挙しているのである。

(電車の中では琴ちゃんともベツタリくっ付いてたし、海に来てからは楓さんの胸見てたりするし……)

電車内のアレは別に勇吾の過失というわけではないし、楓の胸を見ていたというのも単に水着が物珍しいから 勇吾は週刊誌のグラビアにすら興味を示さないため、露出度の高い水着というのは極めて奇特な光景に思えるのだ という理由だったのだが、紫亜の中では全て『勇吾がエロいから悪い』という偏見染みた公式が成り立っていた。

これは紫亜と紅葉の母親である姫神夏美の『男は全て胸好き』という物凄く偏った教育によってもたらされた公式で、彼女はそれを鵜呑みにしているため何の疑いも持っていない。

紫亜はため息など吐きつつ、自分の胸をふと見下ろした。小さいというわけではないが、大きいとも言えない膨らみが二つ視界に入る。

楓がメロンだとすると彼女はリンゴといったところだろう。

(勇吾君もやつぱり、楓さんみたいに大きいのが好きなのかな……?)

これまでの勢いはどこへやら。一転して気落ちした雰囲気になる紫亜。

一応、勇吾の名誉のために追記しておく、彼は特に胸への思い入れを持っていない訳ではない。

なんにしる紫亜は、憤然とした心中から一気に落ち込みモードに突入していた。

と、その紫亜の背後から、俄かに声が上がった。それと同時に、何か背中にやけに肉感的な柔らかい感触が発生する。

「紫〱亜〱ちゃんっ」

「きゃっ …… か、楓さん」

小さく悲鳴を上げて振り返ると、楽しげな笑みを浮かべた楓が自分の首に手を回して寄りかかってきていた。背中の感触は間違いない胸だろう。なんてタイムリーな接触だろうか。

今の今まで胸について悩まされていたところにこれとは。

先程まで向かい側にいたのに、いつの間にも移動したんだろうと思いつつ、紫亜は驚き覚めやらぬまま、言う。

「ど、どうしたの？ こないきなり……」

「だって、紫亜ちゃん呼んでも返事しないんだもの。だからちよつと悪戯したくなっちゃって」

さりげなくだが、妖艶に微笑みながら言ってくる楓。その自然な動作の一つ一つ いや、もはやそこに居るだけで、全身に『女』の

魅力を纏っているような気さえする。同じ女の身である紫亜が見ても、思わずドキリとさせられるほどに色っぽい。

「えっと、その楓さん……?」

気後れ気味に紫亜がそう言つと、楓は少しだけ困り顔を見せた。首に絡めていた手をどけて、やはり困つたように言ってくる。

「もう。同級生なんだから『さん』はやめない?」

「え、でも……」

紫亜も困り顔で口ごもる。

紫亜は姉に紹介されて彼女と最初に会つた時に、雰囲気からてつきり年上だと思つていた。

それ以来、紫亜の中では『さん』付けが定着してしまっているのだ。今更急に変えるのは、なんとなく抵抗がある。

「んー。まあ良いわ。紫亜ちゃんが呼びやすいなら、『楓さん』でも」

と、こちらの逡巡を悟ってくれたのかどうかは分からないが、楓は悪戯っぽくそう言った。

なんとなくホツとして、紫亜は、

「あの、私に何か用が……?」

「うーん。用つて程の事じゃないんだけどね。ちょっとお話したくて」

そう前置きしてから、楓は続けた。

「紫亜ちゃんと勇吾君つて、どれくらい付き合つてるの?」

「えっと……一月くらい、だけど……」

楓の意図が分からずに、紫亜はやや戸惑いながら答えた。

（何でこんな事を聞いてくるんだろう? 楓さんには関係ないのに……）

思わず、そんな事を思い浮かべる。傍から聞いていればただの世間

話なのだが、紫亜としては、楓の口から勇吾の名前が出てくるのがなんとなく面白くなかった。

それは紛れもなく『女』としての嫉妬や焦燥の類だったのだが、自覚して戒められるほどには、紫亜は成熟していない。

なにしろ勇吾は紫亜にとっては初恋の相手であり、なおかつ初恋の人である。

当然何もかもが『初』尽くしで、勝手が分からないのも当然だった。

戸惑う紫亜の様子には頓着せずに、楓は楽しげな声を上げる。

「あら。じゃあ、今からが一番楽しい時じゃない。もうキスはした？」

どこか活き活きした様子の楓。目にはしっかりと好奇心の光が宿っていた。

ちなみに、さつきこれと似たような質問を昴が勇吾していたが、もちろん彼女たちはそんな事は知る由もない。

ともあれ、紫亜はその質問に面食らってしまった。微かに、頬に朱が燈る。

「そ、そんな……まだ手を繋ぐのがやっとで」

「えっ？ 嘘、何で？ 普通そのくらいの時期なら、すっごくベタベタくっついちゃうのに」

驚愕に近い表情で疑わしげに呟く楓。

だが、何でと言われても、正直答えようがなかった。

あえて理由を挙げるなら恥ずかしいというか照れがあるからということだが、それを言っても楓は納得しないだろう。

それこそ『何で恥ずかしいの？』と聞かれそうだ。

紫亜が返答に困って考え込んでいると、楓が人差し指を口元に当てながら少し考えるように、

「ふーん。それなら、私が割り込む隙間もあるのかな？」

「え……？」

楓の言葉に、嫌な予感が、紫亜の脳裏をよぎった。

「実は勇吾君、結構好みだったりするのよね……。今日一日何回かアクシヨン起こしたのに、全然乗っかってこなかったもの。硬派っていうのかしら。彼みたいな人、今はあまりいないじゃない？ ああいうタイプの男の子って、その気にさせてみたくなっちゃう」

そこで楓は、言葉を一旦切ったようだった。少し間を置いて、続ける。

嫌な予感が、具体的な形を成し始める

「誘っちゃおうかしら、彼」

「そんなのダメッ！」

楓が全てを言い切る前に、紫亜は思わず叫んでいた。普段大声を出すことのない彼女の思わぬ大喝に、楓は眼をぱちくりさせる。端的に言えば、楓は驚いていた。

だからと言うわけではないが、楓は少し弁解気味にはあるが紫亜を諷めようと口を開き、

「……えっと、紫亜ちゃん？ 今のは一応冗談 半分はホントだけど だから、落ち着いて？」

声のトーンを少し落として呟く楓。が、紫亜はもはや聞いてもいないようだった。

「ダメだから！ そんなの絶対、絶対にダメだからね！ 勇吾君は私の、大事な人なんだからっ！」

「……………」

……沈黙。ひたすらに、ただただ沈黙。

ザザーツ。波の音だけが虚しく響いた。

まわりに仲間内以外の人間はいなかったものの、昴と琴子は一体何事かと紫亜の方を見つめていた。間違いなく、今の紫亜による心の叫びが聞こえたのだらう。

一番間近で聞いていた楓に至っては、未だに忙しなく瞬きをしながら閉口している有様だ。

そして、叫んだ当の本人はというと

「……………あ……………」

ようやく、自分が何を言ったのかを呑み込んだようだった。

人類の限界に挑戦しかねないほどに顔を真っ赤にしつつ、慌てて自身の口を手で塞ぐ。

だが、それで今の発言が取り消されるわけではない。

昔の人は言いました。『覆水盆に返らず』と。

とりあえず、勇吾本人がこの場に居ない事は、彼女にとって救いといえるかもしれない。

……………しかし。間の悪いことにこの数分後、自販から帰ってきた何も知らない勇吾が、この場に現れるのである。

第八話：彼女たちの交流と面倒事（後書き）

黒い服しか持っていないので外を出歩くと日光集めまくりで死にそうになります。

どうも、へっばこ物書きの龍之介です。

短い上に更新が遅れました。あんまり居ないとは思いますが、続きを待っていてくれた方はすいません。

出来るだけ早く次話を投稿すべくキーボードを叩いておりますが、受験勉強により遅筆に拍車が掛かっております。

なのでこれからも気長にお付き合い頂ければ幸いと存じます。

第九話・違和感、掠る（前書き）

かなり短いです。

話をつなぐ為の話、といった感じでしょうか。

第九話・違和感、掠る

どうしてこんな事になっているのか。
取り合えず、知りたいことはそれだけだった。

立ち尽くしている勇吾の目の前には、ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた昴と琴子の姿がある。

さつき勇吾が紫亜と話そうと彼等の近くまで来た瞬間に、それまで続いていたビーチバレーのラリーを止めて、突然笑い出したのだ。何故、顔を見られただけで笑われなければならないのか全く見当も付かないが、まあ、それは良い。
少々腹立たしいものの、それだけで実害はないので放置して構わない。

もう一人、何故か困ったような顔で首を傾げている楓も視界に入るのだが、それも今は追求すまい。

そう　問題なのは、紫亜だ。

彼女は今ここにいない。

勇吾がここに来た瞬間、つまりは昴たちが笑い出したのとほぼ同時に、顔を真っ赤にしながら走り去ってしまったからだ。

訳がわからない。今日は朝から色々あったが、これに関しては全く心当たりがない。

今回は間違いなく、自分が何かしたわけではない筈である。

しかし、紫亜が自分と目のあった瞬間に、沸騰したように真っ赤になって走り去ったのは紛れもなく事実であり、だとすれば原因は勇吾自身と関係があるのだろうと推測される。

だが、今までこの場にいなかった自分にどんな非があるのかと考えると、やはり答えは『何もしていない』だ。

(……何だか、俺が紫亜に近づこうとする度に邪魔が入るような気がしてきた。厄日か?)
鈍痛のしてきたこめかみを人差し指で押さえて、勇吾は嘆息した。
なんでこう、厄介事というのは一度に纏めて襲ってくるんだろう。

(何だっつてんだ……?)

自身の与り知らぬところで事態が変化している事にげんなりしつつ、
勇吾は天を仰いで呟いた。
もうじき夕方だというのに、太陽は相変わらず絶好調に発熱を続けている。

とにかく。

いま勇吾が知りたいのは、どうしてこんな事になっているのか。
ただ、それだけだった。

* * * * *

「おい、これは一体どういうことだ？」
「教えない。言ったら多分紫亜に怒られるだろうからな」
上記の理由から現状把握のために質問をぶつけた所、昴はそう答え
た。

「……」

勇吾は閉口して、昴を半眼で見やった。しかし、昴は相も変わらず
陽気な表情のまま、勇吾の眼光に怯んだ様子すらない。

この男から事情を聞きだすのは至難だと判断して、勇吾は楓に視線
を向けた。

そして昴にしたように、楓にも質問をしようと思いを開く。だが、勇
吾が何か言う前に、楓は先手を打ってきた。

彼女はどこか意地の悪い表情で、

「教えない。だってその方が面白そうなもの」

言われて勇吾は再び閉口する。どうしようもなくなつて、視線を昴たちの方へ戻す。昴は笑いを引つ込めたようだったが、琴子は未だ意地の悪い笑みを浮かべたままで、それがかなり腹立たしい。

(……本格的に訳が分からなくなつてきた。昴と琴子にや笑われる、楓は何も言わねえ、紫亜に至つては何故か走り去つちまう……俺のいない間に何があつたんだ?)

疑問を胸中で呟く。それで何がどうなるわけでもないのだが、他に出来る事があるわけでもなかった。

このタイミングでは、紫亜を追いかけたところでやぶへび以外の結果は出ないだろう。

紫亜が走り出したとき、紅葉が追いかけて行つたのを横目で確認できたから、今は彼女に任せるしかない。自分はその間に状況の把握をしておこうと判断していたのだが、完全に当てが外れてしまった。事情を知っているであろう昴達こいつらがまったく役に立たないのだ。

本当に、何が一体どうなっているのか

ほとんど途方に暮れるような心持で、勇吾はそんなことを考えていた。

と、不意に脇腹の辺りをつつかれる。何かと思つて目をやると、琴子がにしし、などとわざとらしい笑いを漏らしながら横にいた。

「……何だよ」

「いやあ、何つてそりゃ旦那、決まつてるじゃねえですかい」

えらく奇妙な口調で言つて、笑みを濃くする琴子。うりうり、とこちらの肩を小突きながら、続けてくる。

「へっへっへ、愛されてますなあ、旦那。いやいや、若いつてのは良いもんですなあ」

「いや、何言つてんだか俺にはさっぱりなんだが。というか何だその鬱陶しい喋り方と笑い方は……」

「いやなに、気分ですよ旦那。へっへっへ……へぶっ」

最後まで奇怪なしゃべり方のままで、結局重要なことは何も言わずに琴子はじりじりと下がっていった。その間中、変な笑い声は続いていたが、途中でどうも琴子がこけたらしく、途切れたようだった。それは無視して、勇吾は再び鈍痛に襲われたこめかみを人差し指で擦った。

(どんな気分なんだ……?)

余計に頭が混乱して、思わず胸中で勇吾は呻いた。

と、こけた状態から昴の手を借りて立ち上がるうとしている琴子の向こうに、少し疲れたような表情の紅葉が見えた。ゆっくりと、歩いてこちらに向かっている。

待ちきれずにこちらから走り寄って、勇吾は、

「紅葉、紫亜はどうだった？」

そう訊ねた。

それに、紅葉はため息をひとつ吐いてから、答えてくる。

「えっと、紫亜は部屋に戻ってたんだけどさ。どうもそわそわして落ち着きないって言うか……照れ隠しかなにかみたいなきっかけだ」

「そうか……だがまあ、部屋にいるなら安心か」

ひとまず胸を撫で下ろして、勇吾は呟いた。それに、紅葉の話からすると紫亜は特に怒っているというわけではないらしいから、まだ対応はしやすいだろう。

「ていうか、私は状況が全くわかんないんだけど。さっき紫亜が何か叫んだのは見てたけど、声は聞こえなかったし。昴、あんたは知ってるんでしょう？ 説明してよ」

不機嫌そうに、紅葉は昴に命じた。どうも彼女も現状から取り残されていたらしい。

勇吾は微妙な連帯感を感じたが、意味が無い気もした。

昴は紅葉の命令に、少し考えるような仕草をして、それから紅葉を手招きした。紅葉が怪訝な顔をしつつそちらへ歩いていく。

「つておい、昴。俺には説明なしか？」

紅葉一人を呼んだ昴に言うが、彼は肩を竦めて、

「お前は駄目。少なくとも今はな」

それだけ言つて、昴は小声で紅葉に何かを耳打ちし始めた。

すると、怪訝だった紅葉の表情が、話を聞くにつれて苛ついたようなものになっていき、次に呆れが混じり、最終的には諦観に染まっていた。

数秒後、話を聞き終えたらしい紅葉はどこか難しい顔で勇吾の所に戻ってきた。

そして。

「……………」

何故か拳をつくり、勇吾に向けて軽く振りかぶつて

ごん。

「痛い」

勇吾の頭をぶん殴った。

「お、おい。なんで殴るんだ？　というかなんで怒ってるんだ紅葉

痛えっ。だから何でだ！？」

二発、三発と続けて拳をぶつけてくる紅葉に、勇吾はわけがわからず訊ねる。が、紅葉は聞く耳すら持つてくれないようだった。

「うっさい。　どう足掻いても勇吾と紫亜はノロケに走るよーね

……………」

昴が何を言ったのか知らない勇吾は、何一つとして状況がわからなのまま紅葉に殴られるしかない。

なにかとてつもなく理不尽な気がしたが、今の紅葉に逆らう勇気は、勇吾にはなかった。

そうして、しばらくされるがままになっていると、突然勇吾の体に違和感が発生した。

それは最初、小さな事でしかなかった。まず、ぐらり、と視界が揺れる。

そしてほんの少しだが、寒さを感じた。太陽はまだ沈んでいないというのに、体の芯から震えるような寒さ。

今度は体全体から力が抜け、脱力感に襲われる。気を抜けば、即座に倒れそうなほど。

まるで、何か大きな力で頭を打たれた直後のように。

(紅葉に打たれてるせいかな?)

ふと、そう思いつく。

だが、勇吾の頑丈タツさなら、紅葉に打たれたくらいでは痛みはあっても大したダメージにはならない。そういう風に鍛えられている。

だとしたら。

(これは……なん、だ……?)

これまで感じたことの無い奇怪な感覚に、勇吾は顔をしかめた。

そうしている間にも、違和感は体内で蠢き続けている

「ふう。とりあえずすっきりした。あれ、どしたの勇吾？」

拳の連打を止めて、少しばかり晴れやかな顔になって、紅葉が聞いてくる。

が、勇吾は答えられない。

違和感が、無視できないレベルの嫌悪感に昇華され、体を侵食していく

「ちょ、ちょっと。どうしたのよ？ そんなに強く叩いちゃった？

何か言いなさいよ、こら」

こちらの異変を見て取ったのか、紅葉が少し心配そうに聞いて来た。

「……何でもない」

なんとかそれだけを答えて、勇吾は深呼吸した。それでなんとか、

嫌悪感が少し薄まる。

今の違和感がなんなのかは分からないが、もしかしたら疲労が溜まっているせいかもしれない。

といっても、勇吾の肉体そのものは馬鹿みたいに強靱だから、あるとしたら精神的なものだろうが。

今日一日色々あったから、精神的に思ったよりガタが来ているのかもしれない。

勇吾は適当に胸中でそう結論付けて、まだ心配そうにしている紅葉に顔を向けた。

「……よし。大丈夫だ。どうも少し疲れちゃったらしい」

「もう。びっくりさせないでよ。怪我でもしたのかと思ったじゃない」

「すまん。だがまあ、もう問題ない」

言いながら、実際にある程度回復していることを勇吾は実感していた。さっきのは一過性のものだったのかもしれない。

紅葉は安心したのか笑みを見せながら、

「そっか。でも、確かに私もそろそろ疲れてるし、紫亜も部屋に戻ってることだし、今日は引き上げよっか」

それに、勇吾は頷いた。昴達にも声を掛け、撤収準備に取り掛かる。

今はとにかく、紫亜の事が気になっている。

というよりも、ごく単純に、勇吾は紫亜と話したかったのだ。

第九話・違和感、掠る（後書き）

小説家になろうの秘密基地でイラストを描いてもらって無駄にハイテンションな愚か者が一人。
誰かPCの前で悶えながらキーボードを叩いてる黒ずくめを止めてくれ。

……毎度の事ながら変な書き出しですいません。
へっばこ物書きの龍之介です。

短い割りに執筆に手間取りました。
次は一体いつになることやら。

それでは、また次回のあとがきで。

第十話：楓、策謀する（前書き）

海編もそろそろ後半戦。

十一部、よつやく更新です。

第十話：楓、策謀する

（失敗したわね……）

浜辺から少し離れた位置にある旅館に向かいながら、楓は一人ごちていた。

先に帰ってしまった紫亜が心配なこともあって、全員で宿泊予定の部屋に戻るようになってから約五分。荷物を纏め、着替えを済ませて、こうして帰路についている。

前方には、紫亜を除いたメンバーたちが、何やら雑談しながら先行している。

いや、彼らが先行しているというよりも、楓が遅れていたのだ。考え事していると、どうしても歩みは遅くなる。

（ちょっと意地悪してみようとしただけで、あの内気でおとなしい紫亜ちゃんがあんなに取り乱すなんてね。そんなに、緒方君が魅力的なのかしら）

思考の焦点は、先ほどの紫亜の態度についての事だった。

クラスメートである紅葉を経由して、ある程度紫亜のことは知っていたし、以前からの面識もある。ここ最近は付き合いが希薄だったが、一年の時は紅葉や琴子を含めて、四人で遊びに出かけたこともあった。その経験からのイメージでは、決してあのように大声を出して自己主張をするタイプではなかったはずだ。

もちろん、そのイメージが正しかったという保障は無いのだが、楓はよほどの事が無い限り、自分の人を見る目を信用することにしてきた。

結論。さっきの紫亜の態度は、楓の知る紫亜のものではない。
（だとしたら、紫亜ちゃんがつい最近に変わったということ。それも良い意味で　そう、『成長』した、ということになるわ。たぶん原因は……緒方君、なんででしょうね）

前方を歩いている黒髪の少年の背中を見やり、ふと思い浮かべる

緒方勇吾。

今日、初めて会った少年の名だ。

印象は、特に強烈なものではなかった。翠の双眸を除けば、どこにでもいそうな高校生にしか見えない。

紫亜を落とした　　というか紅葉もだが　　と紅葉から聞いていたから、どれほど魅力的な男なのかと思っていたが、実際会ってみれば意外に普通な印象。

話してみても、不器用　　女に慣れていなさそうな　　感じがするだけだった。

紅葉の話では喧嘩が恐ろしく強いそうだが、それは今のところ考慮に値しない。
強いだけの男ならいくらでもいる。

まあ、からかうと中々初心はつこで面白い反応をしてくれるのは評価できるが。

他に好印象なところといえば、今時珍しいくらい堅物であるところか。

今日何度か接触してみたが、その度に彼の意識はこちらではなく紫亜の機嫌に向けられていた。それはつまり、楓にはさして興味を持っていないという事。

女に慣れていない分、過剰な反応をするようだったが、鼻の下を伸ばしているという感じではなかった。

それはまあ、好意に値する。

少なくとも体が目当てで女を追う男ではないということだ。

総合評価としては平均を少し超えるくらい、といったところか。悪くない。が、特別イイ男というわけでもない。となるとやはり、楓の目から見ても可愛く、魅力的な紫亜が何故あそこまで彼に御執心なのか、判断が付かなかった。

容姿だけで言えば彼の連れである金髪の少年 芹沢昴の方が秀でているし、学校の成績も昴の方が上。実際、昴の名は、女子同士の会話で好意的な意見をよく聞く。

彼らは常に行動を共にしているようだから、自然に二人の内どちらが優れているのか、周囲からは比べられることになるのが普通だ。客観視してしまえば、どちらか選べと言われた場合、十人に八人は昴を選ぶだろうと推測される。

出会ったタイミングや好みの問題もあるのだろうが、やはり普通は昴に惹かれる可能性が高いはずだ。

（なんで紫亜ちゃんが緒方君に惹かれているのか……気になるわね）
非常に興味深い男だ。好奇心が疼く。魅力がどこにあるのか、分からないからこそ興味が強くなっていく。

……もしも勇吾の、自分には見えていない部分に、紫亜を落とせるだけの魅力があるのなら。

（ 『寝取りの羽坂』として、本格的に狙ってみたいわね）
そう呟いたとき、楓は我知らず小さな笑みを浮かべていた。
それは彼女の癖だった。興味のある男を見つけた時、獲物を見つけた獵師ハンターのような気分になる。

俗に言う『恋の狩人』の状態だ。

『恋愛』が絡んでくると、楓は少しばかり周りが見えなくなるのだ。それも癖のようなものではあった。

だからこそ、学校内で『寝取りの羽坂』と、影で呼ばれている。

最近目ぼしい男が周りにいなかった事も手伝ってか、楓の思考は一気に加速した。

（今まで色んな男の子を見てきたけど、こういうタイプの人はいなかった。『未知の男』ってところかしら。……ふふ、それはそれで面白そうね）

客観視で勇吾を評価していたはずが、いつの間にか興味津々な様子の楓。

しかし彼女はそこには頓着せず、マイペースに思索をめぐらせる。

（何か行動を起こすなら、早いほうがいいわね。まずはいつも通り、二人きりになるところから始めましょうか）

今まで勇吾に掛けてきたちよっかいなど、本当にかいかい程度のものでしかなかった。

周りに人がいたし、そもそもマジになるほどの価値を勇吾に見出していなかったからだ。

しかし、ここからは違う。勇吾の本質を見る為には、本気でかからないと。

ふと気がつけば宿泊予定の旅館は、もう目の前。

楓は部屋に戻って機会を見つけたら、すぐに仕掛けるつもりでいた。

* * * * *

この海水浴場の近辺には、まともな宿泊施設は二軒しかない。古株の旅館『水庵』と、新規参入のホテル『シーリゾート』の二つである。

他にもごく小規模な宿 自宅を改造しただけの民宿など ならいくらがあるが、ある程度のサービスの質を望むなら、海水浴客をメインに集客している上記の二つのどちらかに泊まるのがベターな選択だろう。

まともな宿が二軒しかないだけあって、その二軒の客引き競争はかなり激しい。様々なオプションサービスを取り入れたり、あるいは単純に値段を安くしたりと、営業努力は常に惜しまない状態だ。

だから と決め付けるのは些か乱暴ではあるが、勇吾たちの予約した『水庵』の大部屋は、かなり安価で泊まれる事になっていた。

いくら集客競争の影響で値段が下がっていると云っても、一介の学生である勇吾たちに個室を取る金銭的余裕は流石にないので、より安価な大部屋を選択したのだ。

そして、『大部屋』というだけあって、室内は中々広い。六人全員が大の字になっても、かなり余裕が持てるくらいだ。

長方形の和室で、十八畳ある。

部屋の真ん中あたりには襦ふすまがついていて、寝るときにはこれを閉じてしまえば男女別に仕切ってしまう塩梅あんばいだった。

残念ながらその部屋からは海を臨む事はできないが、この旅館には海側に露天風呂があるそうなので、海の景色を堪能したければ、入浴時にたっぷりとしめぬ。

これらのことは最初に荷物を置きに来た時に確認済みの事柄だ。

値段から考えれば、破格といっても良い好条件だった。その割には、何故他に泊まるうとする客がいらないのか気になるところではあるが。

「なんか、不自然に条件が良すぎる気が……」
全員分の荷物を詰めているせいでやけに重たい鞆を提げて、紫亜を除いたメンバーをぞろぞろと引き連れて部屋に向かいながら、勇吾はなんとなく呟いた。

返事は、えらくタイミングよく返ってきた。小声で呟いたので誰にも聞こえないと思っていたのだが、割と近くにいた琴子には聞こえていたらしい。階段を上りながら満面の笑みで、言ってくる。

「それは当然、昔あの部屋で首吊り自殺があって呪われてるとか、ユーレイが出てくるとか、そんな逸話があるんじゃないかなっ？」

「当然なのか……？ いや、それよりお前、これから泊まる部屋のことをよく呪いだのなんだのと言えるな」

「いーじゃん面白そうで。『ユーレイと戯れる夏の思い出！』……くぁー、楽しそうー！」

「いや、どつとは言わんが……」
楽しげに不吉な事を言う琴子に、勇吾は呆れ混じりの視線を向ける。何がどうあると、琴子のハイテンションは落ち着きはしないらしい。

（こっちは頭痛の種が多すぎて、まともに楽しむ余裕なんぞねえつてのこ）

ぶつくさ呟き　　今度は聞かれないように胸中で　　、勇吾は立ち止まった。

琴子の話に付き合っている間に、部屋に着いていたようだ。

『神風の間』。扉の横に貼り付けられた表札のような木の板に、そう書いてある。

部屋のネーミングに関しては少しばかり言いたい事があるが、まあそれは気にしなればどうということでもない。

いま勇吾が気にしなればならないのは、紫亜のことだけだ。

（さて　　どうやって紫亜と話せばいいのやら……）

この中に紫亜がいる事を再確認して若干の躊躇をしつつ、勇吾は横開きの扉を開けた。

「あれ？」

「いたっ」

部屋に一步踏み入ってから突然立ち止まり、勇吾は間の抜けた声を出した。

いきなり止まった所^{せい}為で琴子が勇吾の背中に激突してひっくり返ったが、無視する。

「紫亜、いねえぞ？」

脚の短い机や座布団、後は布団や浴衣などが入っている押入れくらいしかない部屋を見回して、勇吾は呟いた。

紅葉の報告ではここにいるはずの紫亜が、部屋のどこにもいないのだ。

後ろから琴子の抗議が聞こえてくるが、それも無視する。

取り合えず荷物を床に放り出しながら、続いて部屋に入ってきた紅葉に問いかけた。

「なあ、紫亜は確かに部屋まで戻ってきてたんだろ？」

「うん。水着のまま走って来ちゃってたから、着替えてたけど」

紅葉は肯定したが、しかし実際には紫亜がいない。

「まあ、どっか行ってたとしてもその内戻ってくるだろうが、一応探しに行って来いよ。」

鼻がひっくり返ったままの琴子を起こしてやりながら、そう言うてきた。

そもそも、紫亜が部屋に戻ったのは勇吾と顔を合わせ辛いからだから、勇吾が行って仮に彼女を見つけても、また逃げてしまいそうな気がする。紫亜の性格上、十分にそれはありえる。

とはいえ、ずっと顔を合わせないわけにもいかないのだから、この

際勇吾が行くしかないだろう。

「……そうだな。とりあえず旅館の中を一回りしてくる」
少し考えて、勇吾は首肯した。

「あ、じゃあ私も行くわ」

狙っていたかのようなタイミングで、楓が申し出てくる。

勇吾はそれを承諾して、楓を伴って部屋を出て行った。

* * * * *

「まったく、紫亜のやつ、どこ行ったんだろ。ほんと、面倒くさいバカツプルだわ」

勇吾と楓が出て行ってから、紅葉がぼそりと呟くのを、昴はなんとなく聞き取っていた。

昴たち待機組は、適当に畳の上に座布団を敷いて座り込み、勇吾たちの帰りを待つことになっていた。
紅葉は机の近くに座って備え付けの急須を使ってお茶を淹れる準備などしつつ、愚痴染みた呟きを続けている。

琴子とはいえば、「広い部屋ー！」とか言いながら畳の上をゴロゴロバタバタと回転して上機嫌になっていた。つくづく能天気である。昴はそれを視界に収めながらも特に何も言わず、それどころか座りもせずに部屋を見回していた。

(妙、だよな。やつぱり……)

内心呟き、忙しく動かしていた視線をぴたりと一点で止めた。

視線の先にあるのは、押入れである。部屋に入ったときからおかしいとは思っていた。

よく見ないとわからないのだが、押入れの襖がほんの少し開いているのだ。

当然のことだが、襖が勝手に開くわけがない。誰かが開けない限りこの状態にはならない。

(……まさかとは思うが、状況的にはそれしかないもんな)

再び呟き、襖に向かって歩を進める。ほぼ確信に近いものが、胸の内ですっかりつづいた。

「……昂？ あんたさっきから座りもせず何してるの？」

紅葉が訊いてくる。訝しい声だ。

「まあ、見てりゃわかるよ」

投げやりに返答して、昂は押入れの襖を開いた。

「……あ、紫亜」

後ろで見ていた紅葉がぼつりというのと同時に、中に小さくなって隠れていた紫亜と、図らずとも目が合う。

ちなみに、このクソ暑い季節に締め切られた狭い空間に閉じこもっていれば、言うまでもなく、問答無用に蒸し風呂を味わうことになる。

この押入れも御多分に漏れず蒸し風呂と化しているようで、紫亜は額に汗を浮かべている。

「……」

「……」

意味もなく見詰め合って、数秒後。

「……とりあえず、出てきたら？」

昂がそう提案すると、紫亜は力なく頷いたのだった。

第十話：楓、策謀する（後書き）

『萌え』の意味が分からずアキバ好きな友人に訊ねたところ、小一時間ほど説法されました。

それでもいまいちよく解らないままなのですが。

例題に出されたアニメキャラ、一人もわかりやしませんでした。

どうも。受験生の自覚など微塵も感じていない愚か者、へっぽこ物書きの龍之介です。

中々話が進まないのに余計な表現ばっか増えていくのはどういうことなのか。私にも謎ですが、とにかく進みが遅い。

これからもそんな感じでのろのろとカタツムリの如く這いずる予定の私ですが、広い心で読んでもらえると吉。主に私が。

それでは、また次回のあとがきで。

第十一話：違和感は消えず（前書き）

短めで、特にコメディはないような
前フリみたいなお話です。

第十一話：違和感は消えず

人間である限り、誰にでも過去はある。

あるいは、過去を持たぬ者では人間足りえぬ、というべきか。

もちろん、忘れてしまいたい過去、もしくは気付かないままに思い出せなくなるまで薄れてしまった過去も、十年も生きれば出てくるだろう。程度の差はどうあれ。

まあ、少しばかり捻くれた人間から見れば、過去を顧みるなどつまらない感傷だと鼻で笑うかもしれないが。

それはともかく。

緒方勇吾は人間だ。加えて十七年生きてきている。

結論として 緒方勇吾には、過去が存在する。

忘^{かしこ}れたい記憶、もう覚えてすらいらない記憶^{かしこ}が。

勇吾にとっての前者は、物心がついてから『師匠』に会うまでの十年程、後者はそれ以前の記憶の全てが該当する。

前者は、普通の人間と比べると些^{ちか}か長すぎるかもしれない。

それはつまり、『緒方勇吾』が始まってからの十年間全てを、当の本人が否定しているという事で、勇吾が肯定できるのは、『師匠』に出会ってから今現在までのたった三年足らずであるという事なのだから。

だが、それで良いのだろうか。

認めたくない過去^{おとぎ}だからといって、それを否定して。

都合の良い部分だけを肯定して、それ以外は思い出すことも無く心

の隅に追いやって。

自らの過去など、認めてやれるのは自分自身をおいて他にいないというのに。

許してやれる『自分』が、たった三年分しか無いなどというのは、あまりにも寂し過ぎるのではないか？

(……つまらない事を考えてるな。どうやら本当に疲れてるらしい)

人気のない旅館内の休憩所のベンチに力なく腰を下ろして、勇吾は苛立ち紛れに呟いた。

もつとも、人気が無いといっても完全に自分一人という訳ではないので、声に出すことはしなかったが。

この旅館 『水庵』は、どうやら全施設の隅々まで気が配られているらしく、大して使われてもいなさそうなのこの休憩所のベンチも、それなりに座り心地はよく、簡易ベッドにもなりそうなくらいだった。

許されるなら、今すぐ横になって泥のように眠りたいものだと思うが、状況的にそれは却下せざるを得ない。

と、思索に耽る勇吾に、柔らかい声がかかった。

「大丈夫？　なんだかすごく辛そうだけど」

「ん？　……ああ、それなりにマシになった。すまん、つき合わせて」

勇吾は思索を打ち切ってかけられた声に応えながら、視線を少し上げる。

目前に立っていたのは、楓だった。微笑えはそこらの男の理性を根こそぎ奪い去るであろう美貌を心配の色で翳らせて、こちらの顔色を覗き見ている。

彼女は勇吾の返答をどう捉えたのか、ふう、と息をひとつ吐いて、「これくらいで謝らないで良いわ。それより、もっと自分の心配した方がいいわよ」
そう言い含めるように告げた。

勇吾はそうだな、と判っているのかそうでないのか、どうにも曖昧な返事でお茶を濁す。

楓はその返事に何か言いたそうな顔をしたが、結局再び吐息して諦めたようだった。

代わりに、という訳でもないのだろうが、楓はベンチの勇吾の隣に腰掛けて、

「まったく、勇吾くん、いきなり倒れるんだもの。びっくりしたわ」
「……すまん。俺もまさかぶっ倒れる程疲れてるとは思ってなかったんだ」

楓の叱責じみた言葉に、勇吾はなんとなく居心地悪くなりながら呟いた。
それきり、なんとなく会話が途切れる。

……さて。紫亜を探しに出掛けた筈のこの二人が、何故こんなところで揃って雑談などしているのか。

まあ、特に複雑な事情ではないのだが、一応説明しておく事にしよう。

二人が紫亜を探して旅館内をうろついているとき　つい先程、具体的には数分前に、勇吾が急激に体調を崩した。

正確に言うなら、海で紅葉に拳の雨を食らわされている時に感じた違和感を感じたのだ。

あの、悪寒を伴った視界の歪みと、緩やかに込み上げる嘔吐感を、だ。

それも海で感じたものより、悪寒が遥かに強くなっていたのだから性質が悪い。

最初はそれこそ『違和感』程度だったのだが、最終的には真っ直ぐ歩けないほどに悪化してしまった。そんなわけで、勇吾と楓は近くにあった休憩場で小休止を取っているとこだった。

（身体が丈夫なのが唯一の取り柄だったのに、情けねえ事この上ないな……）
未だにふらつく身体が忌々しい。これまでどんな怪我をしても、歩く事くらいは出来たというのに、今回の体調不良の原因は恐らくただの疲労だ。ただ疲れているだけでここまで身体にガタが来ているとするなら、確かに少しばかり情けなくはある。

と、静寂の中で少し気まずくなってきた頃、隣の楓が何かを呟くのが聞こえた。

「ねえ、勇吾くん？」

「……ん、何だ？」

答えて、楓に視線を向ける。

「このまま黙ってても退屈だし、少しお喋りしない？」

「お喋りって……別に構わんが、何を話せば良いんだ？ 楓とは今朝会ったばかりなんだから、趣味も嗜好も判らんし……。それに、紫亜を探さなきゃならんから、そうゆっくりもしてられんぞ」
勇吾は楓の提案に、肯定しつつも眉を顰めた。

話題が特に無いのは事実だし、勇吾はあまり口が上手いわけでもない。

まあ、身体が回復するのにまだ少し掛かるような気もしているから、時間潰しに会話を用いるのは有効ではあるのだが。

しかし、楓は勇吾の懸念に、軽く笑って答えてきた。

「大丈夫。お喋りするのにお互いのことなんて知らなくても良いのよ。むしろそういう事を知るためにお話するんだから」

「まあ、一理あるか……」

確かに、言われてみればそんな気もする。そもそも、人と話すのにいちいち事前情報が必要なら、初対面では会話が成立しないことになる。そういう意味では、楓の言葉は実に正しい。

勇吾はそう納得すると、軽く腕組みなどしながら切り出した。

「そんじゃ、何の話をする？ 正直、俺は話術に関しちや雨の日の

革靴程度にも期待できないんだが」

「そうね……例えば、^{たと}勇吾くんの昔話はどつ？」

「……俺の？」

「ええ。貴方の事は紅葉から少し聞いてたんだけど 昔はやんちゃしてたって」

「紅葉がそんな事を？ 俺は自分の話なんざ、ほとんどした覚え無いぞ？ ……あ」

呟いてから、ふと思いつく。自分の過去について詳細な事を知っている人物など、姉の渚を除いては一人しかいない。

（昴、だな。あいつ最近妙に紅葉と連絡取り捲つてると思ってたんだ。そうか、あの馬鹿 紅葉にいらん事吹き込みやがったな）

こめかみを押さえつつ、勇吾は呻いた。まあ、あの男はやけに要領が良いから、話しても洒落で済む程度に抑えたのだろうが……。

「どつ？ 私としては、勇吾くんのやんちゃ話、興味があるんだけど」

楓が急かしてくる。こちらに向けられている瞳には、好奇心の光が見て取れた。

どうも、興味がある、というのは本当のようだった。そんなに自分は過去に『面白そうな事』

を秘めているように見えるのだろうか。それはそれで嫌な印象ではある。

正直、過去を思い出すのはあまり気分の良いものではないのだが、今現在こうして足止めをくってるのは自分のせいなのだし、多

少の事は我慢するべきかもしれない。

（まあ、一部を除けば話せなくも無いか。いくらか『やんちゃ』では済まない部分もあるが……その辺は誤魔化せばなんとでもなるだろ）

勇吾は虚空を見つめつつしばし迷ってから、内心で結論した。

「わかった。楓が聞きたいってんなら、話してもいい。だが……つまらなくても文句言っなよ」

「ええ、話をねだってるのは私だもの。文句なんか言わないわ。約束する」

勇吾の言葉に、楓は即座に答えた。

勇吾はそれを確認すると、一つ息を吐き、視線を上げた。

その視線の先に自らの記憶を投影し、語るべき部分を模索する。

そして結局　自分が最も『やんちゃ』だった頃……『師匠』に会う直前の時期を、語るポイントに決定した。

「……よし。それじゃあ一つ、馴れない役目を　語り部を、演じるところだろうか」

掛かった

楓は内心そう呟き、同時に嘆息もしていた。

狙っていた好機　勇吾と二人きりになるところまで思いの外簡単に成功した楓は、いつもの手管通り、相手に『過去』を喋らせようとしていた。

男というのは基本的に過去の武勇伝を語りたがる生き物だ。

無論全ての男がそうだというわけでは無いが、そうした性質を持つ者はかなり多い。

少なくとも、楓の知る『男』という生き物は大半がそうした者達だった。楓の経験上、喧嘩自慢、腕に自信のある者は特にその傾向が顕著だ。

だからこそ、紅葉に聞いていた『勇吾は喧嘩が強い』という情報をもとに、勇吾もそういった傾向を持つ男だと断定した。そうした結果、勇吾はいとも簡単に釣れた。

（なんだか、少し拍子抜けね。こんな簡単に引っ掛かるなんて。今までの男とは違うかも知れないって、少し期待したのだけけれど）

咳いて、再び嘆息。

ただし、隣の勇吾には気付かれないようにこっそりと。

しかしまあ、期待外れだったとはいえ、昔話を要求したのは自分だ。ならばせめて、勇吾の語る彼の人生の断片を聞いてやるくらいはしないといけない。

そう思い、楓は注意を勇吾へと向けた。

第十一話：違和感は消えず（後書き）

自分の誕生日を友人の『誕生日おめでとー』というメールで思い出しました。

おお、そういえば何日か前に年輪が増えたんだったと今更思い知ってます。

大丈夫か私の記憶力。

どうも、ヘッポコ物書きの龍之介です。

久しぶりの更新。

あまり中身は進んでませんが、一応前フリとしてのお話でした。

次はちょこつと勇吾が過去を語ります。

過去編のネタは何かいっぱいあるんで、『師匠襲来』までに何回かに分けて書こうと思ってます。

勇吾と昴は過去の大部分を共有してるので、偏らないように両方を語り手にして、相互補完しようとも画策中。

では、今回はこの辺で失礼。

また次回のがきで。

第十二話・三年前・前編（前書き）

過去編其の一、しかも前編。ラブもコメもありやしません。

では、本編をどうぞ。

第十二話：三年前・前編

勇吾の記憶にある中で、最も『やんちゃ』だった時期といえば、『師匠』に会う少し前、中学二年生のちょうど今頃　夏休みの時期だった。

具体的な『やんちゃ』の事例　ある『事件』を引き起こしていたというのが、その最たる理由だ。

勇吾の住む町から然程離れていない所に、『桜通り』という場所がある。

もつとも、その名前は俗称で、正式名があるのだが、やたらと長い名前のためあまり浸透していない。誰も興味を持たなかったし、昴と共に何度もそこに通っていた勇吾ですらそうだった。

そこは『昼間は未成年の街、夜は成年の街』と呼ばれる、娯楽施設やショッピングモールの集合体とも言うべき一帯であり、勇吾が引き起こした『事件』の現場でもあった。

昼間はそうでもないのだが、夜になると途端に危険な人々　不良グループだとか暴走族だとか、そういった連中の溜まり場になると言われていた。

実際、昼にも居ないとは言えないが、夜の方が断然数が多く、それに比例して危険度も高くなる。

周辺の不良やチンピラの吹き溜まりであり、喧嘩はもちろん、カツアゲやリンチ、異なるグループ同士の抗争じみた諍い　そういった物騒な話題には事欠かないような場所だ。

そんな場所で、絶対の力を持つグループがかつてあった。

『餓王髑髏』という暴走族である。

『走る』という事を目的にした暴走族ではなく、どちらかと言えばたまに走りに出るだけの不良集団、というような感じの。

五十人近い構成員を抱える、近隣では中々の大所帯で、警察も手を出すのを憚るほど『やばい』と言われていた。

ただ、『かつてあった』という表現の通り、今現在はもう存在していない。

壊滅したのだ。たった一人の少年 当時中学生だった勇吾の手で。

さて。ここで少しだけ、当時の勇吾について語ろう。

『喧嘩屋』

当時の緒方勇吾という少年を語るときに、これほどじっくりくる言葉は他にないだろう。

実際、彼は幼い頃からずっと、常人の何倍も喧嘩をしてきている。

それも、友人同士の意見の食い違いから起こるような一般的なものではなく、言い争いで終わるような平和的なものでもない、『ただ自分と対立しているから殴り合う』というような、原始的で野蛮な喧嘩を。

何故か。

それは彼が周りにいる人間の殆んどを『敵』としてしか見なかったからだ。

勇吾の育った環境がそうさせたのかもしれない。
育ての親である祖父が死んだ後、勇吾とその姉の渚は元々両親と住んでいたらしい家に戻り、必然的に転校することになった。

その転校先の小学校では、瞳の色が違うという理由でイジメに遭っていた。

それそのものは大した事ではなく、よくある話だ。学校という場所にイジメは必ず付きまとうのだから。

故に、変わっていたのは勇吾の方だといえる。

普通なら大人数でのイジメに遭えばただ被害が別の方向に向けられるのを待つか、大人に相談して解決を図るのだが、勇吾はそうせず、自身の手でイジメを行う者を『殲滅』した。

また、同じくイジメの標的だった姉の渚に敵対する者も、徹底的に殴っていった。あるいは、自身に敵対する者よりも優先して潰していたかもしれない。

ただ一人生きている自身と近いものは、家族である渚の優先順位は、勇吾自身より遥かに上だったのだ。

なんにしろ、勇吾はひたすら『喧嘩』に没頭した。自衛の意味以上に、『闘う』という行為自体にのめり込んでいった。

まるで、自身の存在を確かめるように。

勇吾は生来の高い筋力 常に成長痛が体中に纏わり付くほど早くに発達していた肉体を以つて、事を成した。

祖父が教えてくれた空手の技術もそれを助けた。

だが、喧嘩は基本的に新たな喧嘩を呼ぶ。

実際、勇吾の下には次から次へと『敵』が現れ、どれだけ倒しても収まることはなかった。

唯一の救いは解かり合える者 昴と出会えた事。

最初こそ習性で敵対したものの、勇吾は何故か彼とだけは手を取り合い、その内背中を任せて喧嘩をするほどに彼を信頼するようになっていった。

そうして勇吾は育ち、中学二年の夏休みが訪れた。

そして 『事件』が起きた。

* * * * *

不自然だった。何が不自然かといえば、家の鍵が開いている事が、だ。

今、勇吾は学校帰りで、時間としては午後の七時を少し回ったくらい。

昴に付き合って寄り道をしていたので、多少帰宅が遅れてしまっていた。

その昴も、今現在勇吾の傍らに立っている。今日は泊まっていくつもりらしい。

それはともかく。勇吾の家は姉と彼の二人暮らしで、高校を卒業してすぐに働きに出た姉は、この時間帯は出勤している筈なのだ。

普段は恐ろしくとぼけた性格の姉だが、こと仕事に関しては意外に真面目で、遅刻も欠勤も殆んどない。昨日会ったときは元気だったから、おそらく体調不良という事もないだろう。

だから、今家の鍵が開いているのはかなり不審な状況だった。

「何だ？ 渚の奴、今日は仕事休むなんて言っただけなのに……」
訝しみつつ、ドアを開ける。

と 玄関のすぐ近くに、見慣れた女性が座り込んでいるのが視界に映った。

「……ゆーちゃん？ それに、すーちゃんも……？」

「渚 おい、どうした、その顔!？」

座り込んでいた女性 渚の名を呼んでから、はたと気づいて、勇吾は声を荒げた。

こちらを見上げてくる彼女の顔、その右の頬が、少しばかり腫れていた。少し泣いたのか、目も赤い。

それだけではなく、着衣にも多少の乱れがあり、服の襟元が破れてすらいる。

「どうしたんだ、その有様は！ 一体何があった!？」

酷く慌てたように、勇吾は渚に詰め寄った。いや、実際、相当に慌てていたのだが。

その勇吾を、少し遅れて渚の様子に気づいた昴が諫める。

「落ち着け、勇吾。焦っても仕方ないだろう。 渚姉^{ねえ}、簡単にで

良い。事情を聞かせてくれ」

それに、渚は困ったように小さく笑うと かなり無理のある笑みだった。 途切れ途切れに説明を始めた。

「えへへ、ちよつと、お客さんとモメちゃって。……怒らせちゃって、それで叩かれて……服もボロボロに、なっちゃったから……今日には早引けさせてもらったの」

それで、勇吾は事情を察した。昴も同じく事情を悟ったらしく、苦々しい表情になる。

渚の職業はホステスだ。その渚が言う『お客さん』が怒る理由など、

簡単に想像がつく。

恐らく、自分と交際しろ、あるいはもつと直接的に『今晚付き合え』
とでも言って断られたのだろう。

渚のモメた、という言葉は随分と遠慮がある。一応相手が客だったからそう言ったのだろうが、本質は要するに、単なる逆ギレではないか。

「……どこのどいつだ、そんなつまらん理由でお前を殴ったのは」

低い およそ中学二年生のものとは思えない声で、勇吾は呟いた。その声質からは、既に激昂の兆しが見え隠れしている。

昂にしても、彼にしては珍しく、怒りを表情に出していた。

滅多な事では負の感情を表に出さずに腹に溜め込む性質たちである彼だから、これはかなり稀有なことだった。

それほど、二人にとって 意味合いはそれぞれ違うが 渚が大切なのだろう。

対して、渚は何でもないことのように、やはり笑みを湛えて呟き返してくるだけ。

「あはは……しょうがないよ。あのお客さん、すっごく怒りんぼだったから。『なんとかどくろ』って暴走族のリーダーだって言うてたから、そのせいかも……」

「髑髏 餓王髑髏か」

渚の呟きから断片的な情報を拾い、昂は断定した。

「桜樹広場で毎晩たむろってるゴミ集団。だが、規模はここらで最大級、素行の悪さもヤクザが視線を逸らして歩くレベル。大物が出てきやがった」

多少は落ち着いたのか、少なくとも表面上は平静になった昂が告げる。

と、同時に、勇吾はふらりと動いた。

踵を返し、閉じていたドアを押し開けながら、ぼつりと呟く。

「昴。渚は任せる」

それに、昴はやや遅れ気味に反応した。あまりに唐突に動いたので、一瞬訳が分からなくなつたような間が空く。

勇吾は昴の返答を待たずにドアをくぐって歩き出したが、それを昴が遮つた。

「待て、勇吾。どうする気だ？」

平淡に、問われる。努めて押し殺したような声。

「……どうする、だと？　　決まつてるだろうが。餓王髑髏の連中をボコる」

無理矢理感情を押さえつけているせいだろう、酷く平淡になつた声音で、勇吾は告げる。昴としてはその答えにはなんとなく予想が付いていたが、目を細めて、努めて冷静に問う。

「正気か？　　相手は五十人近い上に、それなりの武闘派集団だぞ。」

いくらお前でも、一人でどうにか出来る連中じゃない」

「だから何だ？　　相手が強いからって、矛を収めるつてののか？　　はっ！　　俺は御免だぜ。あのクソ虫どもは何がどうあるうがボコる！

二度とこんなつまらねえ事ができねえくらい徹底的にな！」

勇吾のその叫びは、感情がそのまま漏れ出したものだった。勝ち負けなど知つたことが。渚に手を出されて黙っていられるほど、自分は人間が出来ていない。

それに、昴は嘆息したようだった。続けて呻くように、告げてくる。

「……………相変わらずどうしようもないな、お前の馬鹿さ加減は何かを諦めたような呟き。意味もなくこめかみに指を当てている。だが、勇吾はふん、と鼻を鳴らすと、堂々と宣言した。

「先刻承知だ、そんなもん」

その断言に、昴はこれみよがしに大きいため息を吐いて見せた。そして降参だ、とでも言うように肩を竦めて、

「……やれやれ、今更再認識させられたぜ。まったくんでもない奴の相棒ダチになっちまったらしいな、俺は。行ってこい。渚姉は俺が看てるから、思いっきり暴れてやれ。治療が終わったら俺も向かう」

苦笑して、そう答えたのだった。

第十二話：三年前・前編（後書き）

受験が終わったんで調子に乗ってテンション上げてた矢先、風邪を引きました。ううむ、なんとゆーかへボだぞ私の体。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

かなり短めの過去編前編。今回は大して中身はありませんでしたが、後編はバトルになります。

またしてもラブもコメも無いかと思われませんが、過去編が終われば復活するでしょう。

ところで、前作の段階から残してた簡単なキャラ設定が出てきたので、一話につき一人ずつあとがきに載せていこうと思います。

第一弾は主人公から。

『緒方勇吾』

17歳。176センチ。67キロ。筋肉が付いてるのでやや重い。

遺伝の関係で両目が翠色の少年。

顔はそこそこ、勉強からつきし、体力だけは無駄にあると少年漫画の主人公的ステータス。

眼つきがすこぶる悪い。

微妙に不幸。

物心つく頃には両親が死んでたり、育ての親である祖父も小学二年生の時他界したりと家庭環境にはあまり恵まれていない。

そのせいか昔は荒れていたが、『師匠』にボコられてちょっぴり改心。以後はそこそこ善良に生きている。

また今作では一度も出てきていないが、家事全般が得意。これも家庭環境の関係で習得した技能。

黒が好きで、私服は黒い物しか持ってない。

設定自体はもっとありますが、多分この先使わないだろうし、使うとしたらここで書くネタバレになるので止めときます。

さて、いつも以上に長くなってしまったので、今回はここらで消えときまーす。

では、また次回のがきで。

第十三話：三年前・後編（前書き）

過去編の後編。

なんだかラブコメなのかどうかかなり怪しくなってきましたが、よろしければお付き合いを。

では、本編をどうぞ。

第十三話：三年前・後編

許容しがたい事。勇吾にとって、今の状況がまさにそれだった。喧嘩を売られる。それがどうにも、我慢ならない。

生まれついでにの性質。殴られたのなら殴り返さずにはいられないという衝動。

他人の事はどうでも良い。自分の知り得ない部分で誰かが苦しんでいたとしても、それは勇吾にどうにか出来る事ではないし、するつもりも無い。

無関係の人間にいちいち構ってやれるほどに、勇吾は善人ではなかった。

そんな能力も持ち合わせていない。自分の身の程は知っている。

だが、苦しんでいるのが『関係のある』人間であればどうか。自身の大事だと思つものが傷つけられたなら、どうするのか。

一方的に喧嘩を売られたのが、例えば家族や親友であれば、どうなのか。

許容しがたい。自分が殴られるより、自分が罵倒されるよりもずっと腹立たしい。

彼に出来る事。それは彼自身が一番よく知っている。さして器用でも善良でもない自分に出来る事など、ただ一つだと、彼は理解していた。

誰かを救つ事など出来はしない。人それぞれが抱える問題を解決してやれる能力はない。

だから、せめて『壊す』。それならば、自分にも出来る。いや、自分にはそれしかない。

『暴力』^{チカラ}以外に何も取り柄を持たない勇吾に出来るただ一つの事。

それは、大事な者に牙を向けるその全てを、『暴力』^{チカラ}を以って排する事のみ。

ならば　そうしよう。幼い頃から培ってきた唯一の武器　拳で、対する敵を壊そう。

徹底的で決定的に、致命的で刹那的に、剥き出しの暴力で　何もかもをぶち壊してしまおう。

（ああ、そうだ。それしかない。それだけだ。俺はただ、売られた喧嘩を買うだけ。

渚に売りつけられたつまらん喧嘩を買い取っただけだ。そして、買った以上は、きっちり代金を払わねえとな……！）

桜樹広場。餓王髑髏が集会場になっている、桜通りの唯一の公園。いつも通りに、彼らはいた。そして同じくいつも通りに、彼らがいるこの時間帯は、この周辺に人影はない。

……ただ一人、勇吾を除いては。

彼らは勇吾に気付かない。いつものように、広い公園の敷地内に無遠慮なほどの数で集まり、薄っぺらい会話を続けている。

その様子が人目で見渡せる場所　公園の入り口に立って、勇吾は凶悪な眼光を湛えたまま、一歩踏み出した。

* * * * *

ゆっくりとした歩み。何の気負いもなく、欠片の恐怖もなく、ただ歩いている。

目の前には、五十に届くかというほどの数の敵。敵以外はこの場にいない。

視界に映るその全ては、悉くが敵、敵、敵、敵

「……お？ 何だ、このガキ」

『敵』の一人が、こちらの存在に気づいた。当然だろう、別に隠れていたわけではないのだから。

連鎖的に、他の者達も勇吾に気づいて、視線が勇吾に集中する。しかし、大して興味が沸かなかつたらしく、すぐに視線は四散した。が、最初にこちらに気づいた男だけは、勇吾に視線を向けたままだった。もしかしたら、今の勇吾が内包している凶悪な気配に気が付いたのかもしれない。

軽薄な表情を少しばかり引き締めて、勇吾に近づいてくる。

「おいおいおい、こんなところで何してんだ、小僧。ここは teme emi たいな中学生ガキが来るとこじゃ ツ ああああああ!？」
途端に、辺りに悲鳴が響き渡った。

勇吾が男の鎖骨に向けて、警告も宣告も無いまま拳を打ち込んだからだ。悲鳴で隠れてはいたが、注意して耳を傾けていれば骨が砕ける音が聞こえたことだろう。

鎖骨というのはかなり脆いから、大の男でも女性に力一杯殴られた程度で簡単に折れてしまう。

流石に今の悲鳴を聞き流すことは出来なかったのか、周囲の男たちが騒ぎ出している。

しかし勇吾はそれにも構わず、過剰なまでにマイペースで言葉を紡ぐ。

「この頭はどいつだ？ 個人的に用がある。出来ればタイマンで話したいんだが」

手近にいた男の一人に、そう尋ねる。報復の対象は一人だから、可能であれば一騎打ちで戦いたいのだが。

恐らく無駄だろうと判ってはいたが。

その見立ては間違っていないが、問われた男は激昂したように勇吾の胸倉を掴み上げ、怒鳴りつけてくる。

「ああ！？ テメエ何様のつもりだ、ごらあ！？ いきなり出てきてリーダーに会わせろなんて、ふざけたことぬかしてんじゃねえ！」

勇吾は胸倉を掴まれたまま、平然とその言葉を聞いていた。

これはあくまで通過儀礼。

別にこの暴走族の頭に対して個人的に報復するだけなら、一人のところを狙って奇襲すれば事足りる。卑怯かもしれないが、そもそも女性なまこに対して手を上げた方が卑劣ではある。手間や実現性を考えても、その方が簡単だ。

だが、勇吾にとっては、これは報復行動とはいえ喧嘩だ。どうせなら正面から討ち入りたかった。他人の目など知ったことではないが、これに関しては勇吾自身の矜持が否定した。

つまらない意地ではある。

そして現状。五十対一の喧嘩。戦力差は歴然だ。どうなったところで誰も文句など言わないだろう。そして、勇吾自身も文句はない。

これだ。この状況が欲しかった。自身が許容できる戦闘。

これなら、何も気にしないで渚を傷付けられた怒りを放出できる。それだけで良かった。

そう、自分はただ、唯一残った家族を殴って、あまつさえ泣かせやがったクソ野郎を、思いつきりぶん殴りたいだけなんだから！

勇吾はやはり静かに目を閉じ　そして唐突に暴発する！

「そうか、頭を出す気は無いか　ならば失せろつ！！！」

ドスツ、という鈍い音。勇吾が胸倉を掴まれたその体勢のまま、相手の鳩尾を打ち抜いた音だった。

打たれた方は悲鳴を上げる余裕すらなかったのか、肺から押し出されたような短い呼吸を吐き出しただけで、あっさりと昏倒する。ざわざわと、辺りが不明瞭な声で埋め尽くされる。

いきなり現れた中学生に二十歳も近いだろう仲間が打ち倒されるという突然すぎる展開に、怒ればいいのか驚けばいいのか判断し損ねたような、そんな雰囲気。明らかに見て取れる動揺。

勇吾はそれを鼻で笑った。これだけの人数がいながら、多少早熟な肉体を持つとはいえ中学生の域を超えていない自分の行動にこうも露骨に反応するとは。

勇吾はその瞬間確信する。この喧嘩……勝てる、と。何故かは判らない。

五十人もの敵を相手に喧嘩をした事など流石にない。普通に考えれば敗北どころか勝負にすらならないはずだ。

なのに　何故だか今、負ける気は一切しない。不思議な感覚だった。

その感覚に、勇吾は口の端を吊り上げて、晒った。

凶悪で鮮烈に、晒う、晒う、晒う。

翠の瞳に確信の光を湛えて、尚晒った。

そして ゆっくりとその口を開いた。

「 さあ、始めるか。徹底的にボコリ尽くして、決定的にシバき倒し、致命的に殴り飛ばして 刹那的に暴れてやるぜ！！！！！」

そうして、獣は解き放たれた。

* * * * *

何の工夫も技巧も無い、ただ硬く強いだけの拳打。目の前に群がっている敵の一人にそれを力の限り叩き付けて、少年は叫んだ。

「つらあああああ！！！」

喉が裂けんばかりの絶叫。同時に聞こえる敵のうめき声と地面に倒れる音。

周りからは怒号。

何だこの化け物は、早く誰か何とかしろ、お前がやれ、くそつたれが そんな言葉がひっきりなしに飛び交っている。

公園内は、半ば狂乱状態に陥っていた。

「くそつ！ 何うるたえてやがる、テメエら！ 相手はたった一人だぞ！？ とつとと取り押さえてぶつ殺せよ！！！」

餓王髑髏の幹部である男が、周囲の者に怒鳴り散らした。

それは、有り得ないはずの光景だった。

たった一人の中学生が、五十人というもはや数だけで暴力と呼べる人数の男たちを相手に、もう十分近く奮戦を続けているのだ。

その上、十人ほどは既にその中学生によって叩き伏せられている。すべて一撃で沈められていた。

ドサ、と軽い音を立てて、また一人倒される。顔面を上段蹴りで痛打された結果だ。

強い。恐ろしく強い。

何しろ喧嘩馴れし過ぎている。これだけの数を相手にして少しも臆した様子は無く、むしろ昂ぶたかってすらいる。

一斉に掛かって取り押さえようにも、既にその中学生の一撃が持つ威力を知ってしまったっている男たちは安易には近づけず、結果攻めあぐねている間に一人、また一人と打ち倒されていく。

まるで化け物だ。常軌を逸している。

その中学生とて無傷ではない。何度か取り押さえられ、かなりの回数を殴打されているが、そのたびに押さえ込んでいる数人を引き千切るように投げて捨て、止めとばかりに踏みつけて沈黙させる。

あまりにも愚直な、泥臭い戦い方。

例えるなら、戦車のような戦い方だ。自身に打ち込まれる攻撃は急所に当たるもの以外はあえて受け、カウンターで打ち倒す。そんな単純で、しかし効果的な戦法スタイル

その中学生の一撃は、一度放たれれば、確実に一人を撃沈した。砲弾のような拳打の威力に、装甲染みた頑丈さ。まさに戦車。

これが本当に中学生なのか。

何かの間違いで人間として生まれてしまった、悪鬼羅刹あくしやくの類ではないのか。

早くぶち殺せ、とヒステリックに叫びながら、その男はそんな事を考えた。

と その瞬間、爆発音のようなものが、辺りに響いた。否。ようなもの、ではなく、爆発音そのものだった。

そして 男は我が目を疑った。

誰の物かまでは判らないが、餓王^{チーム}餓體の名前が書かれたバイクが一台、燃え上がっている。強い衝撃でガソリタンクが破損したところに、火花が散って引火したのだろう。いや、だるうも何も、男はその瞬間を見ていた。

あの中学生は、そのバイクを、あるうことか持ち上げて地面へと叩きつけたのだ。

燃えるバイクを見た途端、メンバーの顔色が変わった。

餓王餓體の面々は酷く慌てて、そのバイクから遠ざかっている。中には運悪く服に引火して血相を変えてのた打ち回り、周りの者に消化してもらっている者もいた。

それを見たせいだろうか。数で圧倒しているという事実すら忘れて逃亡を始めるものが出始めた。勝ち負け以前に、このイカレた少年の相手をするのが怖くなったのだろう。

間違いない、あの中学生は悪魔だ。^{ガキ}人間じゃねえ。^{ホモサピエンス}

そう考えた瞬間、もう辺りは暗くなっていてその中で、街灯の光を反射して危険な輝きを放つ二つの瞳が、男を捉えた。

そして、一直線に男の下へと疾駆してくる !

「ひっ
」

訳も判らないまま恐怖に引きつった悲鳴を漏らして、男は後退する。いつそ自分も逃げ出そうか。そんな考えが頭を過ぎった。

だが、それを実行に移す前に、圧倒的な速度で詰め寄ってきた中学生は、その無骨で原始的な暴力を、男の顔面へと打ち込んだ。それっきり、男の意識はぷつりと途切れ、数時間後、全てが終わるまでそのままだった。

* * * * *

「雑魚が邪魔をするなあああ！」
遠巻きに指示だけをしていた幹部らしき男を殴り倒して、勇吾は吐き捨てるように叫んだ。

完全に無謀だと思われたこの喧嘩だが、とある偶然が勇吾を助け、戦況は意外と拮抗していた。
暴走族だけあって人数と同じくらいバイクの停めであるこの公園内では、正直五十人という人数は動き辛いにも程があった。一度に飛び掛かれる人数が制限されてしまうのだ。

とうに理性など高揚で吹き飛んでいた勇吾はそれに考えが及ばなかったのだが、膨大な喧嘩の経験から反射的に『ここでは相手が動きにくい』という感覚を引き出し、結果それなりに上手く立ち回っていた。

正直一度に二十人も三十人も飛び掛ってきたら、流石にその質量だけで押しつぶされてしまう。だが、ことこの状況ではそれが無い。相手にしてみれば、辺りが暗いせいもあるが、闇雲に殴りつけると同士討ちになってしまうが、勇吾にとっては回りが全て敵なのでその心配はない。

一度に二、三人でしか掛かってこれない素人同然のチンピラを順番に殴りつけるだけだ。

しかしそれでも、人数のアドバンテージはあまりにも大きい。確かに一瞬で押し切られるような状況にはならないが、疲労とダメージは嵩かさんでいく。

そのままでは、間違いなくその蓄積によって潰れていただろう。

だが、そうはならなかった。

纏わり付くように周りを囲っていた男たち目掛けて、手近なバイクを投げたところ、それが何故か爆発した。勇吾は知る由も無いが、そのバイクは持ち主の乱暴な扱いのせいで元々外装がところどころ破損していたのだ。

勇吾はとっさに飛びのいたお陰で何とか炎から逃げたが、男たちの中には炎に巻かれてのた打ち回る者もいた。

まあ、自業自得でもあるので無視したが。

そしてそれを見た者は、どうも臆病風に吹かれたらしく、あわを喰って逃げていった。

（ 邪魔なんだよこいつらはツ！ くそつたれが、燃えたバイク程度にビビるくらいなら、最初からこんなところで調子に乗ってんじやねえ　！！！！）

勇吾は視線を巡らせて、状況を確認する。理性など殆んど焼ききれていたが、敵の人数を数えるくらいには残っている。

残敵は、十数人にまで減っていた。

これまでに倒したのが覚えている限りでは十五人前後。反射的にカウンターを入れて潰した者もいた筈だから、概ね二十人といったところか。

となると、逃げたのは十人近くということだろう。

近隣最大の不良グループと言われている割に、団結力は少ない

らしい。

集団での喧嘩に慣れてもいなければ、即物的な恐怖に打ち勝とうとする意思もない。

よほど頭リッダーに人望が無いのだろうか。

と、ふと気づくと、男たちが動きを止めていた。

一際大柄な男を中心に、十四人ほどが幽鬼でも見つけたような顔でこちらを見ている。

あの大柄な男が、恐らくここの頭　つまりは渚を泣かせたクソ野郎なのだろう。

それを認識すると、勇吾の内側から臨海寸前まで怒気が迸った。

「さあ、ようやくご対面だなクソ野郎。痛覚放棄したくなるまで殴ってやつから覚悟しろよ」

勇吾は口の中に溜まっていた血の混じった唾を吐き捨てて、中央の男を見据えた。

周りの取り巻きたちは、緊張したような面持ちで状況を窺っている。

（ふん、まだ随分と邪魔なのが残ってやがるな。俺の体がぶっ壊れるのと、奴らが一人残らず地面に血反吐ぶちまけんのと、どっちが早いか）

正直なところ、殴られ過ぎて体の動きがかなり鈍くなっていたのだが、一応動きはするから、恐らく骨や内蔵に大きな被害は無いだろうと無視していた。

まあ、今の勇吾なら内蔵が破損して吐血しながらでも喧嘩を続けるかもしれないが。

ともあれ、勇吾に睨まれた男は表情を引き攣らせて、呻くように告げた。

「テメエ……なんなんだよ！　いきなり襲ってきやがって、何のつ

もりだ!？」

「ああ？ 何のつもりもクソもあるか、ボケ。ウチの姉貴がテメエに世話んなったって聞いたから、利子つきで礼に来ただけだ。当然受け取り拒否は認めねえ」

「あ、姉だと　ああ！　そうか、てめえあのキャバ嬢の……!」
「そうだ、渚の弟だよ。理解したか？　理解したんなら　心置きなく、散れ」

「ふ、ふざけんなっ!!　ちつとばかり腕が立つからって調子に乗りやがって、今ここに残ってんのは俺の腹心だ。全員格闘技を習ってる、ここらじゃちよいと名の知れた連中なんだぞ!　逃げやがった腰抜けどもとは違うんだよっ!」

引きつった表情から一転、己の優位を確信した視線で、男が勇吾を見る。

だが、勇吾はその視線を、男が自身有り気に語った言葉ごと一蹴する。

「それがどうかしたのか？　俺がテメエを絶殺する寸前までぶん殴るのに、それがなんの問題になるよ？」

もはや勇吾の頭には、この男を殴る、という事しか残っていないかった。

だから、取り巻き連中が邪魔をしようが関係ない。

無理でも殴る。絶対殴る。何がどうあるうが完膚なきまでにボコリ尽くす。

そんな言葉が、脳裏を完全に支配している。凶悪な事この上なかった。

そんな勇吾に、男はもう語る言葉も無いのか、啞然としたような表情を作り、そしてそれから

「イカレ野郎が……。お前ら、やれっ!」

取り巻きたちに、そう命じた。

それが、二度目の開戦の合図だった。

（まずいな、思ったより遅れちゃった。渚姉を誤魔化すのにあま
で手間取るとは）

夜の街を駆けながら、昴は胸中で呟いていた。

（いくら勇吾でも、餓王髑髏相手じゃどうしようもない。あいつの
喧嘩が一番近くで見ってきたから、あいつが化け物じみて強いのは知
ってるが……それでも、数の力は洒落にならない）

昴は今、飛び出した勇吾を見て大泣きしそうになった渚を宥め透か
し、どうにか勇吾の援護に向かっていた。

といっても、正直自分が行ったところで戦況は変わらないだろうと
思っていたのだが。

彼は勇吾ほどに直情的ではないし、五十人もの勢力を真っ向から敵
に回そうとは思わない。

否、思えない。勇吾同様、彼にも生来の性質がある。

それは、どんな状況でも冷静であること。

どれだけの激情に身を焼かれても、どこか冷たく状況を把握してい
る。そんな性^{さが}。

勇吾とは完全に逆ベクトルの性質だった。

正直、勇吾のように、単純に誰かの為に怒れた験しが無かった。

そして、それが出来ればどれほど良いだろうとも思っていた。

渚が泣いている。ただそれだけで、勝ち目などないはずの喧嘩に身
を投じる。

余計な打算など微塵も無く、ただ素直に感情を爆発させる事。

誰かの為に感情だけで突っ走る。ただ愚直なまでに真っ直ぐに。それが出来れば、どんなに

(ち　それこそ、余計な事だ。今は勇吾の無事が最優先。それが出来なきゃ、渚姉はまた泣いちゃう)

雑念の過ぎつた頭を強く振って、昴は足を速めた。

もうすぐ、桜樹広場に着く。恐らくは、集団リンチじみた一方的な喧嘩が巻き起こっているだろう。

最悪、警察に通報することも視野に入れなければならない。

そうすれば、間違いなく自分たちも警察の厄介になるだろうし、学校での立場もかなり面倒なことになるだろうが、それは仕方ない。

今は、何よりも勇吾の五体満足が優先される

そう思考を纏めて、昴は足を止めた。景觀造りのために植えられている木々の影に隠れているため中の様子は見えないが、間違いなくここが桜樹広場だ。

昴は深呼吸を一つすると、意を決して中へと踏み込んだ。

そして。

「……………」

飛び込んできた光景　燃え盛るバイクらしき物体と、倒れ伏す何十人も男たち。

そして、それらに囲まれた公園のど真ん中で、大柄な男を片手で持ち上げている勇吾の姿に、思わず昴は絶句した。

* * * * *

「これで、終わりか」

へし折らんばかりの力で首を握り、変則ネックハンギングツリーの
ような形で持ち上げていた男を、勇吾はゴミでも捨てるように地面
へと放り投げた。

まさしくゴミのように転がる男。しこたま殴られまくったのか、顔
は腫れているし衣服はボロボロだし何やら痙攣するみたいにピクピ
クと動いているが、とりあえず生きてはいる。

勇吾に残っていた最後の理性は、かろうじてだが男の命を繋いだら
しい。

取り巻きの連中も、『名の知れた』というわりには大したことは無
かった。

むしろ、格闘技のルールを咄嗟に思い出してしまっ分、こうした喧
嘩では脆いのだ。

そしてその結果は、この状況だ。

目的は果たした。渚を泣かせた男は目の前でボロクズのようになっ
ている。

怒りは全て拳で解消した。これで良い筈だ。すっきりした気分にな
って良い筈だ。

なのに

「空っぽ、だ」

勇吾は何も残らなかつた胸の裡を、端的に言葉にした。

そう、空っぽだ。思いつきり暴れたはずなのに、晴れやかな気分にな
る筈だったのに、怒りは全部吐き出したのに。

何も、無い。事を成した達成感も報復を終えた爽快感も、何も感じ
ない。

「やっぱり、そうだよなあ。どんだけ暴れても、いくら八つ当たり

しても、俺がこんなんじゃない、すつきりなんてこない……」

判っていた。今までだってそうだった。

自分出来る唯一の事。自分にとって無二の武器。

暴力で敵対する者を根こそぎ打ち壊す。それで得たものは何も無い。守れるものも、多分、無い。渚を守るなんて口だけで、いつも自分がやってきたのは後始末。

誰かを助ける、ということなら、昴がいくらでもやってのける。

今日だってそうだ。本当なら感情に任せて喧嘩なんてせず、渚の傍にいてやるべきだった。

冷静になって、自分がどうするべきなのか考えるべきだった。

昴はそれをした。状況を整理して、自身の採るべき最善の選択をする。

それが出来れば、どんなに良いか。それが出来れば、どれほど渚の為に生きられるか。

ただ一人きりの家族だ。勇吾と渚は、お互いがただ一人の頼るべき肉親だ。

だというのに、自分は今ここにいる。怒りの矛先を求めて、何より泣いてる渚を見たくなくて、逃げるようにこの男を殴りにきた。

ああ、どうしようもなく自分は

「くだらない、クソ野郎」

ポツリと呟いた言葉は、自身の空虚な心にだけ響いて霧散した。

「勇吾」

短い言葉に、振り返る。見慣れた金髪が、視界に映る。

「勝った、みたいだな。信じられんことに」

「ああ、弱かったよ、こいつら。弱くて、くだらなかった。俺と、同じくらいに」

「……………そうか」

昂は勇吾の様子から何かを感じたようだったが、追求は無かった。ただ、

「なら、帰るか。渚姉の所に」

「……………そう、だな」

短く意思疎通を済ませて、二人は無言のままその場を後にしたのだ。つた。

第十三話：三年前・後編（後書き）

昨日、自宅に置いてあるピアノで腰を痛打しました。

その上痛さでのたうちまわったところ、目の前の机に顎をぶつけてまたアウチ。

ぬう、何で楽器と家具にコンボなんぞ決められにやならんだ（あんたが気を抜いてるからです）

どうも、へっばこ物書きの龍之介です。

書き出しが変なのは毎度のことなのでスルーしちゃってください。

ラブどころかコメディも無い過去編、如何だったでしょう。わりとシリアスな上にちよっぴり勇吾と昴が鬱ってます。思春期の悩みです
ね。

私は書いてて楽しかったです（おい）

次回からは元のお気楽な感じに戻りますので、どうか見捨てずお付き合ってください。

さて、前回から始めたキャラ紹介。

今回は金髪男をご紹介します。

せりわすは
の
芹沢昴

十七歳。身長百七十四センチ、体重五十五キロ。

日米のハーフ。遺伝子の悪戯か、わりと日本人よりの顔立ちだが髪は金髪というアンバランスな奴。

異国の血が混じっていると、共通点から、勇吾と仲を深める。

成績優秀、容姿と運動神経も上々という、やたらハイスペックな勇吾の相棒。

絶対にラブコメの主人公にしちゃダメなタイプのミスター完璧。

勇吾同様家庭環境が悪く、そのせいか性格は歪んでいる。

だが、その歪みを隠せるくらいには感情を制御でき、頭も良い。

今のところ歪んだ昴を知っているのは勇吾のみ。

何故かこんなのみが残ってませんでした。頭では、エピソードつきの詳細なのがあるのに、どうしてか紙には残ってない。

さてさて、それでは、お気楽に戻った次回のあとがきでまたお会いしましょう。

第十四話：満身創痕とお約束（前書き）

気楽にやりすぎました。後半はもはやカオスと化していますが、見捨
てずお付き合いください。
では、本編をどうぞ。

第十四話：満身創痕とお約束

「 というわけで、まあ一応、餓王髑髏は消滅したわけなん
だが」

「……………」
喉から零れそうになった、『冗談でしょう？』という言葉は何とか
呑み込んで、楓は沈黙した。
というか、こんな話を聞かされては、聞き返すか黙るか以外に反応
のしようが無かった。

「まあ何だ。自分でも馬鹿らしい話だとは思うんだが……………」

取り繕うように言ってくる勇吾の声も、もはやまともには聞いてい
ない。

楓の頭の中は、今の話の事で一杯だった。

（桜通りの暴走族壊滅事件……………それって、短い間だったけど全国ネ
ツトのニュースになっていた奴じゃない……………）

中学時代、同じ県内で起こった事件として報道されていたそれを、
楓は微かにだが覚えていた。

確か 『巨大暴走族、一夜で謎の壊滅！ 負傷者多数。別の暴走
族との抗争か？』 そんな見出しだったと思う。身近で起こった
にしては規模の大きいその事件は、楓の中学でもかなり話題になっ
たものだった。

（ あの事件を起こしたのが、この人だっていうの？）

楓は疑わしい心持のまま、隣でぼーっと天井など見上げている勇吾
に視線を注いだ。

見えない。見た目のイメージから考えれば、とてもではないがそん
な大それた事をしてかした男には見えない。

どう鼻屑目に見ても『ちよっと捻くれてそうな、でも不良にはなり

きてない少年』でしかないのだ、この勇吾という男は。

だが

（冗談言うタイプではなさそうだし……見栄張っての大言壮語にしては、平然とすぎているような気がするわ……）

冷静に観察する。態度からすると、この少年は嘘を言っているわけではないのだろう。

それに、彼は語り続けている間、ずっと眉間に皺を寄せた苦々しい表情だった。まるで昔の自分を語るのに痛みを伴っているような、そんな表情。古い自分を責めているようにも見えた。

あんな顔で語られた言葉が冗談や法螺の類だとは、どうにも思えない。

しかし、それを認めれば今のトンデモ武勇伝も全面的に認める事に

「ええと……何だか、コメントに困るようなお話ね」

結局、楓はそんな中途半端な返答でお茶を濁した。それ以外に出来る事はなさそうだった。

それに、勇吾は肩を竦めて見せる。

「まあ、そうだろうな。俺自身、あの時の力をもう一度出せって言われても出来そうにないし、本当だって証拠も特に無い。普通に考えれば眉唾なんだろうな、こんな話」

どうでも良さそうに言っつて、勇吾は息を吐いた。喋り疲れたのだろう。億劫そうな仕草で立ち上がり、楓に向き直ってくる。

「さて……まだ体は言っつこと聞きやがらねえが、歩くくらいは出来そうだな。そろそろ、動こうぜ」

「ええ、そうね。でも、少し時間も経つたし、紫亜ちゃんも部屋に戻ってるかもしれないわ。一度、部屋を覗いていきましょう」

楓は頷いた。それから一つ提案をして、先に歩き出していた勇吾に続く。

彼は振り返らず、そうだな、とだけ答えてきた。

それを聞きながら、楓は一人呟く。

（さっきの話が本当だとしたら……紫亜ちゃん、あなたとんでもない男と付き合ってるわよ）

勇吾を知ろうとして近づいたのに、結局謎が深まったただけだった。

それどころか、強烈に興味をそられつつある。

（でも……そういう危険な男も、たまには良いかもね　　）
百戦錬磨の『寝取りの羽坂』が、そんな事を思ってしまうくらいには。

* * * * *

時間を少し遡り、場所も変わって神風の間。

「……で、なんだってあんな蒸し風呂に隠れてたんだ？」

昴はため息を吐きたい衝動を押し殺しつつ、そう訊ねた。

しかし、訊かれた本人はこちらと視線も合わせず俯いており、どうにも答えてくれそうな雰囲気ではない。

（そりゃまあ、あんな事があつた後じゃ仕方ないけどな）

肩を竦めながら、昴はどうしたもんかと思わず考え込んだ。

勇吾たちが紫亜を探しに出て行ってから、まだ五分と経っていない。

だからこの場に勇吾が現れて紫亜が再び逃げ出す　という最悪の事態だけは無さそうだが、それでもこの状況はあまり好ましくは無

かった。

神風の間、その中央辺りにぽつんと置いてある時代錯誤感すら漂わせたちゃぶ台を囲んで、昴、紫亜、紅葉の三人は座っていた。

あまりにも紫亜が挙動不審なので、少しばかり事情聴取　　といひかなんというか　　を行おうと思ひ立つた結果である。

ちなみに、琴子は『よっしゃー、三点倒立ー！』などと意味不明の雄叫びを上げながら、やはり意味不明に、ドツタンバツタンと広い部屋の中を元気良く暴れまわっている。テンションの上がりすぎた小学生みたいな奴だった。

まあ、琴子がこの話し合いに参加したところでまず間違いなく邪魔だろうから、他所で暴れてくれるだけマシである。

もっとも、今も十二分にやかましくて邪魔だったが。

ともあれ、ただ黙っていても精神的に不衛生だし、と適当に踏ん切りをつけて、昴は口を開いた。

「　まあ良い。話し難いなら、せめて目を俺に向けてくれ。」

質問だけするから。肯定か否定かはこつちで読み取る」
すると、紫亜は恐る恐る、といった風体で顔を上げた。

瞳は何かを怖がるようにひっきりなしに揺れている。だが、やがて昴に焦点を合わせたのか、ピタリとそれが止まった。

と、そこでこれまで黙っていた紅葉が口を挟んでくる。

「読み取るって……そんな事できるの？」

「ああ。多少隠そうとしても、目や仕草を見ていれば大体な。

家庭環境の影響だね。こういう他人の顔色を窺うような事ばかり上手くなる」

「いや、そんな簡単に……。勇吾といい、あんたといい、ベクトル

は違ってても人間離れしてるのは一緒ね」

「勇吾^{アレ}と一緒にされるほど人間やめた覚えはないがな」

「えー。うっそだー」

明らかに面白がって言う紅葉。こんな所にも話の邪魔をする者が居たとは。

昴は少し瞑目し、それから、

「……………琴子ー、紅葉がプロレスごっこをしたいそうさ。相手してやれー」

それを聞いて、琴子が『おっしゃーっ！ ボンバイエー！』とか言いながら紅葉に突撃していった。

いきなり紅葉を羽交い絞めにして、引きずっていく。

「あ、こら昴！ 人を勝手に生贄にするんじゃない」

ずるずると琴子に引きずられながら、紅葉が何か言っているが、昴は無視した。

その上、始まったプロレスごっここの結果、『こら馬鹿琴子っ！ あんだどこ触って じゃああああ！？』とか聞こえたが、昴はやっぱり華麗にスルー。

やれやれ、とばかりに肩を大仰に竦めて、それから静かに紫亜へ告げた。

「さて。それじゃ始めようか。 といつても、概ねの想像は着いてるんだが……………まあ、確認だな。まず、紫亜は今、勇吾と顔を合わせたくない。というかぶっっちゃけ恥ずかしすぎて逃げたい。これはどうだ？」

「ッ」

紫亜の瞳が面白いくらいに動揺して揺らいだ。非常に判りやすい。

「なるほど。その様子だと今すぐ逃走したい衝動があるらしいな。

理由はまあ、さっきの『愛の叫び』だろうけど」

「ッ!?!?」

これは、わざわざ仕草の微細な変化を見るまでも無かった。紫亜は人類の限界に挑戦とばかりに顔を真っ赤にしている。もちろん目線も泳いでいた。

昴はそれに、今度こそため息を吐く。

「ふう　そうだろうとは思ったが、これはまた深刻な初々しさだな……」

何のことは無い。紫亜はただ、照れているのだ。それが多少極端ではあるが、感情そのものはそれだけの事。さほど複雑では無いのだろう。

しかし、高校二年生というこの状況でここまで酷いとは思わなかった。

目の前で狼狽の限りを尽くす紫亜の様子に、昴はかける言葉を模索しようとして　諦めた。

（これだけ酷いと、周りから何だかんだ言ってもどうにもならないな。本人がその照れやら羞恥やらを乗り越えないと、前どころか後ろにも進まない。

つたく、ちゃんと告白して付き合ってたつてのに、未だにこんな状態なのかよ。

もうちょっと自覚的にベタベタくっ付いてても良さそうなものにな。

まあ、あの勇吾が相手じゃ、そうそう進展なんて無いんだろうけど)

所詮^{しよせん}勇吾だもんな

ふとそんな事を考える。あの男は昔からそうだ。

人との付き合いがひたすらに下手くそだ。距離を計るのが病的に下

手。

自分のように相手が男で、本音を思いつきりぶつけ合うような間柄なら問題ないのだろうが、どこか遠慮の必要な 紫亜のような彼女相手だと、酷く消極的になる。

(俺とまともに会話するようになったのも、散々殺し合いまがの喧嘩をしまくった後だったからな……。あれのお陰でお互い、細かい気配りなんかしないで付き合えたから、今の関係に至ったわけだし) 初めて会った頃の事をふと思い返して、昴は一人語散た。

元々、勇吾と昴の仲はどうしようもないほどに悪かったのだ。今現在の二人からは想像し難い事ではあるが。

まあ、その険悪な時代を経たからこそ、明け透けに信頼できるようになったとも言えるかもしれない。

それは二人以外には誰も知らないけれど。

その経験から、勇吾は本気で殴りあうくらいしないと上手く人付き合いが出来ないのだろうと、昴は見当を付けていた。

拳で語る、とまではいかなくとも、それに近い性質を持っているのだ。

『師匠』に会ってからは、多少改善されているようにも思えたが、それでも人付き合いが下手である事に変わりはない。自分から他人へ干渉する事が、極端に少ないからだ。

まあ、相手からずかずか踏み込んできて、相性が良ければそれなりに上手くやっていけるかもしれないが。

例えば、今日知り合ったばかりでも、勇吾と普通に会話している琴子や楓のように。

(けど 紫亜に琴子みたいな馬鹿をやれとか、羽坂みたいに『女』

である事を武器にしるとは言えないしな)

昴はこっそりと、琴子みたいな紫亜と楓みたいな紫亜を想像して、即座にそれを振り払った。

無理がありすぎる。そんな事になったら勇吾が発狂しかねない。

(……………まあ、あんまり外野で騒ぐ事もないか。この先こういう事はいくらかもあるだろうしな。俺が毎回仲介するのもあまり良い傾向じゃない)

昴は思考をそう纏めた。勇吾が絡む事には干渉し過ぎているな、と自戒する。

(……………あの時の負い目のせいかね？ もう、気にしないようにしていたつもりだったんだが)

苦笑して、目を紫亜に向ける。

「なあ、紫亜」

ぴくり、と。紫亜が反応した。昴は笑みを深めつつ、なるべく軽い口調を意識して語り掛けた。

「俺は人の心理は読めても、思考までは読めない。当たり前だけどな。

だから、紫亜が今、何を考えて何を悩んでいるのかはどうやったって理解できない。

多分、勇吾にだって伝わらないだろうさ。

自分で何とかするしかないんだ、結局は。

だから 自分で勇吾と話せ。出来るな？」

「……………うん」

その言葉が、彼女にどう伝わったのかは判らなかったが。

それでも彼女は、先ほどから初めて、明確に頷いてくれた。

それに、昴は一つ頷いてやる。

「そうか。なら、俺は今回の事にはノータッチでいくよ」

確認するように言う。紫亜ももう一度頷いた。

(よし。とりあえず、意志は折れてないらしいな。なら、多分大丈夫だろ)

頷いたつきり紫亜からの反応は無かったが、とりあえずそれで善しとして、昴は笑みを引っ込めた。

と　そこで、色気の欠片もない悲鳴　　というか怒声　　が、昴の耳朵を叩いた。

「うみやあああー！　こ、琴子！　そこは洒落にならにゃあああああ！？」

「……………忘れてた」

昴は呟きつつ立ち上がった。　そろそろ琴子を止めないと、紅葉がお嫁に行けなくなりそうだ。そういえばさつきから時折、悲鳴のようなものが上がっていたから、もうじき紅葉の忍耐も擦り切れるだろう。

じつと何かを考え込んでいる紫亜を一瞥だけして、昴は殆んど地獄絵図と化している琴子VS紅葉・時間無制限一本勝負の場へと踏み込む。

「す、昴っ！　早くっ！　早く助けなさいよー！」

少しばかり衣服の乱れた紅葉が、情けない調子で、しかし声を荒げて言ってくる。

その姿にほんのちよっぴりだけ同情しつつ　自分で種を蒔いたくせに　鷹揚に頷いて、琴子に近づいた。

「ほら、紅葉はもう降参だそうだから、その奇怪な寝技　寝技なのは何でコブラツイストなんて出来るんだか　を解け」

「へへん、やーだね！　それよか、すばるんも混ざろうぜい？　おんにゃの子と密着しつつ絡まるチャンスですよ？」

子供なんだかおっさんなんだか判断し辛い言葉のチョイスで、琴子が言ってくる。

それに紅葉は半べそで「やー！　これ以上関節折り曲げたくないー

！」と抵抗している。

昴は嘆息しつつ、適当に告げた。

「女の子、ねえ。どこにそんなリリカルなモンがいるんだ？

あ、もしかしてお前らか？ 駄目駄目。俺、洗濯板べったんこには興味無いんだわ」

……瞬間。ギシイ！ と空気が軋んだ。同時に、これまで散々暴れ回っていた二人が、揃って動きを止める。

それから異口同音に、二人が言った。

『 ぺったんこ？ 』

ぎらり、と。二人の目に光が宿る。その視線は一直線に昴を射抜いていた。

全身から、何やらオーラのようなものが迸っているようにも見えるのだが、あれは幻覚だろうか。

（おっと。これは、地雷踏んだ……かな？）

肩を竦めて、昴は呟く。あの視線は既知のものだ。勇吾がへまをやらかした時、紅葉は大抵ああいう目をする。『コロス視線ビーム』とでも言おうか。

（やれやれ。こういうのは、勇吾の役目だった筈なんだが）
もう一度彼が呟く。それと同時に。

紅葉と琴子は類稀シンバシなる共感によって突然タッグを組み、揃って昴に襲い掛かった。

紅葉&琴子VS昴。今こそゴングが鳴り響く。

カーン。

何故だかふらついている勇吾と、それを時折支えてやって

いる楓が絶賛乱闘中の神風の間へと帰ってきたのは、それから五分ほど経った後だった。

* * * * *

頭が痛い。それも割れるように。それが疲労性のものである事に、勇吾はもはや一片の疑いも持たなかった。

現状を整理しよう。まず、ここは神風の間だ。楓の助言に従って、戻ってきた。

すると、紫亜がいた。

何故か俯いて何か考え込んでいるが、話しかけたら返事はしてくれなかった。

どうしてさつき逃げたのかの説明はしてもらえなかったが、とりあえず大丈夫そうなので、勇吾としては万々歳である。そう、ここまでは良い。ここまでは。

現実逃避に近い心持ちで、勇吾はそこまで頭の中で考えを巡らせたと、そこで嫌々ながらも、頭痛の原因に注意を向ける

すると
「誰が『見渡す限りの平原女』よ!? 取り消しなさい、この馬鹿金髪!」

「……いや、そこまでは言っていないぞ? 俺はただ、ぺったんこだと」

「言うなあ! それ以上言いやがったらぶっ殺して差し上げるぜい!」

「琴子……? 何か言語に異常が見られるんだが大丈夫か」

といったやり取りを、何故か掴み合いをしながら行っている馬鹿三人が勇吾の視界に入った。

図式的には、飛び掛りながら何やら『胸』『薄い』『ペチャパイ』などの単語を多く用いて怒鳴っている紅葉と琴子に、それを飄々と

ついに、勇吾はぷつつんした。ありつただけの声量で叫び、びしい、と指を二人に突きつける。

「さつきから何だっただ、お前らは！ 人が大人しくしてりゃ訳の判らん事をべらべらと喋くりやがって！ 一体、何が言いたいんだお前らは！？」

両手を戦慄かせて、きつぱりと告げる。すると、二人はどちらからともなく口を開いた。

『つまり、胸が平坦で何が悪いのかと』

「知るかそんなもんっ！！」

絶叫しつつ、勇吾は頭を抱えた。そして いつの間にか安全圏へと逃げていた昴を目聡く見つけ、問いかける。

「おい、何でこんな力オスなことになっただ？ 胸がどうとか、俺にはさっぱり判らん。……まあ、概ねお前が原因なんだろうが」

「心外だな。別に誰が悪いって訳じゃないぞ？」

平然と、昴は返してきた。それから、ごく真面目な顔で告げる。

「たいした事じゃない。俺は正直に、二人は胸部の辺りがささやかだなと言っただけだ。な？ 誰も悪かないだろ？」

「きつぱりと悪いわ、馬鹿たれっ！！」

勇吾はつかつかと昴に歩み寄ると、金髪のその頭に拳を振り下ろした。が、簡単に避けられる。

「危ないじゃないか」

何故か笑みなど浮かべつつ、昴が言ってくる。勇吾はその笑みがふと引つ掛かったが、無視して怒鳴った。

「やかましいっ！ 結つつつつ局、全部お前が消し掛けたんだろーが！ 大体、事実だから怒るんだろ！？ 俺は女心の機微なんぞ殆んど判らんが、女は胸部辺りの肉付きを気にするってのは聞いた事がある」

と、そこまで捲くし立ててから、勇吾はふと気付いた。周りの空気が、何故だか物凄く冷たい。

何となく嫌な予感を覚えつつ、振り返る。

「…………げ」

思わず、勇吾は呻いた。

視線の先で 琴子と紅葉がこちらを見つめている。何故だか知らないが、拳を固めて。

(…………あれ？ おかしいよな？ 殴られるのは昴のはずだよな？ なのに何でお二人はこちらをガン見されているのでせう？)

一部に古文の仮名遣いを交えて、勇吾は疑問符を浮かべまくった。無論、そんな事では二人は止まらない。

「ちよつ、何で俺！？ 悪いのは完全に昴だろ？ 俺は何も言っていないぞ！」

慌てて弁解する

「…………言ったわよお、『事実だから怒るんだろ』って。聞いたわよねえ、琴子？」

「聞きやしたぜ、姉御。ゆうごんは確かに、あつしらが貧乳なのが『事実』だと認めやした…………！」

そこで、脳裏に思い浮かぶ言葉があった。

『事実だから怒るんだろ！？』

確かに、勇吾はそう言った。

(あ、あれか？ あの一言が悪かったのか？ え、それだけでこんなのデジャラスな事になってんの？)

じりじりとにじり寄ってくる二人に、勇吾は冷や汗を浮かべて後退した。

そのまま、声を上げる。

「お、落ち着け二人とも。 あ…………昴！ てめえ、さっき笑ってたの、これを読んでやがったな！？」

不意に気付いて、勇吾は怒鳴った。だが、昴はにやにやと笑うだけで何も言っていない。

あんにやる と呻いてはみるが、現状ではどうにもならない。

ふと、助けを求めて紫亜に目を向ける。が、彼女は完全に考え事に

没頭しており、この騒動にすら気付いていない。ある意味たくましい。

楓は 露骨に背を向けている。その肩が笑いを堪えるように震えているので、確信犯だろう。

「おい。紅葉さんに琴子さん？ あの、俺って今、ちょーっと体調が優れないというか、殴られたりするとまづいなーって感じなんですけど……… そうですか聞いてませんかちくしょう」

怖い笑みで目前まで迫っている紅葉たちを前に、勇吾はただ呻くしかない。

彼女らは、どこか危険な光を瞳に宿して、

『さあ、報いを………！』

そう告げた。

そんなこんなで。

この数秒後、神風の間から聞こえた悲鳴は、旅館全体に響き 以来、この部屋には『絶叫するお化け』が出ると噂されるようになるのだが、それはまあ、後日談である。

第十四話：満身創痕とお約束（後書き）

バイト先で自転車に悪戯されました。ある日いつもどーりに帰宅している時です。

なんとサドルの高さを調節するねじが全開になってました。これではサドルが前後左右、自在に動きます。まずいです。

しかし、それに気付いていない私は、カーブを曲がろうと体重を傾けます。

瞬間。腰が自転車運転中では有り得ないくらい回りました。こう、クイツとね。

そして当然こけました。このくそ寒い中道路の真ん中でガシャンゴロゴロ。

正月早々何やってんだ私。

というか悪戯が地味だなおい。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

友人に『お前は後書きの方が面白い気がする』と言われてへこんでます。

まあ、それはさておき。

シリアスな過去編を二本入れた反動か、今回の後半はえらい事になってます。

キャラのテンションがフライアウェイ。

特に紅葉はちょっとやりすぎたかも。

次回から、ようやく本筋が動きます。というか動かします。何故っ

て、海編が異様に長くなりすぎたから（無計画な）

ともあれ。とりあえず、前回に引き続きキャラ紹介をやります。
今回はメインヒロインその一。

姫神紫亜 17歳

紆余曲折の果てに勇吾と付き合うことになった少女。

大人しく物静かで、少々人見知り。

容姿端麗、成績優秀、周囲からの人気も上々とほぼパーフェクト。

ただ、あまり運動は得意ではない。

姉の紅葉との中は良く、高校生になっても殆んど行動を共にする。

勇吾と関わり出してからも概ねその状態は続いている。

普段おどおどしている分、怒らせると怖いと言う説も。

といった感じですが。実はこの紫亜、作者の中では結構動かし難くて
てこずってるキャラの一人。

なのでメインヒロインなのに目立ちにくい。

では、今回はこの辺で。次回は月末には投稿出来るかと思われます。

第十五話・事態は動く、影に日向に（前書き）

短いですが、一応必要な部分ですのでこのまま投稿では、本編をどうぞ。

第十五話：事態は動く、影に日向に

「広い風呂つてのは良いもんだな。特に、こういう露天風呂は風情もある。見渡せる景色も中々のものだし、文句の付け所がないな」

少し離れた位置から、声が聞こえる。どこか気楽で陽気な雰囲気を持つた声。

声の告げている事は、概ね勇吾も賛成ではある。確かにこの露天風呂は悪くない。

一望できる夜の海はやや薄暗くはあるが、それなりに美麗といえた。静寂が一定に保たれた空間というのは、それだけで価値がある。勇吾個人としてもそうした静かな眺めは嫌いではなく、むしろ多少時間割いてでも心象に刻んでおきたいほどだ。

叙情的な心情が欠けている傾向にある勇吾ですらそう思うのだから、この露天風呂は観光地の目玉として、十二分に及第点だろう。

そうした環境で穏やかに湯に浸かれるというのは、それだけで楽しみと言えるのではなからうか。

………もつともそれは、当人に余裕があればの話である。

周囲の状況を楽しむ余裕のない人物の筆頭、勇吾は風呂に来ていた折角、露天風呂などという風情溢れるオプシオンがあるのだから、しっかり楽しもう。そう主張する女性陣に押し切られ、さっきまで理不尽なリンチにあっていた勇吾も昂を伴い、痛む体を湯に浸けている。そんな状況だった。

そして勇吾自身の状況はと言えば、はっきり言って、疲労困憊である。

湯に浸かっているというよりは沈むの堪えているといった状態だし、熱めの湯は打撲だらけの体にえらく染みだ。思わず悲鳴でも上げそうになる。

と、そんなけちよんけちよんな勇吾に、不意に声が掛かる。

「おいおい、大丈夫かお前。そのまま溺れるなんてのは無しだからな」

ややバツの悪そうな表情でそう言われたが、勇吾はやはり返事をしなかった。

海を横目に眺めていたしかめっ面に折り畳んだタオルを乗せて、無視を決め込む。

「何でそこまでヘソを曲げてるんだ、お前。あのくらいの事、別に珍しくもないだろ？」

「……………」
再び投げ掛けられた言葉にも、勇吾は沈黙を返す。それに、先程からの声の主　昴は、こちらが機嫌を損ねたのだと思ったのか、

「判った。さっきのは謝るから、いい加減機嫌を直せ」

言うてから、片手を顔の前で縦にして、軽く会釈してくる。そこでようやく、勇吾は顔に乗せていたタオルを退けて、昴に視線を向けた。

「……………」別に、それは気にしてねえよ。認めたかないが…………お前の言う通り、俺が理不尽に痛い目に遭うのはいつもの事だからな。

悪いのは、機嫌じゃなくて気分だ」

うんざりした心地で、そう告げる。すると、昴は軽く片眉を上げて反応した。

「…………ん？　何だお前、体調でも崩したか？　それはまた何っか…………面妖な」

「てめえは俺を何だと思ってやがるんだ…………？」

暗に『お前が体をぶっ壊すなんてありえない』と言われて、勇吾は頬を引きつらせた。

しかし、昴はさしてそれは気にせず、言葉を重ねてくる。

「そうは言ってもな。お前、今まで真つ当に入院したことあったか？」

高熱出したとか、転んで怪我したとか。ないだろ？

いつも、喧嘩で刺されただけの師匠との訓練で殴られすぎただのと普通死んでるよーな理由で入院して、挙句の果てに常人の半分以下の期間で退院しやがって」

「それはまあ、そうだが……」

反論する余地が見つからず、勇吾はげんなりしながら認めた。確かに、勇吾はこれまで風邪すら引いた事がない。彼も人間だから多少は疲弊して弱るのだが、一晚寝れば概ね回復してしまうのが常だった。

それを一番近くで見ってきた昴だから、今のぐったりとした勇吾の様子は奇異なものに映るのだろう。

（まあ、俺自身ですら、自分がこんな簡単にへばるとは思ってたなかつたしな）

勇吾はため息を一つ零すと、頭上をふと見上げた。

丸い輪郭を持った月が、やや雲に邪魔されながら、こちらを見下ろしている。

勇吾はなんとなく、その満月に笑われているような錯覚を覚えて視線を移した。

視線の先には、壁がある。まあ、壁とは言ってもそう厚いものでもない、ただの木製の板切れだ。高さも然程なく、肩車でもすれば反対側が見えるだろう。

男湯であることは対極の、今は紫亜たちが入浴中であろう女湯が。

しばらくそうして意味もなく壁を見やっていると、昴が言ってきた。

「どうした、女湯が気になるのか？」

さては無性欲朴念仁

及び壊滅的堅物のお前にも、そつち方面の興味が湧いたか」

「黙れクソ金髪」

軽口を叩く昴に罵倒を返しながら、しかし勇吾は否定しなかった。方向性のずれはあっても、気になる、という一点のみは正しく勇吾の胸中に存在するものだったからだ。

「おい、アホ金髪」

「何だ、目つき最悪男」

呼びかけに口汚くではあるが応じてきた昴に、勇吾は壁を顎で示して見せ、

「何か、静か過ぎると思わないか？ 向こうには琴子がいるつのに、殆んど物音もしやがらねえ。あいつならこついう広い湯船を見たら、バタフライでもしそうなもんだつてのによ。妙じゃねえか？」
そう訊ねた。

それに、昴は軽く肩を竦めて見せ、

「確かにそうだが、妙だとは言つても実害は無いし、静かな分には良い傾向だと思つがね。なに、旅行中の風呂と就寝前は内緒話の聖域ソカだと言つし、女子限定の会議でもしてるんだろつ」

明らかに取つて付けた口上を述べる。

それを聞き、勇吾は塗れた前髪を雑に掻き上げる。

「内緒話、か。こんな板切れ挟んだ隣側で、何を喋繰ってるんだか

ふと興味を覚えた勇吾は、我知らずそう呟いていた。

* * * * *

「と、いうわけで。第三十五回チキチキ女だけの恋バナ選手権、開幕
幕！」

ペチペチバシャバシャ。

小声の開幕宣言と、手が濡れているため大して響かない拍手の音と、湯の中であるため拍手の数だけ発生する水飛沫みずしぶきの音とが数秒間だけ聞こえる。

そのいくつかの音の中で、紅葉は嘆息しつつ思考した。
文句や突込みどころなら、いくらでもある。

どの辺がチキチキなんだとか、第三十五回っていつのまに三十四回もやってたんだとか、そもそも何が『と、いうわけで』なのかとか、本当に色々ある。

しかしそれを口にはせず、紅葉は頭痛のしてきたこめかみの辺りを擦った。

(ホント、このテンションだけは、いつまで経っても慣れないわね)
先程の開幕宣言の声の主 無論、琴子だが 視線を向けて、胸中で呻く。

本当に、この琴子という少女には、破壊的なまでに落ち着きが欠けている。とにかく、何かしら騒いでいないとダメな性質たちなのだ。

女四人で固まってここへ到着したときも、広い湯船を見つけた途端に走り出し、『よっしゃー！ 見よ、この華麗なバタフライをつ！』などと言って飛び込もうとしていた。なんとなくとその行動は予測していたので、すぐさま羽交い絞めにして止めたが。

それから、他の客も来るから泳ぐな騒ぐなやたらめったら大声出すなときつく厳命し、ひとまず琴子も大人しくなったのだが それは一分にも満たなかった。

何やら楽しいな笑みを浮かべ、拳を天に突き出して琴子が言った一言が 先程の宣言というわけだ。

(……勇吾には悪いことしたかもね。これを初体験で一日中やらせてたわけだから。もしかして、浜辺で眩暈を起こしたのもそのせいかしら?)

現実逃避に近い形で、紅葉は勇吾に軽く詫びた。もともと、優先的

に詫びるべきであろう先程の貧乳云々に関するリンチに対しては、微塵の反省も無かった。

琴子のテンションに悪乗りしてやりすぎた気がしないでもなかったが、それはまあ良いだろう。

コンプレックス 劣等感を突付かれた恨みは深いのだ。

ともあれ、紅葉は琴子に向けてとりあえず問うてみた。

「……で、何だってそういう展開になったわけ？」

「だって泳いじゃ駄目だって言うしー」

口を尖らせて言うてくる琴子に、紅葉は至極面倒そうに答えてやる。

「お風呂で泳いじゃ駄目なのは当たり前でしょうが。だいたい、そんなに泳ぎたいなら昼間の内に海で泳いどけば良かったじゃない」

「いやいや、泳いだら駄目なところで、あえて泳ぐのが楽しいんじゃないかね？　なんとゆうーか、ロマンがあって」

わけの判らない理屈に、紅葉はため息を吐いた。それから、半眼で告げる。

「ないわよそんなもの。恋バナ、ねえ。……………どうせ、いつもの

ごとく気分でなんとなく言い出したんじゃないの？」

「そーともいう」

あっさりと認める琴子。どうも、単に退屈なだけらしい。

ただまあ、それで何故恋バナにいきなり話が飛ぶのかは謎のままだが。

「あつそ」

ぞんざいに応じておいて、紅葉は先程からあまり声を発していない他の二人　紫亜と楓に視線を向けた。二人は少し離れたところで並んで湯に浸かっている。今日は何かとあの組み合わせを見ている気がしたが、別に良いかとそれは思考から追い出した。

(…………この面子で、恋バナなんて出来る?)
ぼそりと呟く。

楓は恋多き女ではあるが少々ケースが特殊だし、琴子はそもそも恋

愛に興味があるのかどうかも疑わしい。紫亜は彼氏持ちであるからして、ただのノロケになるだろう。

紅葉自身に至っては手痛く失恋したてのホヤホヤである。

（はい、無理無理。こんなんでどーやって盛り上がるってのよ）
思考を一蹴する。半眼で琴子を見やりつつ、紅葉は言った。

「琴子、面子的に無益で無駄で無理だから諦めなさい」

えー！ それじゃ暇だ暇だ暇だー！ と喚く琴子を無視し、紅葉は体から力を抜いた。

何というか、風呂でくらのんべんだらりとしていたい。日中やらと騒がしかったのだから、尚更そうだ。

なおも何事かほざいている琴子はやはり放置。紅葉はリラックスモードに移行しようとして 不意に気づいた。

楓と紫亜が、何やら会話している。ただし小声で、だ。それがどうにも気にかかった。

それに、紫亜の表情がやや暗いのも気にかかる。部屋にいる時から何か考え事をしているようで沈んだ雰囲気だったが、今はそれに輪をかけて暗い。

（……内緒話、かな？ あの二人って、そんなに仲良かったっけ？
ていうか、あんまり楽しそうでもないわね）

気になって聞き耳を立てるが、ほとんど聞こえない。

と 楓が紫亜の耳元に顔を近づけた。何かを囁き掛けている。その瞬間。

さっと紫亜の顔色が変わった。驚愕の表情で楓を仰ぎ見やり、今までの以上に表情を暗くする……

「ちよっと、何の話？ 何だか穏やかじゃなさそうだけど」
そこで紅葉は、二人の会話に割って入った。

答えてきたのは、楓だった。

「何でもないわ。ただの世間話。 ね、紫亜ちゃん？」

「……え？ あ、うん」

「……ホントに？ 小声で世間話なんて、普通しないと思うけど」

追求しながら、艶っぽく余裕の笑みを浮かべる楓と、しどろもどろの紫亜とを見比べて、紅葉は眉を寄せる。
しかし、

「うん。本当に、何でもないから」

紫亜にそう言われては、紅葉に反論出来るはずもない。ただし、釘を刺すことだけは忘れなかった。

「そう？ ならいいけど。……一応言っとくけど、楓。あんまり勇吾と紫亜にちよっかい出さないでよ？」

「それは保障できないわ」

あつさり紅葉の言葉を受け流すと、楓は艶やかに微笑んで見せた。

その笑みが、紅葉はどうにも引つ掛かった。

紅葉の経験上、楓があのような笑みを浮かべたときは 概ね、ロクな事がないのだ。

裏のある笑みを浮かべる楓と、黙り込む紫亜。嫌な予感にコメカミを抑える紅葉に騒ぐ琴子。

あまりにも纏まりを欠いたまま、女性陣の入浴はしばらく続いた。

第十五話：事態は動く、影に日向に（後書き）

バイト疲れで何やら朦朧としながらキーボード叩いております。しかし、どーしてだか元気なときより執筆速度が上がっているこの不思議。

うーむ、なんつー天邪鬼な体だ。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

この次かそのまた次あたりの話で、恐らく山場的な部分に到達します。

なので今回は抑え気味かもしれません。

まあ、山場といっても喧嘩のシーンなんですが、ますますラブコメから遠ざかる予感。

それでは、また次回のあとがきで。

第十六話：与えるもの、与えられるもの「前編」(前書き)

三ヶ月以上間が空きました。更新を待っていて下さった方がもしいるようなら、この場で謝罪を。
すみませんです、はい。

えと、内容的には勇吾と楓メインのお話。前編、とあるように、今後更新するお話とセットで一話、ということになります。
では、本編をどうぞ。

第十六話：与えるもの、与えられるもの「前編」

息が切れる。たかが百メートル程度の距離しか走っていないというのに、既に体のあちこちに無理が生じ、その場にへたり込んで泥のように眠ることを要求している。

否 本当のところは、そうでもしなければ実際に肉体が『限界』を迎え、壊れてしまうということなのだろう。肉体の要求とはそれすなわ即ち、自らの命に危機が迫るとき、最も強くなるものなのだから。

「だと、しても……俺は、止まらない……！」

視界の悪い夜道を全力で駆けながら、勇吾は呟く。

そう、止まらない。どうしても、この足を止めるわけにはいかないのだ。

何故ならこの先に、自身の命などよりも絶対的に大切な存在がいるのだから。

* * * * *

異変に気付いたのは、男性陣女性陣ともに露天風呂から上がった、その三時間ほど後の事だった。

「ねえ、紫亜見なかった？」

昴が持つてきていたチェスに付き合っていた勇吾は、あと二手程で通算五敗目を喫しそうな盤上から目を離すと、声を掛けてきた紅葉

を仰ぎ見た。

「いや、見てないな……」

返事をしてから、対面の昴に視線をやる。無言で首を横に振ってきた。彼も見えていないのだろう。

「マジ？ もう、あの娘また姿が見えないのよ。……さつきと違って押入れにも居なかったし」

「……押入れ？」

「え？ ああ、何でもない何でもない」

後半のボソボソとした言葉の中に、気になる単語を見つけて勇吾が聞き返すが、紅葉は手をパタパタ振るだけだった。

まあ、どの道、この場合一番気にすべきはそこではない。勇吾は思考を切り替えると、

「で、また紫亜がいなかったのは？」

「ああ、うん。それがさ、一時間前くらいに出て行ったきり、あの娘が部屋に戻ってきてきてないのよ。お手洗いとか旅館の中の売店は見えたんだけど、姿は無かったし。携帯も通じないしね」

「……む」

そういえば、この一時間ほどは彼女の姿を見ていない。どうも話しかけ辛い雰囲気だったから、彼女と話はしていなかったのだ。

そして紅葉の話によると、どうやら、紫亜はまたそろどこかへ一人で行ってしまっただけらしい。

しかも、手洗いと売店にいないという事は、もしかしたら旅館の外にいるのかもしれない。

彼女は昼間から、どうも様子がおかしかった。昼間から風呂から上がったからはさらに浮かない顔で考え事をしていたようだったし、そういう時は干渉されるのが煩わしいものだ。

となると、考え事をしに、一人で涼みに出た可能性もある。この騒がしい面子の中に居ては思考など纏まるはずもないから、妥当といえば妥当だろう。そうすると、紫亜は望んで一人になっているのだろうか。

それなら、ある程度は一人の時間を作ってやるのも手として考えられるのだが、しかし

「……もう日付が変わりかかってるんだぞ？ 普通の女子高生が歩く時間じゃない。心配だな。よし、探しに行こう」

言つと、勇吾は立ち上がった。未だ体調は酷い状況だが、歩けないほどではない。

「そうね。そうしましょ」

賛成の意を告げる紅葉。それを確認すると、勇吾は他の面々に視線を向けた。

「お前らはどうする？ 別段急を要するわけじゃないだろうから、全員で行く必要はねえが……」

それに反応してきたのは、昴だった。彼はビショップの駒を手元で弄びながら、

「いや、この際なるべく大人数で行動したほうが良いだろう。お前も言ったが、もう時間も遅い。ただ、全員出払っちゃまうと、もし紫亜が戻ってきたときに具合が悪いから……そうだな、琴子」

「んにゃ？」

流石にこれまではしやぎすぎだったのか、眠そうに琴子が聞き返す。

「お前は留守番を頼む。紫亜が戻ってきたら、誰でも良いから携帯に連絡。良いな？」

「うへーい。りょーかーい」

昴は琴子に指示を出すと、楓の方にも確認を取るように言った。

「羽坂も、それで構わないか？」

「ええ」

「OK。じゃあ、いったん玄関まで移動しよう。それから、二手に分かれる」

「二手に？」

紅葉が訊く。昴は頷いた。

「ああ。全員で固まって動いたら効率が悪いし、かと言って四人がそれぞればらけるのもまずい。俺と勇吾は良いが、お前と羽坂は女

だからな。一人でうろついているであろう紫亜が心配で探すのに、それで女が単独行動してたら本末転倒だ」

昴はいつの間にか場を取り仕切ると、手の中のビシヨップを盤上に置いた。

勇吾はそれに、顔を顰めた……………どうやら後二手ではなく、一手で詰みだったらしい。

「チエツクメイト」

昴は言うてにやりと笑うと、勇吾たちを促して玄関へと向かった。

* * * * *

「で この組み合わせか……………」

勇吾は早足に旅館の周りを散策しながら、毒づくように呟いた。それから、やや後ろを付いて歩いているであろう気配を意識する。

「あら、私と一緒に不満？」

と、先程の呟きを聞き咎めたらしい楓が、何かを探るように言うてくる。勇吾は振り返る事はせず、歩調をやや緩めて、

「別に、不満とは言わないけどな。男二人、女二人の組み合わせには出来ないんだから、こうなるのは妥当といえば妥当だろう。紅葉と二人つきりつてのは、その、なんつーか気まずいからな」

玄関先まで移動してから、昴が指示した紫亜搜索の組み合わせは、勇吾と楓、昴と紅葉というものだった。勇吾の言葉通り、妥当な組み合わせではある。

紅葉と勇吾の関係を考えれば、やはり二人きりというのはよろしくない。となれば、男女の組にしようと思えばこうするしかないわけだ。

それは判る。判るのだが……………

(どうも、楓の相手をするのは疲れるんだよな。別段嫌いじゃねえ

タイプなんだが……)

今日一日の交流で、勇吾の楓に対する印象はその辺りで落ち着いていた。

実際、彼女に対して明確な嫌悪感があるわけではない。だが、彼女と話しているときにも落ち着かないのも事実だった。

元より対人関係は不得手な領分だが、彼女との距離感特に掴みにくい。少し気を緩めると、いつの間にかかなり近い位置まで踏み込んで来ている。

夕方には、つまらない過去の話まで流れに任せて語ってしまった。あんな話、他の誰にもした事はなかったというのに。

あの、相手に自覚させぬままに、短い時間でその内面深くにまで到達する、独特の話術。そして無意識に警戒心を緩めさせるような、特有の雰囲気。

あれは毒だ。意識と無意識の間に滑り込み、本音を引きずり出すための、魔性の毒

「何を考えてるの？」

「……ッ！ いや、何でもない」

唐突に思考へ割り込んできた声に、勇吾は大きく頭を振った。

馬鹿げている。今は行方を晦ました紫亜を探るのが最優先のはず。だというのに、何を余計な事を考えているのか。

(くそ。元々、自制は不安定になりがちだったが、今日は特に酷いな)

毒づいて、足を止める。組み分けを昴に指示された時、どこをどう捜し歩くのかも決まっていた。昴と紅葉は、念のために旅館の中を。勇吾と楓は旅館の周囲を。今勇吾たちは、丁度旅館の周りを一周ぐるりと回ってきたところだった。足を止めたのは、玄関先から見える明かりに気づいたからだ。

「駄目、か……。月が隠れててかなり暗いから、視界も悪い。そう遠くまでには行けないはずなんだが……」

確認するように言ってから、首だけで振り返り、勇吾は楓に視線を

向けた。

「そつちはどうだ？ 人影とか物音とか、気づいた事は？」

「いえ、特にはなかったわ」

この問いは予想していたのか、ほとんど間を置かずに、楓は答えてきた。

それに、そうか、とだけ返して、思考を再開する。

旅館の周囲にいないということは、考えられる可能性は二つ。旅館内にいるか、浜辺にまで移動してしまっているか。この視界の状態だと、外灯のある浜辺付近以外の場所は度外視しても構うまい。

となると、一度昴たちと合流してから、浜辺まで全員で移動するべきか

眉間に皺を寄せ、思案する。

と、不意に正面から声をかけられた。

「ねえ、勇吾君？」

「ん？」

彼女がいつ正面に回りこんだのか気づかなかったことに少し驚きつつ 楓は確か、さっきまで自分の背後にいたはずだ 聞き返す

勇吾。

「何でそんなに、必死なのかしら？」

「……何が言いたい」

質問の意図を測りかねて、訝しい心持で再び問い返す。少しばかり 険悪な声音にもなっていたが、楓は頓着しなかった。

「何が、と言われてもね 言葉通りよ。勇吾君、あなた少し変じやないかしら」

「変って、どこがだよ。自分の彼女がこんな夜中に突然いなくなつて、しかも今日はあまり話せてなかったんだ 心配して探しに出るのは当たり前だろ」

「そうね。その通り。あなたの行動そのものは、ごくごく当たり前 の事。可愛い可愛い彼女を心配するのは、当たり前 の事ね。でも

やっぱり変なのよ、今のあなたは。言ったでしょう？ 『何でそ

んなに必死なのか』って」

「別に、必死ってわけじゃ」

「嘘が下手ね。……気づいてるわよ。さっきから足元がふらついているの。あなた、本当はただ歩くだけでも辛いんじゃないのかしら」
「……………」

勇吾は言葉に詰まり、沈黙した。凶星だった。散策を始めて五分もしないうちから、既に体は悲鳴を上げていた。

ただ、昔から苦痛に耐える事には慣れていたから、我慢できていただけで。

「……………だったら、どうだつていうんだ？ 確かに、今の俺は少しばかり調子が悪い。多少は無理もしてるさ。だが、だからって」
「やっこのことで、ただそれだけを呻くように言う。が、それすら楓は、途中で遮ってしまふ。」

「『』 だからって、必死って言うほどじゃないだろう？』」
勇吾の言わんとしていた事を先読みして、告げてくる。今度こそ、勇吾は反論を完全に封じられた。

そしてこの時になって、勇吾はようやく気づいた。楓の瞳から、昼間のような悪戯っぽい輝きが失われている事に。その代わりに、どこか真剣な光が灯っている事に。

「必死なのよ、それは。とても健気で、痛々しいくらいにね。自分だつて辛いのに、その辛さは無視して、想い人を気遣う。本当に気遣われるべきはあなたなのに。」

心配されて、優しくされるのはあなたのはずなのに「
何を言われているのか、判らなかつた。否、言葉そのものは理解できるが、それが意味のある言葉として認識できない。意図が、まだ掴めない

「やっぱり、変よ。あなたは。いいえ、この場合、『あなた達』というべきかしら」

「あなた達……………？」

やはり意味も意図も理解しかねて、呻く。楓は息を一つ吐いて間を取ると、再び語りだした。

「ええ。勇吾君と紫亜ちゃん。二人の事よ。お昼頃から、どこか引つかかっていたの。何か　不釣合いだつて」

「……そりゃ、品性方向で優等生な紫亜と、チンピラもどきみたいな俺とじゃ、釣り合いが取れねえってのは、自覚してるが」

「違うわ。そういう意味の釣り合いではないの。それに、私の目には、むしろ紫亜ちゃんのほうが勇吾君に追いついていないように見えるわ」

「……すまん。さつきから、何一つとして判らない。結局、何が言いたいんだ？」

堪らずに、勇吾は問うた。本当に判らなかつた。彼女が何を伝えたいのかも、何故こんな真剣な視線で自分を見つめてきているのかも。そして、彼女に何か明確な意図が、伝えるべき意思があつたとして、何故このタイミングで語られたのかも。

楓は口を噤んだ。目を閉じ深呼吸して、気を落ち着かせるように胸に手を当てる。

それから、

「……そうね。余計な事を言い過ぎたわ。ごめんなさい。本当は、最初に話したことは蛇足だったの。私が言いたかつたのは　最後の話題だけ」

「最後の、つて事は……俺と紫亜じゃ不釣合いだつて話か？」

「ええ、そうよ。でも、さっきも言つたけれど、本人同士の客観的な価値がどうこうつて話じゃないの」

勇吾は口を挟まずに、ただ黙って先を促した。雰囲気からして、聞き流して良い類のものでもなさそうだからだ。楓はゆっくりと言葉を紡ぎ始める。

「世の中には、色んな男女の関係があるわ。彼氏彼女、夫婦、愛人関係に不倫　他にも沢山。愛とか恋とか、そういうもので結ばれ

ている男女。ただ、本人の価値^{うんぬん}云々で釣り合い不釣り合いを語るなら、まともな釣り合っている人たちの方が少ないんじゃないかしら。でも、私から見れば、どの関係にしたって、どこかでちゃんと天秤は調整されている。与えるものと、与えられるもの、という観点からなら

「与えるもの……？」

「例えば　そうね。想いでも、お金でも、プレゼントでも、地位や名誉、プライドでも良いわ。とにかくあらゆるものが、男女の間を行き来する。一方通行は、ありえない。少なくとも、破局していない関係なら……ね」

「つまり、俺と紫亜の関係では、その『与えるもの、与えられるもの』が偏ってるって言いたいのか？」

「ええ。そういう事よ。厳密には少し違うのだけれど。だって、あなた達のそれは、本来ありえないはずの一方通行なんだもの。勇吾君から、紫亜ちゃんへね」

「んなこた」

ねえよ、と言おうとして、勇吾は喉まで上がってきた語尾を飲み込んだ。楓の、何故だか悲しげな視線に縫いとめられて、口が開けなくなる。

「本当にそう？　私は今日一日しかあなた達を見ていないけれど、それでもこう思ったわ　勇吾くんは、ただ与え続けているだけだつて。」

紫亜ちゃんが傷つかないように気遣って、お姫様に傳^かく騎士^{うし}のように体を張って守って。二人の間には、それしかないんだって」

それは、違う　そう言葉にしたつもりだったが、実際には口がぱくぱくと動いただけだった。ふと気づけば、体が思うように動かせない。視線は楓の瞳に　どうしてか、少し潤んでいる瞳に縫いとめられていて、引き剥がせない。

これは

(誘導、されている……毒に……あの魔性に……！)

ここに来て、ようやく勇吾は悟った。何か、罠のようなものに、自分が陥っていることを。

それは別に、特別なものではない。無論、彼女が淫魔サキュバスの類だと言うことでもあるまい。

これは単なる、羽坂楓という少女の持つ、魅力。理性を押し倒し、倫理を陵辱し、道徳を踏み越えて男の本能に。原初の『雄』たる部分に働きかける、『雌』の力。

「でも　私は違う。私なら、注がれた想いの分だけ、何かをいいえ、何もかもをあなたにあげられるわ……この手も、顔も、胸も、腰も、髪の本一本までも」

震えるような　しかしはっきりと聞き取れる声で、楓は言葉を続けている。

その表情は熱病に冒されてぼんやりとしているようにも見えたし、恍惚に打ち震えているようでもあった。

第十六話：与えるもの、与えられるもの「前編」（後書き）

激烈更新遅延。書こう書こうと思いつつ先延ばしになり、そのまま新生活に突入。ケチヨンケチヨンに疲れまくって結局今まで放置……

前書きにも書きましたが、こんなへぼ小説でも更新を待って欲しかった方、もしいるのなら謝らねばなりません。申し訳ありませんでした。

次話は多分、そんなに間を空けずに更新できるかと思えます。

第十六話・与えるもの、与えられるもの「中編」(前書き)

すいません。また更新が遅れました。

今回は前回の楓の行動に関する補足と次に向けての足がかり、といったところです。

では、本編をどうぞ。

第十六話：与えるもの、与えられるもの「中編」

「でも 私は違う。私なら、注がれた想いの分だけ、何かをいいえ、何もかもをあなたにあげられるわ……この手も、顔も、胸も、腰も、髪の毛の一本までも」

そんな情熱的と呼ぶことすら憚られる台詞を、楓はぼんやりとした思考の中で告げていた。

それに、酷く熱い。頭が、体が、心が、『羽坂楓』を構成する全てが、沸騰するような熱に包まれている。その熱は、楓の中で暴れ廻り、恍惚と衝動を誘発してくる。

(欲しい……)

楓は心の中で、そう呟いた。理性の排された思考の中で、ただそれだけが頭を巡る。

(彼が 欲しい)

偽らざる感情の発露。全身を駆け巡る熱。人はそれをこう呼ぶ。

恋、と。

* * * * *

元々楓には、先程のような台詞を言うつもりなどなかった。ただ、少しばかり勇吾へのアプローチを露骨にしてやろうと思っただけだ。

勇吾は確かに、今まで楓が見てきた男たちとは違うタイプで、面白い男だとは思っていた。

もう少し深く知りたいと、そのくらいの事は考えていたし、風呂場では紫亜に、軽い『宣戦布告』をしたりもした。彼らの関係が釣り合ったものではないとも、実際思っではいたが……

だが、あんな『本気』の言葉を口にするつもりではなかったのだ。

つい、数分前までは。

恐らくどうしようもないくらいボロボロの体で、それでも紫亜のために行動する勇吾の背中を見るまでは、羽坂楓は冷静だった。

だが、見てしまった。

苦痛を堪え、歩みを止めようとしないうその姿を。

見てしまったら 耐えられなくなった。

どうして、と。何故そこまでするのだ、と。

自問はいくらでも湧いてきた。そして、その全てに返った自答はただひとつ。

『好きだから』

ただそれだけ。勇吾は紫亜にどうしようもなく惚れているから。それだけの事だと、楓は判断した。

それと同時に 欲しくなった。そんな単純で明快で、剥き出しの勇吾の想いが、どうしても欲しくなった。

人の想いを、綺麗だと思う。特に、元より単純な生き物である男の想いは。

それが他人ほかのおんなに向けられたものだとしても、否、だからこそ綺麗に見える。

だから欲しい。自分の物にしてみたくなる。

あれほど苛烈な勇吾の想い。それが全て自分に注がれば、どれほどの恍惚だろう。

想像するだけで震えてくる。

それは生来の楓の性質。強過ぎる所有欲。『寝取りの羽坂』と呼ばれる所以だった。

勇吾の全てが欲しい。だから手に入れる。そして、全てを貰う代わ

りに、自分の全てを差し出す。単純な考え方だ。それ故に、歯止めが利かない。

楓は今、そんな考えと情欲ねつに満たされていた。

楓は熱っぽい目で勇吾を見つめ続ける。彼を得るために。彼に与えるために。

何も与えないままただ横にいただけで、彼とは対等でない紫亜の位置を、奪い去るために。

勇吾は動かない。楓に見つめられたまま、視線も動かさない。

そうして、五分は見詰め合っただろうか。今までの男なら、こうして視線を合わせているだけで手に入ったのだが、やはり彼には通じないのか。

ついに楓は焦れて、一步踏み出した。

このまま口付けをして、彼を得てしまおうと。

「勇吾君……私は、あなたが欲しい　！」

* * * * *

「ちっ　　！！」

楓が近づいてくるにも拘かかわらず、動かない四肢に苛立ちを感じて、勇吾は強く舌打ちをした。

（くそつたれが、何を発情しかかってやがる……！！）
胸中で自身を罵る。間違いなく、勇吾は楓の『魅力』に囚こわわれていた。

それほどに、今の楓は魅力的だった。整った顔立ちはもちろん、扇情的な体つき。

その上、プラスアルファが強力に過ぎる。

潤んだ瞳、上気して赤みを帯びた頬、熱い吐息、そしてさっきの言葉。

これほど情熱的に求められては、如何に朴念仁の勇吾とて無反応とはいかない。

勇吾が動けないのは、『女』としての楓を『男』としての自身が求めようとしているのに対して、自制心で拮抗しているからだだった。

下手に気を緩めれば、薄皮一枚で保っている自制心など一秒もかからずに崩壊する。

そうなれば、この場で楓を押し倒しかねない。

それだけは避けなければならなかった。

そんな葛藤を余所に、楓は悠然と、あるいは陶然と歩み寄ってくる。ついに互いの顔があと十数センチのところまで近づいた。

どんどん距離が縮まる。

十センチ。五センチ。三センチ

(くっ！)

勇吾は殆んど自棄のような心持ちで、唇を噛み切ろうと犬歯を下唇に突きたてた。痛みと血の味で、なんとか判断能力を取り戻せれば、と。

その瞬間だった。

「
けて！」

すぐ近くから、叫び声が聞こえた。

それに、楓の動きが止まる。勇吾の方も、第三者らしき者の介入でどうにか頭に上っていた血を引かせて、バックステップで楓と距離を取った。

「あ……」
残念そうな楓の声。だが、勇吾にはそれに答えてやる言葉がなかった。

だからというわけではないが、勇吾は視線を巡らせて今しがたの声の主を探す。

「今のは、多分悲鳴だ。よくは聞こえなかったが、恐らくは」

「助けて！」

「やっぱり助けを求めているのか！」

再び聞こえた声に、勇吾は振り返った。今ので、おおよその距離と方向は掴めた。声の主は、もうすぐ近くにいます。

「誰か 誰か助けて！」

勇吾の視線の先に、そう叫びながら走る人影が映った。

「行くぞ、楓。……さっきの事は後回しだ」

楓に顔は向けられないままそう告げると、勇吾はその人影に向かって駆け出した。

ある程度近づくと、人影の正体が自分たちとそう変わらない年齢の少女だと判別できた。

と、その少女が唐突に転んだ。勇吾は足を速めてすぐ近くまで駆け寄ると、少女の顔を覗き込む。

「大丈夫か？ えらく慌ててるようだが、誰かに追われているのか？ と、そこで、その少女に見覚えがある事に、勇吾は気がついた。

「って、あんたは」

「あ、昼間の人！」

転んだせいで砂のついた顔を上げたのは、勇吾が昼間、チンピラから助けた少女、麻衣だった。彼女は錯乱しかかっているのか、勇吾の胸倉に掴み掛かると、捲くし立ててくる。

「あの、助けてください！ 浜辺で怖い人たちに囲まれて、それで

「

「追われているのか？ わかった、なら俺がひとまず時間を稼いで…

…」

「違います！ 助けて欲しいのは私じゃなくて、その、友達なんです！」

それに、勇吾は昼間の事を思い出して、告げる。

「あの、昼間一緒にいた喧しい奴か？」

「そうじゃなくて！ さつき会ったばかりの、でも、友達で！」

「何だと？」

『さつき会ったばかり』。その言葉に、勇吾は酷く嫌な予感を覚えた。

（まさか！）

背筋に走る悪寒を堪えながら、勇吾は怒鳴った。

「その友達ってのは、あんたと同じ年くらいで、髪の毛の短い女の子か！？」

「は、はい！ 姫神さんっていう娘で……」

「……うち！！ くそつたれがつ！！！！！」

返ってきた最悪の展開を決定付ける言葉に、罵声を上げて、勇吾は走り出そうとした。
だが。

「待って！」

これまで黙っていた楓に手首を捕まれて、引き止められる。

「そんな体でどうするつもり！？ 歩くだけで精一杯なんでしょう？ 行っちゃ駄目よ！」

真っ直ぐにこちらを見据えて、叫んでくる。さきほどの熱っぽい視線ではないが、代わりに勇吾の体を心配する真剣さを湛えた瞳。

それに勇吾は、走り出そうと曲げていた膝を伸ばし、楓に正対した。本当は振り払ってでも走り出したいが、それをすると今度はしがみ付いてでも勇吾を止めようとするかもしれない。

なら、どうにかして説き伏せるか、隙を見て追撃させないように一気に距離を稼ぐしかない。

勇吾は深呼吸をひとつすると、

「……楓。頼む、行かせてくれ」

「駄目よ」

懇願にも、楓はにべもなく答えるのみ。楓は更に、こう続けた。

「……私も、紫亜ちゃんが心配じゃないわけではないわ。友達だもの。でも、それでも勇吾君を行かせる訳には行かない。これ以上、貴方は紫亜ちゃんのために傷つくべきじゃない。もう十分でしょう？ そんなに痛い思いをしてまで、紫亜ちゃんを守る必要があるの？」

「あるよ」

即答だった。勇吾にとって、これは考慮にも値しない事だ。目を見開く楓に向けて、勇吾は静かに続けた。

「だが、別に必要だからってわけじゃない。俺がそうしたいから、そうする。」

それだけなんだよ。

……さつき、楓は言ったよな。

『俺と紫亜は不釣り合いだ。俺が紫亜に一方的に「与えている」だけだ』って。

……あれにしたって、見当違いもいいとこさ。何かを与えるとか貰うとか、そんな面倒な事、いちいち気にしてないんだよ、俺は。そんな上等な人間でもない。

紫亜と一緒に居れば、世は兇事もなし、神は天に居まし、だ」

「………したいから、する？」

「ああ。だが、俺が求めているのはそれだけの事なのに、中々世の中上手くはいかなくてな。たまに邪魔が入るんだ。それは俺自身のヘマだったり、無粋なチンピラだったりする。俺はそれをどうにか取り払っただけなんだよ。自分のヘマは平謝りで許しを請うて、紫亜に手を出すチンピラは、唯一俺が他人に誇れるこの拳で排撃する」
言って、勇吾は空いている方の手で拳を作り、楓に見せた。

それから、にやりと笑って、

「だから、俺には紫亜を助けに行く理由がある。理屈じゃなくて、感情の方に。それに、今、彼氏が助けに行かなくて、いったい誰が彼女を助けてやれるんだ？」

「あ……」

その笑みに、楓は敗北を悟った。こんな不敵で、それでいて真つ直ぐな笑みを前にして、彼を止められる理屈など存在しない。

(でも……！)

「それでも、行かせない」

楓にも、理由がある。ほんの数分前に芽生えただけのものだが、確かに存在する感情が。

「もう、回りくどいことは言わないわ。私は、貴方が好き。だから行かせない。貴方が紫亜ちゃんを傷つけないように、私も貴方に傷ついて欲しくない……！」

一息に言ってから、楓は気がついた。今の言葉　これこそが、自分の本音だったことに。

勇吾と紫亜が不釣合いだとか、そんな事は、本当のところただの言い訳だった。

ただ、勇吾の傷つく様を見ていらなかった。あの時、過去の事を語ってくれたときのような、心の痛みを堪え続ける姿を見たくなかった。

綺麗だと思った彼の想いが、傷だらけになっていくのが嫌だった。何もかもが言い訳。この本音を、『寝取りの羽坂』が、初心な少女のように、真つ直ぐに人を好きになったということを認めたくなかっただけ。これまで何人も男を手玉に取ってきたという、つまりない矜持に拘っていただけだった。

やっと出た本音。先程のように、熱さに乱された情欲ではなく、それと自覚できる確かな想い。

だが、勇吾はそれに、頭を横に振る。

「そいつは……ありがたんだけどな。俺はそれを肯定してやれない。何がどうあるうと、俺のやる事はひとつなんだ」

呟くと、勇吾は握っていた拳をゆっくりと開き、軽く振りかぶった。

瞬間。

軽い衝撃が、楓の腹部に走った。

「あ、う……！」

思わず呻いて、蹲る。握っていた勇吾の手首も離れていく。呼吸が乱れ、口々に声も出せそうに無い。

それを一瞥して、勇吾がバツの悪そうな声で言う。

「悪い。だが、俺は行かなきゃならないんだ。横隔膜を軽く打っただけだから、数分でなんともなくなるはずだ。安静にして、回復したら宿に戻ってくれ。それと、あんた」

返事も出来ずにいる楓から視線を外した勇吾は、事態から完全に取り残されていた麻衣に話の水を向ける。

「彼女を頼む。それから、この携帯の履歴から芹沢昂って奴に連絡を取って、状況を説明してくれ。聡い奴だ、多少判り難い説明でもすぐに事情を把握してくれるだろう」

「わ、わかりました」

どもりながらも返事して、勇吾の放った携帯を受け取る麻衣。

それを確認してから、勇吾は振り返る。

そして、

「ありがとよ、楓。人からそこまで心配されるのは、正直初めてだ。嬉しかったよ」

最後に一言言い置いて、勇吾は駆け出した。

紫亜がいるはずの、浜辺に向かって。

後編に続く

第十六話：与えるもの、与えられるもの「中編」(後書き)

やっちまった……

またもや更新の遅れたへっぴょ物書き、龍之介です。
すいません、亀更新ですいません。

これからはなるべく早く更新できるようにします。専門学校が夏期
休暇に入ったので、多分次こそは大丈夫です。
なんとか見捨てずお付き合いをば。

では、次回のあとがきで。

第十六話・与えるもの、与えられるもの「後編」(前書き)

心理描写中心で、紫亜視点です。

第十六話：与えるもの、与えられるもの「後編」

理性は、往々にして感情に負ける。よほど訓練を積まない限り、あるいは相応の修羅場を潜り抜けていない限り、制御するどころか押し留めておく事すらできない。

そして、紫亜にはそのどちらもなかった。

ごく当たり前の人生を歩んできた彼女にとって、感情を御すほどの訓練など必要なかったし、修羅場と呼べる状況に遭遇した事もなかったからだ。

もつとも、本来それこそが常道なのだが。

だが紫亜は、今の状況において、常道では太刀打ちできないと感じていた。

時間は、勇吾たちが紫亜を探し始めた、ちょうどその頃にまで遡る。

目の前に広がるのは、海だった。昼間のキラキラとした光景とは似ても似つかない、暗黒とすら呼べる闇色の光景。街灯から漏れてくる光だけが僅かに闇を払うが、それも所詮、『僅か』でしかない。その光景は、まるで自分の心を映しているかのようだと、紫亜は思った。

自分の中でもややもやと漂うどうしようもない感情が、闇。そして無力なくせに抗う事を止めない、小さな理性が　光。

「ここは……暗い、な」

小さく、呟く。思い出されるのは露天風呂での、楓との会話。

『 紫亜ちゃん、少し良いかしら？』

『 え？ う、うん。良いけど』

『 私ね、勇吾君に本格的にアタックしようと思ってるの』

『 ……………え？』

『 彼、面白そうだし。今まで見てきた男のどのタイプにも当てはまらないから、興味があつて』

『 そ、そんなつ。だって、勇吾君は私の 』

『 そう、彼氏ね。でも、だったら尚更良いじゃない？ 二人は好き合っているんでしょう？ なら 横から私が入ろうとしても、隙間なんてないんじゃない？』

『 それは……………そうかもしれないけど……………』

『 なら、宣戦布告は成立ね』

ただそれだけの、短い会話。そして決定的だったのは、その直後の言葉だった。

楓は、紫亜の耳元でこう囁いた。

『 彼の横に立てるのは きっと、守られているだけのお姫様ではないわ』

シヨックだった。そう言われた瞬間、元々今日は混乱しがちだった頭の中が、グチャグチャに掻き乱された。

結果、誰ともまともに会える気がしなくて、思わずこんなところまで来てしまった。静かな場所で落ち着けば、少しはマシになるかもしれない。

そう思ってから、もう二時間近くもこの場所に座り込んでいる。

だが、どこまでも広がる黒一色に、余計に気持ちが落ち込んでいくだけだった。

否 本当のところ、楓の言葉だけが理由ではない。

ただ一言で気落ちするということは、そもそも紫亜の中に心当たりがあるからだ。

つまりは 凶星を指された故に、心が惑った。そういう事なのだろう。

(守られているだけのお姫様、か……)

それは、まさしく紫亜の抱えている劣等感コンプレックスそのものだった。

小さい頃から、優しい両親に守られて生きてきた。

両親が海外へと仕事のために移り住んでからは、姉の紅葉がずっと傍にいてくれた。

そして今は、その役目は勇吾のものだ。

いつも、どこでも、彼女は必ず誰かに守られていた。

本当は、自分だって勇吾を守ってやらなければならないのに。彼の傷を癒してやらなければならないのに。

紫亜は勇吾本人や昂に聞いた話で、勇吾の人生がどんなものであったかを知っている。

両親を顔も覚えていない頃に亡くし、育ての親の祖父にも先立たれ、瞳の色が周りと違うという理由でイジメの的になり続け、その全てに抗い続けてきた事を。

もう、十分だろう。これ以上痛い目に遭わなくても良いはずだ。

こんな自分を守って、この先ずっと傷を負い続ける必要がどこにある？

「私は……」

ふと、楓と勇吾が並び立つ映像が頭に浮かぶ。ズキリと、心が痛んだ。

それでも、思う。楓なら、あるいは勇吾と対等になれるのではないかと。

守られるだけの、与えられるだけの自分と違って、彼を守り、何かを与えられるのかもしれないと。

「私は、勇吾君に……相応しく、ない……」

途切れ途切れに、呟く。そう、自分は勇吾と共にあるに値しない。でも、それでも

「勇吾君と……一緒に居たいよ……!」

こぼれ出た言葉に、紫亜は泣きたくなった。

いっそ、このまま気が済むまで泣いてしまおうか。そう思った瞬間。

「あの……どうかされたんですか?」

唐突に、背後から声をかけられた。

* * * * *

声をかけてきたのは、紫亜と同じ年らしい少女で、葛城麻衣と名乗った。

「……へー、姫神紫亜さんっていうんですか。綺麗な名前ですね」
彼女は紫亜の隣に腰を下ろすと、そんな事を言ってきた。

紫亜は曖昧な口調でありがとう、と述べると、そのまま黙ってしまった。

なにしろ泣き出す寸前のところで声をかけられたから、恥ずかしくて何も言えない。

と、会話がそこでぶつ切りになる。十数秒ほど沈黙が続いた。

その間、麻衣は話題でも探していたのか、唐突にひとつ手を打った。

「あの、ひとつ良いですか?」

「……………うん」

問いかけに、小さく頷く。すると麻衣は、内緒話でもするように声を抑えると、

「どうして、泣きそうになってたんですか？」

そう、ずばりと切り込んできた。

「それは……………」

答えられずに、呟きだけが漏れる。すると麻衣は、慌てたように付け足してきた。

「あ、ええと。変な事訊いてすみません。辛いようなら、無理には聞きません。何せ初対面ですから。でも、何か人に 例えば、友達とかにですけど 明かせない事なら、言ってみて下さいよ」

「……………え？」

「ほら、親しければ親しいほど、話せない事ってあるじゃないですか。恥ずかしくなったりして。でも、その点私は初対面ですから、今回限りですし」

困惑する紫亜に、麻衣はそう続けた。実際、麻衣の言葉は理屈ではある。

この先会う事も無いと思っていれば、大抵の事は話してしまえるだろう。

「で、でも、そんなの迷惑じゃ……………」

「大丈夫です。私、お節介焼きですから」

どこまでも消極的な紫亜に、麻衣はにこりと笑ってそう言った。

「……………じゃあ、少しだけ……………」

紫亜はしばしの逡巡のあと、ポツリポツリと胸のうちを語り始めた。元々、ひとりで抱えているその悩みを重く感じていたのだろう、思いの外、言葉は滑らかに滑り出て行った。

それを、麻衣はしっかりと相槌を打ちながら聞いてくれる。

そうして、十分以上は言葉を紡いだらうか。ようやく、紫亜は全ての心情を吐露し切った。

すると、ほんの少しだけ、楽にはなった。根本的な解決にはならず

とも、鎮痛剤のような効果にはなつたらしい。

「……なるほど。それは泣きたくもなりませんね……」
全てを訊き終えて、麻衣はそう言った。そして考えを纏めるように目を瞑つたあと、ぱちりと目を開いて、続ける。

「つまり姫神さんは、彼氏さんが他の女の人に狙われてて、しかもその人が凄く綺麗で、手強そうで……自分よりその人の方が彼氏さんに相応しいって、そう思ってるんですよね？　そして、それでも彼氏さんとは一緒に居たいって」

「うん……」
他人に改めて言われて、紫亜ははつきりと自覚した。途端に、折角少し楽になった気分が、また重くなる。

「だったら」
と、いつのまにか麻衣は紫亜の目の前に移動し、顔を覗き込んでいた。しつかりと視線を絡めてから、彼女は事も無げに言ってきた。

「だったら、そうしたら良いじゃないですか」
「え？」

紫亜は思わず、間の抜けたような声を上げた。
だが、麻衣は構わずに、

「一緒に、居たら良いと思います。だって、そうしたいんでしょう？」

「でも、私は相応しくないから、だから……ッ！」

「かもしれません。でも」

麻衣は立ち上がり、紫亜に背を向けた。

それから、曇天の空を見上げて、

「でもそれは、『今はまだ』でしょうか？」

「……！！」

紫亜は呆然と、その言葉を聞いていた。

『今はまだ』

そう。今この時には、確かに勇吾に自分は相応しくない。けれど、

「この先頑張つて、その彼氏さんに相応しいような、ううん、今度は置いて行つちやうくらのの、『良い女』になれば、それで良いんじゃないかなつて、私は思いましたけど」
確定していない、未来ならば、どうなのか。

それは、第三者らしい、実に冷静で客観的で前向きな、しかも生産的な意見だった。
だが、ひとりで考え込んでいるだけでは、きっと思いつかなかったであろう理屈。

(そうだ……私、大事な事を忘れてた……)
それは、当たり前前の事。手を伸ばさなければ、掴める物などありはしない。宝くじだつて、買わなければ当たるも何も無い。
逃げようとしていたのだ。楓から、勇吾から、そして自身の感情から。

『女』として格上の楓に、負けるのが怖くて。勇吾を奪われるのが怖くて。

紫亜の自信の無さが、知らず知らずの内に逃げ道を探していたのだ。
(私は……一番やつちやいけな事をしようとしていた。自分から舞台を降りて、身を守るうとしていた……ッ！)

目まぐるしく、思考が回る。

勇吾と共に在ることを望むなら、そして彼をこれ以上傷つけないようにしたいなら、自分が強くなれば良い。それが道理だ。仮に彼が傷を負ったのなら、それは全て自分が癒す。
それも道理。そうしてようやく、対等だ。

紫亜の中で、何かが集おうとしていた。それは覚悟であり、決意であり、前に進もうとする意志。
それはまだ、欠片ピースでしかない。だが、いずれはひとつの一枚絵パズルを完成させるであろう可能性の塊だ。

「……………葛城さん」

「はい？」

紫亜は、これまでの弱弱いものとは違う、しっかりとした声音で麻衣の名を呼んだ。

今の紫亜に必要なものを、こんな短い時間で気づかせてくれた少女の名を。

「ありがとう。私、頑張ってみる。ダメな『今』を、大丈夫な『未来』にするために」

宣言する。自分に、麻衣に、そしてこの場にはいないが楓に。宣戦布告への返礼だった。

その表情は、どこか吹っ切れたような、そして何か『力』に満ちているようなものだった。

それに、元々そう深く考えず、思ったことを口にただけだった麻衣はやや面食らったような表情を浮かべたが、すぐになっこりとした笑みを浮かべて、

「うん。　　どういたしまして」

そう、告げた。

その、直後だった。
無粋な闖入者が、その場に踏み入ったのは。

「おっ！ 女見っけー」

「え、マジ？ うお、マジに居る。久しぶりにハッスルタイムか？」
紫亜の背後から、そんな声が唐突に上がった。

慌てて、振り返る。すると、地元の若者らしき集団が、こちらに近づいてくるのが見えた。

人数は 九人。

どいつもこいつも、前から歩いてきたら一般人なら思わず道を譲ってしまいそうな つまりは、明らかにロクな人種ではないだろう
外見の者ばかりだ。

「ひ、姫神さん。あの人たち、こっちに……」

「うん、来るみたい……」

小声でのやり取り。

紫亜はきゅつと唇を噛むと、どうするべきか考え始めた。

恐らく、彼らはこちらに接触してくるだろう。狙いがナンパなのは間違いない。いや、最悪の事態を考えれば他の可能性もある。

こんな時間帯にこの人数でぞろぞろとろついているような連中だ。
『最悪の事態』も十分に考えられる。

となれば、ここは早く逃げてしまったほうが良いのだが

(でも、もう時間が無い)

すでに、男たちはあと十数秒で接触する位置に居る。相手があの人
数で、しかも男女の体力差を考えれば、麻衣と二人で走って逃げて
もすぐに追いつかれるだろう。

ならば、

「葛城さん」

「は、はい」

流石に厳つい男の集団に怯えないほど肝は大きくないようで、麻衣の声はやや震えていた。

それには構わず、紫亜は小声で指示を出す。

「私があの人たちの気を引くから、旅館のほうへ逃げて」

「え！？ 気を引くからって、そんな」

「良いの。逃げ出して、すぐに人を呼んでくれれば私も助かる。だからお願い。行って」

「っ！ わかりました。すぐに誰か助けを呼んできます！」

「ありがとうございます」

言つと同時に、紫亜は男たちの方へ歩き出し、麻衣は旅館に向かって走り出した。

「んん？ あつれー？ なんか一人走ってっちゃいましたけど、ど

ーします、ヒデさん」

と、麻衣の姿を見咎めた男の一人が、そう言った。

言われたヒデさんとやはらは、億劫そうに肩を竦めると、

「ほっとけ。んな事より、見るよこの女 大した上玉じゃねえか」

「へへ、そつすね。いやあ、久しぶりつすね、こんな可愛い『獲物』は」

「だな。最近マジ溜まってっから、今日は派手にやつぞ」

と、男たちは口々に勝手なことを言う。

どうやら麻衣を追う事はないようだ。それにほっとする反面、予想していた『最悪の事態』はどうも大当たりのようだった。

『獲物』。この状況でその言葉が指す意味がわからないほど、紫亜は馬鹿ではなかった。

つまり この男たちは、ナンパなどという面倒な手順を踏まず、力づくで女をものにする文字通り『最悪』な連中らしい。

じくり、と、押さえ込んでいた恐怖が湧き上がってくる。

麻衣に冷静な指示を出せたのは、紫亜がこの状況において大きな恐

怖を感じていなかったからだ。何故なら　彼女は勇吾と付き合い始めてから今に至るまで、何度もこういうチンピラに遭遇しているからだ。勇吾にはトラブル吸引体質でもあるのか、街を一緒に歩くときよく絡まれた。故に、ただそこに居るだけでは恐怖の対象にならない程度に、彼女は慣れていた。

だが、実際に襲われるかもしれないとなると、話は違う。それに、今は勇吾が傍に居ない。守ってくれる存在が傍らに居ないだけで、ここまで心細いものだとは思わなかった。

(でも……負けられない)

ぞろぞろと周りを取り囲むように動き始めた男たちを見据えて、紫亜は自分を叱咤した。

怖い。どうしようもなく、怖い。だが、折れるわけにはいかない。

ついさつき、誓ったばかりなのだ。強くなると。逃げずに進むと。無謀だという事はわかっていいる。このままだと取り返しのつかないことになるかもしれないということも、理解している。しかし後には引けない。

ここで逃げたら、この先、きつとまた逃げ出してしまう。それでは駄目だ。

こんなに早く破ってしまうような誓いでは、意味が無いのだ。だから引けない。ここはそんな場面じゃない。そう。ここは戦う場面だ。恐怖に抗う場面だ。

(　助けが来るまで、ちゃんと立ってて見せる。この怖さを超えて)

静かに己の裡と戦いながら、紫亜はその小さな拳を握り締めた。

第十六話：与えるもの、与えられるもの「後編」(後書き)

思いの外紫亜の思考が書きにくかったためか、予想より時間がかかりました。若干難産な感じですかね。

次で一気に雰囲気が変わります。多分。

バトルというか喧嘩のシーンをどっぷり書きたいと思いますので、
請うご期待。

……なんだか、ラブコメと銘打つ自信がなくなってきました(汗)

第十七話：獣の牙（前書き）

勇吾視点と昴、紅葉サイドでお送りします。

バトルは次回に持ち越しになりました。

では、本編をどうぞ。

第十七話：獣の牙

月が、見え始めていた。分厚い雲が緩やかに動き、生まれた切れ目から柔らかな月光が零れてくる。

その月光に導かれるようにして、勇吾は海を目指し、走り続けた。

概算では、見当を付けている場所　昼間パラソルを立てていた辺り　までは、あと二分もかからないはずだ。

実際、勇吾の視界には、浜辺と思しき開けた地形が既に収まっている。

(……多分、紫亜がいるとすりゃ、あの辺りのはずだ。いくらなんでも、見覚えの欠片もないような所までは行かねえだろ。それに、あの麻衣とかいう娘だけ逃げてきた事を含めて考えると、紫亜は移動していない可能性が高い。囷にでもなったのか、それとも単に逃げる余裕がなかったのか……)

勇吾の脳裏を、いくつかの推論が駆け抜ける。勇吾は、普段そう頭の回る性質の人間ではないのだが、これまでに経験してきた荒事の多さ故に、こういう事態に関してだけは、即座に仮説を立てる事もできる。

(あの娘の走る速度から言って、俺に会うまでにかかった時間は十分程度。俺があそこに着くまでには、五分程度だ。合計十五分。紫亜にこれとって戦闘能力がない以上、これはかなり危険な数字って事になる。　くそつたれ、間に合うのか!?)

目的の場所が見えている分、勇吾の中では苛立ちがどんどん積もっていく。それに、勇吾は奥歯を砕けんばかりにかみ締めることで耐

え、既に悲鳴を上げ始めている全身に鞭打って、速度を更に上げた。見る間に、浜辺との距離が近づいていく。そして見当を付けていた辺りには、いくつかの人影があった。流石に暗くて見え辛い、あれは恐らく

（ 紫亜だ！ ）

勇吾は胸中で叫ぶと、拳を握りこんだ。麻衣の話からすると、恐らく戦闘は避けられない。故に備える。いつでも、この拳を打ち放てるように。

「 紫亜ッ！！ 」

勇吾は人影の群れに向かって叫んだ。彼女があの中に居るなら、返事があるはずだ。それに、周りの人間にもこちらの存在を認識させられる。これで少しは、状況を知れる筈だった。

祈るような心持ちで、勇吾は返事を待った。この際、悲鳴でも構わないから、とにかく彼女の無事を確認出来る反応が欲しかった。

だが。

「 ……勇吾、君……？ 」

声は、人影の群れの、中心から聞こえた。自然に、目がそちらに向く。

「 ……なに……？ 」

勇吾の喉から零れ出た声は、掠れていた。視線は、一点に固定されている。

勇吾の見つめる先に 紫亜が、いた。

…………… 三人がかりで地面に押し付けられ、何かを堪えるように引き結ばれた口の端には血を滲ませ 服の胸の部分が破られていて、そしてその瞳は、今にも零れ落ちそうな程、涙を含んで潤んでいた。

それは突然現れた勇吾に驚き、呆然としていた男たちのひとりのも
のだったが、既に勇吾には聞こえていない。それどころではなかつ
た。元より最悪と言っていていいほど劣悪なコンディションの上に、今
度は頭に割れるような痛み。
そして　この、声。

コロセ。ころせ。殺せ。

殺す、殺せ、殺して、殺す。

殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、殺、
殺、殺、殺。

さあ……こんな奴ら、殺してしまえ

！！！！！！

再び頭の中で響いた声。それには、冷たさだけでなく、殺伐とした
空気と、鋭さが宿っていた。
まるで、狩りを行おうとする獣のように。

瞬間。勇吾の中で、何かが音もなく弾けた。

勇吾の体が、静かに沈みこむ。構えだった。

それも、いつもの自然体に近い『見』の構えではなく、やや前傾姿
勢の　完全な戦闘体勢。

拳は握られておらず、鉤爪のように禍々しく曲げられていた。
そして、静かに口が開かれる。

「……………殺す」

「あ………？」

ぼそりと呟かれた勇吾の言葉に、男たちは一様に怪訝な表情を見せた。

そんな事に構うはずもなく、勇吾は殺意の咆哮を上げた。

「てめえら全員殺してやるッ！　一人も逃がさん　皆殺しだ………！！！！！」

そうして……狩りが、始まった。

* * * * *

「　　そうか、わかった」

昴は旅館の中で携帯電話を耳に当て、渋面を浮かべつつも平静を装って対応していた。

「すまないが、君は羽坂を　　そう、その女の子を見ててやってくれ。紫亜と勇吾に関してはこっちで対処するから。……ああ、頼むよ」

ピ、と電子音をたてて、通話が切れた。

「昴、今のは？」

と、傍らにいた紅葉から、疑問の声が上がる。昴は渋面のまましばしの間を置いて　　整理しなければ説明など出来はしない　　口を開いた。簡潔に、要点だけを告げる。

「どうやら、紫亜が暴漢に襲われてるらしい。それと、勇吾は紫亜を助けに行つたみたいだな。連絡をくれたのは、紫亜の事を勇吾に教えた人のようだったが……」

「え、紫亜が！？　何で！？」

「さあな。それに、今はそんな事はどうでもいいだろう？　早く行

かないとまずい」

紅葉からの反論はない。納得したのか混乱していて言葉が出ないのか。まあ、それは別にどちらでも構うまいと捨て置いて、昴は旅館の出口に向かって走り出した。紅葉にも、付いてくるように手で促す。

一分も経たずに、二人は旅館から出た。

と、そこで紅葉が、昴の後を追いなから言ってきた。

「でも、勇吾が行ったんならとりあえず大丈夫なんじゃないの？

暴漢の一人や二人、あいつなら」

「ああ、どうとでもするだろうな。……いつものあいつなら、軽くあしらえるだろうよ」

紅葉の言葉を遮り、昴は答えた。紅葉はそれに頷くと、続けてくる。「なら、紫亜の事は勇吾に任せて、警察に連絡入れるとか、そういう方向に動いたほうがいいんじゃないの？」

確かに、それはもっともな意見だった。勇吾の戦闘能力を考えれば、特別援護の必要はない。相手が数十人いたり、武器を持っていたりするなら話は別だが、電話で聞いた限りでは、そういうわけでもないようではあるし。

それに関しては、昴自身も大いに同意するところだ。だが、

「言っただろ、『いつもの勇吾なら』って。今日のあいつは、夕方の前あたりから様子がおかしかった。それに、さっき、自分で言っただけでやがったんだよ、体調が悪いつてな。精神的にもかなり参ったようだし、場合によってはかなりまずい事になる」

走りながら会話するのは中々に苦しいが、足を止めるわけにはいかない。昴は息が切れないように留意しつつ、紅葉に懸念を伝えた。

「それじゃ、紫亜どころか勇吾も危ないって事？ だったらもつと急がないとまずいじゃない！ ああもう、ほんつと世話がかか

るわね、あのバカップル!!」

やや自棄気味の叫びを背後に感じながら、昴は思わず苦笑した。

(……同感。勇吾のトラブル吸引体質は今に始まった事じゃないが、紫亜とセツトだと、それが倍どころか二乗されるんだからな)

もつとも、当人たちには自覚のない事だろうが。だからこそ、世話がかかるのだろう。

と、そこで昴は緩んだ頬を引き締めた。

紅葉が言ったように、急がないとまずい。下手をすると手遅れになりかねない。

ただし 昴が懸念しているのは、紅葉の言った事とは多少の違いがある。正しく伝わっていなかったのだ。先程の昴の言葉は。

(そう、危ないんだ)

小さく、胸中で呟く。

と、 そうこうしている内に、電話で聞いた紫亜が襲われているという現場が見えてきた。

数十秒で、状況をよく見渡せるところまで、至る。

そして、

「何、あれ……」

その光景を見つめて、紅葉が足を止め、呟いた。

昴も、同じ光景を見つけて、思わず苦々しい表情を浮かべる。

「どうやら、遅かったみたいだな……」

見えるのは、倒れ伏す数人の男たちと、逃げ惑う大柄な男。少し離れたところで呆然としている、紫亜らしき少女の影。そして、もはや戦う意志など欠片も見当たらない敵に、執拗に追撃を加えようとしている 勇吾の姿だった。

それはまるで 狂った狩人が繰り広げる、虐殺の狩場。
あるいは、牙を持つ獣の……蹂躪の、宴。^{うたげ}

「殺すッ！ 殺してやるぞ！！ 貴様らあああッ！！！！」

それは、勇吾の咆哮だった。憤怒と憎悪と殺意とを押し固めたような、酷く凶悪な声。

同時に、悲鳴が上がる。勇吾に引きずり倒され、その悪魔のような眼光に恐怖した悲鳴が。

聞こえてくるいつもならざる勇吾の叫びに、紅葉は、

「何なの、あれは！ 勇吾は体が悪いんじゃないの！？ それなのに、あんな……！」

完全に混乱した様子で、紅葉が叫び声を上げる。昴はここで声を荒げれば収集がつかなくなると判断して、殊更ことごとに冷静な態度で口を開いた。

「紅葉。誤解しているようだから言っておくがな」
言葉を一度切り、続ける。

「俺は、勇吾が危険だなんて、一言も言っていない。良いか、紅葉。俺が心配だったのは」

昴は人差し指で、未だ暴走の止まらない勇吾を指した。そして、告げる。

「 あいつが、相手を殺すんじゃないかって事だよ」

* * * * *

「……どういう事？」

あまりにも冷静な昴の態度に気圧されてか、紅葉がやや平静を取り

戻して言う。それに昴は、やはり冷静に告げる。

「そう難しい事じゃない。

……あれが勇吾の　より正確には、あいつの『力』の本質だっただけの事だ。

『追い詰められた獣』だよ。鼠でも猫に噛み付くような、進退窮まった状況でこそ、獣は真の力を発揮する。

そしてその力には、容赦や躊躇ってものがまるで無い。何せ後ろには引けないんだからな。

まあ、要するに、一般的な意味でのものよりも、遥かに厄介な形で『キレた』と思っておけばいい」

「……理性を完全になくしてるのね」

ああ、と昴は頷く。

「追い詰められた……か。つまり、紫亜が危ない目に遭った事で、勇吾は理性なんか消し飛ぶくらいに怒ったって事よね」

どこか思うところがあるように、紅葉は呟く。その表情は、少し暗い。

昴はそれをあえて無視した　それは恐らく、紅葉にとって、心の一番柔らかいところからの、言葉だろう思ったから。

一度失恋した相手が、それほどの想いを自分の妹に注いでいるというのは、やはり

「よしっ!」

と、昴がそんな事をふと思いついたところで、唐突に紅葉は気合でも入れるように自身の頬を張った。

パン、と景気の良い音とともに、彼女は視線を鋭くする。

「それで、どうするの?」

彼女はそう言ってきた。事情はわかった、それで、この後はどう行

動するのか、と。

(良い切り替えだ)

昴は呟いた。

彼女は今、間違はなく心に傷を負ったはずだ。それをこつとも容易く覆い隠すのは、中々出来る事ではない。強い女だ。素直に、昴はそう思った。

だから昴は、さっきの紅葉の表情には何も触れず、端的に答えを返した。

「戦って意識を奪う。それしかない」

最早、説得の言葉など通じないであろう勇吾を止めるには、力づくしかない。だが、それは酷く困難な方法だった。何しろ、相手はあの勇吾である。

今は体調を崩しているらしいので、多少は弱っているのだろうか

十人弱の中々に屈強そうな男たちを完全に蹂躪し尽くしているあの様子を見ると、それもあまり期待してはいけなさそうだ。

これでは、嫌が応にも不安になる。

しかも、だ。昴の言葉通りなら、ここから先は命賭けの喧嘩になる。勇吾を相手に、である。

「……出来るの？」

「分からない。俺もあんなった勇吾には、ここ数年お目にかかってないから。直接やりあった経験もないしな。ただ、」

昴は紅葉の頭にぼん、と手を載せると、薄く笑って、

「あいつは、俺がどうにかするさ。たった一人の、相棒しんゆうだからな」

その笑みに、紅葉は思わず赤面しそうになった。なんて笑い方をするのだ、この男は。

それは恐らく、信頼の笑みだ。

勇吾という男に対する、『お前の為だったら、俺の命くらいは賭けてやる』とでも言うような、無償で絶対の信頼。いや、事実そうなのだろう。この男は、命を盾に勇吾と向き合おうとしている。

それに、紅葉は確信する。昴なら大丈夫だと。根拠は無かったが、そんな気がした。

昴はゆったりとした足取りで、勇吾の方に歩いていく。

その背中を見送ってから、紅葉は彼とは別の方に足を向けた。恋人が自分の為に、あるいは自分のせいで、修羅と化しているにも係わらず、何も出来ずにいる紫亜いもつての方に。

早く傍に行つて、言つてやらねばならない。出来るだけ気楽そうに、安心させるように、

『大丈夫。昴がどうにかするってさ』

そう、言つてやりたかった。

第十七話：獣の牙（後書き）

ようやく次回あたりに、一番やりたかった勇吾VS昴が実現しそう。海編のオチは特に決めてなかったなので、これを持って来ることにしました。

今回の話は繋ぎ的な感じでした。バトル書くなら一話丸々使いたかったので。

それでは、また次回のあとがきで。

第十八話：相棒（前書き）

これまでで一番長いです。こつてりバトル描写に、ラストでは御伽
噺的才手。

では、本編をどうぞ。

第十八話：相棒

かつて。

数字にすれば四年ほど前。昴はとある出来事の中で、勇吾に救われた。

当時、人を心から信じる事が出来なくなっていた昴を、勇吾はその愚直さで信じさせた。信じても良いのだと思わせてくれた。

昴は思う。俺たちが本当の意味で親友に、そして相棒になったのは、きつと、あの日からの事なのだ。

お互いに、全てを賭けて信じられる存在に、あの日初めてなりえたのだ。

だから、勇吾^{ゆうご}。心の片隅で良い。信じている。これから少しの間だけ、俺はお前の『敵』になるけれど、事が終われば、また相棒だ。

さあ、始めよう。不本意な形だが、数年ぶりの二人の喧嘩を。

お前を止めることで、俺はあの日の借りを返す。

そして、その先で

* * * * *

(今度は俺が、お前を救ってやるよ)

誰にも明かすことはないだろう決意を呟きながら、昴は勇吾の許に

歩みを進めていた。

少し離れた所から、未だ収まらぬ怒りを叫ぶ勇吾の声が、夜空を裂くように響き渡る。

「死ね　ぶっ壊れる！　今すぐ、俺の前から消え失せるッ！！！」

その声が続いて、ボゴ、という鈍い音がする。勇吾が『敵』を殴りつけた音だろう。

いつもの彼なら絶対にしないであろう、戦意を失った者への追撃の音。

その意味をゆっくりと咀嚼して、昂は呟く。

「やはりな。あいつ……ただキレてるだけじゃない。……」戻ってる」

意味の取れぬ呟き。少なくとも、昂自身以外にとってはそうだろう。だが無論の事、昂にとっては意味のある確認事項だった。

実のところ、昂が紅葉にした説明は、勇吾の現状の全てを語ったものではなかった。

もちろん、嘘を言ったわけではない。勇吾が相手を殺しかねない状況だという事も、勇吾の本質が『獣』だという事も、昂の経験から導かれた、確かな事実だ。そこに嘘はない。ただ、少しばかり言葉が足りなかっただけで。

芹沢昂という人間は、不必要な嘘を吐く事がない。だが、故意に何かを隠すことはあった。

昂が隠した事。というよりも、語ろうとしなかった事。

それは　勇吾の心の状態レベルが、中学時代の　それも最も荒んでいた頃に帰ってしまっているという事だった。

(そう……あれは、あの構えは、師匠に手解きを受けるようになってからは、一度も使っていない我流の構え……)

鉤爪状に曲げられた指は、相手を掴んで引きずり倒すために。

前へと傾いた体勢は、防御を捨ててただ敵を打ち倒さんとするが故に。

『空手に先手なし』という言葉と、握り締めた拳こそを最大の武器と恃む現在の勇吾の信条を真つ向から裏切る、その構え。

先程から勇吾が、拳打を放つ瞬間以外は一瞬たりとも解かない、禍々しき構え。

それこそが、昂が勇吾の状態を『戻ってる』と判断させた要因だった。

あまりに高まりすぎた憤怒^{ふんど}。それは、心の安定を欠いていた昔の勇吾が、何度も経験していたものだった。だが、ここ最近それなりに平穩に暮らすようになって、久しく忘れていたその激情に、過去の記憶^{いかり}を重ねて、一時的に同期してしまった。理屈をつければ、そういう事なのだろう。

(あの構えが出るという事は、あいつはあの頃に……師匠と出会う前にまで、戻ってる事になる。敵と見れば殺意と敵意の化身と化す、あの時代に。……やれやれ、背筋が寒くなるぜ。あの時のあいつと、しかも肉体的な成長を経た今、拳を交える事になるとはな)

軽口を叩きながらも、実際に昂は背筋が震えるのを感じていた。当時は味方としてしか喧嘩に臨まなかったから、これ以上なく頼もしく感じたものだが、敵に回すところまで威圧感を感じるのか。

しかも、まだ喧嘩は始まっていない。今はまだ、昂は傍観者だ。だが。

「ここで退くわけには、いかないからな。精々、殺されないように頑張るとするか」

口調だけは軽く、昂は歩みを進める。勇吾との距離は、あと三メートルもない。

勇吾はまだ、拳を収めるような動きを微塵も見せていなかった。このままいけば、相手が息絶えるまで止まるまい。

しかし、させない。他の誰でもない、この芹沢昂がそうはさせない。勇吾を人殺しになど、絶対にさせてたまるか。

「ッおおおおおおお!!!」

咆哮とともに勇吾の拳が、一際高く掲げられた。これで止めと言わんばかりに、最早動けもしない標的に向け、その拳を叩き落さんとしている。

瞬間、昂は大地を大きく蹴った。やる事は決まっている。

昂は、飛び出した勢いそのままに、勇吾の腕を掲げているおかげでガラ空きになつたわき腹へと、膝蹴りを叩き込む！

「がッ!?!」

助走込みで打ち込まれたその膝に、流石の勇吾も吹き飛ばされる。いかに頑丈な肉体だろうと、質量そのものはそう大きくないのだが、ダメーシそのものは大してなかったのか、即座に起き上がった勇吾は、凄絶な眼差しで昂を睨み付け、

「邪魔するんじゃない!?!」

「するさ。いくらでもな。お前を人殺しにはさせない」

「ぎげんなッ! このクソどもは、絶対に殺すッ!!! 何がどうあるうが、許してはおけねえ、絶対になッ!!!」

怒号を上げる勇吾に、昴は肩を竦めて見せた。精々、挑発的に見えるように。

「そうか。まあ、そうだろうな。だが、俺の意見は変わらない。『何がどうあるう』と、だ。……さて、俺らの意見は完全に平行線だが、こういう場合、やる事はひとつだな?」

訊きながら、昴は既に構えを取っていた。勇吾が普段多用する、自然体から右足を引き、膝を少しだけ曲げた『見』の構え。

「……まだ、邪魔するつもりか」
憎悪すら籠っているようなその声に、昴は何も返さなかった。ただ、静かな視線で勇吾を見つめる。

「そうか………だったら、まずはてめえから潰してやる……ッ!」
「ふ、やってみろ。だが、そこらに転がってる奴らのように、簡単に終わると思うなよ?」

言ってから、昴はニヤリとした笑みを浮かべて見せた。

内心がどうあるうと、また状況がどれだけ悪かろうと、昴は余裕の態度を崩さない。

常に冷静クールに。それが彼の流儀だった。

ただ、今回に限っては、少しばかり熱くなっている自分を、昴は自覚していた。もっとも、別に昴はバトルマニアというわけではないので、これから始まる死闘に胸躍らせている、というわけではない。そもそもそんな暑苦しいのはキャラではない。

しかし、だ。相手が勇吾であるならば、話は別だった。

昴は世界の全てを理屈で片付ける。それは、理性的な行動が体に染み付いているが故の事。

だが、この男は、勇吾だけは例外だ。昴が唯一本音を晒した、全力で向き合える無二の相棒だけは、この世界でただ一人、昴に熱を与える。

故に 芹沢昂は、緒方勇吾に対してのみ、熱くなる。

ただし、全ての行動を、感情任せにする気は、毛頭ない。
思考は冷たく、だが腹の底では熱く滾るものを飼い慣らす。
それがベストで、芹沢昂の流儀でもある

昂は息吹をひとつ吐く。そして、景気付けとばかりに、軽口を叩いて開戦の合図とした。

「 さて、と。覚悟しろよ勇吾。そのネジの緩んじまったお頭つむ、派手にノックして目を覚まさせてやる ！」

* * * * *

最初の一撃。それが鍵になる。

昂は猛然とこちらに突っ込んでくる勇吾を見やりながら、そんな事を考えていた。

勇吾の放つ拳打は、どうしようもないくらい強力だ。まともに喰らえば、急所を外していても昏倒しかねない。それに、命中率も悪くはない。拳速が半端ではないため、そうそう避けられるものではないからだ。

だが、そんな事は、勇吾自身が一番よく理解していることだろう。つまりは、自信を持っている。

だからまずは、その自信を揺らがせる所から始める。昂はそう、静かに決定した。

「 っらああああッ！！ 」

怒号とともに放たれた拳を、昂は間一髪で回避した。こめかみを掠

めていく拳圧に肝を冷やしながらも、サイドステップで勇吾との距離を取る。

(つと、今のは少し危なかったな。予想してこれか。……だが、避けるには避けれたな。

お、警戒してる警戒してる)

昂は油断なく勇吾に視線を向けながら、自身の最初の目論見が達成された事を確認した。

勇吾は必倒のつもりで放った拳を容易く 彼にはそう見えた避けられたことで、次の攻撃に即座には移らずに動きを止めている。

(やはりな。どれだけ怒り狂っていても、危険を感じ取る感覚は死んでいない。あいつは大抵の場合、最初の一撃で勝負を決てきたからな。その拳速故に相手は避け切れず、威力故に耐え切れない。だからあいつは、初手で決められない相手に対して、本能で警鐘を鳴らす。これで少しは時間を稼げるな)

昂が最も恐れるのは、一瞬たりとも勢いを緩めず、絶えず攻撃されることだった。

それでは手を読む暇がないし、昂の反射神経では到底対応しきれないからだ。

最初の一手が正面からの拳打だという事は、これまでずっと勇吾の喧嘩を傍で見てきた昂には簡単に予測できたから、初手を避けきる事にまず全力を注ぎ、勇吾に警戒心を抱かせた。

そして、初手の拳打が通じない場合、勇吾の取る選択肢は、概ね二つ。

手刀による連撃か、距離を取って蹴りで牽制してくるか。

と、流れるように思考を紡ぐ昴を後目に、勇吾が動き出した。やや警戒した目つきで、手刀を構えて突っ込んでくる。

（ 来たか。だが、その手刀は読み通りだぜ。最初はまず ）
勇吾が手刀を振りかぶる。昴はその動きに合わせて、バックステップで大きく後退した。

（ 喉笛を狙った突き…… ）
果たして、勇吾の放った一撃は、昴の読み通り突きだった。誰よりも近くで、そして長く勇吾の喧嘩を見続けてきたからこそその、的確な予想。

距離を取られたせいで、突きは昴には大きく届かない。

（次は 大きく踏み込んで袈裟斬りだな）
死角へ回り込み、読み通り放たれた袈裟斬りの手刀を回避する。それと同時に、次の読みも完成する。

（そして間髪入れず、薙ぎ払いの一撃 ！）
昴は勇吾の動きなど見もせず、己の読みをただ信じて深く体を沈めた。それとほぼ同時、鋭く空気が裂かれるような音とともに、薙ぎ払いが頭上を通過する ！！

（ 凄いだ！ よし、ここで ）
その威力故か、勇吾の体が僅かに揺らいだ。手刀の勢いに引っ張られ、昴の目の前にガラ空きの腹が晒される。それも、昴の脳裏に描かれた構図通り。

（ 打ち込む！ ）
小さく、昴は踏み込んだ。拳を握り込み、鳩尾に向かって全力で打ちかかる。

パシィッ！ 乾いた音が響いた。昴の背筋にぞくりという悪寒にも似た感覚が走る。

昴が放った拳は、勇吾の手 手刀を放ったのとは反対の 面に、受け止められていた。

（これを止めたか……！！）

毒づいて、反撃が来る前に飛び退る。勇吾は特に追撃する様子もなく、棒立ちになっている。

（手刀の勢いで体が泳いだのを利用して、空いていた手を強引に振り回したか。……まったく、大した反射神経だ。それとも、ただの勘かね？ まあどちらにしる、厄介な事には変わりないか。だが、）

昂は思考を遊ばせた。問答無用で意識を奪える、みぞおち急所打ちの機は逃したが、それだけの余裕が彼にはあった。

（今回は俺の読み勝ちだ。『山突き』。どうにか当たったな）見やれば、勇吾の表情が、苦悶に歪んでいる。喉を押さえ、酷く窮屈そうに呼吸を繰り返していた。

そう 昂の拳は、当たっていたのだ。鳩尾を狙ったのとは別に放った、喉元狙いのもう一方の拳が。

『山突き』
スポーツ競技空手においては反則と見なされる技の一つで、両の拳を上下に分けて同時に放つ技である。本来は顔面と腹部を狙うものだが、今の勇吾は顔に入れても大きなダメージにはなるまいと、あえて呼吸を乱すための喉元狙いに絞ったのだ。

この技は勇吾に付き添いがたら『師匠』から学んだものの、これまで使った事のないが故に不安もあったが、何とか成功した。勇吾がでたらめな動きをするのは、元より承知の上だ。二段構えを常にしておかないと、あっさりと負けるだろう。

昂はしっかりと構えなおすと、再び思考を転がした。

(さて。呼吸が乱れれば、隙も増える。このまま畳み掛けて、あいつの処理能力と我慢比べして一気に決着を付けるか　引き続き『見』に徹しつつダメージを蓄積させるか)

目を細め、昴は勇吾を見やった。勇吾は既に、構えに戻っていた。息が荒いところを見ると、呼吸まで正常に戻ったわけでもないようだ。

だが、少なくとも戦闘継続が可能な程度には、回復の見込みがあると思われるだろう。

……普通なら、即座に酸欠でぶっ倒れてもおかしくないのだが。

(決定。様子見と牽制、隙を見てのヒット&アウェイを継続しよう。あれをこんな短時間で回復を始めるような奴と、ガチンコで打ち合うなんてのは自殺行為の何物でもない)

分かってはいたが、あの男の頑丈さと肉体の潜在能力はまともではない。
ポテンシャル

悪魔にでも魅入られているのだろうか、昴は益体もないことを考えた。

「　　ったく、寝つきの悪い野郎だ」

呟き、次の手を読む事に専念する。

これだけ攻撃を凌がれた経験は、恐らく勇吾にはほとんどあるまい。あるとすればただ一人、『師匠』のみだろう。
となれば、

(師匠との鍛錬での勇吾の行動を追想して、反映する。これなら有効なはずだ。

真つ当な思考能力を放棄した今のあいつは、たぶん体に染み付いたパターンを最優先に行動するはずだからな。自分の攻撃をここまで凌いだ相手　師匠との組み手で使っていた手法を。『戻ってる』

なら尚更そつだ。

だったら、余計な推測は入れずに)

と、思考と途中で、勇吾が先んじて動いた。まずい、もう攻撃に移るほど回復していたのか。昴に小さな焦りが生まれた。勇吾は例の構えのまま、再び突進してくる。

「 はあああッ! 」

地の底を這うような声とともに、その禍々しき鉤爪が迫る ! !

「 ツ速い! 」

予測が完了する前に放たれたそれは、寸分違わず昴の首を狙っていた。

まずい、あれに掴まれば、それだけで致命的…… !

「 くつ、仕方ないか! ! 」

回避が不可能と見て取ると、昴は腕をクロスさせて防御の体勢をとった。せめて首を掴ませてはならない。勇吾の握力は百キロ近いのだ。掴まれば、窒息するどころか頸骨を折られかねない。

やや下から、突き上げるようにして迫った鉤爪が、昴の腕を掴んだ。重い衝撃が走る。

と その次の瞬間、昴の体から重力の縛りが消え失せた。

(これは ! ?)

声も出せずに胸中で呻く。

そうしている間に、足が地面から離れた。そしてそのまま、昴は地面と平行に『飛んだ』。

数秒にも満たない飛行の後、昴は三メートルほど離れた場所に背中から叩き付けられた。

カハ、と短く息が漏れる。その衝撃と痛みに、昴は今何が起きたのかを悟った。

(………………何て出鱈目だ、あの超絶底抜け馬鹿力 片腕で俺を

ぶん投げやがったのか。おつかねえにも程がある)

毒づきつつ、追撃を想定して即座に起き上がる。全身が満遍なく痛む上、気を抜くと咳き込みそうになるが、どうにか耐えた。

これで地面がコンクリートだったら終わりだっただろう。柔らかい砂浜だったのが幸いした。

昴の想定は、残念ながら大当たりだった。倒れたままだったら踏みつけて止めにするつもりだったのか、勇吾が追撃を行うべく地を蹴っている。

昴は一か八かだと、集中状態に移行するために目を瞑った。本来戦闘中に視界を閉ざすなど有り得ない事だが、元より手の先読みが出来なければ勝ち目など存在しない現状では、これに賭けるしかない。

(トレス 焦るな。クールにいけ。やることは一つなんだ。落ち着いて追想を開始しろ……)

走馬灯の如く、昴の望んだ記憶の一部が頭の中を駆け巡る。師と勇吾が毎日行っていた、実践さながらの組み手の光景。

師匠に打ちかかり、蹴飛ばされて吹き飛ばす勇吾。

それを見て笑う師匠。

犬歯をむき出しにして再度挑む勇吾。

笑いながら、平然とカウンターを決める師匠

流れていく記憶たちを二秒にも満たない時間で統合し、昴は、

「見えた」

そう呟いて、構えを変えた。勇吾のそれとは違う、『攻』の構えにやるべき事は既に決まった。あとはそれを実行するのみ。

そして 勇吾が拳を固めて迫ってくる。

やはりそうだ。この男が最後に頼るのは、数多の修羅場を潜り抜け

てきたその拳　　！！！！

「消える……これ以上邪魔をするなあああッ！！！！！！」
紛れもなく絶叫となつて迸つたその声に、昴は

「ならば消してみる！　だが俺は、そう安くないぞ　　！！！！」

ここにきて、己の中で滾る熱を開放し、叫び返す。昴はなんとなくこれが最後の激突になるだろうと感じていた。

情けない話だが、先ほどの片手投げのダメージだけで、既に昴の肉体は悲鳴を上げている。

勇吾と違い、そう大きな筋力をもたない昴には、耐久性がどうしても足りないのだ。

故に　　これから行われる激突に、全てを叩き込む。

「くたばれえええッ！！！！」

勇吾がその凶悪な拳を振りかぶり、一直線に突き出した。

助走を付けて放たれたその拳は、文字通り必殺の風格を纏いて昴の顎を砕かんと突き進む！！

「上等ッ！　月まで吹っ飛びやがれこの馬鹿があッ！！！！」

対する昴は、両手を組み合わせた奇怪な形の拳を作り、大きく振りかぶっていた。

これが昴の考えた最後の策。記憶の欠片から引き出したラストカード。

そしてそれを　　勇吾ではなく、こちらに迫る拳に向けて全力で振り下ろす！！

激突は一瞬。一秒にも満たない時間の後で、浜辺に対峙する二つの影は、対照的な立ち位置でその姿を晒していた。

昴が上で、勇吾が下。

真上から拳を叩き落すという昴の荒技の果てに、勇吾は体勢を完全に崩して片膝をついていた。

そして 止めとなるべき一撃が、これより振るわれる。

「これで」

軸足を残し、片足を振り上げる。この位置でなら、回避など不可能。防御しても、その上から存分に脳をシイクしてやれる。つまりは、

「チエクメイトだ!!!」

ゴツ、という、ハンマーでも振るわれたような音とともに、勇吾が蹴り飛ばされて砂浜を転がっていく。

そのまま勢い余って海に突っ込んだところで、回転は止まった。動きも、完全に止まる。

どうやら 気を失ったらしい。

「やった、か」

それを確認して、昴はその場にしゃがみ込んだ。どうしようもないほど、全身に疲労が溜まりきっている。

しかしそれでも、毒づく事と、ニヤリとした笑みを浮かべることだけは忘れない。

「ようやく止まりやがったな、馬鹿たれめ。つたく、殺されるかと思っただぜ」

静かなその言葉は、夜の海、その漆黒に吸い込まれて消えていった。

* * * * *

「うわぁ……」

紅葉はぽかんと口を開けて、自分でもちよつと間抜けだと思つような声で呟いた。

「すつご、人つて空飛ぶんだ……」

先ほどの勇吾の片手投げと、今の昴の蹴りは、ちよつと尋常ではなかった。

気分的には、怪獣映画を見た後のそれに似ている。

「あつと、惚けてる場合じゃなかったか。紫亜、紫亜ー」

紅葉は自分が羽交い絞めにしている紫亜　　どうやら無事だったよ
うで、勇吾と昴が喧嘩を始めると止めに行こうとして暴れた　　に
声をかけた。

「え？　ああ、うん。何、姉さん？」

勇吾が吹っ飛ばされた辺りで紅葉と同じく呆けていた紫亜が、詰まりながらも返事をしてくる。

その様子は、何故だかとても落ち着いているように見える。

(……何か変わったわね、この子。いつもならもつとオドオドするか、暴れに暴れて勇吾に泣きつきそうなもんなのに)

何しろ、身も蓋もない言い方をすれば、強姦されかけた後である。

その上助けに来た勇吾まで暴走して手が付けられなくなる始末だ。

(というか、私だってそんな状況に放り込まれたら、いくらなんでも泣くわよ)

それが、癩癩を起こすわけでもなく、とりあえず表面上は落ち着いている。

まあ、実際には、紫亜は多大な精神的労力を費やしてどうにか平静を装っているだけなのだが、紅葉は気づかなかった。

「姉さん、そろそろ放して欲しいんだけど……勇吾君も、もう暴れないだろうし……」

「え？　あ、ごめんごめん」

あまつさえ、紅葉よりも早く現状を把握したと来た。何だろう、この妙な落ち着きは。

「とりあえず、勇吾君を移動させないと。あんな所じゃ、風邪引いちゃう」

「えと、あー。まあ、そうね。その通り」

紅葉は、とりあえずこの事はもう気にしない事にして、紫亜と一緒に勇吾の方へ歩き出そうとして

「……………嘘お」

いつの間にか立ち上がり、再び昴の方へ歩き出そうとしている勇吾を見つけて、掠れ声で呟いた。

* * * * *

「……………マジか？」

紅葉が呟くのとほぼ同時に、昴は物凄く疲れた顔でぼそりと言った。先ほどの蹴りは渾身の力で放ったし、手応えもこの上ないほどにあった。

あれを食らってまだ立ち上がるとなると、最早呆れるくらいしかやることがない。

何しろ、昴はもうへロへロである。

あの片手投げの威力は、とても常人に耐えられるものではなかった。しかも受身も取れなかったから、完全にボロボロである。

「……………やれやれ、神様はどうやら、俺らの事がとことん嫌いらしいな。いや、疫病神あたりには大いに好かれてる気もするが」

わりとどうでも良い事を言いながら、昴はどうか立ち上がった。まったく、こっちはこの程度でもう限界だというのに、あいつはあれだけボロボロでまだやる気なのか。

「元気だなあ、くそつたれ」

構える。流石にこれだけ消耗していると、読みも何もあつたものではない。

こうなれば、もう運を天に任せつつあとは野となれ山となれ。

だいぶ混濁し始めたというか自棄の混じった思考をしつつ、昴は勇吾を見据えた。

「まだ、だ……」

小さな呟きが聞こえる。立ったといつても限界に近いのは確かなのか、足取りも不確かだ。

「まだ、敵がいる……倒さ、ないと、また……紫亜、が」

「……………」

昴は渋面で、その言葉を聴いていた。足を引きずり、瞳すら虚ろになりながら、それでも歩みを止めない姿を、見つめていた。

本当に　こいつは、ただそれだけの為に狂ったのだと確認して。

ただ一人の女の為に、文字通り己と敵を壊しながら、牙を剥き続けるその姿は、今になって別のものに見えた。

これは、獣というよりも　失うこと、大事なものが傷つく事を恐れているだけの子供だ。

ただ迷っている。ただ惑っている。

「　　まったく、んな顔するなよな。もう一頑張りしたくなるだろうが」

昴は力なく笑う。出来るかどうか微妙だが、もう一発くらいは当てられるかもしれない。

それで倒れるかは、それもまた微妙なことではあるが。

と、　　その瞬間だった。変化が訪れたのは。

というよりも、『彼女』が変化をもたらした、といった方が正しいが。

「 勇吾君！！ 」

そんな声とともに、昴の視界に小さな影が現れた。

それはどう見ても、紫亜でしかなかった。何とも勇ましい事に彼女は、この馬鹿げた喧嘩に、身一つで飛び込んできたのだ。勇吾に向かつて、一直線に走っていく。

だが、勇ましさは認めても、状況的には最悪と言わざるを得ない。

「 っって馬鹿！ 今の勇吾に下手に近づくな！ 追い詰められすぎて、もう何をするか 」

昴が叫ぶも、遅かった。

勇吾は突然接近してきた人影を認めると、即座に迎撃体勢に入る。鉤爪状の手を伸ばし、『敵』を屠らんとする。

（馬鹿がッ！ くそ、この期に及んで間に合わないなんて、何て無様 ！！！ ）

走り出そうとするも、どう考えても 間に合うタイミングではなかった。

* * * * *

耳鳴りがする。喉の奥が異常に痛む。体が重くて、足など鉛か何かのよう。

頭なんか、ボブ・サップにノックでもされてるんじゃないかと思うほど、ガンガンとやかましくて痛い。

もう、勇吾には、何も分からなくなっていた。

自分が何と戦っているのか、何のために戦っているのかも、もう分からない。全て熱と痛みの中に消えていった。

ただ、分かることもある。

許しておけなかったのだ。

『敵』を。××を傷つけた奴を許しておけなかった。だから戦った。今も戦っている。

？

……おかしい。××とは誰だ。何だ。

分からない。思い出せない。

いや。

(……分からないのなら、もう良い事なのかもしれない)

とにかく、敵を。敵を倒さなければ。

××が誰か分からなくとも、××を傷つけた敵が許せないことは分かるのだ。

ならきつと、それで良い。

(ああ、まだ一人、残ってるじゃないか。なら、倒さないと。殺さないと)

動かない足を無理に動かす。上がらない腕を強引に持ち上げる。

「まだ、だ……」

意思とは別に、口が開く。

俺は一体何を言いたいんだろう。誰に言っているんだろう。そんな事を思いながら、内心首を傾げる。

「まだ、敵がいる……倒さ、ないと、また……紫亜、が」

××。×亜。紫×。

紫亜。

ああ……まだぼんやりしているけれど、その言葉が、名前が、何故か心に響く。

響くけれど　まずは、敵が、先。

『敵』は、金髪の男。　見覚えがある。けれどそれだけ。そこで思考が止まる。

余計な事は良い、と。あれは敵。さあ倒せ。さあ殺せ。守る為に。マモル為に。まもるために。

「勇吾君……」

（　　？　何だ、もう一人いたのか。小さな人影が、こっちに来ている。よくは分からないが、今の俺に近づいてくるのなら、きっと敵なんだろう）

特に何も考えずに、腕をそちらに向ける。そして、軽く振りかぶって

ピタリと、動きを止めた。何も見えなくなったからだ。目の前が暗い。

それが何故なのか分からないまま、勇吾の意識は急速に冷やされ、どこかぼんやりしていた思考が速やかにクリアになっていく。

何故だ？ 何故なにも見えない？

まさか、戦闘中に目を瞑っているとも言っのか。馬鹿馬鹿しい、そんな事があるわけ

と、そこで、勇吾はもう一つの事に気づいた。

(……………これが、戦闘だと?)

呼吸が、止まっていた。否、止められていた。

『紫亜』に、唇を塞がれて。キスを されて。

紫亜。愛しい名前。

ああ、そうだ。そうだった。

何故忘れていたんだろう。こんなにも愛しい少女の事を。

(……………ああ、なるほど。キスなんてしてりゃあ、顔同士が近くて前なんざ見えるわけねえな)

あまりにも今更に、そんな事だけをしっかりと理解して。

勇吾はクリアになった思考のまま

あっさりと、気を失った。

第十八話：相棒（後書き）

最近バイトがきつくてしょうがないです。時間帯的に若いバイトが少ないんで、私一人に力仕事が集まるんでケチヨンケチヨン。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

今回は今までで一番の分量にして、最大の力作でもあります。一応海編のクライマックス的な感じ。ドシリアスのバトルでお送りしております。

ただまあ、次は気楽な感じにコメディやりつつこの話の補完とかしようと思ってるので、次回は気楽にお訪ねください。

……ちゃんとラブコメしないとなあ。

では、次回のあとがきで。

第十九話：悪い男と美女と野獣「前編」（前書き）

海編ラストの前編です。前半コメディ後半ちょいシリアス。
というわけで、本編をどうぞ。

第十九話：悪い男と美女と野獣「前編」

「ん……？」

突き刺さるような光を瞼の上から感じて、勇吾は微かに覚醒した。薄目を開けて、眩しさから再び目を閉じる。

なんとなく、朝なのだろうと推測する。いつも目覚める時も、目覚まし時計の金きり声より先に、こうして朝日にやんわり起こされる

（ あれ？ ）

ふと、疑問が浮かぶ。そういえば、いつ床に着いたのかまるで覚えがない。

（ ……いや、それよりも、だ。この、体中が軋むみたいに痛えのは一体どういう つつう……！ ）

関節や筋肉に感じた痛みに疑問を感じた途端、今度は頭に酷い痛みを覚えて、思考が遮断される。

「いつてえ……」

思わず、呻く。すると、それに対して反応があった。

「あ、勇吾が起きた！」

よく判らないが、とりあえず女性の声だ。やや大きいその声が頭に響いて痛み、勇吾は顔を顰めた。

もつとも、未だに半ば程しか意識が覚醒していないため、出来る反

応がその程度でしかなかったのだが。

「あー、起きたには起きたみたいだが、寝ぼけてるな、これは。そう朝に強い奴でもないからな」

今度は男の声だ。これは昴だろうと、勇吾はふと思った。流石に聞き慣れ過ぎていて、夢見心地でも判別できる。その声は、嘆息を一つ漏らすと、こう続けた。

「とはいえ。これ以上寝こけられても困るし、一気に目覚めてもらうとしよう。 琴子」

「あいよ、心得たあ！ よっしゃー、行くぜえ！」

(……琴子?)

そのやり取りに、勇吾は寝ぼけながらも何か危険なものを感じ取った。

だが、勇吾が何か行動を起こす前に、無情にも喜劇の幕が下ろされた。

嫌な予感に反射的に身を固くして、目を開けた勇吾が目にしたのは

「そりゃあ！ 琴子・ザ・ダイビングアタックインシーサイドオオオオオッ！」

喜色満面で勇吾の真上の空中に静止し、これから落下してくるであろう琴子の姿だった。

* * * * *

「げばあぁっ!?!」

思いつきり腹の上に落っこちてきた重圧に、勇吾は一気に現実引き戻されつつ悲鳴を上げた。

「おお、目が覚めたみたいだな、朝寝坊小僧」

「寝起きにフライングボディプレスなんぞかまされりゃ、なんぼなんでも起きるわい馬鹿たれ!」

勇吾ががばりと跳ね起きると、その拍子にまだ腹の上に載っていた琴子が吹っ飛んだ。彼女が「によわー!?!」などと悲鳴を上げるが無視し、勇吾は腕組みなどしている鼻に食って掛かった。

軋む全身の痛みを無視して立ち上がり、そしてまだちゃんと回復しきっていない体でそんな無茶をした以上、当然の如く膝から崩れ落ちて豪快にすっ転んだ。

「おおおおお!? 何だ、立てんぞ!?!」

「当たり前だボケ。昨日の乱痴気騒ぎをもっ忘れたのか。どれだけトリ頭なんだお前は」

「誰がトリ頭だこの野郎……昨日?」

這い蹲はくするような姿勢のまま言い返し、ふと気づいて鼻の言葉を反芻する。

「昨日……昨日……あぁっ!」

咳くごとに昨夜の記憶が弾けるように脳裏に瞬き、勇吾は唐突に昨夜の出来事を思い出した。

ただ、思い出せたのは一部の事のみ。あの時、紫亜が暴漢どもに襲われている状況を目にした瞬間から後の記憶は、まるでなかった。

つまり 紫亜の安否に関しては、完全に情報がない。

勇吾は再び跳ね起き、今しがた転んだことすら忘れて、どうにか立ち上がるうとする。

「そうだ、思い出した　！　昴！　紫亜は！　紫亜はどうなったんだ！？」

「……覚えてないのか？　アホみたいに暴れまくったのも、あの無意味に衝撃のラストも」

「ああ、そうだ。綺麗さっぱり抜け落ちてんだよ！　んな事より紫亜はっ！？　無事なのか！？」

頭に響くのを堪えながら、怒鳴る。

すると昴はこれみよがしに嘆息して、勇吾の背後、つまりはさっきまで寝ていた布団のあたりを指差して、

「……そこだ。無事かどうかは……まあ、なんだ。見れば判る」
その妙に歯切れの悪い言葉に、勇吾は眉を顰めつつ振り返った。

視線の先には、さっき跳ね飛ばした琴子と、恐らく最初に聞こえた声の主であろう紅葉の姿があった。

だが、それはいい。それよりも、だ。勇吾は更に、視線を滑らせた。そして視線が、ついに敷かれた布団の真横で固定される。ついでに、体も固まっていた。

「……へ？」

思わず、間の抜けた声が漏れる。

何故なら

「……ん……ふみゅっ……」

何故だかやたらと幸せそうな表情で、しかも妙な寝言を口にしながら熟睡する紫亜の姿を見つけてしまったから。

「……………」

ただただ、沈黙する。あまりの展開に絶句して。
ややあつて、勇吾はようやく口を開くことに成功した。

「……………」昂

「何だ？」

即座に聞き返された言葉に、勇吾は再び沈黙を挟んでから、こう懇願した。

「……………」説明を、頼む。完膚なきまでに、状況を解説してくれ

* * * * *

「……………」そうか

渋面で瞼を閉じて、勇吾は溜め息混じりにそう呟いた。

昂にある程度、現状の説明を受けてから、開口一番の台詞がそれだった。

昂の話によると 昨日、勇吾は『戻った』らしい。

それが意味する事を、勇吾は嫌というくらいに知っている。

つまり 自分は昔から、何も変わってなどいないという事だ。

少しはマシになったはずだった。

『師匠』から教わった事は技と力だけではなく、己の在り方も刻んでくれていたはずだったのに。

あの日 己の人生最大の喧嘩を終えたあと、虚しさに震えたあの

日。
こんな事をしていても、何の意味もないと 知ったはずだったの
に。

ただ拳を振るうだけでは、『守る』という事は完成しないのだ。
本能のまま暴れるのでは ただの獣だ。

言うなれば、ヒトに生まれながら、獣へと化けた者。

バケモノ
化獣

それが緒方勇吾という存在だった。

身体は人間のモノでも、在り方が獣であるならば、それはヒトとは
言えない。

だから 自分は強いのだと思っていた。
まともなヒトではないから。だから負けないのだと。

だが、それを 『師匠』は笑いながら蹴り飛ばした。

ヒトでありながら、一度たりとも敗北のなかつた暴力の権化たる自
分を、あっさりと叩き伏せた。

希望だった。

ヒトとしてあれほどの強さを持つ存在が、あんな風に現れるなんて。

もし。もしも 俺もあんなヒトに、強いヒトになれたら。

誰かを、何かを、守れるのかもしれない。

そう思つて『師匠』に師事して、ヒトとして意志の下に拳を振るうようになつてから　今までずっと、『獣』は出て来なかつた。昔の自分は死んだと思つていたのに。

今になつて　この様だ。

「……………は」

思わず、笑いが漏れた。

ヒトとして意志の下に拳を振るう？

どの口でそんな事をほざきやがる。

昨日の記憶なんてまるつきり消え失せている。

そんな状態の何処に意志がある？

あるわけがない。

大事な時に傍に居ず怖い目に遭わせ、その上昂の話では、自分は紫亜に手を挙げようとしたらしい。

紫亜に。守ろうとした者に、だ。

全くもつて愚かしい。

あの喧嘩は昔の俺がやってた馬鹿と同じモンだ。

敵と見なせば拳を振るい、『守るため』だと言ひ訳だけ捨て置いて、暴力以外に価値を持たない自分を慰めていた、くだらないケダモノだろうが　！！

心底、自身を嫌悪する。この身の愚かしさは理解していたつもりだ

つたが、よもやこれほどまでとは思わなかった。 無様に過ぎる。

「……またくだらん事を考えてるみたいだな、お前」

渋面で沈黙していると、昴が呆れ顔で言ってきた。自虐的に、呟く。

「……俺の考える事なんて、いつだっただらねえさ」

「そういう意味で言ったんじゃないんだがな」

今度は苦笑して、昴は言った。

更に、こう続ける。

「お前の事だ。考えてたのは『馬鹿な真似をした』とか、『昔と何も変わってない』とか、そんなところだろう？」

「……………」

見透かされている。やはり、この男には敵わない。

緒方勇吾じゃ、敵わない。

勇吾は何も言わず、ただ苦笑した。

「……はあ。相変わらず、馬鹿のくせに考え込むんだな、お前って

奴は。 だが、安心していい。お前はちゃんと踏み止まった

よ。化獣バケモノなんかには、なっちゃんない」

「……意味がわかんねえよ。俺は紫亜に よりによって紫亜に、手を挙げようとしたんだろ？ 最悪だよ。考え得る限り最悪の結果だ。ロクに話も出来ねえままで、大事な時に間に合わず、拳句

の果てには守るところか、自我をテメエで吹っ飛ばして、この手で

この手で、大事なモンをぶっ壊しかけた。どうやって止まったんだかは知らねえけどよ 大方、お前が蹴り飛ばしてくれたんだ

ろ？ ……お前がいなきや、俺は何より大事なモンを傷付けた…

……」

くそつたれが、と最後に罵倒の言葉を吐いて、勇吾は押し黙った。

だがそれに、昴は静かに告げる。

「……いいや。俺じゃない」

「……何？」

緩慢な動作で昴の顔を見やり、勇吾は聞き返した。昴はだからな、と前置きして、

「お前を止めたのは、俺じゃない。もつとも、最初はそのつもりだったし、途中までは上手くいったがな。だが、最後の最後　お前を踏み止まらせたのは、紫亜だよ」

「紫亜が……？」

眠り姫となっている紫亜に、目を向ける。彼女は未だ起きる様子もなく、ただ幸せそうに眠っている。

「そうだ。だいたい、あの寝顔を見て、少しはおかしいと思わないのか？　もしお前が、一線を踏み越えて紫亜に手を挙げて、それを俺が力技で止めたとしたら、あんな穏やかな顔で寝ていられるとでも？」

「……………」

確かに、違和感はある。そして違和感は寝顔の事だけではない事に、勇吾は今更ながらに気付いた。

紫亜をつぶさに眺めて、呟く。

「そついや……外傷がどこにもない……？」

昨日勇吾が見たときには、確か口元に血がついてた筈だ。あの状況で口の中を切って出血したというのが妥当だろう。原因は　顔を殴られた拍子に、という以外には考えられない。

「どついう事だ……？」

回転がようやく普段と同じになった頭で、勇吾は考える。

そもそも、自分を止めたのが昴ではなく紫亜だというのはどついう事なのか。

紫亜にはこれといって戦闘力がない。

経験、技術、単純な身体能力　どれをとっても、極普通の少女のものだ。

それでは、いくら弱っていても、勇吾は止められない。

だとすれば、自分はどうかやって止まったというのか。

物理的手段せみじゆうではないとすれば、説得せとくだろうか。

それこそまさかだ。

記憶をなくすほど怒り狂っていた自分に、言葉など届くはずもない。

（わかんねえ……解答を出すには、情報が足りてねえのか？くそ、もうなにがどうなってやがるのか　）

「わからない、って顔だな。

ならちようどいい。昨日何が

どうなっていたのか、お前がどうしたか、そして紫亜がどうなったのか。全て、本人に聞いてみる」

「あ？　ああ、そうだな」

見ると、紫亜がもぞもぞと動いている。起床の前触れだろう。

勇吾は最後の一押しをするべく、紫亜の傍に寄って肩を揺すった。

「眠いだろうけど……起きてくれ、紫亜」

「ん……んむう……」

言葉未滿の寝言を置き去りにして、のそりと、あまり機敏とは言い難い動きで紫亜が起き上がった。

やや寝ぼけ気味の瞳は、まだうまく焦点を合わせられずにふらふらと彷徨たぐひっている。

（……近くで見ても、やっぱり外傷がねえ。……とりあえずは、紫亜が無事だっただけマシかもな……）

思わずそんな事を考える。

と、紫亜の瞳がこちらをしつかりと捉えた。目が覚めてきたのかもしれない。

「はれ……ゆうごくん……」

口調はまだ駄目だった。

「……あ、ああ」

曖昧に、口ごもる。さっきまでわりとシリアスな事を考えていた筈なのだが、何だか今の紫亜を見てると強制的に気分が和んできまう。

(……そーか、紫亜は寝起きはふにゃふにゃなのか。もしかしたら、低血圧なのかもな……)

ついでに、余計な事を考えたりした。

ともあれ、これで彼女からも話を聞ける。少しは状況が整理できるはずだ。……筈だったのだが。

「ゆうごくん……んにゃー」

相手が勇吾だと確認した 意識自体は寝ぼけたままで 紫亜は、何を思ったのか、勇吾の首っ玉にしがみつくと、そのまま引き寄せ
て

「……むにゃー……」

「は？ いやちよ、紫亜顔が近い顔が近い何て言うかちょっと待っ
んむっ……！？む、むー！むむ、むむむむ、むむーッ……！」

熱く熱く、口付けた。それはもう、貪るように。

どうやら、彼女はえらく重度に寝惚けているらしかった。

「む、む、む、むむむー！？」

そして勇吾は、突然の接吻に対する驚きと、急激になくなっていく
酸素への切望に、混迷と混乱の声を上げたのだった。

結論を言うと 状況は、整理されるどころか、更に酷くなってい
た。

目の前の光景を眺める事約十秒。

完全に取り残された感のある外野たち
「！」などと騒いでいる琴子は除いて

「おわー、チューだチュ
は、何故だか平淡な表情

に薄っぺらい笑みを貼り付けた状態で、現実逃避を始めていた。

「ねえ昴、私いま物凄くコブラツイストの練習がしたいんだけど、勇吾でやつちゃ駄目？」

「ほほう。やけに攻撃的かつ具体的な欲求だな。だが後にしとけ。

酸欠の上に関節まで極められたら、流石のあいつも死ぬから」

「じゃああんたで」

「『じゃあ』の使い方を限りなく間違っているのを無視して言うが、反撃しても良いならどうぞ」

「反撃？ 具体的には？」

「揉む」

「どこを？」

「胸を。ああすまん、揉むほど無いか」

「殺すわよ」

「じゃあ尻で」

「あんたも『じゃあ』の使い方を間違えてるじゃない」

どうしようもない馬鹿話で、どうにか目の前の光景から意識を逸らそうと努力を重ねていく。

正直、見ていられない。映画のワンシーンで男女の絡みがあると目を背けたくなる事があるが、この光景はそれに似ていた。もっとも、映画と違ってこちらは主演者二人が知っている者なので、余計に性質ちが悪いが。

いつも冷静で斜に構えている昴も、事態の転び方が尋常ではないためか、状況把握を放り出していた。

しかも、口にはしているのは普段あまり言わない下ネタのトークである。紅葉にしても、平然と切り返したりしている。

二人揃って、色々と末期だった。

「んーむ！ んむむ、むむむむむ！」

勇吾がまだ何か声を上げている。悲しいかな、意識を遠ざけようと
しても、昴にはなんとなく、勇吾が何を言っているのか理解できて
しまう。

「『おい！ 昴、助ける！』か。 嫌に決まってるだろう」

「んむ、むむ！」

「『おい、こら！』だな。 まあ、諦める。昨日の昼にも言った
が、お前らはスキンシップ不足だからな。紫亜も色々溜っていた
んだろう。この際、じっくり味わっておけ。『それ』以上の行為に
及びそうだったら止めてやるから」

「むむむーむむーッ！」

「『薄情ー者ーッ！』ね。褒め言葉をありがとう」
不自然なまでに爽やかな笑顔で、昴は言い切った。

結局、紫亜が正気に戻って死にそうなくらい赤面して、勇吾が
酸欠で文字通り死にそうになるまで、五分かかった。

* * * * *

「し、死ぬかと思った……」

何とか息を整えながら、勇吾は呻くようにそう言った。その顔は、
気恥ずかしさと酸欠の名残でみっともないほどに紅潮している。
無論、約六分間に及ぶ人工呼吸 直接的に言語化すると羞恥心で
首を吊りたくなる の弊害である。もともと、惚れた相手との事
なので、たまらなく恥ずかしいだけで、悪い気はしないのではある
が。

少し距離を置いたところでは、似たような状態の紫亜が、あうあう

と自分のした事に戸惑いながら、体育座りでちょこんと鎮座していた。

「ふむ よしよし、少しは落ち着いたようだな」

二人が落ち着くまでの間、こちらも我に帰って状況把握に努めていた昴が、どうにかマイペースを装ってそう言った。つまりは、昴もまだ完全に冷静ではないと言うことだが。

と、ひたすら小さくなっていた紫亜が、遠慮がちに口を開いた。

「あ、あの……」

「どうかした？ 寝起きどつきりキス魔ちゃん」

「あつ……」

元想い人と妹とのショッキングな映像により、ちよっぴりダークサイドに堕ちかかっている紅葉が、即座に妙なあだ名で死者に鞭打った。

まるでいじめっ子である。紫亜は哀れ、よりいっそう小さく縮こまつて言葉を見失っている。

見かねた勇吾が、何とかフォローに入ろうとして、

「あのさ、紅葉。そうツンケンしねえでくれな

いか？ ほら、寝惚けてたって事は、不可抗力なわけで……」

「うっさいわよ、赤面ピュアボーイ」

「ぬあつ……！」

見事に玉砕する。中々見事なネーミングセンスだった。

「……まあ。さっきの事は置いとくとして」

わざわざ物を横にどける動作をしてから、昴が言う。これ以上は話が進まないと判断しての事だ。それに、紅葉も一応従う形で一步下がる。

「ほら、勇吾。お膳立てしてやったんだ。ちゃんと聞きたいことは聞いて、言いたい事は言っておけ」

昴からのそのパスを受けて、勇吾は頷いた。すると昴も頷き返して

きて、紅葉と琴子を連れて部屋を出て行く。

紫亜と二人きりになる。

と　ふとそこで思い立つ。

そういえば楓の姿が見えないな、と。だが勇吾は、その思考を断ち切った。彼女とも昨日は色々あった。自分と顔を合わせたくないのかもしれない。

勇吾は思考を切り替え、表情を引き締めて、紫亜に向き直った。

胸中で、呟く。

(聞きたい事も、言いたいことも、山ほどある。だが、まず何よりも)

勇吾はその場で、頭を下げた。深い、お辞儀の体勢。

「……ごめん。俺は、紫亜に手を上げた。しかも、その時の事をまるで覚えちゃいないんだ。昴から、話だけ聞いてさ。……最低だよな。本当に　ごめん」

紫亜が驚いたのが、気配で知れた。

今ほど、自らを嫌悪した事はない。最低の行為を行い、それを覚えていないと言う最悪の自己。そしてその上、出来る事といえば頭を下げることだけ。

ああ、なんて　くだらない、クソ野郎。

なのに。自分はそんな最低の野郎なのに。掛けられた声は、とても優しかった。

「うん。そんなの、謝ることじゃ、ないよ」

「え？」

「……勝手に一人で出て行って、危ない目に遭ったのは私だから。勇吾君は、私を助けに来てくれたんでしょ？」

「……ああ」

「じゃあ、勇吾君が謝ることなんて、ないよ。……むしろ、謝らなきゃいけないのは、私……」

「……………」

黙って、先を促す。彼女が謝る理由など皆目検討がつかない。

紫亜はゆつくりと、口を開いた。

「……私ね、怖かったんだ」

「怖かった？」

「うん。勇吾君がいなくなるのが。誰かに盗られちゃうのが 例
えば、楓さんに、とか。それがたまらなく、怖かった」

「……………」

「自信がなくて。楓さんみたいにスタイルも良くないし、姉さんみたいに料理も出来ない。琴ちゃんみたいに元気いっぱいってわけでもない……そんな事を考えていたら、どんどん悲しくなってきた。

本当に、勇吾君は私の事、好きなのかなあって、そんな事まで思うようになつて」

紫亜は情けないよね、と苦笑して、続ける。

「そうしたら 楓さんに言われたの。『彼の横に立てるのは

きつと、守られているだけのお姫様ではないわ』って。堂々と、言われたの」

「……………そう、か」

まさか、紫亜に対しても動いていたとはな、と楓の行動力に内心舌を巻きつつ、そして昨日昴が言った紫亜の精神状態の的中率に寒気すら覚えながら、相槌を打つ。

「……正直、ああ、勝てないなあって、そう思った。私なんかじゃ、敵わない。守られているだけの私じゃ、届かない。そう思って

逃げようとしたの。色んな事から、ね」

でも、と言って、紫亜は目を伏せた。

「私は、それでも勇吾君が好き。そうも思った。逃げ出そうとしたくせに、図々しいくらいに、思った。そうしたら　ある女の子に言われたの。『でもそれは、今はまだ』でしょう』って」

「今は、まだ……」

「そう。今は、まだ。今の私じゃ届かないなら、届くまで努力すればいい。これから先を、大丈夫にしていけばいい。　その子のお陰で、ようやく気づけた」

言って、彼女は立ち上がった。そして座り込んでいる勇吾に向けて、手を差し出す。

それはまるで、交際を申し込む時のようだった。

空気が、変わった。二人の間に流れる空気が、はっきりと異質なものとへと流転していく。

それは酷く誠実な空気だった。それはどこまでも真摯な異質だった。

そして。そんな空気の中。彼女は真摯な眼差しで勇吾を見つめて、ゆっくりと　『告白』を始めた。

「だから　待っていて、くれますか？　私が飛び切りの『良い女』になるまで、私にとっての　『良い男』で、いてくれますか？」

それに　勇吾は苦笑した。それしか出来なかった。

ああもう、全く以って馬鹿らしい。俺は本物の馬鹿だ。よりによって、こんな事を彼女に言わせるなんて。それはむしろ、こちらの台詞だろうに。

畜生め。そんなもの、答えなんて決まっている。ああ、決まっているともな。

緒方勇吾は昔のままなんかじゃない。しっかりと変わっている。だって知らなかった。あの頃は、こんな感情なんて知らなかった。誰かを想う事の幸せを。自分にとつての『たった一人』がいる幸せなんて、知らなかったんだから。

勇吾は立ち上がった。不思議なことに、全身と頭の痛みはもう全く感じなかった。

浮かべるのは、いつもの笑みだ。どこか皮肉気な、しかし最も彼らしい笑み。

「惚れた女にそうまで言われて　断る理由なんざ、ねえな」

勇吾は差し出されている紫亜の手を取って、ゆっくりと引き寄せた。紫亜の体が、すっぽりと腕の中に納まる。

「あ……」

「でも、待つ必要なんてない。　文句なんざ誰にも言わせねえ。

今、たった今この腕の中にいる女が、世界で一番『良い女』だ。誰より隣に居て欲しい　『たった一人』なんだから、な」

腕の中から見上げるようにして見つめてくる紫亜に、勇吾は断言した。そして　この堅物にしては驚くべき事に、自分から、彼女の唇と己のそれとを　重ねた。

先程とは違う　とても、優しいキス。

紫亜は何も言わず、それを受け入れた。

時間にすれば数秒の、触れ合いが終わる。

再び見詰め合う。勇吾は、彼女の頭を軽く撫でて、言った。

「なあ、紫亜」

「……なに？」

「さっきの紫亜の言葉、一つだけ訂正しとく」

「……訂正？」

「ああ。紫亜は『良い女』で確定だけど、俺は『良い男』なんてもんじゃないから。どっちかつつと」

そこで言葉を区切って、勇吾はどこか悪戯っぽい表情を見せた。それから、心底楽しそうに、言う。

「『悪い男』だ」

それは、年中黒ずくめで皮肉屋な、けれど馬鹿みたいにまっすぐなこの男には　ぴったりの言葉だった。

第十九話：悪い男と美女と野獣「前編」（後書き）

なんだか途轍もなく間が開いてしまいました。

へっばこ物書きの龍之介です。

すいませんまた遅筆の病が……

書きたい事が多すぎて、逆に執筆が遅れる始末で、どうにかこうにか更新しました。

完結自体は必ずさせますので、もしも読んでいただいている方がいらっしやれば、なんとかもうしばらくお付き合いください。

では、また次回のあとがきで。

第十九話：悪い男と美女と野獣「後編」(前書き)

昴を中心に補足や今後の伏線を少々。

とりあえず、海編が今話で終了となります。
では、本編をどうぞ

第十九話：悪い男と美女と野獣「後編」

「やれやれ、何とか収まりそうだな」

差し当たって必要であろう処置を終えた事で僅かに気を緩め、昴は肩を竦めた。

(少なくとも、あいつらに関しては、もう心配はいらないだろう。

紫亜の話からすると、もう覚悟があるようだったからな。あとは元の鞘に納まるのを待っただけだ。 もつとも)

思考を途中で断ち切り、昴は視線を横に滑らせた。

(こっちは、少しばかり気を回した方が良さそうだがな)

そう愚痴るように呟く。その対象は、常よりもやや精彩を欠いた表情の楓だ。

彼女は勇吾が目を覚ます前に部屋から出ていた。その行動の理由は

概ね推測できている。

(まあ、間違いなく原因は勇吾だな。大方、振った振られたの話だろう。というか状況的にそれしかないか。……しかし、勇吾の奴ここ最近モテモテだな。『女神』の姫神姉妹の次は『寝取りの羽坂』が陥落とは)

この事実が学校の男どもの知る所になれば、また敵が増えるに違いない。これは人生に三回あると言われている『モテ期』なのだろうか。個人的には、単に女難の相が出てるだけではないかと邪推している昴である。

(まあ、それはそれとして。……どうフォローしたものかね) 思考する。正直なところ、楓とはそう親しくない。下手に動くのは逆効果だろう。かといって、直接勇吾にフォローさせるわけにもいくまい。振った相手に必要以上の気を回すのは、むしろ残酷な行動だろうから。そして、筋違いでもあるだろう。

まあ、それを言ったら、そもそも無関係であるところの昴がこの件に関して気を回す義理からして、筋は通らないのではあるが。

それでも昴が動こうとしているのは、単に、この件が勇吾によって引き起こされた事だからである。

昔から、勇吾の出来ない範囲の後始末や事後処理は昴の仕事なのだった。

その分、昴が対処しきれない荒事には、勇吾が必ず関与していく。互いに背中を預け合う者同士、長所と短所を補い合うのが、二人の間柄なのだ。

(……とはいえ、だ。今回は些か面倒だな。喧嘩の後始末なら軽い情報操作の類でどうとでもなるが、傷心の女ケアとなると、あまり経験がない)

人の心を抉るのは得意なんだが、とやや外道風味の事を思い浮かべて、昴は苦笑した。

昴の武器は身体能力というよりも、むしろ言葉や頭脳である。思考速度の速さと飛び抜けた洞察力で相手の弱点を探り、あとはあらゆる手段でもってそこを攻める。

喧嘩にしても、まずは相手に付け入る隙がないか探ってから行動を起こすタイプだ。

つまるところ、普通に悪い男である。少なくとも、正統派ではない。

(さて、どうするか。そういや……一月前は紅葉も似たような状況だったよな。あの時は、気が済むまで泣かせたんだっただ。胸を貸して、だが)

今回もその手が使えないかと思案して、二秒で諦めた。

駄目だ、どう考えても羽坂楓が男の胸で泣くキャラとは思えない。

それもさして親しくない自分では、尚更である。

他にも何かないだろうかと、昴は思考を深めた。十秒ほどで、二十七通り思いつく。そして即座に全てを却下した。どれも、昴と楓の関わりの浅さに起因してのボツだった。

となると、昴自身に出来る事はないという結果に落ち着いてしまう。可能な事といえば精々、紅葉を消しかけるくらいだ。

(ま、妥当な線か。友達で女同士、しかも同じ相手に失恋してる。酷といえば酷だが……何もしないよりは好転するだろう)

そう決定して、昴は少し離れた所にいる紅葉に、事情を説明しようと手招きを

「何を考えているの?」

する前に、楓に声をかけられた。思わず呻き声でも上げそうになるが、表情には一切出さない。鋼の精神力は健在だった。

「いや、別に」

「嘘ばかり。さつきから、ちらちらこっちを見てたじゃない」
誤魔化しがまるで通じなかった。その上、視線まで気取られていたらしい。

(おいおい、見てたといつても、動かしてたのは目線だけだぞ。何て勘してやがる)

内心舌を巻きつつ、昴はいつものように笑みを浮かべて見せた。長い間付け続けてきたせいも、既に素顔の一部になってしまった仮面の表情。その事を知るのは、自分から話してある勇吾一人だ。だが、

「その笑い方、やめたらどう？　少なくとも、私には通じないから」

あつさりと、仮面を見破られた。

それに、昴は珍しく動揺した。表情にも出たかもしれない。

(……おいおい。おいおいおいおい。何だ、これは？　俺ら、会って一日だぞ？　勇吾くらい分かり易けりや話は別だが、よりによって俺の仮面が通じないだと？　何て女だ、こいつ)

正直、見くびってたな　そう付け加えつつ、昴は苦笑というにはやや苦味の足りない表情を浮かべた。こちらは仮面ではなく、素の表情だった。

それから、言われたとおりに笑みを消す。すると、途端に昴の雰囲気に変質した。

別人になったといつても良いような、急激な変化だった。

「　あら。貴方、そっちの方が素敵ね。少なくとも私は好きよ、その顔」

楓は微笑して、そう口にした。やはり精彩を欠いてはいるが、それでも随分と華やかではある。

「……そいつはどうも」

昴は静かに返答した。それから、少し後悔する。

(やれやれ。この顔を見せるのは、あまり好きじゃないんだけどな)

昴は意識して笑みを浮かべておかないと、自分の表情が酷薄なものになる事を知っていた。

素の表情が、どうしようもなく希薄なのである。

それはどこか能面を思わせ、人によっては不気味さを覚えるだろう。元の顔立ちが整っているせいでもある。

この顔のせいで、幼い頃は随分と酷い目にあつた。勇吾が瞳の色を理由にいじめの対象になったように、昴はこの顔が足枷だったのだ。

もつとも、昴の場合は学校ではなく、家庭内で酷い事になっていただけだ。

飲んだくれの父親に、『ツラが気に入らない』と何度殴られた事か。昴の洞察力は、この時身についたものだった。父親に殴られないためには、相手の機嫌の移り変わりを随時知っておく必要があつたのだ。

その為に人の顔色を伺う癖をつけ、結果的に人の精神状態を知れるようになった。ついでに、自分の本心を悟らせない技術も身についた。

それが昴の歪みだった。感情を制御し、本心をひた隠して生きていく。当時小学生だった者の生き方ではない。

勇吾との出会いがなければ、ロクな人間になつていなかっただろう。昴は今でもそう思っている。本人に言えば、『さあ、どうだろうな』とでも答えるだろうが。

昴の仮面の表情は、そうして曲がりなりにも苦勞して得た技能である。それが会つて一日の人間に見破られたのだから、昴が落胆するのも無理はない。

昴の表情を見つめていた楓は、ふとバツが悪そうな顔になった。それから、口を開く。

「……ごめんなさい。余計な事を言ったわね。貴方、一応私の心配をしてくれたんでしょ？」

「否定はしないけどな。純粹に心配しただけ、とは言いにくい」
「正直ね」

楓は、笑ったようだった。それに昴は肩を竦めて見せる。

この辺りで、昴はようやく理解を得ていた。楓が何故昴に声をかけたのか。そして、わざわざ見透かすような言動をしたわけも。

「……どうやら、余程プライドが高いらしいな。他人に弱味を見せるのが嫌いとみえる。それに、同情も好きじゃないらしい」

つまりは、そういう事だ。昴が気を回して紅葉を消しかけようとした動きを察知して、釘を差したのだろう。

要するに

「悪いな。どうやら、余計な世話だったようだ。自分で立ち直れる奴に手を差し伸べたって、意味はない。むしろ邪魔にすらなるか」

彼女は、昴が手を貸すまでもなく、自分で立とうとしている。ただそれだけの事だ。

「ええ、そうね。失恋なんて初めてだけれど、それでも自分の事くらい自分でしたいもの。紫亜ちゃんに大見得切った手前もあるし、ね。守られてるだけのお姫様は御免よ」

「やれやれ。紅葉もそうだが、羽坂も大したタマだよ。『良い女』になりそうだ」

「失礼ね。私は今でも十分『良い女』のつもりなのだけれど？」

「……くく、それは失礼。 本当に大したタマだな、あんだ。惚れそうだ」

昴は喉の奥でくぐもった声を出した。笑いの衝動だった。思わずつまらない軽口まで叩いてしまふ。

それに楓も、軽く返してくる。彼女なりの努力なのだろう。とてもこんな馬鹿話に付き合う心境ではないはずだが、あえて軽口に乗る事で自分を元のラインにまで引き上げようとしている。

「惚れても良いけど、私は安くないわよ。特に今は、勇吾君の御蔭で価格が高騰してるもの」

「それは残念」

言って、昴は表情を元に戻した。酷薄な様相が雰囲気ごと、陽気なものへと様変わりする。

「あら、もう戻っちゃうの？ さっきの方が好みなのに」

「最近じゃ、こっちの方が素顔なんでね。あっちのはむしろ疲れるんだ。仏頂面は健康に悪いしな」

へらへら笑って、昴は踵を返した。これなら、楓に対してのフォロ―など必要ない。

万事が概ね丸く収まったのだ。

と 振り返った昴を、紅葉が手招きした。特に迷う事もなく、近づいてみる。

「話は終わったの？」

どうやら、楓との会話が終わるのを待っていたらしい。

昴は黙って頷いた。

「そ。なら良いわ。 あの娘も、まあ、それなりに大丈夫みたいだし」

私は結構引きずったんだけどな、と小さく付け加えて、紅葉は肩を竦めた。彼女も彼女で、楓の置かれている状況には察しがついてい

たらしい。昴が注射する必要はなさそうだった。

やれやれ、と昴はため息を吐いた。まったく、らしくない。楓には仮面を見破られ、紅葉が気付いていることを把握できず、昨日は苦手分野の肉体労働を盛大にやらかした。まったくもって、らしくない。

「あ、それはそうとさ」

少し自嘲気味な気分になっていた昴に、紅葉から声がかかった。彼女は何かを思い出すように虚空を見上げてから、言う。

「ちよつと疑問があるのよね。昨日の事で」

「何だ？」

「あのさ。結局、昨日勇吾は最後、紫亜のキスで止まったじゃない？ あれだけ豪快に蹴飛ばされても起き上がったのに、何だっただれで止まったわけ？」

ああそれか、と、昴は頷いた。確かに、疑問といえば疑問だろう。事が済んだ今となっては、解答を用意するのはあまり意味のある事ではないにしろ、別に解いてはならないわけではない。

昴は一拍置いてから、ふむ、と呟いた。

「よし。昨晚から、どうもらしくない事が続いているし、ここらでいつものペースに戻っておくのも良いかもな。『俺らしく』、それについて理屈を付けて説明しようか」

昴は紅葉が聞く体勢になったのを確認してから、人差し指を立てて、「実際の所、勇吾は俺の蹴りを受けた時点で、肉体的には限界をとつくに迎えてたんだ。

あいつは元々、体調を崩していたからな。それは運んでくる時に確認した。異常に体が熱を持ってたよ。つまり、風邪か何かで高熱を出してたわけだ。それであれだけ暴れて、しかも一晩寝たら当然

のように治ってやがったんだから、これに関しては呆れるしかない」

壁にもたれ掛かりながら、続ける。

「つまり、立ち上がったあいつを支えていたのは、気力のみだったわけだ。ひたすら気を張る事で、どうにか意識を保っていたんだな。そして、ボロボロの意識で『敵』　まあ、俺だな　を見つけて、攻撃しようとした。その時点で、あいつの気力も、多分底を尽きかけていた筈だ。　で、そこで現れたのが、紫亜だった」

「うん。それで？」

「ああ、ここからが話の肝だ。

あいつには、これまでの膨大な戦闘経験から、一つの常識が作られているんだ。

つまり、戦闘中に起こりうる事、という括りでの常識だ。それは無意識下でも働く。だから、昨日の勇吾もその常識の範囲でしか行動しなかった。

……そして、そうした状態で、『戦闘中に有り得ない事』　つまり紫亜のキスだな。これが起こればどうなるか。答えは簡単。勇吾を支えている気力が底を尽くすわけだ」

「……つまり、もしんどくてたままない、ってところに訳判らない事されてびっくりしてばたんきゅー、と。こういうわけね？」

「……ま、身も蓋もなく言えばそうだ」

『らしさ』を取り戻した感覚でもあるのか、ややすっきりした表情の鼻に、紅葉はげんなりとして言った。

自分で言っておいてなんだが、あまりにも釈然としない真相である。紫亜の行動が『キス』であった意味がまるでない。

「しかし、だ」

「……しかし？」

と、やや曇りがちな表情の紅葉に、鼻が再び説明口調で口を開いた。

「別に、良いんじゃないかとも思うよ」

「何が？」

「相手が紫亜で、キスだったから勇吾は止まった。それで良い気もするよ、俺は。別に誰も困らないしな」

気楽そうに、まさしく『芹沢昂らしい』物言いで、彼は告げた。

そして

「かくして獣の姿の王子様は、お姫様のキスで元の姿に戻れましたとき。めでたしめでたし。理屈も何もありませんが、こっちの方がすつきりはする。だろ？」

妙に器用なウインクを一つ飛ばして、紅葉にそう同意を求めた。もちろん、紅葉の答えも、決まりきっていた。

「そうね。私も、そっちの方が好き」

そう。少しくらい世界がロマンティックでも、誰も困りはしないのだ。

めでたしめでたしで終わる事ができれば、多分、きっと、それで良い。

第十九話：悪い男と美女と野獣「後編」（後書き）

海編終了。長かった。超長かった。

無駄な描写が多すぎるのか、単に私が度を越えた遅筆なのか……ど
つちもかも。

へっぽこ物書きの龍之介です。

今回は、作者的には第二の主人公扱いの昴を中心に行ってみました。
いや、色々と楽しい感じですよ。

さて、次回からは軽いお話を少し挟みつつ、師匠襲来編に繋げてい
こうかと思っております。

では、また次回のあとがきで

第二十話：追いかけてくる過去（前書き）

独白：勇吾

寂しがり過去の過去が、俺を追いかけてきた。置き去りにしてきた昔が。刻んできた足跡が。呪いのように、俺に追いつがってくる。

再会した中学時代の後輩。俺の闇を知っている、身内以外の『他人』だ。

俺はどうすればいい。向き合つべきなのか？それとも、また置き去りにして行けば良いのか？誰か……誰か教えてくれ……

第二十話：追いかけてくる過去

それは　海への旅行から帰ってきた、その翌日の事だった。

啞えタバコに、全身黒ずくめの格好。数年前からさして変わっていない私服姿で、勇吾はとある場所に来ていた。

通称、桜通り。ダーツやビリヤードなどの遊び場が数多くあり、シヨッピングスポットも吸い寄せられるように集まってきた場所だ。いくぶん色々なものが集まり過ぎて、カオスな雰囲気にもなっている。そして、夜にはいわゆる『いかかわしい店』が活発に活動を始める。つまりとところ、昼であろうと夜であろうと活気が消える事のない場所である。

そしてそういった土地柄上、嫌が応にも集まってくるものがある。チンピラやヤクザの類だ。

今勇吾がいる所は、通称『黒桜』と呼ばれている。この桜通りの中でも、特にそういった人種の多い場所だった。

昔はともかく、ここ最近はあまり出入りしていなかったのだが、今日は少しばかり用向きがあって、久しぶりに足を踏み入れたのである。

その用向きというのは

* * * * *

正面から振り下ろされる鉄パイプに対して、勇吾は酷く落ち着いた
気分で備えていた。ごく小

さい動きで体を鉄パイプの軌道から逸らし、そのまますり足で小さ
く踏み込む。

攻撃を避けられた事にか、あるいは反撃を予期しての事か。相手の
表情に驚愕が浮かぶ。だがそれは、勇吾が放った肘打ちに痛打され
る事によって苦悶へと変わった。悲鳴を上げて、相手が吹き飛んで
いく。

それをやはり落ち着いたまま見やって、勇吾はふと予感を覚えて、
前方へと跳んだ。

途端に、後方を何かが通り過ぎる音がした。風切り音だった。

振り返り、確認する。もう一人、今しがた打ち倒した者とは別の男
が、ただし同じように鉄パイプを振り下ろした体勢でそこにいた。

「…………ツ!？」

やはりその男も、驚いたようだった。それはそうだろう。見もせず
に背後からの攻撃を避けられたのだから。

勇吾はそれには構わず、前蹴りを繰り返した。ヤクザそのものの乱
暴な仕草で蹴り飛ばされ、男はもんどりうって昏倒する。

それを見送って、勇吾は徐に頷いた。

「…………ふーむ。やっぱり、前とは感覚が違うな」

喧嘩を終えた直後とは思えない気楽な態度で、そう呟いた。
続いて軽く腕を回して体の調子を整えつつ、考え込む。

「どうやら、思った通り感覚がずれてるみたいだな。これは…………昔
の感覚じゃねえか」

死角からの攻撃に対して、予感だけで回避できたあの対応。あれは特に意識しての事ではなかった。つまり、まるっきりの勘だ。そして、その勘は今の勇吾からは失われているはずの技能である。

この『勘』というのは、経験則とも言い換えられる。曖昧な所ではその場の『闘争の空気』、細かい所では単純に『相手の動き』に反応して、膨大な戦闘経験から情報を引き出し、即座に最良の対応をとれる、いわば『戦士としての資質』である。

格闘家や喧嘩屋にとっては、これ以上ない武器だろう。

達人と言われる人物が傑出して強いのも、この経験則があるからだ
というのは、『師匠』の弁である。

かつて、勇吾はこの経験則を扱えた。毎日毎日ひたすら繰り返される喧嘩と本人の才によって、自然に芽生えてしまったのだ。もつとも、彼自身の自覚では、『なんとなく相手の動きがわかる』といった程度のものでしかなかったのだが。

ともあれ。彼が度を越えて強かったのは、肉体の強さの他に、こういった背景もあつたのである。

だが、前述した通り、この経験則という奴は、今の勇吾にはないはずのものだった。

『師匠』に師事し、ただ振り回していただけただけの拳を『技術』へと昇華した勇吾は、次第に闇雲な喧嘩をやめて言ったのである。『師匠』によって、精神的にも救われた事も少なからず影響していただろう。それに呼応して、『経験則』もなりを潜めていった。

だというのに、旅行から帰ってきてふと気付いたら、何か懐かしい感覚を体にしたのだ。

無意識の内に、背後や死角への警戒を働かせていた。つまりは、『闘争の空気』を感じ取るうと感受性を高めていたという事だ。この現象は『経験則』に付随して起こるものだと、勇吾は知っている。

「わっかんねえなあ。高校に入った頃から、この感覚はほとんど無くなってたつてのに。何だつて急に戻つてやがるんだか。……海で感情レベルの方を戻しちまったから、そつちに引つ張られでもしたのかね？」

正直、昔の自分が持っていた感覚を取り戻したというのは、あまり気分の良い事ではない。

勇吾は過去の自分が嫌いなのだ。なので過去の感覚も、当然嫌いなのである。

だが、かといって何の確認もしないままというのも気分が悪い。この場所に来た用向きというのは、『経験則』が戻っているのかどうかの確認の為なのだった。

喧嘩を売ってくる者には事欠かないので、うつつけの場所なのだ、ここは。

と

「いて」

勇吾は唐突に、そんな事を呟いた。

何故だろう。背中が痛い。それも、まるで長くて細い棒か何かで殴られたかのように痛い。その割りに、眩きには緊張感がなかったが、勇吾は振り返った。すると、鉄パイプを持った男が一人、恐怖に歪んだ表情で立っていた。

「ひっ！」

目が合うと、男は引きつったような声を上げた。

と、そこで勇吾はふと理解した。さっき倒したと思っていた男が、実はまだ動けたらしい。そして、ぼけつと突っ立っている勇吾に、背後から殴りかかったと。

どうやら、『経験則』はまだ完全に戻ってきたわけではないらしい。随分と精度に誤差があるようでもある。

成る程成る程。背中が痛いはずである。長くて細い鉄パイプで殴られたのだから。

勇吾は納得して、何故かにつこりと笑みを浮かべた。そのまま、男に歩み寄る。

「いてえええじゃねえええかあああ！」

「ひいひいひいひい！」

勇吾は笑ったまま、わざとおどろおどろしい物言いをしつつ、片手で男の胸座を掴み上げた。それから、空いている方の手でびしりと男を指差して、

「あのな、相手が俺だったから良いようなものの、普通の奴だったら下手すりゃ背骨折れてんぞ？ 喧嘩をするなどは言わんが、そういう硬い上加減の利きにくい得物を使うなら、狙うのは手足にしとけ。それなら死にはしないし、若い人間なら治りも早い。わかったか？」

軽いレクチャーをして、掴んでいた胸座を離してやった。まあ、殴られたお陰でどの程度『経験則』が戻っているのか目途がついたから、礼代わりにボコるのはやめてやろうという配慮である。

それに、男はがくがくと頷くと、完全に笑っている膝で一目散に逃げ去った。

「うむ。俺も大人になったなあ。昔なら問答無用で半殺しにしたもんだ」

満足げに呟いて、勇吾は歩き出した。確認したい事は確認したし、長居して面白い所ではない。

と、

「あ、待ってくださいですう！」

歩き去ろうとする勇吾に、その声がかげられた。そういえば、ここにはもう一人いたんだっとな、と思い出して、勇吾は首だけで振り返った。

視界に映ったのは、一人の少女だった。その容姿は、なるほど、中々に整っている。美少女だといってもそうそう文句は出ないだろう。ただし、その体にはあまりというか、ほとんど凹凸がなかった。

これで身長が高ければスレンダーといえるのだが、生憎と彼女は小柄である。

つまるところ、いかがわしい事をするには少々アレな体付きだった。まあ、あの男たちは特殊な性癖でもあったのだろう。そういう需要も、世の中にはあるのだ。

そして実は、この少女こそが、今の喧嘩の発端なのである。

そもそも、勇吾がこの場所で一戦交えたのは、何もいきなり喧嘩を売ったわけではない。

ちゃんと大義名分はあるのである。

適当にぶらついていれば、その内誰かがカツアゲでもしにくるだろうと思っていた勇吾は、『黒桜』周辺をそのものずばりぶらついていた。

そして、ベッタベタのイベントに遭遇したのである。随分と幼い

小学校高学年くらいだろうか　少女が、先程撃退した男たちに

連れ去られようとしていたのだ。恐らく、路地裏にでも連れ込もうとしたのだろう。少女は抵抗しているようだったが、体格差がありすぎて意味ある抵抗にはなっていなかった。

それを見た人間の取る行動は、概ね二つだろう。巻き込まれるのを恐れて無視するか、青い正義感の下に助けに入るか。一般人は、恐らく前者を選ぶはずだ。

まあ、見捨てるにしろ助けるにしろ、普通は少女の行く末を心配するくらいはするだろう。

だがこの外道は、『あ、良い大義名分見つけ』とまず手を打ち鳴らし、それからちらりと『まあ、ついでに助けておくか』と取ってつけたような感想を持ったのだった。自分の身内でない者には、とことん執着のない男である。

具体的に起こした行動としては、『なあなあ、あんたら。ちよつと実験に付き合ってくれないか？』と持ちかけて、怪しんだ男たちが鉄パイプを拾って殴りかかって来た所を振り返りにした。それが事の顛末である。

つまるところ、今声をかけてきたのは、その助けられた少女である。勇吾的にはただの喧嘩の理由だが。

肩越しに目の合った少女は、

「あのう、」

と何かを言いかけた。だが勇吾は、先んじて言葉を発しておく。

「ああ、礼なら要らんぞ。『せめてお名前だけでも』とかも無しな。『名乗るほどの者ではない』なんて空々しい事、言いたかねえし」
そして、言うだけ言ったらさっさと歩き出そうとする。海での楓の一件から、勇吾は決めている事があった。それは、無闇にフラグを立てるのはやめておこうという事である。

誰に何を言われようが紫亜一直線を譲る気がない勇吾としては、フラグの乱立がなにより厄介だ。誰かに想われていても、それに答える気など毛ほどもないのだから、最初からそうならないように努める。勇吾なりの誠意だった。

それに、何より最近女難っぱいしな、とも思っている。

なので、この場もこの少女とは不必要に話さず、とっとと帰るべきだろう。

そう判断して、駆け足でこの場を立ち去ろうと地面を蹴って

「だから、待ってくださいってばあー！」

「ぐえ」

襟首を掴まれて首が絞まり、勇吾は蛙のような呻き声を上げるのだった。

「うおおおお、く、首が……」

咳き込みそうになるのを堪えつつ、勇吾は呟いた。この女、なんてエキセントリックな真似をしてくれやがるんだ、と。

「あ、あのなあ……いきなり何だっただ？」

「あ、すみません。『先輩』って丈夫だから、つい。苦しかったです？」

「丈夫だろうが頑丈だろうが、首なんぞ絞められりゃ苦しいに決まっつて……あん？先輩？」

ふと明らかに間違ったワードに気付いて、勇吾は聞き返した。何だっつて初対面の少女に『先輩』などと呼ばねばならないのか。甚だ疑問である。

「あー、その顔、気付いてませんです？ むー、悲しいです虚しいです。私はすぐに気付いたのにー」

「ああ？ 何だよ。んな不満顔されたって俺にやどうしようもないぞ」

「むむむ、まだ気付かないんです？ 相変わらずトリ頭です緒方先輩」

「だ・れ・が・ト・リ・あ・た・ま・だ」

すらすらとやり取りが成立する事に違和感を感じる。この少女とは初対面のはずなのだが、どうしてこうも会話のテンポがスムーズなのだろうか。

疑問顔の勇吾に、少女はにこりと笑い、何故だか胸を張って見せた。その姿に、勇吾はふと記憶の隅の方が刺激されるのを感じていた。そうだ。自分はこの少女を知っている。この気の抜けた話し方を知っている。この無闇に無邪気な笑みを 知っている。

「もう、しょうがない人です。仕方がないので、トリ頭先輩の為に、自己紹介するですよ。 中学の時、空手部のマネージャーだった、」

「 泉、^{いずみ} だな。 泉 ^{すず} 鈴」

彼女の言葉の途中で思い出した名を、告げる。すると彼女はふわりと笑って、

「はいです。お久しぶりですね、先輩っ！」
ぶつかるようにして、抱きついてきた。

「ああ、そうだな。…………… 思わず忘れちゃうくらいには、久しぶりだ」

勇吾は呟いた。顔には苦笑を貼り付けながら。抵抗することなく鈴の抱擁を受け止めて、ただ内心で言葉を漏らす。

まったく、何てタイミングだ。昨日は感情。今日は『経験則』が戻ってきて、ついでに偶然会った知り合いは昔の後輩だった。それなりに 身内とは言えないにしろ、構ってはいたこの後輩。これはいつたい、何の偶然だろうか。

過去。昔。残して来た足跡。

感情にしろ『経験則』にしろこの鈴にしろ、それらが関与している。

これではまるで、過去が追いかけてきたようではないか。忘れるんじゃないよ、と。逃げるんじゃないよ、と。

そう。それはまるで、呪いのように。

* * * * *

「あつゝ幸せですう」

言葉通りやたらと幸せそうな顔でパフェを頼張る元後輩を眺めやっ
て、勇吾は嘆息を一つ漏らした。それから、自分の注文した分であ
るコーヒーに口を付ける。

(何やってんだろうな、俺……)

ひたすらに苦い液体を口の中で転がしながら、しみじみと呟く。

あれから勇吾は、再会した中学時代の後輩である泉鈴に連れられて、
桜通りにある喫茶店に来ていた。

『このまま別れるなんて、せっかく会ったのに勿体無いですう』と
言う鈴に押し切られた形だ。どうしてこう、自分という奴はNOが
言えないのだろうか。そんな事をふと考える。

（つーか、いくら外見がこんなんだつつつても、こいつだつて女なんだよな。しかも年はいつこ違うだけだし。……こづいづいのも、浮気に入ったりすんのかね）

彼女しあが不在である今、女と二人きりで会っているというのは、少々後ろ暗しんかったりする。

勇吾は本来なら、今日は紫亜と遊ぶ予定だったのだが、紫亜は今日、先日の旅行中に世話になったという少女に会いに行っているのだ。

勇吾とも一応の面識があるその少女は、確か麻衣と名乗っていたはずである。

何でも、麻衣の一言にえらく勇気付けられたとかで、是非とも改めて礼を言いたいのだという。

更に言えば、結構相性は良さそうなので、友達にもなりたいそうな旅行の最後では結構いい雰囲気になったから、今日は少し期待していたというか楽しくなりそうだと思っていた勇吾も、恩を返しに行くという紫亜の心がけには頷きを帰す他なかった。

一緒に旅行に行っていた他のメンバーはそれぞれの日常に戻って行ったし、昴も今日は疲れているらしく、勇吾の家まで来ておいてあっさり寝てしまった。

お陰でぼっかりと予定の空いてしまった勇吾は、折角なので自分の体起こっている違和感の事を確認しに来ていた、というわけである。

そんなわけで、恋人たる紫亜は現在不在。でもって勇吾は美少女と面会中。

よくよく考えると、後ろ暗いどころかかなりデンジャラスな予感がある。

その辺りどうなんだろうと、勇吾は検討を始めた。
キーワードをいくつか思い浮かべてみる。

(久しぶりに会った後輩。遅い発育を無視すりゃ、可愛い事には違いない。それに……昔は結構懐かれていた気もするな。俺も……まあ、そこそこ可愛がってたような。少なくとも、嫌いじゃなかった。あれ？ 駄目くさいぞこれ。傍^{はた}から見りゃ浮気の始まりじゃねえか)

知識の出所そのものは夏休み中に見た昼ドラという不確かなものだが、勇吾の結論はそう間違ったものではない。

しかも、その場合勇吾は浮気者の他にもロリコンという烙印を押される事になる。実際は年齢が一つ違うだけだが、鈴の外見年齢は中学生程度だ。それでも大分樂觀的に見積もったものである。見ようによっては小学生に見えなくもないのだし。

(あかん。これはあかんで)

意味もなく関西弁になったりしながら、勇吾は背中に嫌な汗をかいた。
と、

「先輩？」

黙り込む勇吾に、鈴が首を傾げて語りかけてくる。それでもパフエをかき混ぜる手は止まっていないが。

「どうしたんですか？ お腹、痛いんです？」

「ああ、いや。何でもない。少し馬鹿な事を考えてただけだ」

「あははー。何を言ってるんです。先輩はいつだってお馬鹿じゃありませんか」

「……………お前、俺を何だと思ってるんだ？」

さりげなく馬鹿にされて、勇吾はこめかみを引き攣らせた。

そういえば、この元後輩はいつもこんな感じだった気がする。妙に懐いてくるわりに、あっけらかんと人を馬鹿扱いするのである。そ

んなに自分は馬鹿に見えるのだろうか。だとすれば泣けてくる。実際結構な馬鹿者なので、声を大にして否定できないのが余計に泣けてくる。

鈴は勇吾の問いに、あっさりと答えてきた。

「ほえ？ お馬鹿な先輩だと思ってるですが、駄目です？」

「……いや、もう良いや。うん。聞いた俺が馬鹿だった。うう……」
普通に馬鹿だと言われて、流石にへこんだ。しかも自分でも馬鹿と言ってしまったって、二重にへこむ。

「……まあ良いか。馬鹿だのアホだの言われんのは今に始まったことじゃねえし。それより、泉。聞きたいことがある」

「はいです」

鈴が頷く。勇吾は行儀悪くテーブルに片肘を付くと、とんとんと逆の手の人差し指でテーブルを叩いた。

「正直、あんまり口出しする気はねえんだがな。それでも気になるから聞いとく。お前、『黒桜』なんかで何してたんだ？」

疑問を口にして、勇吾は鈴を見やった。

『黒桜』は、こんな小娘が理由もなくうるついて良い場所ではない。仮に何か理由があるとしても、一人では絶対に入らせてはならない場所だ。

彼女は相変わらずパフェと格闘しながら、答えてくる。

「えつとですねえ。ちよつと、やんごとなき事情がありましたですね。ただ今絶賛家出中なのです」

「家出？」

勇吾は聞き返した。疑問に対する答えではないが、聞き捨てならぬのも確かだ。

「はいです。今日で一週間目なのです」

「一週間？ 小娘の家出にしちゃ、結構長めだな。友達の家にも泊まってたのか？」

「ピンポンなのです。でもですね、流石にいつまでもお世話にはなれませんが、そのお友達の所からは今朝出てきたです。それで、次

の宿を探そうと桜通りに来てみたのですが……」

「慣れてねえ道なもんだから、迷っちゃったわけだ。通い慣れねえ奴にありがちなパターンだな。でもって、そういう奴は大概えらい目に遭って泣く羽目になる」

かなり道が複雑な桜通りでは、迷子になる者は少ない。そして、そのまま運悪く『黒桜』にまでたどり着いてしまう者もまた、決して少なくはないのだった。

「またまたピンポンなのです。先輩、冴えてるですね」

「お前な。俺がたまたま助けに入ったから良かったものの、あのままだったら酷い事になってたぞ。何そんな気楽にしてんだよ」

「過ぎた事を憂いても仕方ないです。私は前向きなのが取り柄ですのー」

えへへー、と気の抜けた笑み。この馬鹿たれ、と言いかけて、勇吾は口をつぐんだ。

（そっぴや、そっぴやだったな。こいつは昔からずっとこんなんだ。今更どうこう言っても、それこそ仕方ねえ）
やれやれ、と呟く。

「……………で、お前これからどうすんだ？」

勇吾は今度は、別の事を聞いた。続けて、『行く当てはあるのか』と言おうとする。

そこで、気づいた。

パフェを突付く鈴の顔にクリームが付いているのを。勇吾は思わずため息を吐いた。言おうとした言葉が霧散していく。

勇吾はもう一度ため息を吐くと、鈴に向けて手招きした。

「……………はあ。おい、泉。ちょっと来い」

「……………？」

鈴は不思議そうな顔で首を傾げたが、素直にパフェの器を持って、勇吾の対面の席から隣へと移動してきた。

「おら、顔貸せ。それと、良いつて言うまで動くなよ」

勇吾は言つと、備え付けの紙ナプキンを手に取り、クリームでベタになつてゐる鈴の口元を拭いてやった。その間、鈴は言われた通りにじつとしている。

「もう良いぞ。……どうした？」

手を離しても動こうとしない鈴に、勇吾は怪訝な声を出す。鈴はじつと円らかな瞳で勇吾を見上げると、ぽつりと言った。

「先輩、変わったです」

「……そうか？」

ピンと来なくて、聞き返す。鈴は大きく頷いた。

「はいです。とつても、とつても優しくなりました。昔はもつと……周りに興味がなくて、目つきもギラギラしてたです。雰囲気が……荒んでたです。」

きつと昔の先輩なら、私の顔にクリームが付いていようと血が付いていようと、気にしなかつたです。でもでも、今の先輩は優しく拭いてくれたです！ 雰囲気だつてあつたかくて、優しいです！」

鈴はやけに熱っぽく力説した。正直な所、『優しい』などという自覚は欠片もないが、こつまで言われるとそうなのかもしれないと思えてくる。なので勇吾は、今度は肯定の意味で『そうか』と言おうとした。

が、

「そして、お馬鹿がパワーアップした気もするです！」

「最後の一言でますます『そうか？』つて気分なんだが」

思わず、呻く。それから、鈴の頭にぽんと手のひらを被せた。「ほえ？」と鈴が暢気な声を上げるが、無視する。そして、目を瞑つた。

(……) そうか。そうだったろうな。『きつとクリームが付いていようと、血が付いていようと気にしなかつた』。確かにそうだっただ

ろう。あの頃は、身内以外は徹底してどうでも良かった。俺がそういう人間だったのは間違いない。本質的な所で歪んでやがるんだ。だが……今は、どうなんだろうな？)

たかが元後輩の口元に付いたクリームを気にして、あまつさえ拭いてやって。気まぐれというわけでもない。もう一度鈴が口元をクリームで汚せば、きつと自分は苦笑でもしながら、また拭いてやるんだろう。

そんなもの、どう考えても勇吾のキャラではないというのに。

嘆息する。深く深く嘆息する。無意識に懐に手を差し入れ、手探りで煙草を取り出した。一本取り出して口に啜える。手入れとオイルの補給を怠っていないジツポライターで火を着けて、大きく一呼吸。紫煙がゆつくりと天井に昇っていくのを眺めやる。

それから、ふと思いついたように、

「……なあ。煙草、吸っても良いか？」

「あはー。やっぱりパワーアップお馬鹿さんですう。そういうのは、聞いてから吸うものですよ？」

「は。そりゃそうだ」

薄く笑って、そう呟く。もう、それで良いかと勇吾は思った。

自分が変わったという事に違和感を感じるのも。気遣いなんてキャラじゃない事をしてしまうのも。

きつとどちらも、馬鹿だからそうなるんだろう。昔よりも更に馬鹿になっっているからだろう。

それで『優しくなった』なんて言われるのなら、別に構いはしない。

(……少なくとも、悪い気はしねえ。なら、それで十分だ)

不思議なくらい穏やかな気分で、勇吾はそう呟いた。

そして

「なあ、泉。もし、行く当てが無いんなら
鈴の頭の上にある手を軽く撫でるように動かしながら、

「俺の家、泊まってくか？」
気が付いたら、そう口にしていた。

第二十話：追いかけてくる過去（後書き）

どうも、自分でも更新速度にびっくりしているへっぽこ物書きの龍之介です。

最近、どうも私のこの作品に対する考え方が変わったような気がしてなりません。

最初はノリだけで書いているお馬鹿小説のつもりだったんですが……今は勇吾の成長物語の度合いが強いです。

もちろん、馬鹿なノリもやめませんが。

さて、今回から師匠襲来編の前菜として、元後輩再会編を始めました。話数的には五話かそこらで終わるかと思えます。……多分。

では、また次回のがきで。

第二十一話：二匹の野良犬、吠える鏡像（前書き）

独白：?????

俺は自分がまっとうな大人だと思っただ事がない。
ただ、子供だとも思っていなかった。

しかし どうやら、目の前にいるこの存在を受け入れられない程
度には、俺は子供であつたらしい。
忌々しい事だ。これではまるで、鏡に映る己の姿に吠える犬のよう
ではないか。

そう、この小僧は。確かに俺の鏡像だ。
脳髓に獣を飼っている、俺の同類だ。

それを理解できるのが 堪らなく忌まわしい。

第二十一話：二匹の野良犬、吠える鏡像

(……あー、こりやちよつと失敗したかもなあ)

勇吾は少しばかり苦い表情を浮かべつつ、心の中で呟いた。後悔とまではいかないものの、やめときゃよかったかなあ、くらいには思う。

こういう気分の際は、右手で頭を掻くのが勇吾の癖なのだが、今はその右手が塞がっているので、仕方なく左手を使う。利き手ではないせいか、少し違和感があった。

「おっ泊まり、おっ泊まりっ。先輩のお家でおっ泊まりっ」

すぐ隣から、奇妙極まりない即興の歌が聞こえてくる。えらくはしやいでいる鈴のものだ。ニコニコ顔の彼女の左手は、勇吾の右手をしつかりと握っている。

(……ったく。能天気なツラしやがって。……まあ、黙ってそれに付き合ってる俺も俺か)

鈴はついに、スキップまで始めた。手の繋がっている勇吾はやれやれと苦笑いだ。元々歩幅が違うので、少し歩調を速めて、彼女の調子に合わせてやる。何がそこまで嬉しいのかは判りかねたが、こういう姿を見ると、勇吾としてはそう悪い気はしなくなってくる。

結局の所、勇吾の先ほどの誘いは二つ返事で受け入れられていた。それどころか、満面の笑みで万歳までされる始末である。喫茶店にいた他の客は何事かとこちらを見ていたが、鈴と勇吾のツーショットを見ると、何故か微笑ましい視線を投げかけてきた。どうも、兄妹うたいにでも見えたらしい。ロリコンの謗りを免れたので、勇吾としては胸を撫で下ろした次第である。

今は、勇吾がここに来るのに使ったバイクを取りに、駐輪場へ向か

っているところだった。

昴といつも二人乗りをしているので、ヘルメットは常に二つある。なのでこのまま、勇吾の家に向かう手筈になっていた。

そろそろスキップはやめさせるべきか、と悩みつつ、勇吾はなんとなくこの元後輩と自分との関係を思い浮かべた。

(そうだな……まあ、妹　みたいなもんなのかもしれねえな、こいつは。手を握っても何も思わんし、ついでに言えば……やっぱ、悪い気はしねえ)

ご機嫌な元後輩のつむじを見下ろして、勇吾はふとそんな事を思った。本来女が苦手である自分が、こつも自然に並んで歩いていられるのも、そう思えば納得がいく。昔は、確かにただの後輩だったはずなのだが……今になってこの距離感を見つめ直してみると、それが一番しっくりくるような気もする。

そんな思考を流してから、勇吾は不意に気付いて今日何度目かの苦笑をもらした。

(……おいおい。『妹』ってなんだよ。そりゃ、完全に身内の認識じゃねえか。つたく、俺はこんな簡単に、他人に気を許す奴だったか?)

鈴には散々変わったと言われた勇吾だが、やはり自覚はあまりない。自分の人付き合いのあり方はもつと淡泊なものだと思っている。一部の例外を除いて、の話だが。

「……………ん？」

と　考え事をしていた勇吾は、ふと握られている手の力が強くなつたのを感じて、足を止めた。鈴を見やると、彼女も足を止めている。

そして彼女の視線が、前方の一点に縫いとめられているのに気付いた。その表情は、先ほどまでとは正反対の、強張ったもので

「あ、あの人……！」

「どうした？　んな似合わねえ顔して」

軽口を叩きながら、勇吾も前方を見やった。

そして

「……………ほう、来たか」

そう、声を掛けられた。

「　　ッ！！？」

その声に、全身から湧き上がる得体の知れない寒気を覚えて、勇吾は表情を険悪なものへと変える。

二人の視線の先には、一人の男がいた。長身瘦躯に漆黒のダークスーツを過不足なく着こなし、煙草を啜えて棒立ちになっている。目はサングラスで隠されて見えない。

だが、勇吾はそのサングラス越しに、男と目が合った気がしていた。その上　この男の目がどんな光を湛えているのか、直感的に把握できてしまう。

きつと、この男の目は　自分と同じ鈍い輝きに満ちているのだろうと、何故か理解できてしまう。

その感覚が、寒気を更に加速させた。

（何だこれは……！　どうなってんだ！？　頭のとっぺんから爪先まで、凍っちまったみてえに寒気が走りやがる！　そのくせ、腹ん中では今にもキレちまいそうなくらい熱いもんが、ヘドロみてえに

溜まってくる　　！！)

今すぐこの男をぶち殺さないと　　そんな物騒な考えが頭の中で閃く。

それを頭を振ってどうにか追い払いながら、勇吾はほとんど無意識にじりじりと立ち位置を変え始めた。　　鈴を庇うような位置に。

一目見て、憎悪の花咲く事もある　　。

この男は敵だ。勇吾はこの時、完全にそう認識していた。理由も理屈もない。ただ、勇吾の中にある何かが、それを確信させる。

そしてその考えを見透かしたように、男はするりと口を開いた。

「ふむ。一目で俺を敵と見なしたか。　　良い勘をしているな」

「……………そいつはどうも」

勇吾は何とか、それだけを答えた。油断なく相手を見据え、無意識に状況の整理を浅い思考として流す。

(こいつが何者なのかは判らない。だが、『来たか』なんぞと叫びやがったんだ。俺か　　あるいは泉に用があると見るのが妥当か。……………いや、状況からすりゃ、俺はむしろオマケと考えるべきだろうな。少なくとも、俺はこんな気分の悪い野郎に覚えはない)

「先輩、あのう、私なら大丈夫です……………。だから　　」

「黙ってる。そして下がれ。あと、出来ればいつでも逃げ出せる姿勢で備えてろ……………！」

勇吾は何か言ってくる鈴を手で押し留めると、完全に鈴を背中に隠

し、膝の筋肉を少し緩めて重心を移動させた。戦闘体勢の予備動作だ。周囲にはそれなりに人がいるから、そう手荒な真似をするとも思えないのだが、同時に警戒を解くわけにもいかない、矛盾した事を考える。

そこで、勇吾は思考を断ち切った。意識の矛先を目の前の男一人に絞り、口を開く。

「それで、あんたは俺に何の用だ？ それとも、用があるのは後ろのこいつかい？ ナンパならやめておけ、趣味を疑われるぜ」
軽い口調で問う。黙っていると、この男の持つ雰囲気呑まれそうだったからだ。

それに、男は煙を緩く吐き出し、平淡な声音で言う。

「後者、だな。最後のは戯言として聞き流そう。そして、貴様には特に用向きがない。可能なら失せてもらいたい」

「そいつは出来ねえ相談だ。てめえみたいに胡散臭い野郎と、こいつを二人にさせるわけにはいかんね」

「……そうか。では、実力行使で」
言って、男は煙草を地面に落とし、踏みにじった。

(来るか！？)

勇吾はいつでも迎撃できるように、気を張った。やや前傾姿勢に移行し、拳を構える。

が、

「と行きたいところだがな。ここは人目が多い故、今は退くとしよう」

男は、さらりとそんな事を言った。勇吾は訝しい気分を隠すことなく、目尻を吊り上げる。

「随分あっさりしてるんだな？ 逆に怪しいぜ」

「目立つのは嫌いなのでな。それに、貴様を排除するのは骨が折れそうでもある。更に言えば、今すぐどうこうせねばならん用という

わけでもない」

男はそれだけ言うと、ゆっくりとこちらに向けて歩き出した。攻撃の意思が無い事を示すつもりなのか、ポケットに手を突っ込み、やや距離を置いている。

そしてそのまま、二メートルほどの距離を置いて勇吾たちとすれ違い、通り過ぎていく。

背後を取られないように体ごと向きを変えて、男の姿を追う。男が数歩ほど遠ざかったところで、勇吾は思わず声をかけていた。

「おい、あんた。一つだけ聞かせる。こいつに一体、何の用がある？」

男は緩やかに立ち止まった。そして振り向きもしないまま、

「初対面の、しかも目上の人間を『あんた』呼ばわりするのは感心せんな。俺の名は黒崎神無カンナだ。黒崎とでも呼べ」

と、まったく関係のない事で小言を呟いた。

それは　その名は、酷く不吉な響きだった。

勇吾はその名に　何故か吐き気すら覚えた。

それを誤魔化す為に、語調を強める。男　黒崎を睨み付ける眼光が、更に鋭くなった。

「うるせえよ。俺にとっちゃ、んな事はどうでも良い。質問に答えろ！」

「だろうな。俺も実は、呼び名などどうでも良い。　そう睨むな。視線で俺は殺せんぞ？　……ふん、貴様のような小僧に聞かせる必要などありはしないが　まあよかるう」

黒崎と名乗った男は、やはり平淡な声音で言ってくる。どうにも、気分の悪くなる声だ。

「その小娘には、少しばかり話があるだけの事。詳細は　　そうだな、企業秘密という事にでもしておこうか」

「……企業秘密、ね。随分と物騒な社員を抱えてる会社だな。社長に言っとけ。『部下は選べ』ってな」

「伝えよう。もつとも、俺の所属する『会社』は、俺のような人間ばかりだがな」

「潰れちまえ、んな『会社』」

存外に饒舌な黒崎に、皮肉を交えて切り返す。この時勇吾は、既に黒崎の言う『会社』というのが何であるのか、大方の見当がついていた。肝心の鈴への用向きはまるで掴めないが。

「……小僧、一つ忠告しておいてやる。その小娘とは早急に縁を切れ。痛い目を見ない内にな」

黒崎は、ぼそりとそう言った。その瞬間、後ろに庇った鈴がびくりと反応したのが、気配で知れた。

「いきなりなんだってんだ？　他人の交友関係にケチ付けんよ」

「ケチを付けたつもりはない。ただの忠告だ。　　どうやら、聞く気はなさそうだが」

「悪いな。全身黒ずくめの怪しげな男は決して信用するなと、祖父^{じい}さんの遺言にあるんだ」

「よく言う。貴様の格好も似たようなものだろうに」

「ああ。だから俺は自分を信用してはいないのさ」

滑らかに応酬される軽口と皮肉。この男とは、鈴と違って完全に初対面であるはずなのだが、何故だか言葉は途切れない。鏡の中の自分でも会話している気分だった。更に言えば、言葉を交わすたびに機嫌が悪くなっていくようでもある。当たり前といえば当たり前だ。誰だって鏡に移った自分が喋ったら気味が悪いだろう。

「……なるほど、退く気はないか。小僧。貴様の名を聞いておこうか」

黒崎は唐突にそう言って振り返り、サングラスを取った。目元が露わになる。

「……………」

勇吾は黙り込み、黒崎の顔を睨み付けた。酷く気分が悪い。今すぐ背を向けて走り出すか、この男を殴り殺すかしないと収まりそうもない嫌悪感だった。

何故なら、その目は。

「貴様がその小娘と共に在るのならば、直に再び会う事になるだろう。嫌が応でもな。ならば次の手間は省きたい。それに、こちらは名乗ったのだ。この程度の礼は尽くせ」

勇吾を見据えてくる、その目は。酷く　酷く、勇吾と似ていたから。

予想通りに。直感通りに。歪なまでに　似ていた。ただし。似ているのは、見た目の事ではない。瞳の色など、黒と碧とでまったく違うのだ。

そう、相似しているのは　湛える光だ。その在り方だ。あれは、獣の目。脳髄の中に理解しようのない化獣を飼っている者の目だ。

（俺の……同類だと？　馬鹿な……！　居るはずがねえ、居て良いわけがねえ！　こんな歪みの塊が　この世に二人も……！）

歪んだ人間は数居れど、その歪さはそれぞれ違う。否　人は生き

ている限り、どこかが必ず歪んでくる、と言っべきか。故に、皆は気付かない。全員それぞれの歪みを抱えているのだから、それが余程傑出したモノでない限り、普段は見えないのだ。それが……他人の歪みにしろ、自身の歪さにしろ。いつもは誰も見えていない。

だが。その違っていて当たり前の世界の中で、同じ歪みを抱える者が二人居ればどうなるのか。

答えは素晴らしく簡単だ。その二人は、一目見ただけで互いの歪みを感じ取るだろう。

何しろ、自身も同じモノを持っているのだから。

そして、こう思う事だろう。自分の事であるが故に、見えているように見えていないその歪みが、目の前に姿を現せば、こう思うだろう。

この歪みが、自分と同じであるなど……認めるわけにはいかない、と。

勇吾の中で疑問が氷解する。先程からこの男に対して湧き上がってくる黒い感情は、つまりその歪みに向けられていたのだろう。自分と同じ歪み。脳髄の中にある化獣。

その化獣そのものであった昔の己にこそ、勇吾は嫌悪感を覚えていたのだ。

（そういう事が……！　くそ、気分が悪いはずだ。こいつはつまりあの頃の俺が、たった今、目の前にいるのと同じ事なんだからな！　くそつたれッ！　そりゃ、殺したくもなるわなあ！）

勇吾は凄絶な表情を浮かべて、奥歯を噛み締めた。どんな顔をして

いるのか、自分でも判る。きっと自分は、これから親の敵でも討とうとしているような、黒い感情を剥き出しにした顔をしているのだろう。鈴を後ろに庇っておいて良かった。こんな顔、とてもじゃないが彼女には見せられない。

「……………緒方、勇吾だ」

搾り出すように、勇吾は告げた。己の名を。目の前の鏡像に。恐らくは 奴も気付いている。自分達が、相似形である事。憎悪を向けるに相応しい相手が目の前に居る事を。

だからこそ、名前を聞いてきたのだ。『絶対の敵』である者の名を、刻み込むために。

黒崎がどんな用事で鈴を訪ねたのかは知らないが、それが何であろうと勇吾の名前を知っておく必要などないのだから。

黒崎は表情をぴくりとも動かさず、だが声には大いに不快感を含ませて、言う。

「緒方勇吾、か。不思議と殺意の湧く名だ。だが、無視が出来ん名でもあるな。ふん。どうやら、覚える必要もないようだ。既に、脳髓にまで刻まれた」

「だろうな 俺もてめえの名だけは死んでも忘れそうにねえ。忌々しい限りだ」

「同意見だ。油断すると貴様の首をへし折りたくなる」

鼻を鳴らして、黒崎は振り返った。現れるのが突然なら、去る時もまた脈絡がない。

そのまま歩き去る黒崎は、最後に一言 これまでよりも深い感情を乗せた呪詛のような声で、

「小僧。どうやら、貴様と俺には度し難い宿業があるらしいな。次に会う事があれば 俺は貴様を消す。そうなりたくなければ、そ

の小娘と縁を切り、二度と俺の前に姿を見せぬ事だ」
そう言い残して、今度こそどこかへと消えていった。

勇吾は何も言わなかった。言うべき言葉など、なかった。

ただ理解していた。元後輩の家出事情に、とてつもなく厄介なオマケが付いて来たという事を。

「先輩……？」

「……………ああ」

いつの間にか前に回り込んでいたらしい、鈴の心配そうな声を聞き、勇吾はようやく我に帰った。緩やかに、表情から憎悪と嫌悪が抜けていく。

「あのう、大丈夫………ですか？」

「ああ、大丈夫だ………問題ない。俺は　大丈夫に、なったはずなんだから……………」

勇吾は知らず握り締めていた拳を解き、見上げてくる鈴の頭に載せた。ゆっくりと撫でてやる。

それは傍目には、妹を慰める兄の姿かもしれない。だが、実際には慰められているのは勇吾の方かもしれない。

何故なら、憎悪と嫌悪が抜け落ちた勇吾の表情には、どうしていいか判らず途方に暮れるような翳りと　拭いようの無い恐怖が残っていたから。

誰かがいなければ、逃げ出していたかもしれない。あの男を殺してしまっただかもしれない。

こいつを守らないと　そう思わせてくれる鈴がいなければ、とてつもなく対峙していらなかった。

(追いかけてくる……捨ててきた過去が……。俺の 歪みが……)

勇吾はそう呟いた。そして 鈴の頭から手をどけると、

「……行こう、泉。ここは夏のくせに、酷く 寒いから」

そう言って、歩き出した。自分がちゃんと歩けていると確認するよ
うに、ゆっくりと。

第二十一話：二匹の野良犬、吠える鏡像（後書き）

『緒方勇吾の恋愛事情 其の二』は健全なラブコメ小説です。
……はい、すいません。この展開じゃ説得力ありませんね。
どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

今回は後半シリアスムード全開というか殺伐としていましたが、一
応次からは軽い話に移れそうです。

昴あたりもちゃんと出てきます。なので見捨てるのはもうちょっと
待ってやって下さい。

では、また次回のあとがきで。

第二十二話：外見少女は高校生（前書き）

独白：昴

やれやれ。勇吾の奴、またぞろ厄介事を連れてきたらしいな。

本当に、女が絡むとロクな事にならない男だ。

だがまあ、構わない。こいつの敵は俺の敵だし、厄介事も共有されるべきものだ。

さて、いつも通りにフォローに回るとしますかね。

第二十二話：外見幼女は高校生

「馬鹿かお前は。彼女おんながいない間に、別の女を家に連れ込んでどうする」

バイクの二人乗りで鈴と共に帰宅した勇吾は、開口一番にやや呆れた調子でそう言われた。

場所は勇吾の自室である。今の今まで寝ていた昴は、人の気配でも感じたのか、勇吾たちの帰宅と同時に起きて、勇吾に続いて姿を見せた鈴を見るなり、冒頭の台詞を吐いたのだった。

勇吾はやっぱりそうなるか、と思いつつ、頭を掻く。

「いや、まああれだ。緊急避難って奴なんだ、これは」

明らかに使い方を間違えている日本語で言い訳がましく反論する。

昴は何か含むところのあるような笑みを作りつつ、肩を竦めた。

「へえ。ま、俺は構わないけどな。いや、しかし知らなかったな。

まさかお前がロリコンだったとは」

「違うわ!」

「なに、照れる事はない。誰にでも、人には言えない性癖が一つや二つあるもんだ」

「あんな、俺は別に照れてないし、そもそもこいつが俺らのいつこ下だつてのはてめえだって知ってるだろがっ!」

「ふむ。そうかそうか。お前の事は大概知ってるつもりだったが、これは一本取られたな」

「聞けよてめえ」

半眼になって、勇吾。昴がずっとニヤニヤ笑っているの、からか

われているのは判っているのだが、だからといって受け流せるほど器用な人間でもない。

昴は勇吾の視線を受けて、判った判ったと呟くと、勇吾の背後部屋の入り口で立ち止まっている鈴に視線を向けた。

「よ。久しぶりだな、チビ助」

「むきーっ！ チビ言うなーですう！」

鈴は失礼極まりない昴の挨拶にあっさり激昂すると、ベッドの上にいる昴に向かって飛び掛った。

「もうっ。久しぶりに会った可愛い後輩に向かってそれですかぁ！許せませんっ。往生するですー！」

「おっと。相変わらず沸点の低いお子様だな。背も変わってないが中身も一緒か」

「ああー！ また言ったですう！ 酷いです鬼畜ですっ！ こう見えても色々成長してるのにー！」

ドスンバタンドタドタッ！

昴と鈴はそう広くもないベッドの上を縦横無尽に暴れまわった。やかましい事この上ない。

（あのなあ……）

勇吾は暴れる二人を眺めやり、大きく嘆息した。二人は顔馴染みだし、昔からこういう交流のしかただったのは確かだ。だからまあ、少しくらい騒がしいのは仕方ない。だが、

「こいつら、ここが俺の部屋だって事、忘れてんじゃねえだろな……」

疑問調に口に出してはみたが、まあ間違はなく忘れていたのだろう。この加減のない暴れ方は、完全に自宅のリビングで戯れるときのそれだ。

(つたく、昴はともかく、このミニマム後輩は……)

こちらにまで飛び掛られても困るので、心の中で呻く。昴が勝手知ったる、という調子なのはいつもの事だ。何せ彼には、合鍵を渡してあるのだから。好きに上がってる、と言うのと同じである。

だが、鈴に関しては再会自体が久しぶりの事で、家に来たのも初めてのはずである。それでここまで自由気ままなのは、肝の太さにも感心するべきなのだろうか。

と、勇吾の思考が妙な方向に逸れかけたその時だった。

ホー、ホケキョツ。

なんとも間抜けな音が聞こえた。

「……………来客か」

勇吾は呟いた。先程の馬鹿みたいな音は、勇吾の姉である渚の一般常識からずれた感性によつて取り付けられた、インターホンの呼び出し音なのだった。馬鹿みたいというか、勇吾個人の意見としては、普通に馬鹿だと思っている。

もつとも、その意見に逆らわずいそいそと取り付け作業を行った彼も彼だが。

ホー、ホケキョツ。

「へいへい。今行きますよ」と

急かすように再度鳴った呼び出し音に、勇吾はぞんざいな足取りでドアに向かった。

階段を降りて廊下を少し歩く。そのあたりで無意識に煙草を啜え、ポケットの中のライターを探しながら、勇吾は玄関のドアに手をかけた。

「やれやれ、千客万来だな。別に望んでもねーってのに」

ぶつくさと言いながら、ドアを押し開ける

「あ、こんにちわ。勇吾君」

「ちっす、勇吾」

「……お？ あ、ああ……」

そこには、何故だか紫亜と紅葉が、並んで立っていたりした。

「どうした？ 二人して」

勇吾は目を瞬か^{しばた}せて、そう言った。

麻衣に会いに行ったはずの紫亜と、しんどいから寝てるわ、とか言っていた紅葉が揃って現れるのは、少し意外だったのだ。

「うん。麻衣ちゃ……葛城さんに用事が出来ちゃったから、途中で切り上げてきたの。お礼は言えたから、次に会う約束だけしてね。それで……その……」

紫亜は調子よく喋りだしてから、急に言いごもった。それをため息混じりに見やって、紅葉があとを続ける。

「この娘、どうしてもあんたに会いたかったんだってさ。どうも元々、葛城さんとやらと予定通りの時間まで会ったあとに、こっちに顔見せるつもりだったみたいよ。……あの晩から少し雰囲気変わったかと思っただけど、恥ずかしがりなのはあんま直ってないみたいね」
「あつう……」

紫亜はすっかり小さくなって、顔を真っ赤にしていた。まあ、仕方のないことだろう。この二人は昨日ようやく初キスを済ませた程度の純情カップルである。

舌の根も乾かぬうちに家にまで押しかけてきてしまったのだから、やはり羞恥心があるのだろう。

「で、私の方は、どーも暑くて寝付けないから、昴をつき合わせて買い物にでも行こうかと思ってね。あの馬鹿、どーせここにいるんでしょ？ 上がって引きずって行って良い？」

紅葉は続けて自分の事情を説明すると、許可を求めるようにそう言っ
つて そのまま勇吾の返事を待たずに家にかかるようにする。

「待てい」

勇吾は紅葉の肩を掴んで、呻いた。何故だろう。さつきから家主であるはずの自分の権限が暴落しているような気がするのだが。

「昴なら呼んできてやるから、ここにいろ。それと、紫亜も今日のところは外で遊ばないか？ そのなんつーか、色々事情が……」

口ごもりながら、言う。紫亜が来てくれたのは嬉しいし、紅葉がこちらに遠慮しないように

なっているのはありがたくもある。だが、鈴の事を誤解なく説明できる自信がないので、今家に上げるのは少しまずいような気がする。

(……というか、『彼女の知らん女が家にいる』って時点でダウトじゃねーか……？ 誤解なしとか以前に)

遅ればせながら焦燥を覚えて、背中に嫌な汗が流れる。啞えている煙草が忙しなく動いた。

どうしよう。もしかして、これって結構ピンチなんじゃないかなろうか。

と 勇吾がかなり真面目に切羽詰ってきた、その瞬間だった。

「せーんーぱーいー！ 何してるですー？」

ぴくりと、勇吾の肩が震えた。ぎくりと言い換えても良いかも知れない。

今の声。どう考えても、勇吾にとっては紛^{まが}う事なき最悪のタイミングで、件の見た目幼女な元後輩がこの場に現れたという証左だろう。

ほぼ絶望的な心持ちで、紫亜と紅葉を見やる。二人とも、勇吾の後ろ つまりは、そこにいるであろう鈴に視線を向けている。意識を向けてみれば、振り返らずともそこに誰かいることはなんとなく判った。まあ、間違いなく鈴だろう。

(えーと……あー……どうするよ?)

ちよつと泣きそうになりながら、勇吾はぼやいた。勿論、それに対する解答などどこからもない。

と 背後の気配が、唐突に動いた。まっすぐに、こちらに向かってくる。同時に、眼前の二人にも変化が現れる。

『あ………』

異口同音に、紅葉と紫亜が同じ母音を呟くのが聞こえた。とりあえず勇吾は悪い予感を覚えて とうか悪い予感しかしないのだが

嫌々ながらも振り返った。

そして視界には、満面の笑顔でこちらに向かって飛び掛ってくる鈴の姿が映っていた。ある意味、実に予想通りである。

「どっかーんっ！」

「どわっ!？」

こちらの胸にぶつかりながら首っ玉にしがみつく鈴に、勇吾は声を上げた。

鈴は見た目の通りにやたらと軽いので、取り立てて体勢を崩すような事はなかったが。

「どしたです先輩ー？」

足を勇吾の腰のあたりに纏わり付かせて、腕は首に回っているというまんまコアラのような恰好で、鈴が暢気な声で言うてくる。

「お前な……」

勇吾はとうとう頭痛までしてきて、額を掌で覆った。

ついでに、色々な事に諦めもついてくる。

もうこうなったら、観念して裁きを待つ他ない。

勇吾は鈴にしがみつかれたまま、ゆっくりと振り返った。

紫亜と紅葉はぽかんと口を開けた状態で固まっていた。

そんな顔でも中々絵になっているのだから、まったく美人というのは得な生き物である。

まったく関係のない考えたを浮かべつつ、勇吾は色々な事を説明しようとして 自己解凍に成功したらしい紅葉に遮られた。

彼女は何故だか犯罪者でも見るような目でこちらを指差して、叫んだ。

「 幼女誘拐！？ 」

「 違うわっ！ 誘拐でもなけりや幼女でもな……いや幼女かこいつ。少なくとも見た目は。ああもうとにかく！ 拉致ってきたわけじゃねえからなっ！ 」

聞き捨てならず叫び返す。

「 ああっ！ さりげなくお子様扱いです！？ 芹沢先輩のみならず緒方先輩や見知らぬおねーさんにまで！ 」

「 せ、先輩？ 勇吾！ こーんな小さい子拉致つたあげく先輩後輩プレイなんて、何考えてんのよあんだ！ 」

「 やかましいわっ！ 拉致じゃねえつつつてんだろっが！ だいたい何だその先輩後輩プレイってのは！ 」

「 そ、それは……その……。ええい、女の私に説明出来るわけないでしょーがっ！ 」

「 逆切れ！？ つーか何で顔赤いんだよ！ どんだけ倒錯した遊びだ！？ 」

十秒で場が混沌の坩堝くわっほに陥った。
と、

「 流石に五月蠅いぞ、お前ら。何を騒いでるんだ？ 」

新たな声が割り込んだ。昂だ。

「……………」
「……………」

第三者の介入で水が入り少し頭が冷えたのか、無言で紅葉と睨み合う事しばし。

二人は同時に、深呼吸を始めた。ゆっくりと呼吸を落ち着ける。

「ひっひっふー。ひっひっふー」

約一名、妙な勘違いから要らん事を言っている馬鹿幼女がいたりしたが。

それはその場の全員にさくりと無視された。というか、あんまりなボケなので誰にも突っ込めなかった。

ひとしきり深呼吸を終えて、紅葉は幾分落ち着いた声音で言った。

「……………」
「とりあえず、言い訳を聞きましょうか」

「……………」
「ああ、そうだな」

睨み合う視線は外さないまま、お互いに言う。

そこで紅葉は、紫亜の方に顔を向けた。この場合、最も事情を知りたいのは彼女のはずなので、いの一に話を聞かせるべきだと思っただろう。

勇吾もそれに倣^{なら}い、視線を横に滑らせる。

「ほら紫亜。あんたも黙ってないで……………紫亜？ げ、まさかこれって……………」

声をかけた紅葉は、途中から怪訝な表情になって、じりじりと後退

し始めた。何かを恐れるような態度である。

「…………紅葉？」

紅葉の奇行に疑問符を浮かべつつ、勇吾はとりあえず紫亜の様子を窺った。

彼女は、妙に熱っぽい視線で、じつと勇吾の胸のあたり　つまりは鈴を見つめていた。

勇吾は少し躊躇しつつ　嫌な予感がした　声をかけてみる事にした。

「…………あのー、紫亜さん？」

何故か敬語だった。もちろん謙^{へりくだ}る方の。

彼女はその言葉に反応したのか、ようやく動きを見せた。ゆっくりと、口が開かれる。

「か……………」

「か？」

「可愛い……………！！！！」

言うや否や、紫亜は普段の彼女からは想像も出来ないような俊敏な動きで勇吾に迫ると、胸元の鈴を覗き込んだ。

「うおっ！？」

「ひゃわっ」

思わず仰け反る勇吾。ワケが判らず悲鳴を上げる鈴。そのどちらも無視する形で更にずい、と鈴の顔を凝視しながら、彼女はやけに熱っぽい声で言った。

「ああ…………っ。近くで見るともつと可愛いっ。勇吾君勇吾君。この娘なんていうのどちら様なのというか触っても良い！？」

キャラが崩壊していた。勇吾は恋人の突然のキャラチェンジに啞然として声もない。

どうしよう。彼女が壊れちゃった。

(あー……なんつーか……。 神は死んだ)

勇吾は何か大事な物をなくしたような気分になって、心で泣いた。

とはいえ。状況は理解できないが、やるべき事は判っている。

勇吾はそつと鈴の脇のあたりに手を差し入れると、優しく抱き上げた。それから、ゆっくりと床に下ろして立たせる。

「先輩……?」

「泉……」

見つめあい、肩に手を置く。そして精一杯の笑みを浮かべてから、勇吾は言った。

「強く生きるよ」

「へ?」

疑問顔の鈴をくるりと反転させて紫亜と向き合わせる。勇吾は妙に嘘っぱい恭しげな表情を作ると、紫亜に向けて鈴を差し出した。生贄として。

「どうぞ。お触りオーケーです」

それを聞いた紫亜は、喜色満面で鈴に飛びついた。

「ああー!? おねーさん、後生ですからやめてくださいですー!」

「うふふふ柔らかい……ふにふに……」

「にゃー!? うあーん誰か助けてですー!!」

なにやら頬擦りされたり、体中まさぐられたりしている鈴が哀れっぱい声を上げるのだが、もはや誰も聞いちゃいなかった。

* * * * *

紫亜は可愛いもの好き。

紅葉の説明によると、今の紫亜の痴態　　と言っても構うまいは、どうやらそのせいだった。

いつもはお気に入りのおぬいぐるみなどが犠牲になるらしい。ただ、人間相手にこういう風になるのは初めてなのだと言っ。

「……どーも、スイッチが入っちゃうと駄目らしくてね。しばらく収まれないわよ、あれ」

「……そうか。いや、まあ。可愛いもの好きなんて珍しい事でもないだろうし、女の子らしくて良いんじゃない、かなあ？」

「ホントにそう思う？」

「ごめん嘘吐いた」

無理に状況を肯定しようとして、すぐに諦める勇吾。

あれから、十分ほど経った。場所だけは勇吾の部屋に移ってはいるが、紫亜の状態は一向によろしくはならなかった。

いや、それどころか、

「……うふふふ……ぷにぷに……ちっちゃい……にゃー……」

何だかもう、本格的に駄目になっていたりする。

「天にまします我が父よ、お願いですから助けてください」

色々と精神的にキている勇吾は、こちらも半ば壊れながら神に祈っていたりした。

さつき死んだとか言ってたくせに。

というか、むしろ助けてやらないといけないのは、もう抵抗する気力すらないのかされるがままになっている鈴の方だろう。心なしか、ぐったりしているようにも見える。

「まあ、あれはほつとけばその内直るから。それより、結局あのちつちゃいのは何なの？　でもって、何であんたの家にいるわけ？」
紅葉が意識を切り替えて、聞いてくる。もつとも、その視線は紫亜たちに向かないようにしつかりと逸らされていたが。

「そうなのか？」

「うん。あと十分くらいだと思うけど」

つまりあと十分は、鈴に生贄になってもらわないといけないわけだ。
(……ま、いつか)

存外あつさりと諦めをつける勇吾。鈴に対する態度は昔からこんなものだったと、勇吾は思っていた。何故だが、あまり過保護にする気にはならない。まあ、鈴はあれで逞しい人間なので、そのせいかもしれない。

「で、説明はもらえるの？」
急かしてくる紅葉に、まあ待てよ、と言い置いて、勇吾は口を開いた。

「あいつは泉鈴っていったな。俺や昴の、中学時代の後輩だよ。歳は一つ下。とてもそうは見えないけどな」

「一つ下って、それじゃあの子、高校生？　うわー、見えない。良いとこ中一だよ、あのちゃんまい感じは」

「まーな。ついでに言えば、空手部のマネージャーでもあった。俺と昴が空手部だったってのは前に話したよな？　その繋がりで、当時はそれなりに可愛がってたんだ。というか、一方的に懐かれてた気もするけどな」

言い終えてから、煙草に火を点ける。それまで会話には入らず、黙って状況を静観していた昴が、気を利かせてベッドの脇にある窓を開けていた。

勇吾はゆっくりと紫煙を味わってから、続ける。

「で、だ。
あいつがここに居る理由なんだが……正直なところ、成り行き、としか言いようがない。」

俺は今朝から『黒桜』に行ってきたんだが、そこであいつと再会してな。

あいつ、なんでだかは知らないが、家出してきたらしいんだよ。
見た感じ帰る気はなさそうだったし、『黒桜』なんぞにあんな危機感の無い馬鹿一人を置いていく訳にもいかなかったから、とりあえず連れて帰ってきたんだ」

「ふーん、家出ねえ。そのわりには、荷物とかないみたいだけど。ちゃんと事情とか聞かなかったの？」

やや怪しむような視線で、ちらりとだけ鈴の方を見やる紅葉。確かに、頭から信じるには情報が足りないのは事実だ。

だが勇吾は、そのあたりの事はあまり気にせず、言う。

「ああ。それは俺も疑問には思った。だが、俺としてはあんまりあいつの事情に深入りするつもりはないんだ。」

家出となると、概ね家庭の事情つてのが絡んでくるからな。

……今のところ、事情を聞いたりするつもりはない。俺がやるのは、黙って寝床をくれてやるくらいのもんだ」

言いながら、勇吾は自分の言葉の嘘を感じていた。今語ったのは、喫茶店に居た時の心情であって、今現在の考えではない。

鈴を家に誘ったのは確かに成り行きだが、今となっては、このまま何も聞かずにおく事はできそうもなかった。

あの男　黒崎神無の存在を知った今では。

勇吾は既に、鈴に何かあれば　あるいは、助けを求められたら、

この拳を握る事に決めていた。
気まぐれとはいえ、一度手を差し伸べたのだ。最後まで付き合っ
が筋と言つものだろう。

（あの野郎……あの不吉なクソツタレが関わっているらしい、
泉の事情。気にならないといえは嘘になる。家出自体はどこにでも
ある話だが、野郎みたいなのが絡んでるんじゃないや話は別だ。ロクでも
ねえ裏があるに決まってる）

知らず、表情が険悪になる。それを見た紅葉が気圧されたように身
を竦ませるが、勇吾は気づかなかつた。

先程の光景を思い浮かべながら、勇吾は思考を深める。紫亜や紅葉
の来訪で先延ばしになっていたが、これは考えずにおける事ではな
かつた。

（野郎の服には、妙なバッチが付いてた。金色で龍の形に彫られた
縁取りに、何かの花を象つた代紋。ありや多分、龍門会傘下の極道
のものだ。野郎は『会社』なんぞと言つてやがつたが……まあ、あ
る意味間違つちやいねえがな。要は、扱う商品が『暴力』だつてだ
けの話だ）

龍門会。東日本の裏社会、その三分の二を支配する広域暴力団
の名だ。

桜通りには、いくらかの組が事務所を構えていて、その九割方が龍
門会傘下の組だと言われている。

更にその九割の組は、性質によって二つに分けられる。

昔気質で義を重んじ、仁と人情に命を張る荒くれ者の集団 『極
道』と、営利目的が先走り、ひたすらあくどいシノギを続ける文字

通りの『無法者』。
桜通りの内、この『無法者』が根を張り、治安が一気に悪化した地域が黒桜と呼ばれている。

勇吾は中学に上がった段階から黒桜に出入りしているため、その辺りの事情も多少は知っていた。

ただ、

（篠田組、近衛組、鬼頭組、藤堂組……名前は判っても、流石にそれぞれ代紋の様子は判んねえ。この件に関わるなら、せめて『敵』になりそうな奴らの姿くらいは捉えておきたいんだがな）

思考が深まるにつれて、表情は狂気を帯びていく。考えるほどに、黒崎の目が脳裏にちらついて仕方が無い。

『貴様がその小娘と共に在るのならば、直じきに再び会う事になるだろう。嫌が応でもな』

あの男の言葉が脳裏に蘇る。

（ああ、そうだな。そうだろうよ。まったくもってその通りだ、クソッタレめ）

と、煙草を啜えたまま凶相を深めていく勇吾の肩に、手が置かれた。いつの間にか背後に忍び寄っていた昴だ。

「落ち着け。紅葉が怖がる」

「……ん。ああ、悪い」

勇吾は言われて、表情から毒を抜いた。物騒な思考を破棄する。紅葉が安堵の息を吐いた。比較的強気な彼女も、半ば本気で殺意を滾らせ始めた勇吾が相手では分が悪いのだろう。

昴は勇吾の耳元に顔を寄せると、ごく小さな声で囁いた。

「あまり溜め込むな。今のお前、『戻った』時と同じ顔だったぞ。戦闘中だった昨日と違って、日常で『戻る』と手遅れになるんじゃないか？」

「判ってる。……すまん」

「いいさ。ただ、話は聞かせるよ。『本当』の方を」

「ああ。場合によってはお前にも動いてもらうからな。嫌でも聞いてもらうつもりだった」

「結構。じゃあ、あとでゆっくりと、な」

ほとんど無意識に答えを返し、素早く打ち合わせる。この呼吸こそが、二人の距離を示すものだった。

勇吾は軽く頭を振った。頭脳労働は、後で昴に任せれば良い。まったく考えないわけにもいかないが、やはり専門の者に託すのが一番だろう。

とにかく今は、やるべき事をやるしかない。

「ああ……持って帰りたい……可愛い服……着せ替え……抱き枕も良いかなあ……」

「あわわわわ。何だかついに貞操の危機の予感ー!？」

……身近なところでは、未だに止むことの無い、紫亜による鈴

の猫っ可愛がりこそそろそろ止めてやるとか。

(……紫亜。判らない。俺にはお前が判らないよ……)
ぶり返してきた悲しみに、勇吾はまた心で泣いた。

よくよく考えれば、こんなわけのわからない光景の真横で『ヤクザ』とか『代紋』について考えていた自分は、とんだ間抜けだったのかもしれない。

なんとなく勇吾は、そんな事を思ったのだった。

第二十二話：外見少女は高校生（後書き）

シリアスからコメディに戻すのにやたらとてこずりました。

切り替え遅いな、私。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

今回、ようやく紫亜のキャラを壊せました。やっぱり人間、どっか吹っ切れてないとね。今まであんまり壊さなかった反動か、えらいことになりましたが。

今回は多分まったりした感じになるかと。後半にバタバタとシリアスに雪崩れ込みみたいので、ここらで小休止、です。それではまた、次回のあとがきで。

第二十三話：つかの間の、優しい嵐（前書き）

独白：紅葉

何だかよく判らないけど、勇吾の馬鹿がやたらとちんまい女の子を家に連れ込んでいた。

まったく、彼女持ちの自覚があるんだかないんだか。

これじゃ、素直に身を引いた私が馬鹿みたい。

ま、あのちんまいのも、悪い娘じゃなさそうだけど。

なんか訳ありみたいだけど……それは気にしても仕方ない。

私は私で、好きに楽しもう　とりあえず、昴の相手でもしてやろうかしら。

第二十三話：つかの間の、優しい嵐

無理。

その言葉を分解して並べなおすと、理が無い、という事になる。実に正確な単語だと、勇吾はそんな事をしみじみと実感していた。今の状況を端的に表現するところだ。

つまるところ、無理があつたのだ。

「先輩先輩。ヒマです退屈ですー！ 遊びましょうよお喋りしましょうよう！」

「あ、鈴ちゃん。そんなに退屈なら私が相手を」

「フーツ！ フシャーツ！ 来るなです危ないおねーさん！」

「ああつ。そんなに警戒しなくても……っ!?」

「そ、そんな事言っても駄目ですっ！ 鈴はもう騙されなですよー！」

「あつううううう」

この状況下において、静かな時間を過ごしたいだなんて、大それた事を願うというのは。

まったくもって 理が、無い。

(……………なんだかなあ……………)

何かとてつもなく苦いものを飲み下すような気分で、勇吾は静かに呻いた。

目の前で繰り広げられる光景を眺めながら、続ける。

(何っーか、もはや誰も、ここが俺の部屋だって事を覚えちゃいね

え……どうしてこう、無意味にフリーダムなんだ……？)

紫亜がやや正気に立ち戻ったのを機に、鈴は彼女の拘束からどうにか逃れていた。その後は、猫か何かのような仕草でひたすら警戒を強めて、紫亜に近付こうとしない。今はそそくさと勇吾の背後に隠れて、徹底抗戦の構えを示している。

当然　　というべきなのかどうか自信はないが　　紫亜の方はといえば、今度はごく真つ当な手段で鈴にお近付きになるうと誠心誠意で奮闘しているようだったが、今のところ効果が出る様子は無かった。

紫亜が鈴の正面からじりじりと距離を詰めようとしているので、位置的にこの争い　　というのも馬鹿らしいのだが　　は、勇吾を挟んで行われているのだった。

鈴は紫亜を警戒しつつも隙あらば勇吾に構いたがるし、紫亜はその度に鈴にアプローチをかけている。

もちろん、巻き込まれている側としては、居心地悪いことこの上ない。

(……ま、昼ドラみたいに『何よこの女は！？』的な展開にならなかったただけ、マシなのかもしれねえけどな。この程度は、堪えるべきか)

それでも少しうんざりしながら、視線を転じる。少し離れた所で、昴と紅葉が差し向かいになって、なにかボードゲームに興じていた。

「って、あー！　また負けた！？　ちよっと昴、あんたイカサマしてるんじゃないでしょうね!？」

「いや、チェスでどうやってイカサマするんだよ。普通に指してただけだろ」

「そりゃそうだけど。でも、何かおかしくない!? チェスだけでもう五連敗なんて。さっきまでのを併せたら何連敗よ?」

「最初にやったオセロで三。次の囲碁で二だな。気分転換にトランプに切り替えて、ポーカーは十回勝った。ブラックジャックは五回でお前が音を上げたんだっただか。あと将棋でも三回勝って、今のチェスだから……二十八連敗か。凄いなお前。神が降りてるんじゃないか? 咬ませ犬の神とかそんなんが」

「む、ム力つく……!!」

騒がしく口論しながら、それでも紅葉も昴も勝負を降りる様子はない。

こんな調子で、二人はこの三時間ほどで対戦の舞台をとつかえひつかえしながら、内容は別として気分だけは白熱した勝負を繰り返していた。

(……………そりゃま、昴相手にその手のゲームで勝てるわけやないわな。将棋なんか、中学時代にや将棋部のエースを泣くまで負けし続けた奴だし)

思えば中々えげつない事をしていたものだと思いつきながら、勇吾は独りごちた。

と、悔しげな表情の紅葉が、呻くように言っているのが聞こえてくる。

「く……! 頭を使うゲームじゃ、どうしても勝てない! でも、このままだと悔しすぎる……!」

二十八連敗してようやく現実を知ったらしい彼女は、ともすれば地団太でも踏みそうな剣幕である。とても学校で『女神』だの『お姉

さま』だのと呼ばれている存在だとは思えない。
今の彼女を見たら、学校の連中はどういう顔をするだろうか。そんな意味のない思考遊びを転がす。
そして、そんな彼女が視線を向けている昴はといえば、こちらはいかにも涼しい顔で、用済みだと判断したチエスのボードと駒を片付けている。

「……こうなったら、もう何でも良いわ。とにかくあんたを一度ぎやふんと言わせなきゃ気が済まない」

「どうでも良いが、実際に『ぎやふん』なんて言葉遣いをする奴は初めて見たぞ、俺」

本当にどうでも良さそうに言ってから、昴は片付けの済んだらしいチエスのセットを脇に押しやりつつ、続ける。

「まあ、俺としては何で勝負しても構わないけどな。だが、いい加減やる事もなくなってきたぞ。何で決着をつけるつもりなんだ？」
紅葉はそれに、ひとつ頷いて、

「じゃんけんよ。これならただの運試しみたいなものだもの。そのわりに、負けるとなんだか妙に悔しいし」

「運試しとは、また平和的というかなんとというか……」

「もちろん、ただのじゃんけんにするつもりはないけどね。罰ゲームでも用意しましょうか。……そうね。面倒だし野球拳でどう？」

「俺には、お前が墓穴を掘ってるようにしか思えないんだけどな。しかもドリルとか使って凄い勢いで」

「そんな事を言っていていられるのは今の内だけよ。すぐに全裸にひん剥いて土下座させてやるから！」

「運試しと自分で言っというて、何なんだその根拠のない自信は。と
いうか、さりげなく罰ゲーム追加されてるし」

「細かい事はいーの！ とにかく、勝負よ昴！」

「やれやれ」

存外に負けず嫌いらしい紅葉に苦笑しながら、それでも昂は楽しげにしている。

俺以外の奴を相手にそういう顔が出来るようになったのか、と勇吾はどこか保護者にもなった気分になりつつ、ふと視線を前に戻す。あの二人は放置する事にした。別に実害が出るわけでもないの、好きなだけ盛り上がってくれば良い。出来れば静かに燃えていて欲しいとは思うが。

戻した視線の先では、未だに膠着状態が続いていた。紫亜は先ほどと同じ位置でどうしたものかと試行錯誤しているし、鈴に至っては勇吾の背中に噛り付いて離れようとしめない。

(こつちはそろそろ、お開きにしてもらうかな)

壁にかかっている時計を見上げてから、親指でこめかみを突付きつつ呟いて、勇吾はやおら立ち上がった。突然のことに背中の鈴がずり落ちていたが、とりあえず無視する。

「勇吾君？」

紫亜がこちらを見上げて、言ってくる。何をするつもりなのか、という事だろうと、勇吾は適当に推測した。もし外れていても、どのみち似たようなものだろう。

勇吾はとりあえず、時計を指で示した。紫亜がそちらに視線を向ける。この際関係のない秒針を除いた二本の針が、円形の時計をちよつとを半分に割っていた。つまり、今は午後六時だ。

「そろそろ良い時間だし、晩飯の準備でもしてくるよ。この調子だと、今日は五人分必要になりそうだからな」

「あ、うん。そうだね。私も手伝うよ」

言って、彼女は立ち上がった。勇吾は頼むよ、と笑みを浮かべた。

と、そこで、背後からも声が上がる。

「私もやるですー！」

元気いっぱい手伝いを宣言してくる。勇吾はなんとなく不安になつて、振り返りざまに口を開いた。

「私もやるつて、お前料理なんて出来るのか？」

「む、失礼な。鈴だつて料理のひとつやふたつ、ちゃんと出来ますつ」

ばたばたと手足を振つて抗議される。勇吾は不安を拭いきれないまま、だがとりあえず納得しておくことにした。

「……ま、良いけどな。じゃ、行くか。台所は下だ」

言い置いて、勇吾は二人を連れて部屋を出ていく。

「あああああつ！ 負けた!?!」

「はい残念。とりあえず一枚ストリップな」

階段を降りたあたりで聞こえてきた、無念の悲鳴と下心ゼロの脱げコールに、少しだけ頭が痛くなった。

* * * * *

「そんじゃ、始めようか」

似合いもしないエプロンを着けて これすらも黒だ 勇吾は横
にいる二人に向けてそう告げた。

紫亜と鈴。どうやら、鈴も紫亜に悪気が無い事くらいは理解できた

らしく、二人は並んで立っている。不必要な警戒は解いてくれたらしい。まあ、元々ひとつの感情に留まれるような鈴ではないので、こんなものなのだろう。

こちらにも、勇吾に倣ってエプロンを着けていた。

勇吾の姉である渚のもの　使われたのは一度だけだ　と、予備に買っておいたものだ。

二人とも、立ち姿だけみれば、十分に上に似合ってはいる。少なくとも、目付きの悪い黒ずくめ男子高校生などよりは、よほどじっくりくるだろう。

うん、はい、というそれぞれの返事が返ってくるのを聞きながら、腕組みして続ける。

「とりあえず、メインはパスタでいく事にした。前に、渚の馬鹿が安売りしてたからって、とても食いきれない量のスパゲティを買い込んできやがったんでな。だが、この人数ならちょうど良い。大皿に盛れば適度につまめるし、サラダと付け合せのスープを工夫すれば、栄養もそんなに偏らんだろ。ああ、パスタのソースは定番のミートソースと、あとはきのこを使った和風の奴を考えてる。ここままで質問は？」

基本方針を伝えて、勇吾は二人に視線を向けた。と、鈴が遠慮がちに手を上げた。

「よし。発言を許可しよう。で、何だ？」

「あのう……さっき言いそびれた事で……正直、この場では今更な事なのですが」

彼女はそこでいったん言葉を切ると、小首を傾げて、

「先輩、お料理なんて出来たんです？」

本当に今更な質問をしてきた。だが、勇吾は鈴の言いたい事がなん

となく判った。

紫亜を見やると、彼女にもそれは判ったのだろう。くすりと笑みを漏らしている。

苦笑して、勇吾は肩をすくめた。

「ま、ある意味当然の質問だわな。俺みたいなのが料理出来るつつても、あんまりしつくりはこないだろ。とはいえ、事実として、俺は自炊してるんだが」

だが、鈴はそれでも疑わしげに勇吾を見上げてくる。そして、ふと思いついたように、

「……自炊、ですかあ。でも、どしてです？ おかーさまがお料理下手つぴなのですか？」

言ってくる。勇吾は雑な仕草で手をパタパタと振りながら、答えた。「いんや。母親が料理下手とか以前に、そもそもいないからな、うち」

「……………へ？」

目をまん丸に見開いて、鈴が間の抜けた声を出す。勇吾は時間がもつたないので、とりあえずパスタを茹でる鍋に水を張って、火にかけた。ついでに包丁やら何やらを調理台に並べながら、続ける。

「そついや、お前には俺の家庭事情なんて聞かせた事がなかったか。まあ、事情といつてもそう複雑なことじゃねえんだがな。」

俺の両親は、俺が三歳かそこの時に死んでるんだ。だから、顔すら覚えてねえ」

何やら衝撃を受けたように、鈴の表情が少し固まる。既に事情を知っている紫亜も、多少気まず気ではあった。

だが勇吾は、手元で準備している道具に視線を向けているため、それには気づかなかつた。何の気もなしにまな板を布巾で拭きながら、祖父から聞かされた両親に関する経緯を思い浮かべていく。

「聞いた話じゃ、俺がようやく人に預けても大丈夫な歳になつたっ

てんで、姉貴と一緒にじいさんのところに預けて、二人して Guam だかハワイだかに出かけたらしい。結婚当初に忙しくて行けなかった新婚旅行の代わりだったみたいだな。

でもって、どうやらそこで死んじまったみたいなんだよ。

何のこたあない、つまらない事故だったそうだが、まあ、当人とってはこういう形だろうが関係なかっただろうな。死んだらそこで終わっちまうんだから」

他人事のように　というよりも、それこそ他人のプロフィールでも読み上げるように言い終えて、再び肩をすくめる。実際、彼にとって両親の存在はその程度のもだった　不幸な人たちだったんだな、という感想はあるが、特に感情は湧いていない。

強いてあげるなら、中身のない空っぽの同情くらいのものである。人によっては冷たいと感じるかもしれないが、それも無理からぬ事ではあった。

姉の渚と違い、彼には両親と共有した『思い出』という奴が記憶にないので、どうしても実感が伴わないのだ。なので勇吾の場合、両親の死は喪失ではなく初期化。積み上げたものがないので、最初から居なかったという認識になるのだ。

なので、親が居ないということに対して、寂しいと思ったことはない。不便だとは思ったが。

とはいえ、勇吾がまるで愛情を知らずに育ったかといえは、そうでもなかったりする。

勇吾はまな板に埃ひとつ付いていない事を確認して満足げに手を止めると、今度は棚を漁ってパスタを取り出し始めた。

「ま、そんな感じで保護者のいなくなった俺は、そのままじいさんに育てられる事になってな。　彼には色々と教わったよ。料理に当たって、元々はじいさんがやってるのを真似たのがスタートだった

たからな。何より　最初に『力』をくれたのが彼だ。……俺の母親　じいさんにとっては愛娘がいなくなっちまった痛みにも耐えて、まがりなりにも俺を鍛えてくれた。俺が敬意を持てる、数少ない人の内の一人だよ」

聞き手からの反応はない。実のところ、鈴はただただ驚いて絶句して、紫亜はまだ聞いた事のない部分に入り始めた勇吾の昔話に、悪いとは思いつつも聞き耳を立てていたのだ。

勇吾は勇吾で、黒崎との邂逅のおかげで外れやすくなっている自制に気づかず、自覚のないままに余計な事まで交えて話を進めてしまっている。

「ただまあ、そんなじいさんにも、やっぱり寿命つてのがあつてな。五年ほど一緒に過ごしたあたりで、病気がかかって亡くなったよ。その後は、姉貴を連れてこの家に戻ってきた。

知りもしない相手ばっかだった、他の親戚に頼るつてのがどうにも我慢ならなくてな。それに、両親やじいさんが、俺と姉貴に残してくれた遺産目当てだつてのが、ガキの俺にも透けて見えてたから。ま、一人だけ真摯に心配してくれた母方の叔父貴には、ある程度頼ることになつただけだな。渚が成人するまでは、保護者になつてくれてたし。転校だの何だのの手続きをしてくれたのも、その人だ。たぶん、母親　叔父貴にとつちや妹だな　の忘れ形見を、放つては置けなかつたんだろう」

もつとも、そのあたりの事に気づけたのは、随分後の事だ。当時の勇吾は、家庭事情以外にも、いじめっ子への逆撃で忙しかったから。

と　火に掛けていた鍋がボコボコと湯を鳴らし始めた事で、勇吾はようやく言葉を止めた。

いつのまにか、随分と口が軽くなっていた事を自覚する。なんとなく気恥ずかしさを覚えて、早口に纏めにかかる。

「と、まあ。こんな感じの家庭事情でな。姉貴との二人暮らしになったから、自然に飯を作るくらいはするようになったわけだ。さつきも言ったが、じいさんがやってたのを思い出して真似ながらな」

途中でパスタの束を湯の中に投入しながら、言う。この分量だと、茹で上がるまでにはそれなりに時間がかかるだろう。ミートソースは一から作るわけにもいかないの、出来合いのものに少し手を加えるだけだ。和風きのこの方にしても、フライパンでシメジ、マイタケ、ベーコンにほうれん草を軽く炒めて、醤油をベースに調味料をいくらかと料理酒を投入。あとは、更に少し炒めるだけ。さして時間はかからない。

要らない事を言った照れ隠しのつもりで、勇吾は調理の方を本格的に始めた。紫亜はどうやらこちらの心情を汲んでくれたらしく、苦笑だけ漏らして冷蔵庫に向かった。食材を取ってくれるのだろう。

「あ、あのう……」

一人着いていけずにオロオロしていた鈴が、遠慮がちに声を上げる。顔を見ずとも、その声だけで概ねの状況が判った。なんとなく、ではあるが。恐らく、気まずい表情。もっと言えば、何かを謝りたがっているような、そんな表情でこちらを見ているのだろう。

勇吾は紫亜が野菜と一緒に持って来てくれたきのこ類を切り分けながら、

「ま、あんまり気にするな」

「え？」

聞き返してきた鈴に、勇吾は苦笑して続きを告げる。

「とは、言わないけどな。言ったところで、どうせ大いに気に病むだろ、お前」

と、肩をすくめる。ちょうど適当な大きさになったきのご達を、とりあえずザルに入れて軽く流水ですすいでおく。

「だからまあ、『変な事を聞いてごめんなさい』とか思ってるんなら、ポケットとしてないで手を動かさせ。寛大な俺はそれで許してやる。茶化すのも忘れずに言い終える。鈴は、少し沈黙したようだった。ぱちくりと瞬きをして、不意に破顔した。もっとも、勇吾には見えていないが。ただ、やはりなんとなく予想はつく。

「はいですつ。えへへ、やっぱり先輩……優しくなっただですよ」

妙に嬉しそうな表情で腕まくりなどしているちびっ子を横目で確かめて、勇吾は再び苦笑を漏らしたのだった。

「さて。そんじゃすっかり手伝ってくれよ、助手さんたち」

言って、勇吾は先ほどから妙に静かな、サラダ担当の助手の方に目を向けて、

「……………」

絶句した。

「……………あのー、紫亜さん？」

勇吾は、先程の鈴よりも更に遠慮がちな調子で、それでも何とか言葉を絞り出した。

「……………何？」

妙な間を置いて、問い返される。

彼女はたかがサラダを作るのに、何故か真剣そのものの表情だった。勇吾は恐る恐る、彼女の手元を指差して、

「何故に包丁を逆手に持たれてますか、あなたは……………？」

と、その問いに、紫亜は真剣な表情から一転、きよんとした顔で、

「……………え？ 駄目なの？」

自分の手とまな板の上のキャベツ（まるまる一玉である）を見比べながら、「ごく不思議そうに聞いてきた。

勇吾はふと思いついて　　ロクでもないものだったが　　、問いを発する。

「……………なあ、紫亜。正直に答えてくれ。……………料理の経験は？」

紫亜は、明らかに怪しい拳動で視線を虚空に泳がせた。

「あんまりした事ない、かな……………」

「正直に」

「……………ごめんなさい全然した事ないです……………」

「よし判った。　　紫亜。退場」

「ええっ!？」

いくら愛しい恋人であつても、そこだけはきつぱりと言い切らずにはいられなかった。

* * * * *

茹で上がったパスタにオリーブオイルを少しかけて固まるのを防ぎつつ、フライパンを細かく動かしてきのこパスタの具を炒める。味付けをし、十分に火が通つたのを軽くつまみ食いして確認する。三口トソースの方は既に準備が完了していた。勇吾の担当は、これでスープだけだ。とはいえ、こちらにも既にほぼ完成に近い。じゃがいも、ニンジン、あとはキャベツとベーコンをコンソメで軽く煮込むだけの簡単スープは、勇吾の得意なレパートリーの一つである。

「よし、と。パスタは盛り付けを残すのみ。野菜のコンソメスープもとりあえず良い感じだし……鈴、サラダの方はどうだ？」

「だいじょぶですー」

「よしよし。よくやった。褒めてつかわす」

「えへへー」

鈴の返事に満足して頭を撫でてやりながら、スープを少し味見する。「うむ。上出来」

元々失敗するような複雑な料理でもないが、やはり上手くいっていると気分が良い。

勇吾は一人頷いて、小さく笑みを浮かべた。

と

「づうづう……役立たず……」

台所の隅から、なんとも情けない声が聞こえてくる。思わずぎくりと肩を震わせて、勇吾は笑みを凍りつかせた。

(……んな声出されてもなあ)

むしろこちらこそが情けなくなる心地で、勇吾はふと呟いた。

結局のところ、しれっと手伝いを申し出た紫亜は、文字通りの役立たずだった。ごく単純に、料理の経験がほぼゼロだったせいだ。彼女の姉である紅葉は、勇吾以上に料理が出来るので、てっきり紫亜も心得があるのだと思っていたのだが。

そして、意外に役に立っているのは鈴だった。どうも母親の手伝いか何かできちんと包丁の使い方を覚えていたようで、危なげなくキウリだのゴボウだのを切り分けていたし、レタスもちゃんと冷水にさらしていた。基本的な知識はあるようだった。

と、鈴はレタスの水気をキッチンペーパーで念入りに切りながら、やや躊躇いがちに声を発した。

「あの、おねーさん。よければ盛り付けのお手伝いを……」

「うふふ。気を遣わなくて良いんだよ鈴ちゃん。どうせ私は……」

どんよりとした空気を纏った紫亜は、台所の隅で膝を抱えて座り、湿った返答をしてきた。

どうも本気で落ち込んでいるらしい。

(なんか、昨日の晩の事が嘘みたいだな。……いや、むしろアレがあったからこそ、か？ 紫亜の奴、前よりちよつと感情が表に出てるような気が……)

スープの煮え具合を気にしつつ、そんな事を考える。少しだけだが、彼女が変わったような気がしていた。それも、恐らくは良い方に。

……いや、あるいは

（ 変わろうとしている、の方が正解に近いかもな。いきなり、自分の望む形には変われっこないんだから。『根本的な変化を望むなら、少しずつでも、現在を積み重ねていくしかない』 こいつは、確か昴の言葉だったか）

かつて自身が変化を望んだ時。 獣からの別離を願った時。 昴にそう言われた覚えがある。

そして、彼はこうも言った。

（ 『急激な変化は、表面を覆う仮面にしかならない。それが自分の一部になるまでには、やはり時間がかかるんだ』 だったか。 つくづく、当時中学生だった野郎の言葉とは思えんが）

苦笑する。 そんな言葉を吐いた聡い男は、上で野球拳に興じているのだから、まったく世の中どうかしている。

野球拳？

「あ。 そっぴや忘れてた」
ふと引っかけた言葉に、 勇吾は呟く。

料理やら不覚の昔話やらですっかり忘れていたが、あの二人は今どうなっているのやら。

上の自室の現状に、 思いを馳せてみる。

「……ま、なんとなく想像は付くな」
呻く。どうせ昴の圧勝だろう。紅葉は運任せの勝負だと言っていたが、昴相手にそんな理屈が通じるとはとても思えない。
口八丁で心理戦に持ち込めば、あとは昴の独壇場だ

（紅葉が意地になつて全部脱いじまう前に、止めたほうが良いかもな）

結構、有り得そうな予想だった。

勇吾は隅っこの紫亜に視線をやった。鍋の番があるので、彼女に頼もう。

「紫亜。紫亜ー」

「なに？」

愛しのどんより姫に声をかける。いや、どんよりは今だけだが。

「飯の準備はほとんど出来たから、上の二人を呼んできてくれ」

「あ、うん」

少し調子を戻して、紫亜が頷く。素直に階段の方へと歩いていった。それを見送りながら、呟く。

「さて、盛り付けるか。………ん？」

パスタを二つの大皿に分けたところで、ふと視線を感じた。鈴だろう。今ここには、自分と彼女しかいない。

「どした？」

「あ、いえその。またまた今更な事が気になりましたですね……」

鈴は何故か、口ごもった。

「……？」

眉間に皺を寄せて、勇吾は続きを待った。

十秒ほど間をおいて、ようやく鈴の口から言葉が出てくる。

「あの、先輩とあのおねーさんは、どういづご関係です……？」

「ああ、それが」

勇吾は得心して、頷いた。なるほど、当然のように家に上がりこんでいる紫亜の存在は、鈴の目には多少不可解に映っていたかもしれない。

「んー。改めて言葉にすると妙に照れくさいんだが。……まあ、あれだ。付き合ってるんだよ。俺と紫亜は」

こめかみを掻きながら、言葉を選んで言う。鈴はそれに、

「彼女さん、です？」

そう、確認するように問いかけてきた。

「そういう事だな。……意外だろ？俺に彼女がいるなんてのは。

あの頃の お前と知り合った頃の俺からじゃ、想像も付かないんじゃないか？ 当時の他の知り合いが聞いたら、腰でも抜かすかな」

肩をすくめて、茶化す。

だが、鈴の反応は、極めて鈍かった

「……………そう、ですか。なんとなく、そんな感じだとは思ってたです……………」

えらく気落ちしたような声だった。肩透かしでもくらったような、落胆じみた調子だ。

見やると、しゅん、とでも背後に書いてあるように、鈴は肩を落として俯いている。

それがどうにも不可解で、勇吾は思わず首を傾げた。

なんだろう。よく判らないが、鈴はどうやら落ち込んでいるらしい。特に何かした覚えはないのだが。

鈴が何も言わないので、手持ち無沙汰にそんな事を考えていると、鈴が急に顔を上げた。

「そっか。そうだったですか。いやはや、先輩に恋人が出来るなんて、世も末ですー」

顔を上げた鈴は、すっかり元に戻っていた。今の態度がなんだったのか、ますます判らなくなる。

だがとりあえず聞き捨てならない事まで言われているので、勇吾は頬を引き攣らせて、

「ほほう。それはつまり、喧嘩を売ってるわけだな……？」

「へへーん。鈴はほんとの事しか言っていないですー！」

「ええい、この口の減らないちびっ子は……！」

「ああっ、チビ言うなですー！！！」

結局、代わり映えのしないやり取りに落ち着く。ポカポカとあまり痛くもない攻撃を適当に捌きつつ　勇吾は師から教わった戦闘技能の盛大な無駄遣いで、するりと鈴の間合いを破った。そして、なんとなく鈴の小さな鼻など摘んでやる。

「ふふあ！？　はなふでふへんはい！」

「それだと先輩と呼ばれてるのか変態と呼ばれてるのか、微妙な気分になるな」

意味のない事を呟いて、手を離してやる。鈴は赤くなった鼻を撫でつつ、

「もうっ！　先輩なんて嫌いですっ！」

「涙目で言われても迫力がないんだが」

「ううううう！　泣いてないですー！！！」

馬鹿二人だった。

と、その時だ。

上から、声が聞こえてきたのは。

「　姉さん！？　どうして下着しか着てないの！？　ああ、待って姉さん！　そのホックに伸びた手を止めて　　！」

「離して紫亜！ この馬鹿金髪に、私だって女なんだってとこ見せてやるんだからー！」

「ああっ。姉さんが壊れた！？」

「どうでも良いが、飯が出来たみたいだし、さっさと降りないか？」

「昴君も煽るような事言わないでー！」

「ああもう、ほんとにムカつく！ この馬鹿ーッ！」

なんとというか、大惨事のようにだった。鈴も、このあんまりな状況に、ぽかんと口を開けている。

とりあえず勇吾は、頭を抱えて蹲りながら、自分を慰めるように咳きを漏らした。

「……………あー、なんつーか。ギリギリセーフ、かな？」

「チエンジだと思っです」

「アウト三つ分かよ……………」

どいつもこいつも、馬鹿ばかりだった。

第二十三話：つかの間の、優しい嵐（後書き）

ちよろつと間が空きました。キャラの崩し具合が上手くないか……

どうも、へっばこ物書きの龍之介です。

今回は中身的にはあんまり詰まってません。というか詰めませんでした。この悪ノりに付き合ってもらって、くすりとても笑っていただければ、私の目論見は成功です。

こっからちよろつとシリアスというか刺々しい感じが混じります。怪しげな新キャラとかも出してますし、少しだけ緊張感じみたものも漂うかも。

では、次回のあとがきで。

閑話休題：事の裏側（前書き）

独白：黒崎神無

この世には、どうしようもないクズが存在する。

これは、そういうクズの一例を端的に示した話だ。

この世には、どうしようもなく哀れな兎が存在する。

これは、その兎が何故哀れまれているのかを示唆する話だ。

そして どうしようもなく愚かな獣が、同時に道化でもあるという事を、語った話でもある

閑話休題：事の裏側

仕事の成果は、正であれ負であれ、上司に報告する義務がある。それは一般の会社でも、黒崎の所属する特殊な『会社』でも変わらない事実だ。

そう、ヤクザにも、上司あにきばんというものが存在し、報告義務もまた、生じるものなのだ。

だからというわけでもなかったが。

上司からの命令を受けて動いていた黒崎は、その命令の遂行具合の報告を行っていた。

* * * * *

「で、目の前に目的のモンがあるつてのに、のこの尻尾巻いて来たつてわけかア？」

「……ええ。そういう事になります」

『報告』を聞き終えてから放たれた、馬鹿にしたような言葉にごく平静な調子で切り返ししながら、黒崎はふと自分の手に意識を向けた。緩くだが、拳が握られている。それに苦笑を漏らしかけて、黒崎は少し苦勞しつつ、どうにか自制した。代わりに、拳を解いて軽く開閉する。

は（……やれやれ。存外、俺も気が短いな。この程度で感情が動くとは）

心の中で呟く。聞かれて困るほどの内容ではないが、だからといってわざわざ声に出す事もあるまい。そんな事を考えている間に、相手の機嫌が、どうやら斜めに傾いたようだった。

「チツ。平然としたツラしやがって。気に入らねエ野郎だ」

「……………」
特に問いかけというわけでもなさそうなので、黒崎は何も言わずに黙り込む。

「まったく、オヤジもなんでこんなを気に入ってやがんのかねエ。ついにボケでも入りやがったか？ ああ、まったくもって気に入らねー」

黒崎の沈黙をどう受け取ったのか、相手は続けて小言を言い出した。芝居のかかった身振り手振りを交えて、実に傲慢な態度で文句を並べ立てていく。

それを聞くともなしに聞きながら、黒崎は視線だけを動かして周りを見やった。特に理由はない。強いて言うなら、単にこの男の話を真面目に聞く気がないからだ。

どうせ、男はお喋りに夢中でこちらの様子など見てはいないだろうし、見咎められる事もあるまい。

(どの道、見慣れた物しかありはしないがな。それでも、このカスの顔を眺めているよりは、随分ましだろう)

実際、動かした視線で見えるのは、いつもの事務所の内装、そしてこの部屋にいる人間だけだった。

部屋の真ん中に置かれた机と、それを挟むようにして鎮座する、二つの上等そうなソファ。黒崎と稲田が座っているのは、このソフ

アーだ。

稲田の隣に目をやると、半裸の女が眠たそうな顔で座っているのが見えた。前に見たのとは違う女だ。またぞろ、そこから金でもばら撒いて連れて来たのだろう。この男はクズだが、金だけは持っている。

別段興味をそえられるほどの美女というわけでもないのに、一秒程度で視線を逸らす。

足元には、ソファーと同じく、えらく上等そうな絨毯が敷かれていた。

あとは、大したものもない。

顔を動かしていないので見えないが、部屋の一番奥には『仁・義・侠』と書かれた額縁入りの長半紙が。壁に取り付けられた台には日本刀があるはずだ。

この部屋にあるのは、精々そんなものだった。

いかにも、といった感じの、極道の事務所。それがここだ。正確には、若頭専用の個室だが。

と、そこで黒崎はふと頭痛を感じた。それは錯覚だったが、別に本当に頭が痛くなってもおかしくはない。

(若頭、か)

目の前で未だにつまらない小言を繰り返している男、稲田。この男が、近衛組の若頭であるという事実が、黒崎としてはどうにも不可解で、そして頭痛の種でもある。更に言えば、黒崎の直属の上司であるということも。

若頭といえば、ヤクザの世界では組長に次ぐ立場の人間である。組長が老齢であるなら実質的に組を動かすのは若頭だし、もっと単純

に次の組長候補の筆頭でもあるのだ。

当然、その立場になるには、相応の実力が必要。この辺りは、普通の企業でも同じだ。権力を持つには、必要なものがいくつかある。

腕っ節の強さ、頭の切れ、あるいは人望、侠気、度胸。激務に耐えるだけのタフさや、人材を見分ける目。全てを兼ね揃えている必要はないにしろ、せめてひとつくらいは傑出したものが欲しい。

だが、この稲田という男には、そのどれもない。

喧嘩は弱いし頭は悪い、好き放題するので人望など望むべくもない。当然、侠気と度胸にも欠け、すぐに音を上げるヘタレで、自分に都合の良い人間しか周りに置かない。他にも、身の程をまるで弁えないなど、欠点を挙げていけばキリがない。端的に言ってしまうば、クズだ。

それでもこの男が若頭などという大層な椅子に座っていられるのは、ただ一つだけだが、この男にも取り柄というものが存在するからだ。それは 血。

この男は、現・近衛組組長の、実の息子なのだ。

現組長は一人の極道としては卓越した男だが、同時に親馬鹿でもあった。

稲田がどれだけ好き放題をしようと、結局はそれを許してしまう。

若頭に指名して権力を与え、金も好きに使わせた。

そんな調子でこの男が組の舵取りを一部行うようになって、そろそろ二年が経つ。

その間、このクズは素人にクスリを売り、女を売り、最近では拳銃にまで手を出そうとしているらしい。

その影響で、とりあえず金は集まり始めたが、その分警察の注意も殺到している。

元々、昔気質で素人には手を出さない信条を持つ近衛組は、警察との関係もそう悪いものではなかった。

そもそも黒桜という土地柄からして、警察とてそう簡単に手出しが出来ないという現状だし、近衛組は質たちの悪い他の組とコトを構える事が多かったため、むしろ警察などよりも抑止力としての役目を大きく担っていた。

（だが、このカスがそれを台無しにした。警察も俺が多少無茶をやったところで、同業者が相手なら見て見ぬ振りをしていたというのに。お咎めの殆んどない、良質の喧嘩が酷くやりにくくなった）

実のところ、黒崎が一番困るのはその点に関してだ。そもそも黒崎が極道をやっているのも、質の高い喧嘩を求めての事である。

脳髓にいる狂った獣を宥める為の方法は、闘う事だけだと、黒崎は答えを得ていた。

だが、ここ最近、この稲田のおかげで喧嘩がやりにくい事この上ない。

（濃度の高い、死により近い喧嘩 殺し合い。これ以外に、この獣を抑えるものはない。豚箱入りせずに繰り返すには、ここが最適だったのだが）

それもどうやら、そろそろ潮時らしい。

稲田をどうにか出来れば、その限りでもないのだろうか

（ だが、消すわけにもいかん。こいつは仮にも兄貴分で、組長オヤジには世話になった。いくらクズでも、息子は息子だろう。………だからこそ、俺にこの面倒な役職を押し付けたのだろうしな）

親馬鹿であるとはいえ、組長もやはり一角ひとかどの人物だ。息子の愚かさには気が付いていたらしく、能力も人望もある黒崎を若頭補佐に立て、息子の目付け役にしたのである。

黒崎が黙ってこの馬鹿者に従うのは、そのせいだ。いくら何でも、組長の言葉には逆らえない。

黒崎が動くのは、あくまでもこの馬鹿が限度を超えた行動をした時のみ。

もつとも、その時は案外近いのではないかと、黒崎は思っている。特に、今回の件を踏まえて考えると、なおさら。

もはや黒崎は、目付け役というよりは、稲田の暴拳の実質的被害者である。

(そう、被害だ)
じわりと滲んだその言葉に、黒崎は苦いものを感じた。

と、そこで返事をしない黒崎を怪しんだらしい稲田が、怪訝な声を上げた。

「オイ、聞いてんのかア？ 黒崎ちゃんよオ」

「ええ、聞いていますよ」

聞き流してもいるがな、と心の中で付け加えながら、黒崎は視線を戻した。

ついでに、もつともらしく頷いておく。

それに、稲田はひとつ鼻を鳴らして見せた。それから、芝居じみた調子で言ってくる。

マ 「ったくよオ、『近衛の黒鬼』ともあろう者が、こんなチンケな仕ヤ

事もこなせねえのかア？ だいたいよオ、何の収穫もなしに報告に来るってのも、おかしい話だよなア？」

その言葉に、黒崎は僅かに眉を寄せた。とりわけ、『近衛の黒鬼』という単語に対して。

それは黒崎の、言わば通り名だった。誰が最初に言ったのかは判らないが。

常に黒ずくめで抗争に現れ、銃弾と長ドスの交錯する修羅場を無手で蹂躪する。

その圧倒的な強さへの畏怖、あるいは武器に素手で挑む^{あつ}侠気^きに対する敬意から、その名が付いた。

少なくとも桜通り近隣で、この業界に身を置く者なら、大抵の人間は知っている。その程度には、有名ではある。ただ、黒崎自身はそれをあまり気に入っていないのだが。

（まるで漫画か何かのようだからな。間抜けか、あるいは道化じみた気分になる）

呟く。表情は既に平時の鉄面皮に戻してあるが、心中では多少の苛立ちがあった。

黒崎はなるべく言葉を選んで、慣れない敬語を吐き出す。

「私がこの件に着手して、そう時間は経っていません。いくら簡単な仕事でも、即座に解決、とはいきませんよ」

「チツ。使えねーな、テメエはよオ」

言って、横にいる女の肩に手を回す。女は一瞬迷惑そうな顔をしたが、すぐに媚びたような表情を作って、稲田に擦り寄っていった。

嘆息したいのを多大な労力でせき止めて、黒崎はやはり胸中でだけ

眩く。

（カスがよく言う。そのチンケな仕事を極限までややこしくしたのは、貴様だろくに）

ここで、ようやく黒崎の思考と稲田の話とが結びついた。さきほど考えていた『今回の件』である。とはいえ、それ自体はごくありふれた、借金の取り立てでしかなかったのだが。

泉恭一。債務者は、確かそういう名の男だったように思う。

元々は稲田自身が、二ヶ月ほど前に、十万円ほどの貸し付けを行った相手だ。

十五　つまり十日で五割という暴利で、である。

最初の内は、利子もちゃんと返済されていた。

だが泉恭一は二週間前に、突然失踪した。どういう手段を用いたのか、一夜にして完全に姿を消したのだ。泉恭一には妻子があったようなので、家族全員消えうせたという事になる。

いっそ鮮やかといっても良い手際だった。

とはいえ、黒崎にとっては、これがケチの付き始めだった。

それつきり、まったく足跡の追えない債務者に激怒した稲田は、直属の部下である黒崎に、借金回収の方法を考えるように命じた。

黒崎はこうまで完全に姿を消されてはそう簡単には見つかるまい、と思いつつも命令に従い、差し当たっては舎弟数人を使って、泉恭一の周囲を調べさせた。

正確な家族構成を割り出し、顔を判別できるように写真を手に入れ、長期戦になる事も覚悟して聞き込みをし、債務者の行方を追った。

そして、存外にあっさり、泉恭一の一人娘の情報に行き当たった。

桜通り近辺で、その姿を見たという組員がいたのだ。

まさか、と思いつつ、黒崎はその情報を頼りに調査範囲を狭めていった。

（そして、二日程して、娘は発見された。両親について行かなかったのか、あるいは逆……逃げるのに邪魔だからと捨てられたのか。まあ、どちらでも構わんが）

どうやら友人の家でも泊まり歩いていたらしく、数箇所で見撃情報が上がっていた。

その情報を、小娘の写真とともに稲田に報告したところ出たのが、拉致の指示だった。

乱暴な手段だが、手取り早いのは間違いない。

ただ、一週間前に小娘が転がり込んだ家からは、今日になるまで出てこなかった。拉致の決行はつい先ほどとなった。都合よく黒桜に迷い込んでくれたので、舎弟を二人向かわせて、連れ去る直前まで持っていったのだが

しかし、結果は緒方勇吾イレギュラーの介入により、失敗に終わった。だからこそ、黒崎はこうして稲田に小言を言われている。

（まったく、面倒な事だ。ようやくこの茶番から開放されたかと思えば、思わぬところで、あの小僧が現れて全てを台無しにしてくれた）

呟き、黒崎は緩く息を吐いた。気分だけはため息のつもりで、ゆっくりと長く。

その僅かな時間の中で、愚痴つても仕方ないかと自戒する。それから、気が進まないのを堪えて口を開いた。

「それで、これからどう動きましょう？ 先ほどは、若の命令通りに拉致を試みましたが、それは報告で言った通り、イレギユラーの介入で失敗に終わりました。目標の小娘は、その後イレギユラーが連れて行ったようです。一応、現在位置の確認はしてありますが」

「決まってるんだろ？ もっとかい拉致するんだよ、ボケ」

「……何故、そうまで拉致を推されるので？」

黒崎は、辛抱強く問いを発した。これはずっと疑問だったのだ。借金の回収が目当てなら、この娘の役割は泉恭一の居場所を知るための中継ポイントだ。

だが、泉の娘が、両親の行方についての情報を握っているとは、正直なところ考えにくい。

あの泉恭一という男は、稲田という大間抜けが相手とはいえ、ああまで見事に逃げおおせたのだ。

こんな簡単な手がかりを残しているとは、到底思えなかった。

それでも黒崎が泉の娘を追ったのは、何のことはない。他に手がかりが無かったからだ。

稲田の命令を遂行するには、可能性が低くともこの娘に接触するしかない。

とはいえ、だ。拉致という手段は、正直言ってあまりいただけない。たかだか十万円の、しかも利子で元金の回収が住んでいる借金の為

に犯すには、あまりに不釣合いなリスクがあるからだ。いくら黒桜といえど、一般人が誘拐されたとなれば警察も動く。まともな判断が出来る者なら、ここは泉恭一からの回収を諦める場面のはずだ。

稲田とて、その程度の事は流石に承知しているだろう。だとすれば、こうまであの小娘に執着する理由はなんなのか。

疑問を抱えた黒崎の言葉に、稲田はやはりへらへらと笑い、そこに何かいやらしいものすら混じらせつつ、口を開いた。

「ああ？ んなもん、借金のカタにするからに決まってるんだろオ？ 女は昔から、払えねー借金は体で払うってのが相場だろーが？」

それに黒崎は、こめかみが盛大に痛むのを感じた。

（この男は、いったい何を言っている？）

黒崎は、先ほど顔の確認をしてきた泉の娘を脳裏に描いてから、

「……………仰る意味が、よく判りません。あの小娘に、体で払わせろ？ 確かに、そういう趣味の者なら高く買うでしょうし、他にも利用価値がないわけではないでしょう。ですが…………その手の人間は探すのに手間がかかる。拉致そのものよりもリスクが大きい。可能な限り避けるべきではないかと」

脳裏に浮かんだ小娘の姿は、どう見ても中学生、いや、下手をする小学生にすら見えた。

実年齢は確か十六だったはずだが…………どのみち、まっとうな成人男子が興味を持つ年齢ではない。

黒崎は痛むこめかみを殊更に意識しながら、稲田の言葉を待った。と、稲田の笑みが途端に下品さを増す。正視に耐えないほどの下劣さを滲ませながら、稲田は、

「あん？ ちげーよ黒崎ちゃんよオ。売るんじゃない。俺が食うんだ」

そう言った。

「……………」

絶句した。錯覚ではない頭痛に頭を悩ませながら、黒崎はひたすら沈黙する。

稲田は、そんな黒崎の事情など気にせず、やはり下品に笑うだけ。

「ケヒヒッ。調査報告で写真見てからよオ、こりゃいー素材だと思つたねエ。ヒヒ、あのガキくせー感じがたまんねえわけよ、俺としちゃーさア」

一瞬、組長への恩であるとか、目の前のこのクズが上司であるとか、そういう事実を全て忘れて、こいつはここで殺しておくべきではないかとも思ったが、咄嗟の判断でどうにか自制する。

「そう、ですか。良いご趣味をお持ちで」

せめて皮肉だけでも、と言葉をこぼすが、目の前のクズ改め変態野郎ロシコは、どうやら既に聞いてすらいらないようだった。

「ヒヒ、ヒヒヒ……あア、たまんねエなア。早いとことつ捕まえて、もっと俺好みに改造してエ」

黒崎は今度こそ、苦々しい感情を抑えきれずに渋面を浮かべた。それを隠すために少し顔を伏せ、暗い心中で、

(…………つまりこの男は、小娘の顔写真が手元に来た時点で…………俺が写真を提出した時点で、債務者を取り逃がした恥でも金でもなく、己の肉欲を優先していたという事か。

…………なるほど、道理だな。最初の指示が拉致であったのも、ある意味納得だ。

ふ。やはり、時は近いな。この男は、必ず俺が殺す)

苦い理解をしながら、黒崎はさくりと胸に刺さる感覚を得た。殺意だ。

気色の悪い笑い声を漏らし続ける稲田に一瞥だけくれて、腰を下ろしていたソファから立ち上がる。

方針を聞いた以上、この場に留まる理由もない。

「…………では、あの小娘に関しては再び拉致の方向で動くよう、部下に伝えておきましょう。現在小娘は、イレギュラーの家にいます。が、恐らくそう長くそこには留まらないかと。イレギュラーとの関係がどういうものであれ、親類ではない以上、短期間の逗留である可能性が高い。小娘が再び単独行動を取った時を機に、拉致を敢行します」

一息に説明を終え、黒崎はポケットに仕舞っていたサングラスで、目元を覆った。

視界がいつもの明度を取り戻した事に僅かな安堵を得つつ、出口へと向かう。

その背に、トリップから帰還した稲田は、にやにやと笑いながら言葉を投げた。

「 ああ、判つてるとは思うが、二度目の失敗は許されねーよ？
吉報を待つてるからなア。黒崎ちゃんよオ」

不快極まる声を背にしながら、黒崎はゆっくりと扉を押し開けた。

* * * * *

稲田への報告を終えた黒崎は、近衛組の事務所から出た。

結局、あの馬鹿者の良いように使われるしかないのは腹立たしい限りだが、これが仕事なのだから仕方がない。

そうして自分を納得させつつ、足を速める。やるべき事が決まった以上、即座に行動に移らねばならない。

黒崎は煙草に火を着けながら、前を見やった。事務所に入る前に命じて舎弟を待機させていた、黒塗りの車が視界に入る。

そう安くもない代物だ。というか、きつぱりと高級車である。

黒崎は足取りも重く、車に乗り込んだ。

「 アニキ。首尾はどうでした？」

助手席のシートに体を納めた途端、待機させていた舎弟が、状況の説明を求めてくる。

小橋こはしという、黒崎と直接杯を交わした舎弟の一人である。

黒崎はとりあえず車を出すように仕草で示した後、平淡な声音を作って告げた。

「 若頭のお達しが出た。小娘を拉致しろ、との事だ。どうやら、もはや取り立て自体はあまり意味を為さんらしい」

「……………どういうことです、それ？ 俺らは泉恭一の借金回収の為に、情報源として小娘を追っていたはずじゃ？」
車を発車させながら口をついた小橋の疑問は、先ほど黒崎の持ったものと同じものだった。
黒崎は億劫おっくうそうに煙草の灰を灰皿に落とすと、ため息混じりに言うてやる。

「……………あのクソ虫は、どうやら少女趣味の気があるらくてな。既に金でも外聞でもない、肉欲を求めてあの小娘を欲している。とんだ俗物だ」

「俗物っすか。つくづく下衆な男っす……………」

「だが、それでも俺たちより権力を持っている。組全体を敵に回すつもりがないのなら、逆らうわけにもいくまい」

「アニキの舎弟は、俺も含めた全員がアニキと共に死ぬ覚悟。クーデターを起こすというなら、俺たちは喜んでドスを握りやすよ」
笑みすら浮かべて言う小橋に、黒崎は表情は変えないまま呟いた。

「ふ……………確かに、それは愉快的な案だ。不義理ではあるのだろうが
奴を殺せるのなら、汚名を被るのも一興かもしれん」

物騒な事を打ち合わせる二人を乗せて、車は大通りの方へ向かっていく。

と、小橋は、ここからは仕事の話だともいうような真剣な表情を作った。黒崎は元より真顔だ。

「それで、具体的にはどうするんです？ 確か、あのガキはまたどこかの家に転がり込んだんでしたよね？」

「ああ。だが、すぐに出てくるだろうと俺は読んでいる。それまでは交代で張り込みだ。小娘が出てきたら人気のない所に向かうのを待ち、しかる後に拉致する」

「……………あんま、気は進まないっすけどね。あんなちっこいのがひでえ目に遭うってのは」
小橋は苦い表情でそう呟いた。怒りのようなものも、声には混じっている。

乱暴者で不器用だが、小橋という男は基本的に弱者に甘い。というか、黒崎の舎弟は大半がそういう者たちだ。

黒崎自身はどうかといえば 本人の意識としては、自身はどちらかといえば非情な人間だと思っている。敵であるなら、黒崎は老若男女区別しない。こと闘争に関する事では、黒崎に躊躇は存在しないのだ。

とはいえ、舎弟たちには、『アニキは女子供に甘い』と散々言われるのだが。

なんにしろ、黒崎は小橋の言葉に、僅かにだが頷いた。

拉致失敗の報告を舎弟から受けた後、自ら出向いて確認してきた泉恭一の娘の姿をふと脳裏に浮かべて、ほんの小さな呟きを漏らす。

「ああ、そうだな。確かに、不憫ではある。泉鈴とかいう、あの小娘は」

閑話休題：事の裏側（後書き）

時間が出来たのでせっせとキーボードを叩いている、へっぴょ物書きの龍之介です。

クリスマスシーズンに何で時間があるのかは……うん、察してください。

ともあれ、後輩編の四話目をお送りしました。

何だか思ったより長くなりそうな予感。

あと五話くらいは後輩編が続くかもしれません。

下手したらもつと長いかも。海編で出てきた新キャラ二名も絡めつつ、最近出した奴らもたっぷり書きたいので、ちよいと分量を食う感じ。

それでは、また次回のあとがきで。

年末までには、もう一回くらい更新できるかと思えます。

第二十四話：ちいさな決意（前書き）

独白：鈴

ここは、暖かい場所です。
幸せな時間です。

だから、私はここにはいられません。

私には、不幸がついてくるから。

だから、私は

第二十四話：ちいさな決意

団欒。そう呼べる食事風景など、どれくらいぶりだろう。しばらく
いや、たぶんずっとご無沙汰だったのではないかと思う。

鈴は一人っ子だが、両親は息災だ。しかし、家族揃って食事をした
覚えがあまりない。

多忙な両親だったので、一緒に夕食を取る事は少なかった。

特に父親は仕事でほとんど家に帰ってこなかったし、母親も専業主
婦というわけではなかったから、時たま家を空けていた。

結果として、鈴は家では一人であることがほとんどで、家族みんな
が揃うことは極端に少なかった。

それが不幸な事なのかどうかは、彼女には判断が付かないのだけ
れ。

(でも、ちょっとだけ寂しかったのは、確かなのです……)

そんな事を、鈴は心の中で呟いた。

場所は緒方家のリビング。そこに置いてある、さして大きくもない
テーブルに料理を並べての、夕食中だった。勇吾、昴、紫亜に紅葉
そして鈴。総勢五人での食事である。

始まってから十分と経っていないが、鈴の握ったフォークは、数分
前から止まったままだ。

この和やか いや、どちらかといえば賑やかか な食事の雰囲気
に、中あてられているのだろう。なんとなく、そう確信する。

(いつもご飯は一人でしたから、なんだか落ち着かないです……)

手慰みにフォークで皿を突付きながら、ふと周りの面子に目をやる。思い思いにテーブルの周りに腰を下ろして、皆一様にパスタの山とスープ、そして鈴が盛り付けたサラダに手を伸ばしながら、雑談に興じている。

「あ、このスープおいし。シンプルだけど悪くないわね」

「そりゃどうも。つつても、お前が言ったように調理法はシンプル極まらないから、あんま誉められたもんでもねえんだけど」

「うう……それすら出来ない私っていったい……」

「ああもつ、いちいちへこまんでくれ、紫亜。今度料理教えてやるから」

「本当？ わ、私頑張る！」

「紫亜。張り切るのは良いが、フォークを持ったままガッツポーズするのはやめるべきだ。刺さっていたきのこがダイビングしている」

「あつ。ごめんなさい昴君」

「こら昴。細かい事にいちいち煩いわよ」

「お前が雑すぎるんだと、俺は思うがね」

「この、誰がアバズレですって!？」

「そこまで言っていないだろ」

喧々囂々なんやかんや。

よほどこの面子でいる事に慣れているのか、空気がやけに軽い。食べるのと喋るのとで、彼らの口が閉じっぱなしになる事はなかった。夕食中に楽しくお喋り。鈴にとってそれは、ずっと欲しかったものであり、そして不慣れなものでもあった。

(うう、この空気に入り込むのは、私には無理なのです……)

皿を突付くペースが上がる。カツカツカツ、カツ。小さいが通りの良い音が、どこか遠慮でもするように響いた。しかし、雑談に意識が向いているのか、誰もそれには気付かない。

いや、一人昂だけはちらりと鈴の方に視線を向けていた。しかし、ひとまず放置を決め込んだのか、鈴に気付かれる前に視線を戻している。

と、その間にも会話は止まる事なく、話題を定まらせずに続いている。

まず、口火を切ったのは勇吾だった。

「あ、そっぴやよ。さっきの野球拳、結局何勝何敗だったんだ？最終的に紅葉が負けたのは漏れ聞こえてきたけど、詳細は聞いてないし」

「勇吾……お願いだからその話はやめて……。ああつ。私の馬鹿っ！」

頭を抱えて、紅葉。どうやら先ほどの暴走を思い出しているらしい。顔は羞恥で真っ赤になっている。

「あー、そうか。勝負に熱くなり過ぎて、思いつきり下着姿を昂に晒してたみたいだもんな、お前。あまつさえ全裸にすらなるうとし
たみたおわっ!? てめえ紅葉! フォークで人の目を突こうとす
んな危ねえだろ!？」

「う、ううう煩い! その話は無し! 今後一切の口外を禁じる!
言ったら引っぱたくからねっ!」

慌てふためく紅葉に、勇吾は自分の眼球の心配をしつつ、

「いや、そこまで気にする事もないだろ。どーせ昂の事だ。下世話
な目で見てたわけでもないんじゃないか?」

「ええ、そーね。私が下着一枚になっても、まるで石ころでも見て
るよーな目をしてやがったわ、この馬鹿金髪。だからムカついて、
つい下着まで脱ぎかけて ってなに言わせんのよ!？」

「いや、お前が勝手に言ったんだろってのおおおおっ!?! だか
らフォークは人の目を突く為にあるんじゃないか! 今ちよつと睫毛
に当たったぞおい! っーか引っぱたくんじゃないか! っつたのか!?!
なに普通に凶器攻撃に移行してやがるっ!」

「あんたが余計な事を聞くからでしょーが!」

「ただの質問の代償が眼球一個じゃ、どう考えてもレートが狂って
るだろがっ! じゃあ何か、昂にお前の半裸の感想でも求めたら
」

「被害は眼球じゃなくて、心臓になるわね」

「殺す気満々か、おいっ!?!」

馬鹿丸出しのやり取りだったが、これはこれで楽しそうではある。その証拠に、紫亜も苦笑を浮かべるだけで特に止めようとしないうし、昴に至っては実に楽しげに観察状態に入っている。

鈴は俯きながらそれを上目遣いで眺め、こつそりとため息を吐いた。思索は止まらない。それも、どちらかといえばネガティブな方向に流れ始めている。

（ それにしても。緒方先輩に彼女さんがいたなんて……うう、ショックです…… ）

先ほどの会話をふと思い返してしまって、一人落ち込む。

中学時代には、いや、今でも少し、鈴は勇吾に対して好意を持っていた。

ただしそれは恋愛感情ではない。どちらかといえば、兄を慕う妹のようなものだろう。

それは昴に対しても似たようなものではある。まあ、彼は意地悪ばかりするので、ちょっと苦手にしてもいるが。一人っ子の彼女は、兄弟というものに憧れているのである。

なので別に、紫亜の立場が羨ましいというわけではない。ただ、誰よりも彼に近いところにいるというのは、少しだけ妬けた。

と、そこで鈴は、ふと自分の思考に疑問と、そして軽い驚きを感じた。

（ どうしたです、私。こんな事で悩むなんて変です……。今の私に、こんな余裕はないのですのに ）

彼女は今、本来ならかなり逼迫ひっかくした状況にある。
その事を思い出して、鈴は心中を暗くした。

鈴の両親は闇金に借金をしている。事の始まりはそれだ。しかも返済が出来なくなったらしく、今鈴は、両親共々取立て屋に追われているのだ。もっとも、鈴がそれを確信したのは、昼間にあった黒校の件からだ。

鈴とて見た目通りに幼いばかりではない。自分が取立て屋に狙われていて、周りの人間を巻き込みかねない可能性くらいは、考え付いていた。

だからこそ、これまで泊めてくれていた友人の家からは、今朝出てきたのだ。

せつかく親切に、しかも何も聞かずに一週間も泊めてくれたのだ。自分の事情に巻き込んで、恩を仇で返すわけにはいかない。

そして 昼間の件で可能性が確信に変わってから、鈴は友人の家に泊まる事をやめようと思った。誰かを頼れば、その誰かは確実に鈴の事情に巻き込まれてしまう。それだけは耐えられなかった。

なのに。鈴は今、ここにいます。

かつて兄のように慕い、今でも大好きな人の所に。一番巻き込まれない人の所に、います。

(……いけない事なのは、判ってるです)

そう、判ってはいる。判ってはいるのだ。自分はここに居てはいけない。

目の前で交わされる言葉と笑顔、ボケにツッコミ。いつもこんな調

子なのだろう光景を見ると、なおさらそう思う。この光景を、壊してはいけない。

そして何より。この和の中に入りたいだなんて、絶対に思っ
てはいけない。

(でも……ここはとっても暖かいから……先輩が、あんな事を言うから……)

『俺の家に、来ないか?』

あの、先輩が。

口も目付きも悪くて、道場以外で見つけた時には必ずといって良いほど誰かと殴り合いをしていた、あの先輩が。

特別顧問の先生以外、誰一人として止められなかった、あの喧嘩屋が。

頼り甲斐はあっても、あんまり優しいところを見せてくれなかった、あの不器用な兄貴分が。

頭を撫でながら言ってくれた。

別に優しくもない口調でも。ぶっきらぼうな声であっても。

紡がれたその言葉は、鈴にとってどうしようもなく嬉しいものだった。

だから、鈴はここに居る。

あの言葉に抗いきれなくて。

嬉しくて、しょうがなくて。

勇吾に恋人がいたというのは些かショックではあったが、それでも鈴は、ここ最近で一番幸せな時を過ごさせている。

と、物思いに耽る鈴の頭上から、不意に声がかげられた。

「どうした、泉。手が止まってんぞ。腹減ってねえのか？」

「え？」

声をかけてきたのは、どうやら勇吾のようだった。他の皆も会話を中断して、鈴に視線を注いでいる。

勇吾は行儀悪く肩肘をついて、フォークの尻でパスタの山を示して見せた。

「無理に食えとは言わんが、ある程度は腹に入れといた方が良いでしょう。たぶん夜中に腹減るだろうし」

「あ、はいです」

鈴は慌てて、皿を突付いている手を止めた。注視されているのがなんとなく気恥ずかしくて、頬を掻いて視線を泳がせる。

それを見ている他の面々は、鼻を除いて皆一様に怪訝な表情を、微かにだが覗かせた。

さっきまでのテンションと今の鈴とを比べると、やはり違いが見て取れるのだろう。

このままだと、『何かあったのか？』とでも聞かれてしまいそうだ。特に、どういうわけか気に入られているらしい紫亜などは、今にも口を開きそうだ。それはまずい。聞かれたところで、答えようがない。親の借金の事を考えてた、なんて言える訳がないのだ。

鈴は少し慌てた。

が、誰かが口を開くよりも先に、動く者がいた。

「ほら、取り分けてやるから少しは食べておけ。ただえさえお前はちんちくりんなんだ。大きくなりたければ栄養を摂るしかないぞ」

昂だ。毎度の皮肉を口にしながら、鈴の皿に少量ずつパスタを載せ、ついでにサラダも軽く盛って鈴に差し出す。誰も口を開けなくなる、絶妙のタイミングだった。機を失った紫亜は、閉口して昂に視線を送るに留まっている。

「あ、はい。どもです」

皿を受け取りながら、鈴はなんとなく瞬きした。庇われたのだろうか、今は。たぶん、そうなのだろう。

ちらりと昂を見やる。彼は別段変わった素振りもなく、平然と食事に戻っている。

(……あの意地悪な芹沢先輩まで、何だか優しいです)

嬉しい。あの頃から好きだった、けれどどこか退廃的で剣呑だった二人の兄貴分が、二人とも優しい『お兄ちゃん』みたいになっただけで目の前にいる。

自分たちの居場所と幸せを見つけて、笑って生きている。

だからこそ

鈴は誰にも見えないところで、一つの事を心に決めた。

ちいさな、決意。

この暖かな絆を壊してしまわないように
行こうと。

自分は、ここから出て

ただそれだけを、決めてしまっていた。

第二十四話：ちいさな決意（後書き）

正月にインフルエンザにかかりました。えらいしんどかった。

そして今は、マイコプラズマという感染症にかかってます。えらいしんどいです。微熱が下がらない……

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

やや短めの話で更新。次はどうでしょうか。

ええと、読んでいただいている方は出来れば気長に待っていて下さるとありがたいです。

第二十五話：二人（前書き）

目を背けてはいられない事。

進むには、越えなければならぬもの。

男二人が追われている。己の弱さに、背後から

第二十五話：二人

水の流れる音に混じって、カチャカチャという食器の悲鳴が聞こえてくる。更には、それらに被さる形で、どこか陰鬱にも思える声が、キッチンに響く。

それはどこか、吐き捨てるような響きだった。

「　　そういうわけだな。どうやら、泉の奴を見捨てる事は出来なさそうだ。心情的にも、状況的にもな」

台詞をそう締めくくって、勇吾は皿を洗うために手元に向けていた視線を横に滑らせた。

「……そうか」

視線の先から、声。昴だ。それに勇吾はああ、と頷きながら、これまで洗っていた皿の水気を軽く切って、彼に手渡した。受け取った昴は、考えを纏めるような目つきで虚空を見やりながらも、慣れた手つきで皿を乾いた布巾で拭いて、食器乾燥機に並べていく。それからは、流れ作業だった。勇吾が洗って、昴が拭く。淡々と、その動作が続いていく。

皿洗いである。どこからどう見ても、完璧に。

男子高校生二人が流し台に立って、妙に息の合った皿洗いを繰り返している。

シニールである。

だが、その点に突っ込む人間はいない。この場には、彼らしかいなかった。

食事の終わり方に決まった事なのだが、今夜は紫亜と紅葉も泊まっていく事になった。是非とも鈴と親交を深めたいという紫亜の、たつての願いだった。勇吾は彼女たちの宿泊を最初渋ったが、元より

今日は鈴が泊まっていく予定だったのだ。今更、女の子が男の家にホイホイ泊まるのは倫理的にどうか、などというのも馬鹿らしくつたし、そもそも紫亜の頼みを断れた験しがない勇吾である。折れるのに時間はかからなかった。そして女性陣は今、連れ立って入浴中だ。

そして キッチンに取り残された男二人は、当然のように食器の後片付けを始めた。

勇吾による、『現状の説明』をBGMとして。鈴を助けた経緯や、黒崎との邂逅。自身に戻りつつある『経験則』の感覚 勇吾はあらゆることを、昴に話していた。女性陣のいない今が、説明の好機だと踏んだのだ。

あの黒崎という不吉な男が関わっている以上、鈴は間違はなく何か厄介な事情を抱えている。善意を押し付けるつもりはなかったが、鈴がもし、その事情を話し、こちらに助力を請うのであれば、勇吾は手を貸すつもりでいた。

だが、勇吾が持つ手札は武力だけだ。実際に鈴を助けるならば、昴の協力は不可欠なものだろう。

この男なら、話を聞いただけでも何かしらの対応策を用意してくれるだろう。あるいは、鈴の事情すら推理で辿り着くかもしれない。それが勇吾の判断だった。

と、これまで休む事のなかった二人の手が、不意に止まった。二人ともタオルで手を拭き、そのまま向き合う。

「 黒崎、か」

唐突に、昴がぼつりと呟いた。先ほど勇吾が告げた名だ。

鈴を狙っているらしい、男の名前。彼は続けた。

「お前と同じモノを持つ男

お前風に言えば、『化獣^{バケモノ}』の在

り方で存在する者、だな」

「ああ」

勇吾は顔を盛大に顰めながら、そう認めた。腹立たしいことこの上ないが、あの男と自分は文句なくそっくりだ。恐らく、闘えばもっと似ていくだろう。

あの男と勇吾の似ている部分とは、『そういう事』に関して最も顕著だろうから。

「俺の中の獣」

戦闘衝動。ガキの頃から喧嘩ばかりしてきた

せいで、体が闘争の空気に馴染み過ぎちまった、その代償だ。喧嘩が始まると、それに没頭しすぎちまう。思考は全て敵を打ち倒すことにのみ注がれ、他の全てがどうでも良くなる。例えば、海での夜みたい、紫亜にすら手を上げるような状態になっちまう」

勇吾は言って、拳を握った。何かを堪えるそんな仕種だった。そのまま、独白のように続ける。

「しばらく、収まってたんだがな。本格的な喧嘩からは遠ざかってたから。だが」

「黒崎が現れた」

言葉の先を押さえて、昴が言う。勇吾は頷いた。

「そつだ。野郎のお陰で、俺の中の獣は目覚め始めてる。海での一件で経験則が戻り始めた事も、たぶんきっかけのひとつだったんだろうが……決定打になったのは、間違いなく奴だ」

言い終えた勇吾に、昴はふと嘆息を漏らした。

それから、顎に手を添えて呟く。

「つまり、お前と同じような根っからの喧嘩屋と、一戦交える可能性があるって事か。その黒崎とやらの目的は判然としないが、どの

道泉の奴が狙われている事に変わりはない。お前の話からすると、そいつは極道なんだろう？」

「ああ。どこの組かは判らんが、龍門会系列の人間なのは間違いないはずだ」

「だとすれば、かなり厄介だな。たぶんその黒崎って男、かなり強い。お前でも勝てるかどうか、微妙なレベルだ。」

極道なんて喧嘩まみれの職業で、お前と同質の存在って事は、相当な数の修羅場を潜り抜けているはずだからな。　　殺しも、たぶん経験しているだろう」

勇吾と黒崎の歪みとはつまり、闘うという事に対する執着を意味する。例えば勇吾は、意識の中では闘う事に対する嫌悪感を持っている。愚かに過ぎた昔の自分を思い出すが故に。だが、実際に喧嘩が始まれば事情が違ってくるのも事実だった。

（少なくとも、拳を握ってる時だけは、確かに俺は昂揚していた。その狂熱が過ぎ去ったあとに残るのが、どうしようもない虚しさだと知っていても……）

武術を嗜む者にとってその気質は、必ずしも悪いものだというわけではない。強さに繋がる事もあるからだ。拳を振るう事しか『守る術』を持たない勇吾にとっても、理屈の上では悪い事ではない。だが、それでも勇吾は、この気質が嫌いだった。

平穩に、静かに生きていくには、この『獣』は足枷にしなければならない
（　　守るための力になんか、ならねえんだ。敵を潰すだけの、こんな激情は）

胸中で呻いて、勇吾は嘆息を漏らした。思考がずれ始めている。

(違うな。今は俺の事なんてどうでも良い)

意識を昂に向ける。直前の彼の言葉を思い出しつつ、勇吾は口を開いた。

「ああ。たぶん、そうだろうな。奴の纏う空気は、俺とは違っている部分があった。剣呑なのはお互い様だったが……奴のは、俺のよりも冷たいものだったように思う」

「その差が、人殺しとただの喧嘩屋との違いだな。しかし泉の奴、何だっそんな厄介なのに狙われてるんだか。まあ、そいつは追々調べておこう」

「……………調べる？ 泉に聞くんじゃないか？」
ふと疑問に思っ、聞き返す。昂は肩を竦めて、

「あの様子じゃ、聞いて喋るとも思えないからな。お前だって、当人に聞く気はなかったんだろ？」

「まあ、そうだが」

「だから、まずは周囲を当たるんだよ。 泉が進学した高校には、中学の空手部の連中も結構いるんだ。お前は興味無さ気で連絡先なんて聞かなかつたみたいだが、俺は一応メールアドレスと番号くらいは押さえてる。まあ、正直なところは、友達付き合いというより、情報網として機能させるためだけだな」

「……………んな事してたのか、お前」
半ば呆れて、勇吾は半眼を昂に向けた。

が、昂は特に悪びれた様子もなく、軽く肩をすくめて見せる。

「まあ、維持が面倒ではあるんだがな。それでも、今はこうして役に立ちそうな状況がある。用意しておいて正解だったって事だろ」と、昂は言いながら携帯電話を取り出し、操作を始めた。忙しなく

指を動かしつつも、言葉は止めない。

「とにかく。泉の周囲に関しては俺が情報を探る。お前は前前で、荒事に備えて気組みを整えておけ。……黒崎とやらを抑えるには、お前の拳が必要だ」

「ああ」

勇吾は頷いて、己の掌に視線を落とした。ゆっくりと握りこみ、力を入れる。

(……………奴と対峙した時、『獣』がどうなるのか。俺が俺のまま
で闘えるのか……………心配なのはそこ、だな)

静かに呟く。鈴の事情が掴み切れない以上、下手に警察機関に頼る事は愚策だろう。となれば、黒崎から鈴に向けられる何某かの魔手は、自分たちの手で打ち払う必要がある。

そしてその為には、恐らくあの男を 黒崎を打倒する必要も出てくるだろう。守りに入って凌げる相手ではない。

(しばらく悪さが出来ねえように、骨の五、六本でもへし折るしか
ねえだろうな。そうまでいかないにしても、病院送りにすんのは確定だ。俺と同じなら ただの怪我じゃ抑えきれない)

ただ、それが出来るかどうかは、かなり微妙だと言わざるを得ない。昂が言った黒崎の実力。それは勇吾自身も感じた事だった。あの男は 強い。

(あるいは、俺よりも。実際に拳を交えるまで、全貌は掴めねえが……………)

あの時、黒崎は一度たりとも勇吾から意識を外さなかった。背中を向けた状態ですら、だ。

つまりそれだけの自信があるのだろう。背後から襲われたところで、
どうとでも対応できる自信が。

(くそ、戦闘体勢でもなかったつてのに、何だつてんだあの隙の無
さは。どこから仕掛けりゃいいのか判りやしなかったぞ)

確実に達人級マスタークラスであろう相手だ。こちらも、余裕などまったくありは
しない。

ギリギリの攻防になった時、果たして自分は己を保っていられるの
だろうか？

握っている拳が小刻みに震えるのを、ふと感じる。知らず、力を込
めすぎていたらしい。関節が小さく軋み、悲鳴を上げている。

勇吾はそれに、苦笑して拳を解いた。 まったくどうかしている。
闘う前からこんな調子では、いざ奴と向き合った時、一体どうなる
事か。

「まあ、良しさ。闘やってみりゃ判る事だ」

口に出す。それが自分を押さえ込む呪文であるかのように。

ただ 彼は気付けなかつたが、それを呟いた時の勇吾の表情には、
言葉では表せない何かが張り付いていた。凄絶な、何か激しい感情
のようなものが。

* * * * *

(さて、と)

昂は携帯電話の操作を未だ止めることなく、そしてそれとは別に、
思考を多方面に走らせていた。

(……これで、仕込み自体は概ね完了だな。時間的には、まだ起きてる奴らが多いだろうから、すぐに集まる情報もあるはずだ。それに……そうだな。後詰めに、空手部の連中以外にも連絡を入れるか。この手の事は、浅く広く枝を伸ばす方が効果がある)

考えながら、立て続けにメールを作成して送信していく。その合間に、別の思考を挟みながら。

(よし。いくらか返信が届き始めた。だが、読むのは後回しだな。それより今は)

眩き、一度携帯電話の画面から視線を外す。その行く先は、正面の勇吾だ。激情を顔に貼り付けている、昴の相棒。

(こいつの事だ。この馬鹿、自分で気付いていないようだ。この顔は、昔のこいつのもの。それも、喧嘩が始まる直前の、もっとも昂揚した状態の顔だ。どうやら、『獣』が戻り始めているというのは、本当らしいな)

それも、かなり状態は悪い。恐らく勇吾が思っているよりも、遙かに段階が進んでいる。

それを確信して、昴は嘆息した。

(どうしたものかね。つまるところ、こいつが黒崎つてのとやり合っるのは、間違いなくこいつの中の黒い部分を引っ張り出す原因になる。だが、話の流れ的には、激突は避けられない……)

もともと、昴個人としては、勇吾が昔の感覚を取り戻す事に対して否やはない。

十年前、昴が出会った頃の勇吾は、敵対者に対してはまさに悪鬼の如き存在だった。

昴自身、かつては勇吾とやり合った事がある。当時は二人とも尋常な子供ではなかったため、その喧嘩は殺し合いの寸前にまで発展したのだ。だがそれでも、昴は勇吾を認め、勇吾も昴を許容し、今で

は互いに命を預け合えるまでになっている。
昂にとつては、今も昔も勇吾への信頼は変わらない。
だが、勇吾はどうやらそうは思えないらしい。　恐らくは、紫亜
や紅葉のせいだろう。

（あの二人に会って、勇吾は急激に変わった。『現在』こそを愛するようになったんだろうな。何だかんだ言っても平穩で、暖かいこの生活を失いたくないんだろう。　自信がないんだ。もし昔の激情を　周りが敵だらけだった頃の自分を取り戻してしまつたら、紫亜や紅葉にどう思われるかが判らないから。特に、今のあいつは紫亜を失う事を過剰なまでに恐れている。だから必死になって拒絶する。己の過去を）

元々、勇吾は愛される事に馴れていない。敵意には鋭敏に反応するが、愛情には酷く鈍感だ。
その勇吾が、紫亜の無垢な感情を受けてしまった。　もう、そこから離れる事は出来ないだろう。紫亜を失う時が、『今の勇吾』が壊れる時だ。

（だが。そうでありながらも、あいつは泉を助けると言った。見捨てれば自分は平穩なままだというのに。わざわざ鬪争の中に身を投じる選択をした。昔のあいつなら、見捨てた可能性の方が高い筈、なんだがな。身内と認めた奴以外を、あいつは守らない。それは信念ですらあつたはずだ。闇雲なようできて、自分の身の程を越えたことはしない。救うと決めた人間以外は、興味すら抱かない　）

その勇吾が、惚れた相手でも、友情を結んだ相手でもない、単なる後輩である鈴を助けるつもりでいる。命すら危うい相手を打倒せねばならない状況で。

（これも、紫亜の影響か。本当に守りたいものが出来たあいつは、今も変わり続けている。価値観すらも、真新しいものに上書きされて、別の何かになるうとしている。

その結果が 『守るべきもの』と認識する対象の、範囲拡大か。新しい価値観の中では、泉の奴は保護対象に入るってわけだ。

ふ。これは、本当にどうするべきなんだろうな。この変化を止めるべきか？ 促してやるべきか？)

昴は珍しく、決断を躊躇した。彼は慎重だが、優柔不断ではない。必要な決断を渋ることは、非常に稀有な事だった。

と。

そこまで考えたところで、手元で行っていた作業が一通り終了した。

（まあ、良い。これは後回しにするさ。今は情報の収集と整理。それが俺の仕事だ）

これもまた、珍しい事ではある。彼が結論を後回しにするという事は。

実のところ。彼もまた、変化の只中にいるのだった。

彼の意図せぬ事ではある。しかし確実に、昴自身にも変革の兆しがあるのだ。

ここ最近の、紅葉や紫亜との交流。それが昴を変えている。勇吾以外の人間に、あるいは心を許し始めているのかもしれない。特に紅葉とは、二人きりであっても警戒心を持つ事が少なくなっていた。

父親からの虐待に端を発する、昴の人間不信。それが崩れ始めてい

る。

そしてそれは、信じるという事へのリスクをも、明確に浮き彫りにしてしまおう。

そう 昴もまた、紅葉や紫亜がいるこの生活を失う事を、心の根底で恐れ始めているのだ。

己の弱さが、二人の知らぬ間にすぐ背後まで迫ってきている。

猶予はない。対決の時は、すぐそこにある

第二十五話：二人（後書き）

恒例になりつつあるラブもコメもないお話でした。

ヘッポコ物書きの龍之介です。

なんとも煮え切らない話でしたが、この次あたりから状況が動き出します。

女性陣もちゃんと出ますので、もうしばらくお付き合いをば。

では、また次回のアとがきで。

第二十六話：失踪（前書き）

独白：黒崎

気の向かない仕事だ。

まさかこの俺が、何の力も持たない小娘に手を下さねばならないとは、な。

だが、仕事は仕事だ。放棄は出来ない。

それに 何も悪い事ばかりではない。

恐らく、来る。あの小僧が。俺と同質の男が。

奴と殺しあえるなら。この仕事にも、意義を見出せるかもしれないな

第二十六話：失踪

目が覚めた。何の脈絡もなく、唐突に。もしかしたら何かきっかけがあったのかも知れなかったが、まるで覚えていないので意味がない。

「……………」

無言で起き上がり、枕元に置いてあったペットボトルの水を取り上げて蓋を開け、一口飲む。

次いで勇吾は、煙草に手を伸ばした。寝起きなのに、手付きには何の問題もない。着火した煙草を啜えて、彼は朝日の差し込む窓を乱暴に開けた。

「 良い天気だな。不気味なくらいだ」

目の眩むような蒼穹にケチをつけながら、勇吾は裸の胸を搔いた。夏場なので、寝るときはジャージのズボンしか身に着けていない。

「 ちつ。何だってこんな目覚めが良いんだ？ 経験上、こういうすつきり目覚めた日は、ロクな事がねえんだぞ」

元来寝起きが最悪といっても良いほど劣悪な勇吾にとって、晴れやかな朝は鬼門に近い。

何か虫の知らせのようなもので、無理に起こされている気がするのだ。

「……………早いな、珍しい」

と、同じ部屋で寝ていた昴が、人の気配にでも反応したのか、むくりと身を起こした。こちらも上半身には何も身に着けていない。銀細工のネックレスだけが、首からだらりと垂れ下がっていた。

「起きたのか。いや、いきなり目が覚めちまってな。ほらよ」

まだ完全覚醒とはいかない様子の昴に歩み寄り、ペットボトルを手渡す。受け取った昴は喉が渴いていたのか、半分ほど飲み干してから、床に置いた。

「サンキュ。と、今の時間は　　六時か。あいつらはまだ寝てるか？」

「たぶんな」

隣の部屋との隔たりである壁を指差す昴に、勇吾は首肯した。隣の部屋は、勇吾の姉である渚のもののだが、職業柄夜は部屋を使うことがあまりない。そのため、今は昨晚泊まることになった女性陣の就寝場所となっている。

「まあ、結構騒いでたみたいだしな。特に紫亜が」

肩をすくめて、昴。壁があまり厚くないので、声が大きいと隣の部屋に筒抜けになるのだ。

昨日は結構遅くまで、はしゃいでいる様子の紫亜の声がこの部屋まで聞こえていた。ついでに、鈴のちよつとした悲鳴なども。

勇吾もまた、肩をすくめた。煙草の灰を気にしながら、言う。

「……泉のこと、相当気に入ったみたいだったからな。抱き枕にでもしてたんだろう。泉もまあ、本気で嫌がってるわけでもなかったようだったから、別に構やしねえが。災難なのは紅葉だな。時たま

『やかましいわよ、あんたらっ！』ってキレかけた声も聞こえてきたし」

「ああ、そういえば。結局諦めたのか、途中からはまったく発言しなくなっただけだ」

「そのようだったな。まったく、俺らとはえらい違いだ」
「まあな」

二人して、嘆息する。何だかんだ言っても楽しげだった女性陣とは違い、勇吾と昴は昨晚、寝付くまでずっと打ち合わせをしていたのだ。

無論、議題は鈴の事だ。これから彼女の扱いをどうするのか。事情は昴が調べるとして、直接的な脅威となる黒崎への対応はどうするのか。現状判っている事の整理。戦力の確認。

可能な限りの事を話し、整頓し、そして結論を出した。

「泉の安全を確保出来るまで、あいつをこの家に置く。情報収集の結果、事情を把握できたら、その解決を図る。あるいは脅威である黒崎を排除するかだ。また、事実としてあいつが自分の家から出ていることは間違いない以上、両親との連絡がついた場合は俺が交渉する。あいつの事情に親がらみの事が含まれていた場合、ただ家に帰すのはかえって危険と判断しての事だ。……一晩経過した今も、この結論に異論はないか？」

「だいが目が覚めてきたらしい昴が、勇吾を見上げてそう告げる。勇吾は頷いた。

「ああ。俺にはどうやら、あいつを見捨てる事は出来ないようなんでな」

それが優しさなのか、あるいは単なる甘さなのか。それは判らない。いや、それどころか、勇吾はまだ自分の立ち位置すら定めてはい

ない。

自分がどういう人間として、鈴の事情に介入していくのか。友人という呼称は当てはまらない。恋人でもなく、そもそも恋愛感情があるわけではない。

中学時代の先輩だというのが、一番正確だが、それでは理由が弱い。勇吾が闘うであろう相手は極道だ。恐らくは、命のかかった喧嘩になる。

単なる後輩のために命をかけるというのでは、理屈に合わない。理由もなく闘ったのでは、拳が鈍る。拳が鈍れば、殺される。

ただでさえ、『獣』を意識しながらの喧嘩にならざるを得ないのだ。これ以上の迷いの種は、命に関わる。

だが、それでも見捨てるという選択肢が、勇吾にはなかった。

（まずいのは判ってる。理由を見つけれないまま闇雲に闘う事がどれだけ危険な事か、俺は知ってる。

師匠の口癖だったからな。『闘う事に理由を求めるのは、致命的な迷いを抱えた奴だけ』。

そして、迷った奴が真っ先に負けるのが、喧嘩ってシステムだ）

意志と信念。具体的な理由なく闘える者というのは、それらを強固に保っているか、単に武術家であるかだ。

勇吾はどちらでもない。何者にもなりきれていない。ただ分不相応に、振るう拳が強力であるというだけの男だ。

「それでも、望む事だけはやめられない。この拳で、何かを守れやしないかと」

小さく呟く。あるいはこれこそが、勇吾が闘う理由なのかもしれない。明確ではない、強固でもない。ただ願い、望んでいるだけ

の、何とも情けない理由。

だが、そんなものでも無いよりはマシなのかもしれない。

蒼穹を見上げながら、そんな事を思う。それから、『次』の事にも思いを馳せた。

大変なのはこれからだ。昴と出した結論は、無論のこと鈴には知らせていない。まずは何か適当に理由をつけて、鈴をこの家に留める必要がある……

と。

そうして思考を深めていた勇吾の意識を、慌しい足音がかき乱した。何か慌てている調子で、階段を駆け降りているような音だった。

「 ? 何だ? 」

「 さあ。何だろうな 」

昴と二人して、首を傾げる。足音は階段を降りた後、どうやら階下を走り回っているようだった。それも、よく聞くと二人分の足音である。

「 おい。マジで何なんだ、これ 」

勇吾が流石に堪りかねて、煙草を揉み消しつつ階下に向かった。昴も興味があるのか、ついてくる。二人してシャツを着込みながら、階段を降りる。

原因はすぐに知れた。紫亜と紅葉である。二人は何かを探しているような様子で、ばたばたと辺りを走り回っている。

「 おいおい。 何やってんだ二人して 」

勇吾はとりあえず近くにいた紫亜の行く手に回り込むと、腕を組ん

で訊ねた。

「え？　あ、勇吾君！　大変、大変なの！」

彼女はこちらの姿を見ると、慌てた態度そのままにそうまくし立てた。勇吾は困惑しながら、

「大変つて、何が」

「いないの。どこにもいないの！」

紫亜は勇吾にしがみつくようにして、そう訴えた。

「……………いないつて、誰が？　まさか」

直感で理解して、勇吾は昂に目を向けた。彼も気づいたようで、小さく舌打ちしている。

勇吾は頭を掻きながら、呻くように言った。

「まさか　泉。あの馬鹿、出て行きやがったのか！？」

* * * * *

午前六時半。桜通り。

朝の桜通りは、比較的人通りが少ない。これはまあ、どこであろうと大差のない事なのだろう。人の集まる時間帯というのは、場所柄に係わらず概ね決まっている。

ただ、比較的、という事であれば、また違う考え方もできるだろう。午前六時半。これが一般的には早朝と呼ばれる時間帯である事を考えれば、鈴の視界に入る人の数は、必ずしも少ないとは限らない。活気があるとは言いが難かったが、人影はチラホラと見られる。

勇吾の家から抜け出した鈴は、その足で桜通りに向かっていた。無い知恵絞って考え込んだ結果である。ある程度人目のある所にいれば、万全とはいかなくともそれなりの安全性は確保できる。別に国

家の秘密などを知って追われているわけではないのだから、防御策はこの程度の事でも問題ないはずだった。

それでも、不安があるといえはあるが　それはもう、気にしてもどうにもならない。

一人でいなければならないのだ。少なくとも、両親が戻るまでは。実のところ　鈴がこの地に一人残されたのは期間限定での事だ。遠方の親戚の家に向いて、金策をしている両親が帰ってくるまで、どうにか凌げれば良い。

ただ、それがいつになるかはまだ判らないのだが。遠方の親戚といっても、さして強い繋がりのある相手ではない。関係性こそ父親の兄夫婦という近いものだったが、ここ数年は疎遠だった。そう簡単に金を借りられるとは思えない。

だから、鈴の父親は娘を置いていった。夜逃げしてしまえば借金取りはやつきになって自分を探すと確信して、妻だけを伴って蒸発してみせた。

そこまでは良かった。理屈の上では間違いはなかったのだから。

ただ、計算違いがいくつもあった。

それは、夜逃げの手際があまりにも鮮やかであったこと。そして、借金取り　稲田が図抜けて無能だったこと。

おかげで鈴の父、恭一郎は完全に姿を消した事になってしまい、結果として稲田に追われるのは鈴ということになってしまった。たった一人で、ヤクザから逃げる事になった。せつかく見つけた頼るべき相手をも振り切って。

(それでも、私はやるのです)

覚悟はある。小さな体に、精一杯詰め込まれている。頼らない
巻き込まない。

大事な人だからこそ、絶対に。

決然と呟きながら、鈴は徐々に人の集まり始めた桜通りを進んでい
った。

と。

唐突に。忽然と。そんな表現しか見つからないほど突然、鈴の視界
に割り込んだ影があった。

「あ………」

「予測通りか。少々拍子抜けだが……構うまい。手間がか
からないのなら、それは歓迎すべき事だ」

黒服。サングラス。啞え煙草。纏う空気は剣呑にして不吉。
それら全てが、ひとりの男を指し示している。

くろなまきかんな
黒崎神無。

(に、逃げないと……!!)
焦燥に駆られて、鈴は踵を返しかけた。あるいは、大声で助けを求
めようとした。しかし、

「無駄だ。この時間、僅か一分にも満たない時間とはいえ、この周
囲は完全な死角となる」

その一言に、全てを塗りつぶされた。

(あ……う……)

体が動かない。黒崎から目を離す事が出来なくなる。

蛇に睨まれた蛙。そんな言葉が頭に浮かんだ。

黒崎は身を固めた鈴に、ゆっくりと歩み寄る。鉄面皮の如き無表情に僅かばかりの哀れみが滲んでいた。彼は、表情の哀れみの感情を言葉にも乗せて、だがそれでも、死刑宣告を行った。

「気は進まないが、な。貴様には生贄になってもらう」

黒崎の言葉と同時に、鈴の背後に男が二人現れた。そして、彼女の首筋に、何か小さな機械を押し付ける

「あうっ！」

悲鳴が上がる。鈴の体に、電流が走った。スタンガンだ　そう思
考したと同時に、彼女の意識はぷつりと途切れた。

糸の切れたマリオネットのように倒れ込む彼女を、背後の二人が抱
きとめる。

それを眺めやりながら、黒崎は静かに命じた

「つれていけ」

* * * * *

バイクが疾走する。道路交通法なんぞ知った事かというスピードで。

「あの馬鹿が……！　なんであと数時間を待てなかつたんだ！」
フルフェイスのヘルメットの中で、盛大に悪態をつく。

勇吾は紫亜たちから鈴が失踪した事実を聞くと、着替えだけ済ませてすぐさま外へ飛び出した。紫亜と紅葉には、家で待機するように言っている。そして昴はといえば

『勇吾。桜通りに向かえ』

と、耳元で昴の指示が聞こえた。肉声ではない。機械を通した声だ。携帯電話に繋いだハンドレス通話用のコード。それによって、勇吾はバイクの運転をしながら昴と通話しているのだ。

勇吾は言われた通り進路を桜通りに向けつつも、疑問の声を上げる。
「桜通り？　何でだよ。あそこは今、あいつにとって一番危ない場所じゃないのか？」

『そうだ。だが同時に、最も安全とも言える。黒桜と違って、単に賑やかなだけの桜通りなら、常に人目がある分、手荒な真似をしにくい。泉はあれで中々利発なところもあるからな。そのくらいの事は気が付くはずだ』

昴のナビを聞きながら、ハンドルを切る。普段桜通りに行く時は裏道を使うのだが、今は時間帯的に大通りの方が空いている。一気に突っ切ればかなりの時間短縮になるだろう。

勇吾は忌々しげに口を開いた。昴の言葉には、穴がある。それは無論、彼自身も気付いているだろうが。

「それはそうだがな。確かに、他の場所で一人歩きしているよりは、桜通りの中でも治安の良いあたりをうるついている方が安全だろうよ。だが、常に人目があるってのは違うだろ」

言葉を切って、続ける。

「どんな賑やかな場所だろうが、人の目から消える場所ってのは必ずある。死角をなくす事はできねえさ。そして、数秒でも人の目がなくなれば、人ひとりくらい掻っ攫うのは難しくねえ。隙について車にでも押し込めれば、それで事足りるんだからな」

『 ああ、そうだ。だからお前が向かっている。黒崎とやらよりも先に接触しないと、泉が危ないからな。 泉の判断は、一般的には正しい。だが、あいつは桜通りを知らなさ過ぎる』

桜通りは、都会ではない。人が集まるのは確かだが 人が住んでいるわけではない。集まる人間は常にどこかへ向かっている。止まっている者はいない。故に構成される死角が、確かに存在する。黒崎は無論のこと、桜通りの構造を熟知しているだろう。人の目がなくなるデットゾーンを把握しているのも間違いない。鈴は捕まる。逃げ切れない。

「そうだ。逃げ切れない。あそこの構造をある程度知ってる俺でも、ただ逃げると言われりゃあ、正直出来るかどうかは五分五分だ」
呟く。同時に視線を左右やミラーに走らせて、周囲を警戒するのも忘れない。パトカーにでも発見されれば厄介だ。時間との勝負である以上、注意してしすぎるといふ事もない。と、そこで昂から、再び声がかかる。

『 勇吾。いったん切るぞ。俺はこれから、桜通りあたりで遊びまわってる知り合いの連中に、片っ端から連絡を入れてみる。大した効果があるとも思えないが、やらないよりはましだ』

「判った！ 向こうに着いたらまた連絡を入れる。そっちは頼む！」
『 ああ、了解だ』

そこで通話が切れた。運転に集中しながら、勇吾は最後の悪態をつく。

「くそ。せめて俺が行くまでは粘ってるよ、馬鹿後輩……！」

呻き声を上げて、勇吾はグリップを握る手を、更に強くした。

第二十六話：失踪（後書き）

わりと早めの更新。

恋愛だよ？ この作品、一応恋愛ジャンルなんですよ？ と自分に言ってみる。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

だんだん殺伐としてまいりましたが、たぶんこの感じはまだ続きません。

勇吾という主人公の性質上、恋愛と同時に喧嘩もしないと成長しないんですよ。自分で作っておいてなんですが、厄介な男です。

では、また次回のがきで。次もわりと早いと思います。

第二十七話：交錯（前書き）

独白：芹沢昂

さて、いよいよ厄介な事になってきたようだな。

いくら俺でも、流石に処理できるかどうか。

だがまあ、やるしかない。

それが俺の役割だ。

俺が俺に課した、ただ一つの役割。

ならば俺は、それを果たすのみだ。

第二十七話：交錯

「んじゃねー」

「またよろしくー」

「ええ、またその内ね」

完全に疲れきったテンションで告げられた別れの言葉に、如才なく答える。微笑と小さく手を振ることも忘れない。どんな時でも優雅に柔らかに。こだわり というほどのものではないが、このくらい女の嗜みだとは思っている。ふらふらした足取りで遠ざかっていく友人たちを見送って、彼女 羽坂楓はゆっくりと伸びをした。小さくだが、背骨の辺りでパキポキと関節が鳴る。あらはしたくないなどと呟きながら、しかし楓は気にせず伸びを続ける。

「ん……ふう。流石に疲れたわね」

伸びをやめて、呟く。彼女は昨日の晩から徹夜で友人たちと遊んでいた^{オイル}ので、いくら若い体といえど少々堪えているのは間違いなかった。今しがた彼女が出てきたのはカラオケ店で、しかも彼女は未成年である。アルコールもなく一晩中エンジン全開だったのだから、無理もないだろう。

更にいえば、彼女は一昨日まで旅行に出かけていた身だ。勇吾たちとの海水浴である。

旅行中は色々と大変だったし、失恋という精神的にショックな出来事もあった。

（ふふ。芹沢君にはあんな風に言ったけれど、まだ駄目みたいね）自嘲気味に胸中で呟く。

とりあえず足は、適当な方向に向けて動き出していた。疲れてはいるが、止まっていたい気分ではない。

(遊んでいれば、確かに少し心が軽くなるけれど……所詮はまやかしね。魔法が解けたら、元の恋に破れた女に戻るもの)

恐らくは生まれて初めて、本気で人を好きになって、そしてその想いは行き場を失った。

誰かに想いを告げたのも初めてなら、振られたのもそうだ。これまでは、ずっと男の方から言い寄られていたから。

(ふう……無様ね。『寝取りの羽坂』なんて、名前負けもいいところだわ)

また自嘲。馬鹿らしい事だと判ってはいるが、だからといって止まるものでもない。感情は中々、自分の思い通りには動いてくれないものだ。

と。彼女はなんとなく足を止めた。周囲が見慣れない景色であると気付いたのだ。

元々疲れきっている上に考え事などしながら歩いたせいで、帰り道とは別の方向に来てしまったらしい。

「本当に疲れてるみたいね、私。寝た方が良いのかしら」

苦笑して、元来た道へと引き返そうとする。その直前。彼女は妙なものを見た。

十数メートル先だ。黒い人影と、妙に小さい人影とが向き合っている。あまりおもしろい事にはならなさそうな雰囲気だ。端的に言って、剣呑である。

「……………」

疑問符を浮かべながら、ひとまず近くにあつた大きな目の看板の影に隠れる。私何してるのかしら、と思いつつも、なんとなく観察を続けてしまう。

と、状況に変化があった。どうやら逃げようとしたらしい小さな影が急に動きを止め、更にその人影の後ろにまた別の影が二つ、忍び寄っている。いよいよもっておかしな状態だ。楓はふと、こんな事を思い浮かべた。

(もしかして……誘拐、かしら?)

かもしれない。そう思った瞬間だった。忍び寄っていた影が小さい人影に近寄った直後、小さい方の人影が倒れた。そしてそのまま引きずられていき、近くに停まっていた。いや、意図があつて停めていたのだろうが、車に放り込まれる。最初に小さい人影と向き合っていた人物も車に乗り込み、そして車は、そのまま走り去っていった。

「……………」

無言でそれを見送る。これは、まさか、やっぱり

「誘拐現場、よね。あれは」

どうやらそうらしかった。疲れすぎて幻覚でも見たのかと思つたが、車が走り去る時にはエンジンの音も聞こえてきた。とすると、やはりあれは現実の犯罪現場だ。

なんとなく何も考えられず、瞬きする。

それから彼女は、のろのろと看板の影から通りに出てきた。

「とりあえず、警察かしら……?」

疑わしげに呟く。現実の事だと理解した今でも、どうも実感がない。

と。ふと彼女は、持ち歩いているバッグの中から振動音がするのを聞いた。マナーモードの携帯電話だろう。バッテリーが切れ掛かっているので、触らずに放置していたのだ。

彼女はそこでようやく我を取り戻した。それでもまだなんとなく戸惑いながら、バッグを見つめる。

出るべきか否か　彼女は少し思案して、とりあえず相手を見てから判断することにした。

警察への連絡もしなければならぬだろうから、バッテリーの無駄遣いは出来ない。

そう思いながらバッグから携帯電話を取り出して、液晶画面に目をやる。

「…………紅葉？　珍しいわね、こんな朝早くに」

楓は首を小さく傾げた。姫神紅葉は友人だが、元々電話よりはメールでのやり取りが多い相手である。それが、こんな時間にわざわざ電話。なんとなく、変な感じがする。

気になってとりあえず、通話ボタンを押してみる。耳に押し当て、定型のもしもし、という言葉の口にしよつとして

『羽坂。今少し良いか？』

耳元のスピーカーから聞こえてきた、聞き覚えのある男の声に、ますます首を傾げた。

* * * * *

「え、ええ　それは、構わないけれど。あなた、芹沢君でしょう？」

楓はやや戸惑ったまま、相手の名を呼んだ。

芹沢昂。一応旅行に一緒に行った仲ではある彼だが、しかしさして親密だというわけではない。

しかも、電話をかけてきたのは紅葉の番号からだ　つまり、彼らはこんな時間から一緒にいるということになる。

(ベッドの中からかけてきたのかしら……?)

紅葉に聞かれたらしこたま蹴られそうな思考をしながら、楓は相手の反応を待った。

『ああ、そうだ。訳あって紅葉の携帯を借りて電話した。　言っておくが、床を共にしたわけじゃないぞ?　……………ええい、五月蠅いぞ紅葉。釘を刺しただけだ。何も言わないで変に勘繰られるよりましたらう。　……ああ、すまん。紅葉が少し暴れてな。それはともかく、今どこにいる?』

やや早口に告げられる言葉に耳を傾けて、楓はなんとなくだが彼の口調に焦りのようなものを感じた。何か急いでいるような印象だ。

「どこって……桜通りだけれど」

隠す事でもないのです、正直に答える。すると彼は得たりとばかりに『良いタイミングだ。　頼みがあるんだ。人をひとり探して欲しい。色々と訳があつてな。詳しく話すにはこちら情報も足りないから、とにかくまずは協力してもらいたい』

なんとなく。本当になんとなくの当てずっぽうだが、楓はふと先ほどの光景を思い出し、そして確信めいたものを覚えた。
それに従って、口を開く。

「ねえ、芹沢君。探して欲しい人って、小学生か中学生くらいの身長だったり、する？」

『見たのか？ なら話が早い。その場所を教えてください』

「ごめんなさい。それは判らないの。だって……」

申し訳なさを少し感じながら、しかし彼女ははっきりと告げた。

「だって、その人……さっき誘拐されちゃったもの」

相手の反応は予測できた。舌打ちでもするのだろう。あるいは怒鳴るか。いや、相手が芹沢昴である事を考えれば、ただ無言でいるかもしれない。いくつかの思考を流しながら、楓は困ったように眉を寄せた。どれであっても、楓としては面白くない。

だが、昴の反応はそのどれでもなかった。

『……そうか。どうやら遅かったようだな』

冷静な納得の声だ。あるいは、事態をある程度予想していたのかも。しれない。

楓は疲れた脳をどうにか回転させて、相手に合わせていく。芹沢昴と会話するのに、たるんだ思考では役者不足だ。

正直なところ、状況はまるで判らない。判らないが、自分が何を求められているかは、なんとなく把握できる。

「それで？ 私は何をどうすれば良いのかしら？」

告げる。この場合、昴にしてみれば楓の存在はありがたい駒だろう。探し人が連れ去られた現場を見ているのだから。動かせるものなら動かしたいはずだ。

協力を求めてくるのは間違いない。そして、楓としては、そうする事にやぶさかではない。彼の事は、嫌いではないのだし。電話の相手は、こちらの意図を察したらしかった。

「話が早いな。好きだぜ、頭の良い女は」

彼は軽口を叩いてから、こう続けた。

「実は今、勇吾がそっちに向かつてる。お前が見たって言う誘拐の、その被害者を連れ戻しにな。細かい事は勇吾に説明させるから、まずはいつと合流してくれ」

「……………勇吾君が？ ええ、良いわ。合流場所はどこ？」

胸に鈍く響くその名前に少し心がざわめくが、ひとまず無視する。

「そうだな……………桜樹広場に向かつてくれ。あそこは桜通りのほぼ中心だ。何をするにも都合が良い。勇吾にも連絡しておく」

「ええ、判ったわ」

「助かる。俺も可能な限り急いで向かうつもりだ。悪いな、羽坂。今度埋め合わせはする」

「期待してるわ」

電話が切れる。楓は携帯電話をバッグに仕舞い込みながら、小さくため息を吐いた。

「ふう どうやら、寝られるのもう少し後みたいね」

もてる女は辛いわ、などと馬鹿らしい事を呟いて、楓は桜樹広場に足を向けた。

* * * * *

「泉が 連れ去られただど!？」

「……………ああ、そうだ」

昂は怒声を上げている勇吾に肯定の返事をしながら、ゆっくりと立ち上がった。

スピーカーを少し耳から遠ざけつつ、続ける。

「今も言ったが、詳しくはまだ判っていない。お前はすぐに桜樹広場に向かって走るんだ。そこで羽坂と合流して、話を先に聞いておけ」

『楓が見たつて言う、誘拐の状況か！ 判った、すぐに進路を変える！』

意思の疎通を簡単に終わると、昴は通話を即座に切った。

携帯電話をポケットにねじ込みながら、昴は嘆息交じりに呟く。

「とりあえず、一手打てたか。やれやれ、だ。……それにしても。まさか、こつも早くチェックをかけられるとはな。黒崎とやらは、どうも頭も切れるらしい」

最悪の事態だ　ふと脳裏で閃く言葉に、昴は否定の言葉を重ねた。「いや。まだそう言うには早いか。羽坂が現場を見ている以上、まだ打つ手はある」

言いながら、部屋を出ようとする。彼が待機していたのは勇吾の部屋だった。これからすぐに、自分も桜樹広場に向かわなければならぬ。

それに、鈴の事情を調べるために機能させていた情報網も、行方を探る為のものに切り替える必要があるだろう。

(それに、俺自身の準備もある。この状況だ。もし泉の居場所をつかんだら、そのまま殴り込みをかける事になるだろう。相手を刺激するから、警察はまずい。となると、俺はこの家に置いてある分の『装備』を持っていく必要があるな。俺は勇吾と違って、素手で極道とやり合えるほどの腕がない)

頭の中で思考を組み立てながら、玄関へ向かおうとする。『装備』は、靴箱の中に隠してある。昔、喧嘩で相手が使っていた武器を奪った物や、通販で買った違法ギリギリの代物だ。

無茶な喧嘩ばかりしていた勇吾に、昴が付いていくには、武器が必

要な時期もあった。
これはその名残だ。

足はタクシーでも捕まえれば良いだろう。
と。

「ちょっとこら、昴！ 何当然のようにとっか行こうとしてんのよ！？」 説明をしなさいよ、私たちにも！」

背後から怒鳴られる。紅葉だ。その横には紫亜もいる。 そうい
えば忘れていた。彼女たち
がここに居るのだという事を。

(どうする？ 時間はないぞ)

昴はやや急いで釈明の言葉を考えた。が、今の紅葉を納得させる言
葉は出てこない。

そもそも、彼女たちは鈴が一度連れ去られかけ、それを勇吾に救わ
れたのだという事すら知らないのだ。それを一から説明する時間は
ない。だが、しないと退かないだろう、彼女は。

いや、鈴を気に入っていたらしい紫亜の方こそ、実際には厄介かも
しれない。

仕方ない 呟いて、昴は紅葉たちに向き直った。 要所だけ告げよ
う。

「時間がないから手短かにいくぞ。 泉が誘拐された。 たった今、
羽坂に聞いた事だ。 現場を見ていたらしい。 事情は聞くな。 俺もま
だ把握していない。 先に言うておくが、警察は頼れない。 とにかく、
今すべきなのは泉をどうにかして救い出す事だけだ。 その為に、俺
は一足先に動いている勇吾と合流する」

早口に言うだけ言って、昴は踵を返した。 彼女らにいつまでも構っ
てはいられない。
だが。

「待つて！」

声をあげたのは、紫亜だった。彼女は昴のベルトをひしっと掴んで、「私も連れて行って！」

そう叫んだ。

「……………」

昴は沈黙した。流石に、即答しかねる状況だった。

(……………どうする？ 紫亜は状況を判っていない。最悪、極道と喧嘩する事になるなんて知らない。説明して止まらせるか？ いや、駄目か。この娘はあの夜、暴走した勇吾相手ですら後には退かなかつたんだ。どの道ついてくるのは避けられないか？)

熟考する。最も時間のかからない選択は何だ？

と、考え込む昴の背中に、紫亜は声のトーンを落として言ってきた。

「……………また、喧嘩をするんだよね？ 勇吾君は」

女の勘、だろうか。彼女は事情を知らないにも係らず、事実の一端を告げている。

いや、事実ではない。そうなるだろうという予測だ。

ベルトを掴んでいる力が増してくるのを感じる。もしかしたら、彼女が心配しているのは、鈴だけではないのかもしれない。気づいているのかも知れない。

昴は少しだけ意外に思いながら、問い返した。

「判るのか？」

「うん。少しだけ。勇吾君、昨日からちょっと様子が変わった。だから……………何かあったのかなって」

彼女は少し間を置いて、続けた。

「鈴ちゃんが誘拐された……それがどうしてかは判らない。今もまだびっくりしてる。どうして、って。でも、判る事もある。勇吾君は、鈴ちゃんを助けようとしてるんだよね？ その、鈴ちゃんを誘拐したって人たちと、闘うつもりなんだよね？」

「ああ、そうなるだろうな。それで？ 紫亜はそれが判っていて、どうして自分も行こうなんて思った？ できる事は何一つないってことも、判っているはずだろう？」

昴はあえて、突き放す言い方をした。これで彼女がどう反応するか、気になった。

彼女は、どうやら何かを決心したようだった。空気がそう言っている。彼女は声を強くして、自信を伴って、言ってくる。

「頑張れって、言わなきゃ。ううん、言いたい。私は、勇吾君の彼女だから」

「……………」

絶句した。完全に、言葉を失った。

『彼女だから』

何の変哲もない言葉だ。だが、少し前の紫亜はそれすら言えなかっただろう。

（この短期間で、何かが変わったか。紫亜は既に、自分の立ち位置を定めている。自分が勇吾を肯定する事で、それが勇吾の力になる事を知っている。ふ、あるいは化けるか）

昴は笑みを浮かべた。こんな状況だが、愉快でたまらなかった。

昴はゆっくりと振り向いた。紫亜の手がベルトから離れる。

向かい合い、視線を重ね、紫亜の肩に手を置く。そうして、告げた。

「いいぜ。今の紫亜なら、足手纏いにはならない。付いて来い」

「うんっ」

紫亜の顔色がぱつと明るくなった。昴は肩に置いた手を今度は頭に乗せた。勇吾がよくやる仕草だ。よくやった、と誉める時の。

と、昴はその体勢のまま、視線を少し動かした。

「……………」

視線の先で、不満顔の紅葉が腕を組んでいる。その目が言っていた

何やってんのよあんた、と。昴は苦笑した。

「拗ねるなよ。別に、お前だけ置いていくなんて言っていないだろ？」

「拗ねてないっ」

挑みかかるように言ってくる紅葉に、また苦笑する。まったく、素直ではない。

「この際、来たいならもう止めやしないさ。姉妹で揃って、勇吾の世話を焼いてやれ。それであいつが覚悟を決めるって事もあり得るからな。さあ、行こうか」

今度こそ制止される事なく、部屋から出る。

まだ状況は今ひとつ定まっていないが 何とかなるだろう。

(こいつらに背中を押されれば、勇吾は本気で闘える。本気の勇吾と、この俺が組むんだ。これで)

打倒出来ないものなど、ありはしない。

そう付け加えて、昴は静かに笑みを浮かべた。

第二十七話：交錯（後書き）

まさかのペースで更新。

自分でもびっくりな、へっぽこ物書きの龍之介です。

とりあえず、ストーリー的にはあまり進んでいない感じですが、これがこの作品のペースなんじゃないかと思ってます。じっくり心理描写しつつバトルでガッツリ。

……あれ？ ラブは？

第二十八話：抱きしめてもらえば良い（前書き）

独白：羽坂楓

疲れ果ててどうしようもなくなった時、人は何を欲しがるのかしら。
暖かさ？ 優しさ？ それとも厳しさ？
肯定されたい？ 否定されたい？
許されたい？ 罰を求める？

きっとどれもが正解で、どれもが間違っている。

それでもあえて、選び取るとするならば。
目の前に傷ついた誰かがいて、何かをしてあげたいのだとするならば。

私はきつと、こうするのだろう。

第二十八話：抱きしめてもらえば良い

かつて自分が、数え切れないほど繰り返してきた喧嘩。自分を、あるいは唯一の家族である姉を守るといふ題目の元に、拳を振るい続けた人生の軌跡。

その一つであり、そして最大規模でもあった喧嘩が、ここで行われた暴走族『餓王髑髏』との一戦だろう。

（そして……気付かせたんだ。あの喧嘩が、俺に。このままじや駄目だったな）

呟き、歩調を速める。自分の過去に敏感になっている彼には、この場所は少し居心地が悪い。

桜樹広場。桜通りと呼称される一帯の中で唯一の公園であり、勇吾が『餓王髑髏』を壊滅させた場所。ごく最近にも、ここで紫亜を庇ってナイフで刺されたりと、勇吾にとっては浅からぬ繋がりがある土地だ。

（あんまり、良い思い出とは言えねえけどな。……だが、分岐点になったのは確かだ。俺はここで、無意味に闘う事をやめた。拳は己の意志で振るうべきだと、ようやく気付いた）

そして、勇吾が『獣』 自分自身の凶暴性を嫌悪し始めたのも、それ以降の事だ。

思い出してしまう。ここを歩いていると。あの頃、自分がどんな人間であったかを。

と、勇吾はふと苦笑した。

（ やめやめ。今更だろ、そんなもん。考え込んだって、どうにもなりやしねえんだから）

頭を振って、くだらない思考を払う。今はそんな事に割く時間など

ない。

勇吾はこれから、人に会わなければならない。この公園は広さがそれなりである上、バイクでの進入は禁止されている。気の急いでいる勇吾は、大股で待ち人を探していた。

「さて、と。昴の話じゃ、楓の奴がこちらにいるはずなんだが」

呟く。昴からの指示では、ここで待ち人 楓と合流して、連れ去られたという鈴の情報を聞く手筈になっている。だが、今のところそれらしき姿は

「いや、いるな。たぶん、あれだ」

昼間の桜樹広場には、それなりに人がいる。その中に、遠目でだが見覚えのあるシルエットが、ひとつあった。

ベンチに座っているらしいそのシルエットは、なんとなくだが記憶にある。楓だ。

(そう背が高いわけでもないのに、目立つ奴だな)

オーラ、とでもいうのだろうか。見た目だけでなく、何か他の人間とは隔絶した雰囲気、その周囲にある気がする。

胸中で呟きながら、駆け足で近寄っていき、その姿を確認できるようになってから軽く手を上げて声をかける。

「よう」

声には、何故か気まずい気配が滲んでいた。理由は自分でもよく判らないが。

(……そういや、俺とこいつって、そう気安く会って良い状態じゃなかったか)

遅れて原因に思い至って、勇吾は表情まで気まずいものに変えた。

だが、ベンチに腰掛けていた相手 楓は、こちらに気付くと、気楽そうな調子で手を振ってきた。

「あら、案外早かったわね。もう少しかかると思っていたのだけれ

ど」

「あ、ああ。 まあ、急いだんでな」

「そう。 よつぱど大事なのね、あの誘拐された人って」

「……まあ、な」

ごく普通の態度の楓に、勇吾はどうにか調子を合わせる。

(何だこりゃ。 変に緊張してんの、俺だけなんじゃねえか?)

これなら、妙な気を遣わなくてもいいのかもしれない。こちらだけ落ち着きがないのは、話の妨げにもなるだろう。そう判断して、勇吾は上着のポケットに手を伸ばした。

煙草だ。 落ち着きたい時には、これが一番早い。 最近は少し吸い過ぎのような気もしているが、それはまあ、今はどうでも良い。

「……………それじゃ、早速話を聞こうか。 それと」

「煙草、かしら? 構わないわ。 ついでに、座ったらどうかしら?」

言葉の尻を先回りしつつ、ベンチの隣を指して言ってくる。 完全に彼女のペースだ。

「ああ、それじゃ……………そうさせてもらおうか」

啜えた煙草に火を着け、楓の隣に腰を下ろす。 位置の関係上、ふたりの視線は絡まなかったが、その分距離自体は近い。

ヤニの匂いに混じって、甘い香り。 楓の香りだろう。 が鼻腔に入る。 それに距離の近さをふと感じながら、勇吾は改めて口を開いた。

「鼻に聞いたとは思うが。 俺の知り合いが拉致された。 行方を知りたい。 お前の見たっていう、拉致の現場を詳しく教えてくれ」

端的に、要求を告げる。 楓は、すぐには答えなかった。 横目で彼女の様子を伺いながら、勇吾は返答を待つ。

数秒して、彼女はようやく口を開いた。

「ええ、そうね。 それは構わないけれど」

「なら、すぐに始めてくれ。 あまり時間があるとは言えないんだ」
思わず、彼女が言い終える前に口を挟む。 自分でも焦っている事は判っていたが、だからといって呑気に構える事もできない。

と、楓はそんな様子の勇吾を、軽く一瞥した。そして、何か思うところがあるように嘆息する。彼女はどうかやら、呆れたようだった。

(……………？ 何だ？)

意味が判らず、顔を彼女の方に向けて眉を寄せる。

と、彼女は、突然こちらに顔を近づけてきた。鼻先が触れるギリギリの距離まで。

(いや、だから何だっつてんだ、一体……………？)

なんとなく顔を引く事が出来ず、生涯経験した事のない近距離で、じつと見詰め合う。

女の顔がこんな近距離にあるという驚きよりも、これに何の意味があるのかという好奇心が勝ったのかもしれない。

「条件があるわ」

と、楓は顔の位置は変えないまま、小さく呟いた。

「……………条件、だと？」

「ええ、条件。……………安心して。別に無理難題をふっかけよう、というわけではないから。とても簡単な事よ。私があなたに情報を渡す代わりに、あなたは私の質問に答えるの。どう？」

相変わらず、というべきなのだろうか。この少女の言う事は、どうにも意図が掴みにくい。

一昨日 いや、もう三日前になるのか 彼女が自分に『好きだ』と告白してきた時にも、彼女は突拍子もない事を語った。

もっとも、それは別に、本当に無意味で意図の無いものでなかったし、むしろ勇吾にとっては益に繋がるものでもあった。

(これも、その類……………なのかな？)

少なくとも、意味の無い事ではないのだろう。彼女の言動には、どこか昂に通じるものがある。相手をして損だという事も、恐らく無い……………

（ 時間は、ない。だが、どの道俺が話を聞いただけじゃ、泉の居場所を特定するのはほぼ不可能だ。実際に行動を起こすには、昴の到着を待つ必要がある。 ）
煙草を持つている指先に、じりじりと火の気配が近づいてくるのを感じながら、思考する。

そして、

「……判った。その条件を呑ませてもらう」

吐息がかかる距離のまま、勇吾はそう告げた。それに、楓は微笑を浮かべて、

「そう。ならまず、こっちの質問から良いかしら？ ……いくらあなたが急いでいるといっても、芹沢君が来るまでは特に出来る事、ないでしょう？」

そう言った。

（こいつ……そんな事まで見透かしてやがる。こっちの状況なんぞ、ほとんど知らねえはずだろ、こいつ。つくづく昴みてえだ）

毒づく勇吾を尻目に、楓が微笑したまま、ようやく顔を離した。

勇吾は根元まで燃え尽き、既に火が消えてしまっている煙草を足元に落としながら、ふと思いつ。

「なあ。質問に答えるのは良いんだけどよ。結局、さっき顔を近づけてきたのは何だったんだ？」

「別に深い意味はないわ。ただ、あなたが落ち着くんじゃないかと思ってる」

「……いやまあ、確かに焦っても駄目かとは思ったけどよ」

呻く。もしかしたら、この応答すら勇吾の気持ちを落ち着かせる為のものなのかもしれない。

「まあ、それはともかく。条件を呑むと言ったからには、しっかり答えてもらうわ」

楓は、仕切り直すようにそう言うと、ぴっと人差し指を立てて見せ

た。

「質問その一。あなたにとって、今探している人はどういう人？」と、質問の初っ端から、勇吾は内心ぎくりとさせられた。どうにかそれを表に出さないように苦心しながら、口を開く。

「……どういう人って言われてもな。……後輩だよ。中学時代のな」その答えを彼女がどう思ったのか。それは判らなかつたが、なんにしろ、彼女はただ頷きだけを返してくると、立てた指を二本に増やした。

「そう。では、質問その二。その後輩さんの居場所が判つたとして、あなたはどつするの？」

「どうもこうも、連れ戻すんだよ。当たり前だろうが」

「連れ戻す、ね。それはどつやって？」

その問いかけが、恐らくはきつかけだつた。何気なく聞き返したように見えて、実のところ楓は狙つてこの問いを放つていた。

勇吾は俯き、拳を握つた。そして、呻くように語りだす。

「……力づくで、だ。話し合いで済むならそうするが、それは出来ない。あいつを攫つた連中には、見当がついてるんだ。少なくとも、無血で終わる話じゃない」

知らず、口数が多くなる。訊かれていない事まで勢いに任せてまくし立ててしまつが、今更止めることも出来そうにはなかつた。

楓はそれを黙って聞いている。相槌を打つことも無く、ただ勇吾の言葉を受け止めていた。あるいは、それが目的だともいうように、聞き役に徹している。

そのせいだろうか。勇吾の言葉は、そこから更に続いた。

「闘つしかない。倒すしかないんだ。警察には頼れない。頼つたところで、役に立つ保証も無いし、な。……相手はヤクザなんだ。どつという理由であいつを拉致なんかしやつたのかは知らねえ。だ

が、どうせくだらない事なんだろう。だから、俺はあいつを助けに行く。くだらない理由であいつが泣きをみるのは、我慢ならねえから」

自分でも制御できない言葉たちが、勝手に口から零れ落ちていく。知らず、疲れた感情を溜め込んでいたのかもしれない。決壊したダムか何かのように、吐露は止まらない。

「……本当は、もっとマシなやり方があるのかもしれない。時間さえかければ、昴が何か策を思いつくはずだから。だが、俺にはこれしか浮かばねえし、時間をかける事を善しとも出来ねえ。この拳でしか、行動を起こせねえんだ」

そこまで一気に言ってから、ふと我に返る。また余計な事を口にしてる。旅行先の旅館で、楓とふたりになった時もそうだった。どうしてだか、自分は彼女の前だと弱さを見せてしまう。

「……悪い。要らねえ事を言ったな」
頭を振って、勇吾は呟いた。冷静になっただらなっただ、思考が負の方向に傾きすぎてしまう。

良くない傾向だ。

楓は構わないわ、と呟き返してきた。それから、

「それじゃあ、最後の質問よ。でも、その前に」

そう言っつて、ゆっくりと立ち上がった。

「……………楓？」

勇吾は訝しんで声を上げたが、彼女は頓着しなかった。

そのまま、楓は勇吾の正面に立った。座ったままの勇吾を見下ろす形で、『最後の質問』を告げてきた。

「あなたは、何を恐がっているの？」

見透かしたような、その言葉。悟られているのだ。この短い取り取りの中で、勇吾が抱えているものの、核心を。故に、この問いは質問などではなく、確認だ。

「……………何の話だよ」

無駄だとは、判っている。だがそれでも、勇吾は言葉を濁した。強がりですらない、逃げの一手。

楓はそれに、ずっと勇吾の拳を指差して、こう言った。

「判らないわけ、ないわよね。……………だつてあなた」

やめる、という言葉が喉に引っかかった。声にはならない。どうにもならないのだろう。

遅かれ早かれ、気付く事なのだ

「さっきからずっと……………震えているもの」

そう告げられて　勇吾は思わず立ち上がった。否定しなければ。拒絶しなければ。

そうしないと、勇吾は、今の勇吾を形作っているものは

「黙れツ！　俺は恐れてなんかねえ　絶対にだ！　俺は闘える。

守れるんだよ！　でなきゃ俺は……………俺は……………ツ！」

子供染みた言い訳が、感情の奔流とともに溢れて弾けた。

認められない。認めてはいけない。恐れているなどと。助けなければならぬ者が居る状況で、己が闘う事を拒絶しているなど。絶対に受け入れられない。

『師匠』の教えで得た、己自身の意志で振るう拳。

それが勇吾の唯一の誇りであり、存在意義だ。

これがないと　勇吾は生きていけない。紫亜に並び立てない。昂の背中を預かる資格など無い。紅葉と結んだ小さな友情も、保つ事ができない。鈴に慕われる器でもなくなる。

勇吾を苛むものが過去の暴力の記憶ならば、支えているのもまた武力という名の暴力なのだった。

激情に突き動かされて振るうのか、意志で振るうのか。あるのはその差だけだ。

だが、その僅かな違いが、勇吾にとっては絶望的なまでに深く大きい。

「俺から暴力ちからを取り上げたら、後に何が残る！？　必要な時に闘えない、誰も守れない俺に、何の価値があるっていうんだ？

何もねえんだよッ！！」

もはや、自分自身にすら何を言っているのか判らない。だが、それ故にこの叫びは　悲しくなるほどに、本音だった。

「だから俺は恐れてなんかねえんだ。何かを恐がって闘えないなら、恐怖なんて要らねえッ！！」

怒鳴りつける。理不尽な事だとは判っていたが　もう、どうしようもない。

と、　激昂する勇吾に、しかし楓は動じた様子も無く、ゆっくりと歩み寄った。

その表情は　この期に及んで、なお微笑を浮かべていた。

「　　ッ！　来るなッ！」

半ば錯乱状態になりながらも、勇吾はそう叫んで後ろに下がる。だが、背後はベンチだ。

一歩動いただけで足が引っかかり、安っぽいベンチに尻餅をつく。楓は、いくら怒鳴られてもまるで微笑を崩さなかった。

ゆっくりと近寄って、　そのまま勇吾を、優しく抱きしめた。

そして、やはり優しく囁き掛ける。

「……………よく、判ったわ。あなた、凄く疲れているのよ。ずっと走り続けていたから。あなたが無茶をするのは、紫亜ちゃんの為だけだと思っていたけれど　違ったみたい。あなたはずっと、疲れて、傷ついて、苦しんで……………それでも走り続けてきたのでしょうか？

休み方も知らないままで、これまでの人生を生きてきた。ご両親を小さい頃に亡くしてしまったから……………こうして、ただ誰かに抱きしめられるなんて事も知らずに、ずっと。知ってる？　抱きしめられて、ただ包まれているのって、凄く安心できるのよ？」

「……………」

力が、抜けていく。どうしようもなく。体から。そして、心からも。だから、止められなかった。隙間から　これまでの人生で開いた心の穴から、剥き出しの己の弱さが流れ出ていくのを。

「……………ああ、そうだよ。恐いんだ。どうにもできねえんだ。俺は今を、紫亜を失いたくない。日常を壊したくない。誇りを……………この拳を、穢したくない」

流れたのは、弱音だけではなかった。気付かない内に、勇吾の頬には涙の筋が出来ていた。

「紫亜と一緒にいるには、俺は強くないけりや駄目なんだ……………胸を張って生きてなきゃいけないんだ。でも……………俺は、その為の方法をひとつしか知らねえ。意志を持って闘う事でしか、自分を誇れねえんだ……………なのに、俺は……………俺の中の『獣』は、それすらさせてくれねえ……………！」

闘う事でしか己を保てない。己を保てなければ、日常を守れない。だが、闘えば『獣』が、過去の激情が全てを壊してしまいかねない。それが恐い。喧嘩で相手に殺されるかもしれないという、ある種当たり前の恐怖など些事ではないほどに。

「騒ぐんだ……黒崎の野郎を見てから、俺の中の獣がずっと叫んでやがるんだ。『闘え』って。どうしようもなく体が疼くんだ。『闘いたい』って。でもそれに従っちゃったら……俺はもう、二度と戻れない」

愛すべき日常には戻れない。一度肯定されれば、彼の戦闘衝動は暴走を続けるだろう。

「俺は……どうすれば良いんだ？」

ついに流れ出る弱音は、具体性すら失った。道を見失った者が最後に行き着くその言葉が、全てを物語っている。

「大丈夫」

と、優しい囁きが、勇吾の意識に割り込んだ。

「今のあなたは、疲れているだけなの。短い時間でも、ちゃんと休めばまた走れるのよ？」

大丈夫。あなたは強いわ。だって、この私が本気で惚れた男なんだから、ね」

その声には、魔法がかけられていた。少なくとも、勇吾はそう思った。

根拠などまるでないはずの『大丈夫』が、何故これほど心に染みるのか。

それは判らない。判らないが

「俺は……闘えるか？」

空白の思考から、そんな言葉が転がり出た。こんな事を他人に聞くのは初めてだった。

「ええ、きつと」

楓は慈愛に満ちた声で、そう囁いた。それがどうしようもなく心地良い。

勇吾は恐らく、これを求めていたのだらう。無意識にずっと。安らぎを。数分でも数秒でも良い。ただ安息を感受できる瞬間を、彼は心のどこかで待っていた。
勇吾は言葉を続けた。

「俺は、自分の意志で、拳を握っていられるのか？」

「出来るわ。あなたなら」

楓は、勇吾が望んだとおりの答えを返してくれた。

勇吾は一度目を瞑り、数秒して、静かに瞼を上げた。そして、呟く。
「……………そう、か」

気が付けば。

壊れかけていた『緒方勇吾』は、その瞳に光を取り戻していた。

抱擁が、ゆっくりと解かれる。楓は、何か慈愛に満ちた表情で、勇吾を見つめている。

(……………俺は、闘える)

勇吾は改めて拳を握った。強く。ただ強く。

震えはこない。勇吾を苛んでいた恐怖心が、大きく削れていた。

「……………」

勇吾は無言で立ち上がった。楓は微笑んでいる。よく出来ましたともすれば、そんな言葉を言いかねない笑みだった。

少し冷静になり始めた思考で、なんとなく理解する。

(そうか 全部、判った上での事だったのか。俺が壊れかけている事を、こいつはどうやってか見抜いた。そして……………吐き出させた。思っている事を、全部)

その上で、認めてくれた。肯定して、『大丈夫』と告げてくれた。一番無様なところを見せて尚、肯定される。嬉しく思わないわけがない。

(愚痴らせて、弱音を聞いて。慰めて、背中を押して まるで本当に、鼻でも相手にしてるみたいだぜ。抱きしめられたのは、流石に初めてだけだよ)

本音をいえば 一番効いたのはそれだった。ただ抱きしめられる。それは、包み込まれるという事だ。暖かなものに包まれ、その瞬間だけはあらゆるものから守られる。 赦される。

（ まったく。とんだヘタレだな、俺は。この期に及んで、女に抱きしめられたのが、こんなに効果覲面だとはよ。おまけに……涙まで）

がりがりど、勇吾は乱雑に頭を搔いた。今になって、照れと羞恥が這い上がってきている。

まさか、自分が涙を流す事になるとは。顔は見られていなかったとはいえ、これは相当に恥ずかしい。

それを隠し切れないまま、しかし勇吾はあえて楓の方に顔を向けた。

感謝を表すのは、早い方が良い。その筈だ。

「あー……楓？」

「なあに？」

呼びかけに、意地悪く楓が応じてくる。小首など傾げて、いかにも白々しい。こちらの言いたいことなど、とっくに知っているだろうに。

「なんつーかな。その……ありがとうよ。色々……助かった」

「ふふ、どういたしまして」

微笑む楓の表情から、つい視線を逸らしてしまう。情けなさ過ぎて楓はやはり優しい目をして、こちらを見ている。彼女はそのままの姿勢で、こう言った。

「本当は、こんな事するつもりじゃなかったのだけれど。事情も状況も判らないから、とにかく芹沢君の言う事に従ってここに来ただけだった。でも、あなたを一目見て気が変わったわ。あんなに疲れきった姿を見せられたら、ね」

「そんなに疲れて見えたか？ 俺の様子は」

「ええ。完全に道を見失って、どうしようもなくなった迷子に見え

たわ。だから思わず、余計なお世話を焼いてしまった。……本当なら、あなたを励ますのは芹沢君の、抱きしめるのは紫亜ちゃん役回りなのだけれど」

「……いいや。余計じゃなかったさ。少なくとも俺は今、どうにか立ち上がれている。お前の言ったとおりだよ。抱きしめられるのは、確かに暖かで安心できた」

言いながら、随分と恥ずかしい事を口走っているものだと自覚する。だが構わない。どの道、彼女には一番みっともないところを見られている。いちいち赤面するのは今更だ。

「そう？　なら良かった。あなたの助けになれたみたいで」
楓はそう言つと、言葉を切った。それから、続けてくる。

「それで、あなたはどうするの？　あなたは闘うのが怖いと言つた。闘わないわけにはいかないとも言つた。その矛盾を、あなたは どうする？」

それは純粹に、ただの問いかけだった。何も予想せず、ただ答えを欲している。

聞きたいのだろう。『立ち上がれている』と口にした男が、これからどうするのかを。立ち上がったその先で、何を成すのかを。

勇吾は、すぐには答えなかった。ちゃんとした言葉で、伝えるべきだと思つたから。

本当のところ、事態は何も変わっていない。鈴の危機、黒崎の存在、勇吾自身の矛盾。

どれも解消されたわけではない。ただ、勇吾の心が少しだけ救われただけだ。

だが、それでも希望は見えたといえるだろう。楓のおかげで、どうにか最初の一步くらいは踏み出せる。先ほどまでは、足元すら危うかったというのに。

勇吾はしっかりと楓を見据えた。碧眼に力が宿る。そして、言葉にも。

勇吾は決然と、告げた。

「俺は闘う。この拳で、この意志で。泉を助けるって、自分で決めたから。闘うのが恐いの、今もそうだ。だが、それでも俺は拳を握る。それが俺に許された。いや、俺自身が許した、たったひとつの武器だから」

一度、言葉を切る。たったこれだけ言うのに、酷く喉が渴いた。ガラにもなく緊張しているのだろう。それを隠すため、というわけでもなかったが、勇吾は笑みを浮かべて見せた。皮肉げな、しかし強い笑みを。それから、続けた。

「先の事は判らない。何事もなく打ち勝てるかもしれないし、どうしようもないまま負けるのかもしれない。意志を貫いたまま闘えるかもしれないし、獣に吞まれて暴走するのかもしれない。だが、それでも　　今闘う意志だけは、絶対に曲げない」

恐らくはそれが、勇吾の中にある意地の形。信念と呼べるほどに高尚なものではないが　　しかし張り続けることで、いつかは価値を持つ何か。

嫌悪している昔の己自身も、これに従って闘っていた。これを張り通すために闘っていた。

この地でも、これがあつたから拳を握った。認められる。今なら、少しだけ。心にゆとりの出来た今の勇吾なら、昔の自分を少しだけ許してやれる。この意地を進んだ事だけは、間違つてなどいないのだと。

勇吾の言葉を聴いた楓は、不意に笑みを強くした。勇吾の答えに満足したような表情だった。

「そう。やっぱりあなたは強いよね。たった一度の温もりだけで、もう走り出す事を考えられるなんて」

どこか誇らしそうな声音で、彼女がそう呟く。だが、勇吾はゆつくりと頭を振った。

「いいや。そうでもないさ。俺は弱い。どうしようもなくな。たぶんまた、今日みたいに疲れ果てる時がきつとくる。……だが、それでも構わない、とも思う」

「それは、どうして？」

楓は首を傾げた。よく判らない。そう言いたげだった。勇吾は屈んで楓と目線の高さを合わせながら、こう告げた。

「判ったからだよ。お前のお陰でな。疲れた時、どうすれば良いのか。お前が教えてくれただろう？」

言って、含みのある笑みを浮かべてみせる。なんとなく、いつもの調子が少し戻ってきた気がしていた。

「疲れ果てて、どうしようもなくなったら。誰かに抱きしめてもらうさ。そうだな、今度は、紫亜にお願いしよう。あんまりかっこいい話じゃねえが、な」

「ふふ、そうね。それが、きつと一番よ」

楓はそう言つと、ふわりと笑った。それから、悪戯っぽく付け加えてくる。

「ねえ。紫亜ちゃんにお願いするのも勿論良いことだけれど、たまには私の所にも寄っていかない？ 疲れていてもいなくても、胸を貸してあげるわよ？」

「……………やめとく。そいつはたぶん、特大の地雷だろうからな。それに、世間じゃそついうのを浮気っていうらしいぜ？」

「あら残念」

そう言つて笑う彼女の表情は、さして残念そうなものでもなかった

が。

勇吾の与り知らぬ事ではあるが、この時の彼女の言葉は、わりと本気のものであったというのは、乙女の秘密というやつだった。

第二十八話：抱きしめてもらえば良い（後書き）

主人公、超ヘタレになるの巻。

どうも、へっぽこ物書きの龍之介です。

しばらく主人公のヘタレが目立つ感じになってましたが、今回がたぶん最もダメな回なんじゃないかと思えます。

ここからはややテンションが上がっていきます。

恐らくラブも片鱗くらいは出せるんじゃないかと。あんまり甘い感じにはならないかと思えますが。

では、また次回のあとがきで。

第二十九話：『無敵だ』

勇吾が見慣れた金髪を発見したのは、楓との一悶着があったから、更に十分ほど経った後だった。

「　　すまない。少し時間を取ったな」

楓と並んで座っているベンチの対面に立った昴は、開口一番そう言った。

勇吾はいや、と首を横に振ってから、ゆっくりと口を開く。

「　　良いさ。焦っても仕方ねえしな。……ただ、」

ひとまず赦免の言葉を口にして、しかしそこで止まることなく、続ける。

「　　そっちの二人に関しては、ちよつと話があるぞ」

勇吾は引き結んだ半眼で昴の背後にいる　　何故だかは知らないが

紫亜と紅葉に視線を投げると、鋭く昴に囁いた。

「　　おい、何であの二人を連れてきた？」

「　　気にするな。少なくとも今はな。何せ時間がない」

囁き返してくる昴に、問い質してやりたいのは山々ではあったが、時間の余裕がないのも事実だ。ここは引き下がるしかない。

「　　……判った。ならこの事は後回しだ。……楓、昴が来たんだ。そろそろ話を聞かせてくれ」

紫亜や紅葉に関しては後々追及する事に決めて、勇吾は楓に話を振った。楓は小さく頷くと、

「　　そうね。それじゃあ始めましょうか」

勇吾ではなく、昴に向かってそう言った。

「ああ。こっちはいつでもいけると、言いたいところだが」と、昴は楓を制止する仕草をした。楓はやや不思議そうな表情を見せたが、おとなしく口を閉じた。

「……………？ どうした、昴」

時間がないと言いながら、中々本題に入ろうとしない昴に、勇吾は疑問符を浮かべる。

昴は携帯電話を取り出すと、それを掲げつつ、

「ここに来るのに使ったタクシーの中で、新しい情報を仕入れてな。それも含めて、現状を整理したい。目まぐるしく状況が変わったからな。まるで現状が判ってない奴もいるだろう？」

「……………新しい情報？」

聞き咎めて、呟く。昴は頷いた。

「ああ。この期に及んでは少々今更な事だが 泉の抱えていた事情だよ」

「調べがついたのか？ 昨日の今日で？」

少なからず驚いて、勇吾は目を見張った。確かに彼は『情報網』とやらで色々と探りを入れているようではあったが、情報の入りが早すぎる。

が、昴は事もなげに頷いた。

「まあな。泉の学校の連中に話を聞いていく内に、あいつと普段仲が良かったって奴に行きついてな。ま、それがビンゴだったんだ。あいつ、一昨日まで友達の家泊ってたんだろ？ その友達ってのが」

「 情報網に引っかけた奴か」

「そういう事だ」

昴は携帯電話の画面に目をやりながら、続ける。

「で、だ。泉の事情だが、どうも借金らしい。『友達』にはそう漏

らしていたそう。聞き出せたのはこれだけだが、まあ想像はつく。親がヤクザから 黒崎の組だろうな 借金して、返済に困って逃げた。泉がこの地に残ったのは……単に邪魔だからと置いていかれたのか、逃亡生活に巻き込まない配慮だったのかは判らないが どの道、泉が危険なものには変わりない」

「借金。ってこたあ、黒崎の役回りは取り立てか……」

「だろうな。で、泉は友達の家を泊まり歩く事で、その取り立てから逃げ回っていたわけだ。だが、それにも限界がきた。同じ場所に留まり過ぎると、足がつきやすくなる。だから単独で動こうとして、桜通りをうるついた。人目が多いから、ある意味安全だと思ったんだろう。今日と同じパターンだな」

「……そこを俺が拾ったのか」

「たぶんな。拾った場所が黒桜だったのは……迷ったんだろうな。」

あいつ、頭は回るがドジだ」
さくりと真理を言い捨てて、昴は苦笑を浮かべて見せた。それから、続ける。

「そして、重要なのはここからだ。わざわざこのタイミングでこの情報を開示した理由も、この為だったと言って良い。知ってるか？ ここらのヤクザで、金融業に手を出しているのは二つしかない。近衛組と鬼頭組だ。つまり、この時点で泉を誘拐した奴らはこの内のどちらかって事になるな」

「……何でんな事まで知ってたんだよ、お前は」

思わず呟く。自分もある意味『普通』とはかけ離れてしまった人間だが、この男も中々のものである。

それに、昴は苦笑した。『苦しい笑み』を、浮かべた。

「昔、うちのクソ親父殿が借金作ってたな。その借り入れ先がヤクザだったんだよ。お前は知ってるだろ、あのクソ虫の事は」

「……なるほど」

横にいる楓や、黙って成り行きを見守っている紫亜と紅葉は事情を

知らないせいかな首を傾げているだけだったが、勇吾は内心舌打ちしていた。迂闊だった、と。

勇吾は昴の家庭の事情には、少しばかり踏み込んだことがある。『クソ親父殿』の事も、すぐに思い出した。

「ま、その話は今回の事には直接関係ない。切り替えようぜ。さて、どこまで話したか　そうそう、近衛組と鬼頭組ここで必要になるのが、楓の情報だ。話してくれるな？」

「？　構わないけれど……正直、大した話じゃないわよ？　現場を見たってただけだから」

眉根を寄せて言う楓に、しかし昴は、

「問題ない。必要な情報はたった一つだからな。　泉を連れ去ったっていう車の行き先。その方向さえ分かれば、それで事足りる」意味がわからない。いったいどんな脳をしていれば、それだけの情報で事足りるというのか。

そう思いつつも、楓はさつき見た車の進行方向を思い出し、そして「南西よ。黒桜の西の端っこに向けて、あの車は走って行ったわ」

告げた。こんなので本当に大丈夫なのかと思いつつながら、
だが

「……南西か。よし、だいたい把握した」

昴は事もなげに言うと、勇吾に向けてこう言い放った。

「　　相手は近衛組。行き先は奴らの拠点の一つ……数年前に潰れたホテルの廃墟だ」

その場にいる人間の思考を完全に置き去りにして、昴は全てを把握したようだった。

* * * * *

黒桜の西の端。桜通り全体から言えば南西に位置する一帯には、近衛組のシマが多く存在する。昴はどうやらその事実から、先ほどの発言をしたらしい。

何故そんな事を知っているのかは 概ね、例の情報網とやらの力と、過去の経験故のものだろう。

付き合いは長いし大抵の事は知っているこの親友だが、時折こちらの予想の斜め上に行く。

感心半分呆れ半分の心地で、勇吾は昴に問いかけた。

「間違いないんだな？」

問うというよりは確認するような調子だった。もつといえ、半ば確信していながらの念押しだ。

「ああ、間違いない」

「そうか。お前が言うんなら、そうなんだろうな」

言いながら、立ち上がる。

これで

(これで、このゲームの事は大方全部見えた。ルール、相手の顔、駒やキングの位置。後は開始の一手を打つだけ。喧嘩を、始めるだけだ)

相手の黒崎^{キング}は強敵だが、やるしかない。囚われているのは別にお姫様というわけではないが まあ、似たようなものだ。

「よし そんなじゃ、行くかね」

こきりと指を鳴らして、勇吾は歩き出しかけた。が、その前に、
「待って」

呼び止められる。

(……だろっな)

背中に嫌な汗をかきながら、呟く。実のところ、こうなるのは予想していた。彼女　紫亜がここにいる以上、こうなるだろっなという事は、勇吾にだって判る。

彼氏が極道と喧嘩しに行くと思つた彼女の反応は、概ねこんなところだろっな。

(止められるか怒られるか泣かれるか引つ叩かれるか……もしくは全部か。何にしろ、あんまり面白い事にはならんだろっな……)

謝るか土下座するか、いやそれって同じ意味じゃねーか、などと悩みながら、勇吾は覚悟を決めて振り返つた。

「ちよつと……お話ししよう?」

真面目な顔をした紫亜に、そう言われた。

(こりゃ土下座かな)

即座にそんな事を思いながら、勇吾は両手を上げた。降参の証。

同時に鼻に、ちよつと待つてろ、とアイコンタクトを送つておく。

妙に器用なウインクが返つてきた。

あの野郎こんな時にふざけやがって、と思ひながら、紫亜の方に近付く。

「えーと、な。どうやらだいたいの事情は把握した……みたいだな、

紫亜

「っん」

静かに頷く紫亜を前に、勇吾は思考した。

何を話すべきか　あるいは何も言わずに叱られておくべきなのか。海では危ない目に遭わせた。いや、付き合いだしてから、平穏な日

々などほとんどなかったとすら言えるか。精神的にも肉体的にも、よくよく考えれば彼女には負担ばかり強いてきたような気がする。その上で、今度は極道と喧嘩してくる、だ。しかも、
(その理由が、後輩の『女の子』を助けるためときたまんだ。こりや、流石にまずいか……)

だが、それでも勇吾はここで止まれない。今ここで闘う意志を曲げてしまうなら、それはもう『緒方勇吾』ではない。理解されなくても、嫌われるとしても。それでも、曲げられない。

「紫亜。俺は」

「悔しい、な」

「……………え？」

決意を伝えようとした矢先に、突然よく判らない事を言われて、勇吾は間抜けな声をあげた。意味が判らず二の句が告げられなくなっている勇吾に、紫亜は、

「楓さんと、何かあったんでしよう？」

(……………ばれて、る？ 超ばれてる!?)

「な、なんで……………」

「顔。なんかすつきりしてるもん。昨日から何か悩んでたのが、なくなっただんでしよう？」

「えーと、なくなったわけではないんだけど……………まあ、ちょっとはマシかなー、みたいな感じではあるかな……………」

背中の嫌な汗が三倍ほどになっているのを自覚しながら、勇吾は視線をそらした。

別にやましい感情があつての事ではなかったものの、あの行為自体は浮気と取られても仕方がない。

内心驚天動地の勇吾である。まさかこの場で指摘されるとは思っていなかった。これはもしかや三行半か……？ と肝を潰す勇吾に、しかし、紫亜は、

「別に、怒ってるわけじゃないの。ただ、悔しいってだけで」

「怒って、ない……？」

「うん。だって、本当は私がしなくちゃいけない事だったから。勇吾君が悩んで、苦しんでいるなら、それをどうにかしてあげるのは私の役目だったはずだから。……でも、気づくのが遅かったから、楓さんに先を越されちゃった。それが、少し悔しい」

「……………それは」

違う、と、勇吾は口の中だけで呟いた。

そんなはずはないのだ。勇吾の悩みは、言わば身から出た錆。自業自得だ。紫亜が面倒を抱え込まなければならぬ道理などない。

「覚えてる？ 私たちが、一番最初に会った時の事」

と、紫亜は突然のそんな事を言い出した。

始めて会った時。それはずっと昔の事。小学生の時の、たった一回きりの邂逅だった。

「あの時。始めて会ったあの時も 勇吾君は闘ってた。そしてそれを、私は格好良い人だと思った。 始めて人を、好きになった」

紫亜は、穏やかに続ける。勇吾はただ、黙って聞いている事しか出
来ない。

「ふたつき二月前に再会した時。あの時も、やっぱり勇吾君は闘ってたよね。」

そして私は、そんな勇吾君を　もう一度、好きになったの」

そこで紫亜は、小さく微笑んでみせた。優しく、穏やかに。

そして、

「怖がらないで、良いよ。私は、いつもの優しい勇吾君が好き。でも、誰かの為に、何かを守る為に闘う勇吾君も好きだから。嫌いになんて、ならないから。だから」

「あ……………」

勇吾はそこで、ようやく悟った。彼女がここへ何をしに来たのか。何を言いに来たのか。

彼女は知っていたのだらう。いや、気づいていたというべきか。勇吾が何に悩み、苦しんでいたか。理屈ではなく、心で。

(そうか……………そういつ、ことか……………)

紫亜に拒絶される　それを怖れて、闘う事を嫌がっていた事を。それを知ったからこそ

と、紫亜が躊躇いなく歩き出した。勇吾の目の前まで来て、立ち止まる。

そして、

「　　頑張って」

そう小さく囁いて、勇吾の唇にそっと口付けた。

それは魔法だった。全てを解決する、真なる魔法。勇吾はゆっくりと目を瞑った。そして、自覚する。自身の中から、恐怖が悉く消えていく事を。

柔らかな感触が離れる。だが魔法は、勇吾の中で確かに存在していた。

そして目を開き、こう呟いた。

「 ああ、頑張ってくるよ」

今理解した。思い悩んでいた事は、全て幻に過ぎなかった事を。たったこれだけの事で、何もかも消えてなくなってしまうような、つまらない事でしかなかった事を。

（そう、つまらない事だ。紫亜が認めてくれるなら。彼女が笑ってくれるなら。俺は ）

紫亜の頭を軽く撫で、歩き出す。自分の戦場に向かう為に。

心は酷く穏やかだった。視界の端に映る昴の含み笑いも、今ばかりは気にならない。

『いつもの』調子に戻った勇吾は、ゆっくりと拳を握りながら、小さく呟いた

「 俺は……無敵だ」

第二十九話：『無敵だ』（後書き）

ぶるあ。よつやく更新できた……

へっぽこ物書きの龍之介です。

この回で前振りは終了です。次からは殴る蹴るが始まりまーす。え、ラブ？ すいません僕英語はちょっと……いえ、そのうち書きます。たぶん。きつと。

第三十話：揺らぐ黒（前書き）

【黒崎神無】

揺らぐ。俺の残滓が。

来る。俺の敵が。

見える。至高の闘争が。

守るものなどなくとも。

俺は 闘う。

第三十話：揺らぐ黒

「ええ。お望みのモノは確保しました。それで、どちらに出荷すればよろしいのです？」

携帯電話を耳から遠ざけた不自然な姿勢で、黒崎は任務終了の報告をしていた。上司である『無能若頭殿』にだ。だが、この『無能若頭殿』は、何が気に食わないのかさつきからずっと怒鳴っている。おかげでやかましくて、いつまで経ってもまともな姿勢に戻れない。いい加減、腕がだるくなってきた頃合いである。

と、黒崎は相手が発した怒鳴り声の中に気になる内容を聞き替えて、わずかに眉根を寄せた。不覚にも、つい苛立ってしまったのだ。

「……それは問題ありませんが。……了解しました。では、それまではこちらでお預かりします」

電話は楽で良い。表情の変化が相手には伝わらないのだから。そんな事を考えつつ、黒崎は淡々と返答を続けていく。どこの社会でもそうだが、上司にいちいち怒りを向けていても仕方がない。普通の会社に勤めていようと、極道に身を置いていようと、それは変わらない。変に睨まれてもしたら厄介なだけだ。もっとも、睨まれる、という意味では、黒崎はもう遅い。とうの昔から、この上司とは犬猿の仲だ。

(……まあ、それでも気をつけるに越した事はない。これ以上溝が深まれば、鉄砲玉でも差し向けられかねん)

身内に鉄砲玉というのはとてつもなく馬鹿げた話ではある。通常はありえない。だが、何しろ相手は極上の馬鹿だ。それも笑えないタイプの。

そういった反抗的な思考を隠すためというわけでもなかったが、意識して表情を取り繕う。だが、せつかくの無表情も、次の相手の一言であっさりと崩れる。

「……………まさか、私にその趣味はありませんので。では後ほど」

どうしようもなく溢れる殺意を堪えながら、なんとか通話を切る。なんとなく携帯電話を握り潰しそうになったが、寸前で自制する。

電話で良かった。黒崎は改めてそう思った。実際に向き合って最後の台詞を言われていたら、殴らない自信は正直あまりない。

「兄貴。どんな塩梅でした、頭は？」

対面に座っている部下の小橋が、にやけた表情で言ってくる。結果を大方予想しているからだろう。極上の餌を前にして、一日待ったをかけられた若頭殿^{ケダモノ}。反応など知れている。

「怒り心頭、といったところだな。仕事が遅いだのノロマだのトロいだのと、同じ意味の罵り言葉を大量に浴びせられた。挙げ句、別件でまだこちらには来れないから、しばらくガキのお守りをしているだと。理不尽な事だ。ああ、殺したい」

「かはははは！ 流石の兄貴も、そろそろ限界ですかい？ 最後、なんか言われた時は、今にも火い吹きそうな目えしてやしたぜ？」

「……………先に手え出すんじゃねーぜ？ 黒崎ちゃんよオ」だと
さ

こめかみがそろそろ『ぶちっ』とでもなりそうだな、と胸中で呟く。実際、額のあたりには青筋が浮いたりもしていた。

「俺の堪忍袋は鋼鉄製だが、緒は濡れた紙で出来てるんだ。まったくと、今までよく切れなかったものだ」

部下に軽口を向けつつ、目頭を押さえる。この軽口も、あながち冗談とは言えない。いい加減、あの虫けらに付き合つのはうんざりだった。

「兄貴！」

黒崎のいる部屋の入り口から、声が上がる。部下の声だ。この場所はホテル跡の廃墟なので、大概の部屋にはドアなどという気の利いたものは付いていない。なのでノックはなしだ。もっとも、黒崎の

部下たちは仮にドアが付いていたとしても、ノックなどするような連中ではないが。

「どうした？」

黒崎は一瞬で表情を取り繕うと、立ち上がって問いかけた。側近の小橋はともかく、他の部下にまで上司への殺意を撒き散らすわけにはいかない。

部下は慌てていたのか、妙に息を乱している。

「何だ。何があった？」

重ねて問いかける。急かしても仕方ないので、腕を組みながら。

「いやー、その。なんと申しますか……」

「……？」

ひとまず息を整えたものの、今度は歯切れの悪い部下に、黒崎は何か嫌な予感を覚えた。

そして、嫌な予感とは大抵の場合当たるものである。

「……その。とっ捕まえてきた女のガキが……」

「逃げたのか？」

「いえ。そりゃねーです。ただ」

「ただ？」

いちいち勿体ぶる部下に、それでも辛抱強く、黒崎は問い返した。と、ようやく部下は核心に触れるつもりになったようだった。

「……ケンカしてんすよ。うちの奴らと」

「……なあ、お前。シャブはやめたんじゃなかったのか？」

「いや、一発キメた末の幻覚じゃねーっス。マジっス」

「……判った。すぐ行こう」

掌で額を覆う。今なら怒りのスーパーモードにでも目覚められそう
だ。

「……………神は死んだか」

「生きてても、『鬼』は救済の範囲外でやしょう？」

思わず漏れたらしくない言葉に返された、ごもつともな軽口をバツクに、黒崎は雑な足取りで部屋を後にした。

* * * * *

捕えた獲物 泉鈴という名の少女を軟禁しているのは、黒崎の拠点の一つであるこのホテル跡の中でも、一応上等と言える部屋だった。元々がそれなりに上質なホテルの一室なので、ある程度手入れをしておけば、体裁は繕える。何より、ドアも付いている。

そして、嫌々ながらもその部屋に足を向けた黒崎を迎えたのは

「むきー！ いー加減離すですこのチンピラー！」

「うおわっ。何しやがんだこのチビ！ あだだだっ！？ こいつ

噛みつきやがるぞー！」

「おいおい、何やってんだらぺ！？ は、鼻に頭突きだと……！？」

「へへーん！ いー気味ですこのゆーかいはんー！」

これだった。

「……………」

もはやいちいち突っ込むまいと、無言で部屋に入る。怪我をさせまいと気を遣った結果、小娘相手に良いように遊ばれている部下たちの間をすり抜け、足音も立てずに鈴の背後に忍び寄る。

「ふふふふ……しょーりなのですっ。さあさあ、負け犬たちは今すぐ私にケーキとおつきなパフェを……いえ、ここから出す準備を……

…ふにゆー！？」

襟首を猫のように掴み上げられて、調子に乗りまくった勝利宣言が中断される。

「……で、だ。たった今負け犬になり下がったお前は、どうするベキだろうな？」

「うっうっうっ……油断したですー……」

ぐったりとぶら下がる鈴に、黒崎は取り落とさないよう持ち手を入れ替えた。そこで、ふと思う。

(軽いな……)

黒崎は常人と比べれば腕力のある方ではあるが、それでも片手で簡単に持ち上がるというのは、少々軽すぎるくらいがある。

軽いという事は、生物として単純に弱いという事だ。いや、この少女が弱者であるのは、軽いという以前に明白だ。未成年で、今はたった一人きり。どうしようもなく、弱い。

その事実には、何か痛みに似た感情を、黒崎は胸の内に感じた。

(こいつ……『なんとかしてやれないか』……?)

良心の呵責、だった。

正確には、もう失ったはずの良心の、その残滓。それが今になって蠢いている。

(馬鹿が……！何を今更！)

自嘲が湧いて出てくる。

(今更、弱者だからと見逃すのか？ 俺は今まで、敵対する全

てを砕いて生きてきた。その中には、明らかに弱者の側にいる者もいた。だが、躊躇わず砕いて捨てた。そうだろう?)

否定を重ねる。だが、得られるのは満足ではなく、ただただ苦いだけの感情だった。

「……………どしたです？」

くりんと器用に空中で方向転換して、鈴がそんな事を言う。まるでこちらを気遣うような表情で。

「なんだか苦しそうです。痛そうです。何かお困りですー？」

実際に気遣われていた。誘拐犯が。被害者に。

「……ああ。それなりに苦しいし、痛い。それに困ってもいるな。だがお前ほどではない」

ベッドの方にまで歩いていき、襟首を掴んでいる手を離す。

「うにゃっ！ うづう、痛いー……」

いきなり弱弱しくなった反応に、黒崎は嘆息を漏らす。そして

「おい、お前」

「なんすか、兄貴？」

部下の一人に向けて、黒崎は自分の財布を投げ渡した。

「大通りの北へ出て、ケーキとでかいパフェを買って来い。車は俺のを使って良い」

言って、車のキーも投げ渡す。

部下は疑問ありげな顔ではあったものの、とりあえず指示には従う気になったのか、しきりに首を捻りながら部屋を出て行った。

「……？ おじさんケーキ好きなんです？」

「甘いものは苦手だ。ビターチョコで吐く。……あれはお前のだ」

「ほえ？ 誘拐犯なのにケーキくれるですか？ むむむ、良い人なのか悪い人なのか、微妙になってきましたよ」

「安心しろ。文句なく極悪人だ。外に出すわけにはいかんが、とりあえず欲しいものはくれてやる。だから大人しくしている。その方がお互い面倒が少ない」

「むー……おじさん、どこかの誰かにとっても似ている気がするです」

鈴が不満顔で　まあ当然だが　むくりと起き上がる。

「緒方勇吾か？」

別にお喋りがしたかったわけではないが、なんとなく聞き返してしまふ。周りの部下が、普段とは違う黒崎の様子に混乱しているようだったが、今更態度を変えるのも馬鹿らしいので、放置しておく。

「うに？ おじさん、緒方先輩の事知ってるですか？」

目を丸くして、鈴が聞き返してくる。何に対しても、正直な反応しかないようだ。

「知ってはいる。が、知り合いというわけではない。無論、友人などという戯けた間柄でもない。強いて言えば、そう遠くない未来、拳を交える事になる相手……そんなところだ」

「よくわからないです」

「だろうな。俺も似たようなものだ。理屈というよりただの確信だ。説明は出来ん」

言いながら、煙草に火をつける。紫煙を肺に送り込み、吐き出して部屋の空気を汚す。と、それからふと気付いたように、

「煙草、苦手か？」

周囲が本気で黒崎の正気を疑うような事を言った。というよりも、誘拐犯が被害者に訊くような事ではない。

「……ふふふ。ほんとにそっくりです。そんなところまで同じなんて、ちよっとおかしいですよー」

「ふん、奴とそっくり、か。不愉快な話だ」

と、そこで黒崎は、窓の方に目を向けた。そして、二秒にも満たない時間で何かに気付いた。

「……小娘。一つ聞きたい」

立ち上がる。お喋りの時間を終わらせる準備として。

「何です？」

「お前にとつて、緒方勇吾とはなんだ？」

その質問に。鈴は答えを詰まらせた。視線を彷徨わせて、深呼吸をひとつ。

それから、ようやくこちらを見た。そして、

「……私の、一番……大切なひと、です」

「そうか」

黒崎は、あっさりと言った。それから、指を一本立てて見せる。すす、と。指先が空中で滑る。その指は、最後に窓の方を指して止まった。つられて、鈴もそちらに目をやる。

「よく見てみる。」

『大切なひと』とやらが見えるぞ」

「……ふえ？」

ぴたりと。鈴の動きが制止した。数秒して、ようやくふらふらと歩き出す。そして、窓から外を一望して

「あ
いる。来る。見える。見覚えのある黒いバイクが。人通りの少ないこの周囲だからこそ明確に、判然と。

「……あ、ああ……ああ、ああ……」

間違いない。あれは、あれは

「そら。黒の王子様のご到着だ。ご丁寧に、白馬ではなく鋼鉄の軍馬でな。おまけに、お供の兵隊までいるようだな」

くく、と喉を鳴らして、黒崎が笑う。

涙すら浮かべて、鈴が笑う。

攫われた者と、攫った者。そのどちらからも歓迎されて、ようやく

主人公ヒーローが現れた。

「く。そう遠くない未来か。まったく、フライングにも程がある」

さあ、主人公ヒーローが現れたのだ。敵役ボスも然るべき所へ行かなく

ては。

堪え切れぬ歓喜に。来るべき闘争に。黒崎はその身を委ねる。

ここから先は『近衛の黒鬼』の領分だ。たかが小娘に同情し、心を揺らがせ、あまつさえ。あまつさえ『なんとかしてやりたい』などと、ほんの一瞬とはいえ思った馬鹿者は、この部屋を出れば死に絶える。

「さあ　始めようか。喧嘩を。闘争を。俺の　存在意義を」

駒は盤上に揃った。人物は物語に集結した。ドミノは描くべきモノを描いて整列した。

始められる。後は指一本だ。最初の一枚さえ倒れれば　　終わ
りまで、止まる事はない。

止まる事は出来ない

第三十話：揺らぐ黒（後書き）

ぶるあ。呐喊作業での強引な連続更新。極端ですね。すいません。

なにやら、リハビリのつもりで書いてたらあっさり書けてしまったので、このままいけるとこまでいこうかと。

さー、次は喧嘩だ。頑張るぞー。

第三十一話：始まる闘争（前書き）

作者がやりたい事やってるせいで、もはやラブコメではなくなってきた感のある第三十一話、始ります。

喧嘩だ喧嘩、とことんやんぞ！

第三十一話：始まる闘争

「　　ここか」

白塗りらしき外装の建物を見上げて、勇吾はヘルメットを脱いだ。眼前の建物は、ところどころ塗装が剥げていたり、くすんで変色していたりするため、あくまで『らしき』程度の白い建物である。外観だけ見ると、酷く怪しい雰囲気がある。

視線を鋭くしながら、勇吾は誰にともなく呟いた。

「いかにも、って雰囲気だな。まるでラスボスの城だ」

「なら、俺たちはお姫様を救いに来た騎士か？」

「どう考えても柄じゃねえけどな。俺らもそうだが、泉の奴がお姫さんってのも怪しいとこだぜ」

「違うない」

肩をすくめる昂に視線を向けつつ、告げる。

「んなことより、武器持ってきてるなら準備しとけよ。突入したら、この中はすぐに修羅場だ」

「ああ、判ってるさ。何年一緒にいると思ってるんだ？」

ベルトに固定したカバーから折りたたみの警棒を引き抜き、昂が言う。

勇吾の家から持ち出した、昂の武器だ。常人離れた勇吾の喧嘩についていく備えの、そのひとつ。

実は他にもいくつか持ち出した物があるのだが、それはあくまで保険だ。可能なら使わずに済ませたい。それに、もし使うにしても、隠し持っていないければ意味をなさない類のものでもある。

（さて。正念場だな。せいぜい殺されないように気をつけるとしよう）

上着の内ポケットにある感触を確かめて、昴は内心ごちる。それから、勇吾に並び立つ。

「まあ、俺の方はご覧の通り準備完了だ。いつでも行ける」

「そうかい。そんじゃ……行くか」

短い意志疎通。既に闘争への覚悟は出来ている。

二人は肩を並べて歩き出す。いつものように。かつてのように。

闘いの場へと。

* * * * *

薄暗い空間だった。薄っぺらい闇が、漂うように充満している。かつてホテルとして機能していた頃には、ロビーと呼ばれていた場所だが、今は見る影もない。

その、丁度真ん中に、一際濃い闇色があった。周りの闇を拒絶するように、あるいは拒絶されるようにして、そこにいる。

と、その闇が声を発した。喜びと憎悪を以って。

「 来たか」

「 来たぜ」

答えた声もまた、闇だった。それも、まったく同じ形の。人の形をした 闇。

「待ちかねたぞ、俺の敵」

「そうかい。そりゃ悪い事したな」

待ち構えていた敵にも、特に驚くことなく切り返す。

「ひとりか。てっきり部下をわんさか消し掛けてくるもんだと思っ
てたがな」

言いながら、勇吾は黒崎との間合いを少し詰めた。喧嘩に開始のホ
イッスルはない。隙を見せればすぐにでも打ちかけられるように、油
断なく相手を　黒崎を見据える。他は見ない。周囲の警戒は昂が
してくれる。強敵を相手にする時の、昔からの役割分担だった。
一足で攻撃に移れる間合いより少し遠い所で足を止め、構える。腰
を落とした、やや前傾姿勢の完全な戦闘体勢。

「部下ならいる。そこにひとりな。　どうやら後ろの小僧は気付
いているようだ」

黒崎は、顎をしゃくってロビーの端を示して見せた。が、勇吾はそ
ちらを見ない。昂が気付いているなら、その必要がない。

「それでも、二人か。たかが学生二人、人数は必要ねえってか？」

「貴様が相手では、怪我人を出すだけで結果は出ない。なら、最初
から俺が出るべきだろう」

「……そりゃまた、随分と持ち上げてくれんな」

「貴様が俺を怖れるように、俺も貴様を怖れている……そういう事
だ。　一目で判った事だろう、俺は貴様を殺せる。貴様は俺を殺
せる。……だからこそ俺は、貴様と闘いたい」

「へっ。いちいち気取った野郎だな。……まあ、良い。ルールはな
んとなく判った。一対一サンでやり合って、勝てば良いんだな」

「そうだ。俺とその男　小橋を倒せば、それで終いだ。小娘は
上の階にいる。他の部下も何人が置いているが……貴様なら数分で
片がつくだろう。俺を小橋を倒したら、後は好きにするがいい」

と。黒崎がサングラスを取った。瞳が晒される。

挑む漆黒の瞳。殺意と憎悪と狂気を内包した異端の視線。
迎え撃つ勇吾の瞳。翠の双眸。闘争と平穩を同時に望む矛盾の視線。
ふたつの視線が絡む。

ドクン 勇吾の心臓がひとつ、大きく跳ねた。昨日は、ここで相
手に呑まれた。

だが、今は 今はどうだ？

感情が暴発する。歡喜と恐怖。巡り合った闘争に。失うかもしれな
い平穩に。二つの感情が勇吾を苛み、そして。

「 は、」

止められない。止まらない。こみ上げる激情に、勇吾は身を任せた。
大丈夫。今の勇吾は、そう思えた。自分は必ず戻れる。どれだけの
感情に支配されようと、必ず。

紫亜がいる。自分を無敵にしてくれる女神が、帰りを待っている。
昂がいる。背中を預けて無心に前だけを見させてくれる相棒が、こ
こにはいる。

そして、鈴がいる。救うべき、救われるべき妹分が。

ならば、この身は。

闘える！！

「 はははははは！！ ふははははははははははははははははッ

！！！！！！！！」

受け入れられる。この性を。この歡喜を。この感情も己自身のものであると、今ようやく、認める事が出来る

「昂ッ!」

振り返りもせず、勇吾は相棒の名を呼んだ。

「あいよ」

「俺はこいつを潰す。他は全部任せた」

「当然」

気安い声で請け負って、昂は自分の敵へと向かった。

昂も、闘う形式は一对一。乱戦を覚悟していただけに、嬉しい誤算だ。なにしろ、これから彼には仕事如山と積まれている。予定では鈴を助けるのに必要な条件は、黒崎を倒す事以外はすべて昂が請け負う事になっていた。それを考えれば、たったひとりの敵を倒すだけのこの状況は、酷く楽に感じた。

* * * * *

昂が立ち去ったのを気配で察して、そして勇吾は思考から戦闘以外の全てを締め出した。

勇吾は一步踏み出す。間合いの中へ。ここからなら、お互い一足で相手を殴り飛ばせるといふ、そういう距離。

「さあ……始めようか、黒崎神無。喧嘩をな」

返事など待つまでもなく、勇吾は強く一步を踏み出した。先手必勝。油断も余裕もない。初見故、相手の手の内は見えないが、それは相手も同じ事。ならば、反撃する間もなく叩き潰すのみ

「破アアアアッ!」

裂帛の咆哮。伸びる腕。『必倒』を確信の下に断言できるだけの威力で、勇吾の拳は黒崎に襲いかかった。が　　すぐにそれは間違いであったと証明される。

黒崎の鳩尾を捉えたように見えた勇吾の拳打は、しかし何一つとして効果を残さなかった。

勇吾の拳は、黒崎の鳩尾の数ミリ手前で停止している。

（手応えがねえ！？）

内心で叫ぶ。

それに、黒崎は小さく唇の端を吊り上げてみせた。

「悪くない拳だ。だが　　」

咳いてくるその声に、勇吾の首筋が急激に冷える。まずい。打たれ強さには自信のある勇吾だが、今の体勢は流石にまずい。どこもかしこも隙だらけだ。

「　　詰めが甘い」

衝撃は、ほぼ同時に三回。脇腹、下腹部、右肩にそれぞれ着弾する。異様なまでに速く、硬い。

「　　ぐ、がつ……！」

肺から息が絞り出される。しかし、連撃はそれで終わりではなかった。

「そら、次だ」

再び連撃。来る、と思った瞬間には殴られていた。今度は顔、腹、腕、腋と、上半身をくまなく、ランダムに打ってくる。しかも、黒崎の拳には無駄な力が一切なく、反作用で後退する事もできない。強引にでも抜け出さなければ、拳打の嵐に抱かれるように、延々と食らうはめになる。いや、普通の人間なら、これだけで敗北の条件となりうるかもしれない。それほど、黒崎の拳打は速く、そして巧妙だった。

「な、めんな……！！」

急所に当たるだろう軌道を通るものだけを辛うじて防ぎながら、齒を食いしぼる。勇吾は拳打の雨に晒されながら、しかし退く事はし

なかった。ここはそういう場面ではなかった。

ここは 退いて体勢を整えるなどという、温い選択が出来る場面ではない。ここで退くのは、言わば常道であり正道。黒崎が對抗策を用意していないわけがない。必ず、追撃の一手が、それも致命的な一手が用意されているだろう。これは最早喧嘩というより殺し合いだ。見誤った者は死ぬ。

今の勇吾に、この連撃を捌き切る技量はない。ならば手は一つ。

四肢に力を込める。全身に力を束ねる。狙うはカウンター。

拳打の嵐を引き裂く、雷の如き一撃

「む ！？」

危険な匂いを感じ取ったのか、黒崎が拳を止める。だが遅い。今度は奴が隙だらけだ。攻撃の後なら、いかなる強者も隠しえない死角「喰らいやがれ」

踏み込みを省いた、上半身の筋力のみで放つ拳打。本来なら、大した威力のない「手打ち」の一撃だ。

しかし、緒方勇吾のそれは別。天賦の才としか言いようのない、恵まれた、恵まれすぎた強靱な筋力が、平凡な拳打を鬼手へと変える。平常を異常に塗り替える。

だが。だがそれでも 相手もまた、異常だったのなら。鬼手は鬼手足り得ない。異常はより異常なものに食われ、その意味を失うのだ。

「温い ！」

黒崎は一瞬の硬直のあと、再度拳を打ち出した。こちらではなく、勇吾が突き出した拳に向けて。

信じがたい光景だった。鋭く抉るようなフックが、勇吾の拳を横から殴り飛ばしたのだ。

「マジかよくそつたれっ！！」

叫びながら、大きくバックステップする。今なら流石に、追撃はないだろう。

「　　くくく。やるな小僧。まさかあの体勢から攻めを選択するとは思わなかったぞ。それに、あれだけ打ちこんで、一度も急所には当たらなかった」

心の底から楽しそうな声で　　顔はまるで笑っていないが　　黒崎が称賛してくる。

勇吾は血の味のする　　連打を受けた時、口の中を切ったようだ
唾を吐き捨て、呻くように返す。

「そいつはどうも。だが、てめえこそ変態的な回避法だったじゃねえか。あのタイミングで打ったカウンターが無効？　しかも拳で撃墜だ？　涙も出ねえよ、くそつたれ」

「たわけ。急所を外したとはいえ、あれだけ打ちこんでそれだけの口を叩ける貴様の方が変態的だ。」

見たところ、ほぼ全ての攻撃を筋肉の表層で止めている」

互いを貶しながら称賛するという訳のわからないやり取りをしながら、じりじりと間合いを測る。お互いが得手とする分野が違う以上、勝機は距離にあると見ていい。それを、ふたりとも今の攻防で察していた。勇吾はベースが空手であるため、必要ならば蹴りも使えるが、黒崎は恐らくボクシングベースだろう。もっとも、最初に勇吾の拳打を無効化した時の歩法は摺り足だったので、あくまでベースは、という程度でしかない。となると、膝はともかく肘くらいはとんでくると見るべきだろう。

先ほどの回避技術を考えれば、足を止めての打ち合いでは、勇吾は恐らく不利だ。破壊力とタフネスを活かして、中距離から一気に距離を詰め、ごり押しするしかない。元々、技量では黒崎が一步も二歩も上だ。

「誰が変態だ。俺は単に生まれつき他人より頑丈なだけだ。……てめえこそ、体重の割に拳打が痛えじゃねえか。さえは拳そのものを鍛えてやがるな？」

体重が軽いという事は、ほぼイコールで攻撃に重さがないという事だ。軽い攻撃では骨や内臓まで衝撃が伝わらない。つまり、極端に言えば弱いという事。

それを補う術のひとつに、拳そのものを硬く鍛えてしまふというものがある。同じ重さなら、ゴムボールよりも鋼球の方が痛いのは当たり前前だ。

勇吾は天性の筋力でそれを補ってしまったので、それを行う事はなかった。もつとも、勇吾の年齢では、そもそもリスクが大き過ぎて出来たものではないが。

黒崎は、次の行動に備えてか構えを取りながら、相変わらずの無表情で言ってくる。

「そんなところだ。極道の中には、貴様ほどではないにしろ、妙に頑丈な者が多い。それらを相手取るには、最低限、この程度の破壊力が必要だったのだな」

(やっぱそうか。……だとすりゃ、こりゃ相当まずいな)
声には出さずに、勇吾は呻いた。

(奴の言うように、俺の体は奴の拳打を『ほぼ全て』耐えた。だが、逆に言えば、全部は無理だったって事だ。　大当たりだよ、くそつたれ)

通してしまった拳打は、脇腹への一撃だけ。だが、その一撃がクセモノだった。

(殴る、つてのとは少し違う。まるで……そう、刺されたみてえだった。下手すりゃ、肋骨に罅くらいは入ったかもな)

あれだけ手数を打ちながら、勇吾の肉体にダメージを通すだけの破

壊力。判ってはいたが、尋常な相手ではない。

今のままでは勝てない。今の勇吾では届かない。傍目には互角でも、実際には黒崎の方が一枚上手だ。それが理解できてしまふ。武術家としての勘というよりは、同族としての嗅覚で。

（ああ、勝てない。平和ボケした俺じゃ、こいつには届かない。だが、それでも負けるわけにやいかねえ。ならどうする？）

自問する。 どうして勝てない？

自答する。 俺が弱いからだ。

自問する。 何故弱い？

自答する。 足りないからだ。

自問する。 足りないものはなんだ？

自答する。 決まっている。足りないのは『俺』だ。

（……………あー、くそ。強いなこの野郎。生まれて二度目だな、
『あ、これ勝てねえかも』なんて思ったの）

一度目は師と始めて手合わせした時だ。あれはもう、本当に勝てる気はしなかった。

だが、あれは稽古だった。負けて失うものはない。しかし、今はどうだ？

（まあ、いくら絶望的でも、退くわけにやあいかねえんだよな。妹分を助けに来た、兄貴分としちゃあよ）

くくく、と、くぐもった笑いが漏れる。それを噛み潰しながら、勇吾は構えを改めて取った。黒崎に、動く気配あり。

（　　手が、まったく無いわけじゃない。『経験則』。あれが万全なら、こいつ相手でも……）

『経験則』。足りない『俺』の一部。これまでの喧嘩で得た経験の全てを引き出し、瞬時に活用する技能。勇吾が持つ　　持っていた、才能のひとつかけら。平和ボケしている間に空になった、器。つまるどころ、勇吾に不足しているものは、他ならぬ自分自身だった。

自分自身を否定し続けた弊害。取り戻すには、それ相応の覚悟が必要になる。

（ちよいと危険な賭けだが……やるしかないな。賭けるのはためえの命。勝って得るのは自分自身の過去の遺産　　情けなすぎて泣けてくる）

そして、一番厄介なのは、ことこの状況においてさしたる恐怖もを抱いていない、自分自身でもあった。死ぬかもしれない場所で、自分を殺すかもしれない相手を前にして恐怖しない自分の心は、やはり異常なのだろう。だからこそ、勇吾はこの性根を嫌っていたのだし。ああまったく、本当にろくでもない。

つまり、勇吾の心には退く気は一片たりともないのだった。

「まあ、ここまで来たら出来るかどうかは関係ないし。　　悪い、紫亜。俺、ちょっとばっかし死んで来るわ」

ろくでもない事を呟いて、勇吾は改めて黒崎を睨みやった。

第三十一話：始まる闘争（後書き）

少し間を開けたらパスワード忘れてました。メモ見つかってよかった……

へっばこ物書きの龍之介です。思いのほか書くのが楽しくてバトルばっかになってますが、もうちょっと、あと何話かでラブコメ的な展開に戻ります。

もしまだ見捨てずお付き合いいただいている方がいらっしゃいましたら、もうしばらくお付き合いをば。

では、また次回のアとがきで。

第三十二話・弱者の牙【前編】

勇吾と黒崎の激突から、遅れること数分。
昂もまた、己の喧嘩を始めようとしていた。

（……流石に本職の暴力屋だな。隙が見えない）
対峙した自分の相手　小橋だったか　を、いつもの癖で観察する。

中肉中背だが、姿勢が悪い。歳は二十の半ばから三十といったところだろう。身につけているのは迷彩柄のズボンに、派手なタンクトップ。見えている　もしくはは見せている　二の腕は、鍛えているらしくかなり太い。得物は日本刀。まだ抜刀はしていない。

「さて……」

小橋が、声を発する。存外に落ち着いたバリトンボイスだった。

「俺たちの役目は、お前さんをほどよく痛め付けて、地面に転がしておくことだ」

「……程よく、ね」

表情を変えないまま呟き、視線を小橋の手元に送る。問題なのは、小橋の言う『程よく痛め付ける』というのが、どの程度の傷を指すものなのかだ。

（まあ、死にさえしなけりやそれでいい、程度の認識なんだろうな。この男、腕は立つんだろうが……頭は悪そうだ。そもそも、日本刀なんて持ちだしてきて、どうやって加減するつもりなんだか）
最小の被害であっても、人が死にかねない武器だ。比喻でも何でもなく、腕くらいは簡単に飛ぶ。

無論。最大であれば、文句なく死が待っている

(一番良いのは、不意打ちで勝負を決める事だ。抜刀される前に、両腕を砕くか意識を絶つか。得物を持った暴力の専門家相手に、正々堂々と挑むわけにもいかない。……まあ、流石に抜刀前に倒すのは無理だな。この距離を一息で潰す手段がない)

接近してからでないかと、奇襲も使えない。地の利は向こうにある。

などと考えながら、昴は彼我の距離を目で測った。

間合いは約五メートルほどか。即座に詰め切れる距離ではないが、かといって気を抜いていられるほどでもない。相手が獲物を持っている事を考えれば、なおさら。

小橋は余裕のつもりなのか、抜刀どころか構えもしないままこちらを見ている。口元には、笑みすら浮かべていた。

(ま、それはそうだろうな。奴にとっては、俺は狩られる側の人間でしかない。兎を狩る肉食獣の気分なんだろう。だが……)

昴は冷静に思考しながら、ゆっくりと気組を整えていった。相手がそういう気にいるなら、こちらも相応の対応をするまでだ。呼吸を深く、緩やかに移行させ、思考も戦闘用のそれに切り替えていく。

(……世の中には、獅子を後ろ足で蹴り殺す、強烈な兎も存在する。勝利とは、強い者にだけ与えられる特権ではない。そいつを、教えてやろう)

昴は腰元のホルダーから、警棒を取り出した。一振りして、内蔵された尺を引き延ばす。全長が六十センチほどの、見た限りではごくありふれた警棒だった。違いがあるとすれば、柄の部分にスイッチが付いていて、それを押すと電流が発生するということだろうか。所謂、スタンロッドという奴である。外国では、警官の基本武装と

して採用されている地域もあるらしい。

相手に触れさえすれば、問答無用で無力化できる。ある意味、小橋の日本刀と条件は同じだ。

（基本はこいつで応戦……必要なら、他の武装も使う。まあ、たぶん出番はあるだろうな）

こんな棒きれひとつで、どうにかなる相手ではあるまい。昴は着ているジャケットの内側に、まだいくつかの武器を隠し持っていた。暗器として機能する類のものだ。つまり、奇襲でもなければ通用しない。他にも備えはある。昴は自分の力を過信しない。備えて備えすぎる事はないと、よく知っている。

スタンロットを右手に構え、昴は改めて小橋に視線を向けた。

「お祈りは済んだか？ そんじゃまあ、悪いがいてえ目みてもらうぜ」小橋がゆつくりと抜刀し、鞘を足元に落とす。そのまま軽く腰を落とすと、肩に担ぐような格好で構えを取った。まるで山賊だ。

「……さて。痛い目をみるのはどっちかね」

こちらは半身に近い構え　フェンシングのような　で、スタンロットを前に出す。切られる面積を減らすためだ。左手は腰のあたりに、軽く拳を作って垂らしておく。

それに、小橋は片眉を跳ね上げて、

「うん？　おやおや。お前さん、ずぶの素人ってわけじゃあなかったんだな。こりゃ、さっきのは随分失礼だったかもなあ」

「気遣いはいらさないさ。むしろ、好きなだけ侮ってくれて構わない。その分だけ、付け入る隙が増えるからな」

「……ふうん。なるほどなるほど。こいつは面白くなってきたねえ。そついうナマを抜かせる奴あ、手強いと相場が決まってるあな。ア二キにゃ悪いが、ちよいと本気を出していこうかね！」

言葉と同時に、小橋が地を蹴る。速い。見た目より遥かに俊敏な動き

で、真っ直ぐに突っ込んでくる。
だが

(対応出来ない速度じゃない)

昴は慌てなかった。小橋の初手は予想がついている。

簡単な消去法だ。

奴は昴を、そう簡単には殺さない。　　そういう命令を受けている。
至上の目的は動きを封じること、無駄に殺人のリスクを負うこと
ではない。

もつとも、自身の命が危なければ、その限りではないだろうが
昴はまだ、明らかな脅威にはなっていない。可能な限り、殺害を控
えるはずだ。

だから小橋は、突きを使えない。昴はそう読んだ。
どこに当たっても死ぬ可能性が高いからだ。

威勢よく飛び出してはいるが、小橋に選べる選択肢は多くなかった。
出来るのは、せいぜい浅い斬撃か、刀を囷に肉弾戦を挑むくらいだ
ろう。

そして初手に限っては、肉弾戦はほぼ無いと見て良い。
相手は極道。チンピラとは似て否なる者。

男を売る稼業だ。ちらつかせた得物を、いきなり引っ込めることは
しない。

(こいつは、必ずこだわってくる。ギリギリのところまで、奇襲は
来ない！)

己の読みに、完全に身を委ねる。それが昴の、真の武器。

初手は斬撃。そう仮定する。

あとは狙われる部位だが　これは、太い血管の少ない部位に限られる。

故に、首はまず狙われない。体幹も駄目だ、臓器に傷がつけばショック死する。大腿は大きな血管があるため、これも駄目となれば、狙えるのは腕か脚の末梢、もしくは関節のみ。

と、そこまで思い浮かべた辺りで、小橋が刀を振りかぶった。突進の勢いそのまま、斬り掛かってくるらしい。

昴は冷静に待ち受けた。相手の突進に合わせ、息を大きく吸う。

(初手を警棒で受けて　そのまま決める！)

胸中で叫び、一歩踏み出して　息吹を解放する！

「はあっ！」

気合いとともに、予測した場所にスタンロッドを振り下ろす。

「何ッ!？」

自信のある一撃だったのだろう。小橋が声を上げる。膝頭を狙った刀は、ドンピシャ　昴の警棒に止められていた。

(ジャックポット)

小橋が驚愕で硬直するのを、昴は見逃さなかった。手元のスイッチを押し込み、呟く。

「痺れな」

音はなかった。代わりに、小橋の苦悶の音がほとばしる。

「　　っ　　ぐが……ぐおおあああああ!？」

激痛に、小橋が刀を取り落とす。昴はすかさず追撃しようと踏み込

みかけて　その脚を払われた。

小橋はまだ、動く力を残していた。

「つく……！」

追撃が来る。咄嗟の判断で地面を転がり、距離を取った。案の定、さつきまで頭があつた位置に、小橋の踵が打ち込まれていた。

（刀越しじゃ、電撃が浅かったか）

即座に起き上がりつつ、思考する。

「はあっ……はーっ……くそ、ガキだと思つて甘く見たか。まさかこんな仕掛けを用意してやがるたあな！」

小橋は肩で息をしながら怒声を上げている。まったく効いていないわけでもないようだ。刀を拾つて、こちらを睨みつけてくる。

「もう油断はしねえ。加減もだ。この切っ先、てめえのその面にぶち込んでやる……！」

どうやら、痛みがそのまま怒りに転じるタイプらしい。目が血走り、刀を握る手も、力が入りすぎて震えている。

（やれやれ、典型的な逆上型か。……まあ、だからヤクザなんだろうが）

子供相手にムキになるのは、極道としてのメンツに拘わることだ。だが、そういう理屈は冷静な間しか通じない。

子供にしてやられた　その時点で、小橋の頭の中からメンツという言葉は消えている。

「くたばれ……小僧ッ！」

小橋が怒声とともに突進してくる。さっきよりも速い。あつと言つ間に間合いに入ってくる。

怒りの力だろう。感情には、体にかかっているリミッターを外す力がある。

もつとも。その分、動きも読みやすくなるが。

昴は警棒を構えた。

(初手で仕留められなかったのはミスだが、まあ良い。これだけ雑な動きなら、俺でも捌ききれる！)

振り下ろされる刃を、警棒で受ける。甲高い金属の悲鳴が、辺りに響いた。

小橋は手を緩めては来なかった。

小橋の斬撃は、動きは荒いものの、速度だけは確かにある。

「おらおらおらああああッ！」

「通すかよ、この程度！」

昴は小橋の猛攻を、捌き、受け流し、あるいは避け続けた。一撃一撃は大した威力だが、大振りが過ぎる。目線で狙いも丸判りだ。

(よし、大体こいつの呼吸は判った。仕上げるか)

昴は呟くと、受け止めた斬撃を強く弾き、反動で距離を取った。

「逃がすかつ！」

小橋がすかさず追い縋ってくる。

それに、昴は、

「逃げやしないぞ」

上着の内ポケットから取り出したナイフを、小橋に向ける。

「馬鹿が、今更そんなもん！」

小橋が声を上げる。

確かに、ナイフの届く距離ではなかったが

(それでも届く。これはそういう武器だ……！)

ナイフの柄には、警棒と同じようなスイッチがあった。昂は躊躇いなく、それを押し込む。

と。

ナイフは、刀身だけが柄から切り離され、勢いよく飛び出した。

「なにっ……！」

慌てて小橋が、避けようと身体を捻る。が、遅い。ナイフの刀身は、半ばほどまで小橋の右肩に突き刺さった。

「ぐおおっ!?!」

小橋が悲鳴を上げる。利き腕が潰れて、刀を取り落としてもいた。

その隙を、無論昂は見逃さない。

膝をつく小橋に走り寄り、

「詰んだぜ、あんた」

囁きながら、小橋の首筋に警棒を触れさせる。

「終わりだ」

スイッチを入れる。電流は容赦なく小橋の身体を駆け巡り、蹂躪し

た。

「がああああああ……！」

喉からほとばしる悲鳴も、徐々に小さくなり、そして

「……」

完全に沈黙した。

*

（負けた　？）

激痛が全身をくまなく駆けまわり、次いで力が抜けていく。その感覚に、小橋はそう呟いた。

（こんな子供に　この俺が負けた？）

自問する。心の中で。声は既に出せなくなっている。そんな力は残っていない。

そして当然、もう立ち上がることも出来ないだろう。　敗北だ。

完全に。

喧嘩は、相手を倒すことが勝利の条件ではない。最後に立っていた者が勝者なのだ。それが、小橋の持論だった。

だが、自分はもう立てそうもない。勝者にはなりえなくなった。

（油断に付け入れられた。隙を見せすぎた。俺っちとした事が、こんな簡単に負けるなんてなあ）

ひとりの男として、喧嘩屋としての矜持。それは完全に打ち砕かれた。長い事　十年近く前に、まだ盃を交わす前の黒崎に完敗して以来、一度たりとも負けた事はなかったというのに。喧嘩だけが、このどうしようもないクスである自分の取り柄だというのに。

小橋は自分を破った少年を　どう見ても優男にしか見えない、も

しくはただの学生でしかない彼を見上げた。

と、彼は油断なくこちらを見返してきていた。目が合う。どう考え
てもこちらは死に体なのだが、それでも気は緩めないらしい。

と、彼はこちらの腕に、視線を移したようだった。何かの仕掛けで
刀身だけを飛ばすナイフ　スペナズナイフというのだったか
で傷を負った腕に。

「…………ふむ」

彼は咳くと、ポケットからハンカチを取り出した。　　どうやら、
手当をしていくつもりのようにだ。

「…………ま、ここまでする義理はないが、死なれてもいい気分にはな
らないんでな。止血くらいはして行ってやる」

(…………挙げ句、器でも負けてるか……。俺っちがもう反撃できない
のを見切った上で、手当までしていこうたあ)

苦笑しようとして、それすらできない事に辟易する。いよいよ意識
を保てなくなってきたらしい。

(すんません、アニキ。俺あ、何も出来ませんでした…………)

小橋はそれだけ咳くと、今度こそ意識を手放した。

第三十二話・弱者の牙【前編】（後書き）

超お久しぶり。

へっぽこ物書きの龍之介です。

ちとモチベーションに問題があつて、長らく小説書いてなかつたんですが、充電完了したっばいでこれからばちばち更新していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1688c/>

緒方勇吾の恋愛事情 其の式

2010年10月10日00時12分発行